

久 下 前 遺 跡 VII

(A2・D2・D3・G地点)

一本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12-

2020

本 庄 市 教 育 委 員 会

本庄市埋蔵文化財調査報告書
第61集

久 下 前 遺 跡 VII

(A2・D2・D3・G地点)

二〇二〇

本庄市教育委員会



く げ まえ い せき
久 下 前 遺 跡 VII
(A2・D2・D3・G地点)

—本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12—

2020

本庄市教育委員会

序

埼玉県の北部に位置する本庄市は、県指定史跡の鷲山古墳や宍勝寺裏埴輪窯跡をはじめとする原始・古代の遺跡が数多く所在し、県内でも有数の遺跡の宝庫として知られています。また、中世では鎌倉幕府の成立期に活躍した武蔵七党の児玉党の本拠地であったことや、戦国時代の先駆けとなった享徳の乱で関東管領上杉氏側の重要拠点であった五十子陣が築かれた場所として、そして近世の江戸時代では、和学講談所の設立や『群書類従』の編さんなどの偉大な業績を残した盲目の国学者塙保己一の生地としても、広く知られているところです。

本書は、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴って発掘調査された久下前遺跡の調査の成果の一部を記録した報告書です。久下前遺跡は、北側に隣接する同一遺跡と考えられる久下東遺跡を合わせると、市内に所在する遺跡の中では比較的広い範囲が調査されており、古墳時代から平安時代を中心とした古代児玉郡を代表する大規模な集落の一つであったことが明らかになっています。

今回報告する久下前遺跡のA2・D2・D3・G地点では、古墳時代前期の河川跡や平安時代までの竪穴式住居跡が多数検出され、集落の中でも中心的な居住場所の一部であったことがうかがえます。また、溝によって区画された広い敷地をもつ中世の屋敷跡や比較的珍しい墓地も検出されており、本地点が古代以降も人々の居住に適した場所として長く利用されていたことが判明しています。

これらは、規模の大きな集落遺跡の一部ではありますが、本庄市の歴史を考えるうえで重要な資料の一つになるものと思われる。

本書が、学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史や遺跡を理解する一助として、多くの皆様に広くご活用いただければ幸甚に存じます。

平成18年度から13年間にわたり行ってまいりました本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財保存事業も、本書の刊行をもって完了することになりました。現地の発掘調査から整理・報告書の刊行までの長い間、様々なご協力やご教示を賜りました関係諸機関並びに地元関係者の皆様に対しまして、改めてお礼を申し上げます。

令和2年 3月

本庄市教育委員会
教育長 勝山 勉

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市早稲田の杜2丁目に所在する久下前遺跡のA2・D2・D3・G地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う事前の記録保存を目的として、A2・D2・D3地点が平成22年度、G地点が平成23年度に調査を実施した。
3. 発掘調査は、本庄市教育委員会が実施し、A2地点は的野善行、D2・D3地点は恋河内昭彦、G地点は松本完が担当した。また、D2・D3地点の調査には高林真人(株式会社測研)、G地点の調査には宮本久子(有限会社毛野考古学研究所)が調査員として現地に専従して補佐した。
4. 本書中で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1と2万5千分の1である。
5. 遺構図のデジタルトレースとレイアウト編集は、株式会社測研に委託した。
6. 出土遺物の実測・トレースは、その一部を有限会社毛野考古学研究所に委託し、その他の出土遺物の実測については恋河内が行った。
7. 出土遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。
A-法量(単位はcm、g、カッコは推定)、B-成形、C-整形・調整、D-胎土、材質、
E-色調、F-残存度、G-備考、H-出土層位・位置
8. 本書に掲載した写真は、遺構は各調査担当者が、遺物は委託分を有限会社毛野考古学研究所が、その他は恋河内が撮影した。なお、本書の写真図版に掲載した遺物写真は、縮尺不同である。
9. 本書の執筆は、第VI章の自然科学分析を株式会社パレオ・ラボとパリオ・サーヴェイ株式会社が、それ以外を恋河内が行った。
10. 本書の編集は、恋河内が行った。
11. 発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関からご教示・ご協力を賜った。記して感謝します。

池田 匡彦、金子 彰男、北山 直人、坂本 和俊、中沢 良一、林 道義、丸山 修
埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、公益財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団、
早稲田大学考古資料館

12. 発掘調査及び整理・報告書刊行の組織は、以下のとおりである。

発 掘 調 査 組 織

<平成22・23年度>

主体者	本庄市教育委員会	
教 育 長	茂木 孝彦	
事務局 事 務 局 長	腰塚 修(平成22年度)	
	間和 成昭(平成23年度)	
	文化財保護課長 金井 孝夫	
	副参事兼課長補佐 鈴木 徳雄	
	課長補佐兼	
	埋蔵文化財係長 太田 博之	
	主 幹 恋河内昭彦(調査担当)	
	主 査 大熊 季広	
	主 査 松澤 浩一	
	主 任 松本 完(調査担当)	
	臨 時 職 員 的野 善行(調査担当)	
	調 査 員 高林 真人(測研)	
		宮本 久子(毛野考古学研究所)

整 理 ・ 報 告 書 刊 行 組 織

<令和元年度>

主体者	本庄市教育委員会	
教 育 長	勝山 勉	
事務局 事 務 局 長	高橋 利征	
	文化財保護課長 佐々木智恵	
	課長補佐兼	
	埋蔵文化財係長 恋河内昭彦(整理担当)	
	主 査 塩原 浩	
	主 任 的野 善行	
	主 事 補 水野 真那	
	専 門 員 松本 完	
	臨 時 職 員 中嶋 淳子	

目 次

序

例 言

第Ⅰ章	発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	5
第Ⅲ章	A 2 地点の調査	6
第1節	A 2 地点の概要	6
第2節	検出された遺構と遺物	7
1.	河 川 跡	7
2.	A 2 地点調査区内出土遺物	10
第Ⅳ章	D 2・D 3 地点の調査	11
第1節	D 2・D 3 地点の概要	11
第2節	検出された遺構と遺物	14
1.	土 坑	14
2.	溝 跡	16
第Ⅴ章	G 地点の調査	29
第1節	G 地点の概要	29
第2節	検出された遺構と遺物	30
1.	竪穴式住居跡	30
2.	掘立柱建物跡	117
3.	井 戸 跡	126
4.	土 坑	134
5.	溝 跡	150
6.	河 川 跡	161
7.	G 地点調査区内出土遺物	193
第Ⅵ章	自然科学分析	194
第1節	久下前遺跡A 2・C 4 地点の花粉分析	194
第2節	久下前遺跡A 2 地点のプラント・オパール	199
第3節	久下前遺跡G 地点堆積物中の珪藻化石群集	202
第4節	久下前遺跡A 2 地点出土の大型植物遺体	206

第5節	久下前遺跡A 1・A 2・C 4地点出土木材の樹種同定	210
第6節	久下前遺跡G地点と久下東遺跡B 1地点出土木製品の樹種同定	219
第7節	久下前遺跡G地点と久下東遺跡B 2地点出土木製品の樹種同定	226
第8節	久下前遺跡A 2地点出土木材の放射性炭素年代測定	230
第9節	久下前遺跡G地点の出土木材及び種子の放射性炭素年代測定	234
第10節	久下前遺跡G地点出土土器の胎土分析	240
第Ⅶ章	考 察	251
第1節	久下前・久下東遺跡の中世土坑墓と歴史的背景	251
	1. 久下前遺跡と久下東遺跡の中世土坑墓(群)の様相	251
	2. 周辺遺跡の中世土坑墓(群)の類例	255
	3. 中世後期の土坑墓群の類型と歴史的背景	258
<参考文献>		261
写真図版		
抄 録		

< 挿 図 目 次 >

第1図 遺跡の位置…………… XIII	第32図 第5号住居跡 …………… 33
第2図 北堀久下塚北・久下東・久下前・北堀新田・北堀新田前遺跡調査地点配置図…………… 2	第33図 第6号住居跡 …………… 34
第3図 久下前遺跡本報告地点位置図…………… 3	第34図 G地点側第6号住居跡出土遺物 …………… 34
第4図 周辺の主要遺跡…………… 4	第35図 第3地点側第6号住居跡出土遺物 …………… 35
第5図 A2地点全体図…………… 6	第36図 第7号住居跡 …………… 36
第6図 河川跡…………… 7	第37図 第3地点側第7号住居跡出土遺物 …………… 37
第7図 河川跡断面図…………… 8	第38図 G地点側第7号住居跡出土遺物 …………… 38
第8図 河川跡出土遺物…………… 9	第39図 第189号住居跡 …………… 39
第9図 D地点全体図…………… 12	第40図 第189号住居跡出土遺物 …………… 39
第10図 D2地点全体図 …………… 13	第41図 第190・191号住居跡 …………… 40
第11図 D3地点全体図 …………… 13	第42図 第191号住居跡出土遺物 …………… 41
第12図 第388号土坑出土遺物 …………… 14	第43図 第192号住居跡 …………… 42
第13図 第388号土坑 …………… 14	第44図 第192号住居跡出土遺物 …………… 43
第14図 第389号土坑 …………… 15	第45図 第193号住居跡 …………… 44
第15図 第389号土坑出土遺物 …………… 15	第46図 第193号住居跡出土遺物(1)…………… 46
第16図 第24・25号溝跡 …………… 17	第47図 第193号住居跡出土遺物(2)…………… 47
第17図 第26号溝跡出土遺物 …………… 18	第48図 第194号住居跡 …………… 48
第18図 第26・27号溝跡 …………… 19	第49図 第194号住居跡出土遺物(1)…………… 49
第19図 久下東遺跡B地点第1号溝跡と久下前遺跡D地点第27号溝跡 …………… 20	第50図 第194号住居跡出土遺物(2)…………… 50
第20図 D1地点第27号溝跡出土遺物(1) …………… 21	第51図 第195号住居跡 …………… 51
第21図 D1地点第27号溝跡出土遺物(2) …………… 22	第52図 第196号住居跡 …………… 52
第22図 D1地点第27号溝跡出土遺物(3) …………… 23	第53図 第196号住居跡出土遺物 …………… 53
第23図 第29～31号溝跡 …………… 24	第54図 第197号住居跡 …………… 55
第24図 D1地点第30号溝跡出土遺物…………… 26	第55図 第197号住居跡出土遺物 …………… 57
第25図 第30号溝跡出土遺物 …………… 26	第56図 第198・199・200号住居跡 …………… 58
第26図 D1地点第31号溝跡出土遺物 …………… 27	第57図 第198号住居跡カマド …………… 59
第27図 G地点全体図…………… 28	第58図 第198号住居跡出土遺物 …………… 60
第28図 第1号住居跡 …………… 30	第59図 第199号住居跡出土遺物 …………… 60
第29図 第3地点側第1号住居跡出土遺物 …………… 30	第60図 第200号住居跡出土遺物 …………… 62
第30図 第2b号住居跡 …………… 31	第61図 第201号住居跡 …………… 63
第31図 第3地点側第2b号住居跡出土遺物 …………… 32	第62図 第201号住居跡出土遺物 …………… 63
	第63図 第202号住居跡 …………… 64
	第64図 第202号住居跡出土遺物 …………… 64
	第65図 第203号住居跡 …………… 66

第66図	第203号住居跡カマド	67	第103図	第224号住居跡	107
第67図	第203号住居跡出土遺物	68	第104図	第224号住居跡出土遺物	108
第68図	第204号住居跡	69	第105図	第225・226号住居跡出土遺物	109
第69図	第204号住居跡出土遺物	70	第106図	第226号住居跡出土遺物	111
第70図	第205号住居跡	71	第107図	第227号住居跡	112
第71図	第205号住居跡出土遺物	72	第108図	第227号住居跡出土遺物(1)	115
第72図	第206・207・208号住居跡	74	第109図	第227号住居跡出土遺物(2)	116
第73図	第206・207号住居跡出土遺物(1)	76	第110図	第16号掘立柱建物跡	117
第74図	第206・207号住居跡出土遺物(2)	77	第111図	第17号掘立柱建物跡	118
第75図	第208号住居跡出土遺物	78	第112図	第17号掘立柱建物跡出土遺物	119
第76図	第209号住居跡	79	第113図	第18号掘立柱建物跡	120
第77図	第209号住居跡出土遺物	79	第114図	第19号掘立柱建物跡	122
第78図	第210号住居跡	80	第115図	第20号掘立柱建物跡及び出土遺物	123
第79図	第210号住居跡出土遺物	80	第116図	第21号掘立柱建物跡出土遺物	124
第80図	第211・212号住居跡	81	第117図	第21号掘立柱建物跡	125
第81図	第211号住居跡出土遺物	82	第118図	第26号井戸跡出土遺物	126
第82図	第212号住居跡出土遺物	82	第119図	第27号井戸跡出土遺物	126
第83図	第213号住居跡	84	第120図	井戸跡	127
第84図	第213号住居跡出土遺物	85	第121図	第28号井戸跡出土遺物	128
第85図	第214号住居跡	86	第122図	第29号井戸跡出土遺物	129
第86図	第214号住居跡出土遺物	87	第123図	第30号井戸跡出土遺物	130
第87図	第215号住居跡	88	第124図	第31号井戸跡出土遺物	131
第88図	第215号住居跡出土遺物(1)	90	第125図	第32号井戸跡出土遺物	131
第89図	第215号住居跡出土遺物(2)	91	第126図	第33号井戸跡出土遺物	132
第90図	第216・217号住居跡	93	第127図	第34号井戸跡出土遺物	133
第91図	第217号住居跡出土遺物	94	第128図	土坑(1)	136
第92図	第218号住居跡	95	第129図	土坑(2)	137
第93図	第218号住居跡出土遺物	96	第130図	土坑(3)	138
第94図	第219号住居跡	97	第131図	土坑(4)	139
第95図	第219号住居跡出土遺物	98	第132図	土坑(5)	140
第96図	第220号住居跡	99	第133図	土坑出土遺物(1)	148
第97図	第220号住居跡出土遺物	100	第134図	土坑出土遺物(2)	149
第98図	第221号住居跡	101	第135図	第46号溝跡	151
第99図	第221号住居跡出土遺物	103	第136図	第46号溝跡出土遺物	152
第100図	第222号住居跡	104	第137図	第47・48・50a号溝跡	153
第101図	第222号住居跡出土遺物	105	第138図	第49号溝跡出土遺物	154
第102図	第223号住居跡及び出土遺物	106	第139図	第50a号溝跡出土遺物	155

第140図	第50b号溝跡	156	第167図	久下前遺跡A 2地点のプラント・オパール分布図	200
第141図	第51号溝跡	157	第168図	堆積物中の珪藻化石分布図	204
第142図	第49・52号溝跡	158	第169図	分析試料	227
第143図	第53・54・55号溝跡	159	第170図	久下前遺跡A 2地点倒木のウィグルマッピング結果	231
第144図	第56号溝跡	161	第171図	ウィグルマッピング結果(1)	237
第145図	河川跡(1)	162	第172図	ウィグルマッピング結果(2)	238
第146図	河川跡(2)	163	第173図	単体試料の暦年較正結果	239
第147図	河川跡出土遺物(1)	166	第174図	胎土分析試料	240
第148図	河川跡出土遺物(2)	167	第175図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	244
第149図	河川跡出土遺物(3)	168	第176図	胎土中の碎屑物の粒径組成	245
第150図	河川跡出土遺物(4)	169	第177図	碎屑物・基質・孔隙の割合	246
第151図	河川跡出土遺物(5)	170	第178図	周辺の既発掘調査遺跡	250
第152図	河川跡出土遺物(6)	171	第179図	久下前・久下東遺跡中世土坑墓規模比較図	251
第153図	河川跡出土遺物(7)	172	第180図	久下前遺跡B 1地点中世土坑墓及び出土遺物	252
第154図	河川跡出土遺物(8)	173	第181図	久下前遺跡G地点中世土坑墓及び出土遺物	253
第155図	河川跡出土遺物(9)	174	第182図	久下東遺跡H地点中世土坑墓及び出土遺物	254
第156図	河川跡出土遺物(10)	175	第183図	城の内遺跡B・C地点中世土坑墓及び出土遺物	256
第157図	河川跡出土遺物(11)	176	第184図	社具路遺跡第4地点中世土坑墓及び出土遺物	257
第158図	河川跡出土遺物(12)	177	第185図	元富東古墳B地点円形土坑墓及び出土遺物	258
第159図	河川跡出土遺物(13)	178			
第160図	河川跡出土遺物(14)	179			
第161図	河川跡出土遺物(15)	180			
第162図	河川跡出土遺物(16)	181			
第163図	河川跡出土遺物(17)	182			
第164図	G地点調査区内出土遺物	193			
第165図	久下前遺跡(A 2地点)における花粉ダイアグラム	195			
第166図	久下前遺跡(C 4地点)における花粉ダイアグラム	195			

＜ 表 目 次 ＞

第1表	河川跡出土遺物観察表	8	第6表	第30号溝跡出土遺物観察表	26
第2表	調査区内出土遺物観察表	10	第7表	G地点側第6号住居跡出土遺物観察表	34
第3表	第388号土坑出土遺物観察表	14	第8表	G地点側第7号住居跡出土遺物観察表	38
第4表	第389号土坑出土遺物観察表	15	第9表	第189号住居跡出土遺物観察表	40
第5表	第26号溝跡出土遺物観察表	18	第10表	第191号住居跡出土遺物観察表	41

第11表	第192号住居跡出土遺物観察表	43	第48表	第28号井戸跡出土遺物観察表	129
第12表	第193号住居跡出土遺物観察表	45	第49表	第29号井戸跡出土遺物観察表	129
第13表	第194号住居跡出土遺物観察表	50	第50表	第30号井戸跡出土遺物観察表	130
第14表	第196号住居跡出土遺物観察表	53	第51表	第31号井戸跡出土遺物観察表	131
第15表	第197号住居跡出土遺物観察表	56	第52表	第32号井戸跡出土遺物観察表	131
第16表	第198号住居跡出土遺物観察表	59	第53表	第33号井戸跡出土遺物観察表	132
第17表	第199号住居跡出土遺物観察表	61	第54表	第34号井戸跡出土遺物観察表	133
第18表	第200号住居跡出土遺物観察表	61	第55表	G地点土坑一覽表	134
第19表	第201号住居跡出土遺物観察表	63	第56表	第149号土坑出土遺物観察表	147
第20表	第202号住居跡出土遺物観察表	64	第57表	第471号土坑出土遺物観察表	147
第21表	第203号住居跡出土遺物観察表	67	第58表	第477号土坑出土遺物観察表	147
第22表	第204号住居跡出土遺物観察表	70	第59表	第481号土坑出土遺物観察表	147
第23表	第205号住居跡出土遺物観察表	72	第60表	第500号土坑出土遺物観察表	147
第24表	第206・207号住居跡出土遺物観察表	73	第61表	第501号土坑出土遺物観察表	149
第25表	第208号住居跡出土遺物観察表	78	第62表	第504号土坑出土遺物観察表	149
第26表	第209号住居跡出土遺物観察表	79	第63表	第505号土坑出土遺物観察表	149
第27表	第210号住居跡出土遺物観察表	80	第64表	第508号土坑出土遺物観察表	150
第28表	第211号住居跡出土遺物観察表	82	第65表	第510号土坑出土遺物観察表	150
第29表	第212号住居跡出土遺物観察表	83	第66表	第527号土坑出土遺物観察表	150
第30表	第213号住居跡出土遺物観察表	85	第67表	第46号溝跡出土遺物観察表	152
第31表	第214号住居跡出土遺物観察表	87	第68表	第49号溝跡出土遺物観察表	154
第32表	第215号住居跡出土遺物観察表	91	第69表	第50a号溝跡出土遺物観察表	155
第33表	第217号住居跡出土遺物観察表	94	第70表	河川跡出土遺物観察表	165
第34表	第218号住居跡出土遺物観察表	96	第71表	G地点調査区内出土遺物観察表	193
第35表	第219号住居跡出土遺物観察表	98	第72表	産出花粉化石一覽	196
第36表	第220号住居跡出土遺物観察表	98	第73表	試料1gあたりのプラント・オパール 個数	200
第37表	第221号住居跡出土遺物観察表	102	第74表	分析試料と堆積物の特徴	202
第38表	第222号住居跡出土遺物観察表	105	第75表	堆積物中の珪藻化石産出表	203
第39表	第223号住居跡出土遺物観察表	107	第76表	A2地点河川跡から出土した大型植 物遺体	208
第40表	第224号住居跡出土遺物観察表	108	第77表	久下前遺跡出土木材の樹種同定結果	211
第41表	第226号住居跡出土遺物観察表	110	第78表	久下前遺跡出土木材の樹種同定結果 一覽	214
第42表	第227号住居跡出土遺物観察表	114	第79表	器種別の樹種同定結果	222
第43表	第17号掘立柱建物跡出土遺物観察表	119	第80表	樹種同定結果一覽	223
第44表	第20号掘立柱建物跡出土遺物観察表	124	第81表	樹種同定結果	226
第45表	第21号掘立柱建物跡出土遺物観察表	125			
第46表	第26号井戸跡出土遺物観察表	126			
第47表	第27号井戸跡出土遺物観察表	126			

第82表	久下前遺跡A 2地点倒木ウィグルマツチング試料及び処理	230
第83表	放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマツチングの結果	230
第84表	ウィグルマツチング測定試料及び処理	234
第85表	単体測定試料及び処理	234
第86表	放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマツチングの結果	235

第87表	放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマツチングの結果	235
第88表	単体試料の放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	235
第89表	試料一覧	241
第90表	薄片観察結果(1)	242
第91表	薄片観察結果(2)	243
第92表	胎土分類結果	247

＜写真図 版 目 次＞

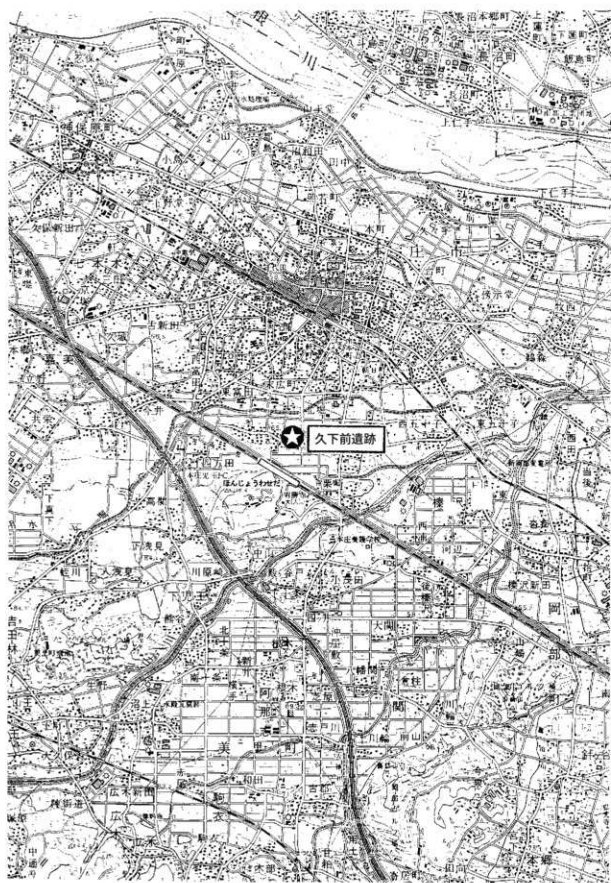
図版 1	A 2 地点調査区遠景(北より) A 2 地点調査区全景
図版 2	河川跡全景(北より) 河川跡全景(南より)
図版 3	河川跡北側土層断面 河川跡遺物出土状態(1) 河川跡遺物出土状態(2) 河川跡遺物出土状態(3) 河川跡木片出土状態(1) 河川跡木片出土状態(2) 河川跡木片出土状態(3) 河川跡底面倒木(コナラ)
図版 4	D 地点調査区遠景(北より) D 地点調査区全景
図版 5	D 2 地点全景(南より) 第388号土坑 第389号土坑 第389号土坑土層断面 第24・25号溝跡
図版 6	D 3 地点全景(東より) 第29・30号溝跡 第30号溝跡土層断面 第31号溝跡 第31号溝跡土層断面
図版 7	G 地点調査区遠景(北より)

	G 地点調査区全景
図版 8	第1号住居跡 第2 b 号住居跡 第5号住居跡 第6号住居跡 第7号住居跡 第189号住居跡 第189号住居跡カマド 第190号住居跡
図版 9	第191号住居跡 第191号住居跡カマド 第192号住居跡 第192号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 第193号住居跡 第193号住居跡カマド 第194号住居跡 第194号住居跡カマド
図版 10	第194号住居跡貯蔵穴 第195号住居跡 第196号住居跡 第196号住居跡カマド 第197号住居跡 第197号住居跡カマド 第197号住居跡貯蔵穴 第197号住居跡遺物出土状態

- 図版11** 第198号住居跡
 第198号住居跡遺物出土状態
 第199号住居跡
 第200号住居跡
 第200号住居跡遺物出土状態
 第201号住居跡
 第202号住居跡
 第202号住居跡カマド
- 図版12** 第203号住居跡
 第203号住居跡カマド
 第204号住居跡
 第205号住居跡
 第205号住居跡貯蔵穴
 第205号住居跡遺物出土状態
 第206号住居跡
 第206号住居跡カマド
- 図版13** 第206号住居跡遺物出土状態(1)
 第206号住居跡遺物出土状態(2)
 第205~208号住居跡
 第208号住居跡
 第209号住居跡
 第209号住居跡跡^イ
 第210号住居跡
 第211号住居跡
- 図版14** 第212号住居跡
 第213号住居跡
 第213号住居跡カマド
 第213号住居跡遺物出土状態
 第214号住居跡
 第214号住居跡カマド
 第214号住居跡遺物出土状態(1)
 第214号住居跡遺物出土状態(2)
- 図版15** 第215号住居跡
 第215号住居跡カマド
 第215号住居跡遺物出土状態(1)
 第215号住居跡遺物出土状態(2)
 第216号住居跡
- 第216号住居跡カマド
 第217号住居跡遺物出土状態(1)
 第217号住居跡カマド
- 図版16** 第218号住居跡
 第219号住居跡
 第220号住居跡
 第220号住居跡カマド
 第220号住居跡遺物出土状態
 第221号住居跡
 第221号住居跡跡^イ
 第221号住居跡遺物出土状態
- 図版17** 第222号住居跡
 第223号住居跡
 第224号住居跡
 第224号住居跡カマド
 第225号住居跡
 第226号住居跡
 第226号住居跡跡^イ
 第226号住居跡遺物出土状態
- 図版18** 第227号住居跡
 第227号住居跡カマド
 第16号掘立柱建物跡
 第17号掘立柱建物跡(1)
 第17号掘立柱建物跡(2)
 第18号掘立柱建物跡
 第19・20号掘立柱建物跡
 第21号掘立柱建物跡
- 図版19** 第26号井戸跡
 第27号井戸跡
 第28号井戸跡
 第29号井戸跡
 第30号井戸跡
 第31号井戸跡
 第32号井戸跡
 第33号井戸跡
- 図版20** 第34号井戸跡
 第149号土坑

- 第460~490号土坑
 第468~477号土坑
 第468・469号土坑
 第470号土坑
 第477~482号土坑
 第485~490号土坑
- 図版21** 第493a・493b号土坑
 第500号土坑
 第501号土坑
 第504号土坑
 第505号土坑
 第510号土坑
- 図版22** 第511・512号土坑
 第513号土坑
 第515号土坑
 第516号土坑
 第517号土坑
 第518号土坑
- 図版23** 第519号土坑
 第522号土坑
 第523号土坑
 第526号土坑
 第527号土坑
 第528・529号土坑
 第530号土坑
 第531号土坑
- 図版24** 第532号土坑
 第533号土坑
 第534号土坑
 第535号土坑
 第536号土坑
 第537号土坑
 第538号土坑
 第539号土坑
- 図版25** 第540号土坑
 第46号溝跡
 第47号溝跡
- 第49・52号溝跡
 第50a号溝跡
 第51号溝跡
 第53号溝跡
 第54・55号溝跡
- 図版26** 河川跡全景(東より)
 河川跡全景(西より)
- 図版27** 河川跡遺物出土状態(1)
 河川跡遺物出土状態(2)
 河川跡遺物出土状態(3)
 河川跡遺物出土状態(4)
 河川跡遺物出土状態(5)
- 図版28** 河川跡下暗灰緑色土内木材出土状態(1)
 河川跡下暗灰緑色土内木材出土状態(2)
- 図版29** 河川跡下木材出土状態(3)
 河川跡下木材出土状態(4)
 河川跡下加工木出土状態
 河川跡木製品出土状態(1)
 河川跡木製品出土状態(2)
 河川跡木製品出土状態(3)
 河川跡木製品出土状態(4)
 河川跡木製品出土状態(5)
- 図版30** A 2地点河川跡出土遺物
- 図版31** A 2・D 2地点出土遺物
- 図版32** G地点住居跡出土遺物(1)
- 図版33** G地点住居跡出土遺物(2)
- 図版34** G地点住居跡出土遺物(3)
- 図版35** G地点住居跡出土遺物(4)
- 図版36** G地点住居跡出土遺物(5)
- 図版37** G地点住居跡出土遺物(6)
- 図版38** G地点住居跡出土遺物(7)
- 図版39** G地点住居跡出土遺物(8)
- 図版40** G地点住居跡出土遺物(9)
- 図版41** G地点住居跡出土遺物(10)
- 図版42** G地点住居跡出土遺物(11)
- 図版43** G地点住居跡出土遺物(12)
- 図版44** G地点住居跡出土遺物(13)

- 図版45 G地点住居跡出土遺物(14)
- 図版46 G地点住居跡出土遺物(15)
- 図版47 G地点住居跡出土遺物(16)
- 図版48 G地点住居跡出土遺物(17)
- 図版49 G地点住居跡・建物跡・井戸跡出土遺物
- 図版50 G地点井戸跡出土遺物
- 図版51 G地点井戸跡・土坑出土遺物
- 図版52 G地点土坑・溝跡出土遺物
- 図版53 G地点溝跡・河川跡出土遺物(1)
- 図版54 河川跡出土遺物(2)
- 図版55 河川跡出土遺物(3)
- 図版56 河川跡出土遺物(4)
- 図版57 河川跡出土遺物(5)
- 図版58 河川跡出土遺物(6)
- 図版59 河川跡出土遺物(7)
- 図版60 河川跡出土遺物(8)
- 図版61 河川跡出土遺物(9)
- 図版62 河川跡出土遺物(10)
- 図版63 河川跡出土遺物(11)
- 図版64 河川跡出土遺物(12)
- 図版65 河川跡出土遺物(13)
- 図版66 河川跡出土遺物(14)
- 図版67 河川跡出土遺物(15)
- 図版68 河川跡出土遺物(16)
- 図版69 河川跡出土遺物(17)
- 図版70 河川跡出土遺物(18)



第1図 遺跡の位置

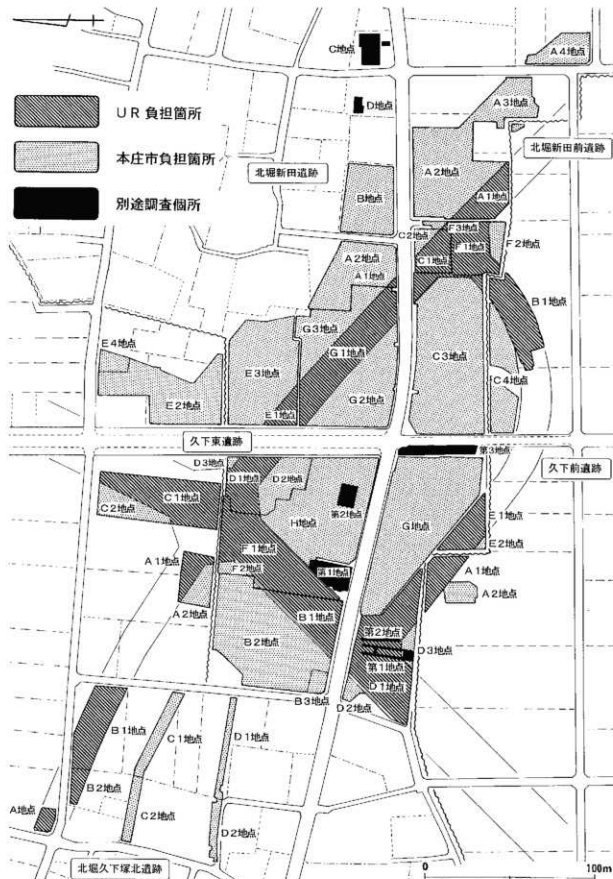
第1章 発掘調査に至る経緯

本庄早稲田駅周辺土地画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成18年9月に事業認可を受けて、同年11月10日に独立行政法人都市再生機構（UR）本庄都市開発事務所・本市・埼玉県教育委員会・本市教育委員会の4者によって締結された「本庄早稲田駅周辺地区埋蔵文化財に関する協定書」に基づいて、同年12月より本市教育委員会が実施している。

事業地内の発掘調査は、その費用負担の違いにより、機構（UR）側の費用負担箇所である都市計画道路の建設区域と、本市の費用負担箇所であるそれ以外の区域（沿道サービス用地・産業業務用地・商業業務用地など）に、それぞれ地点を分けている（第2図）。これらの発掘調査予定区域は、工事計画との関係から都市計画道路建設区域を優先しながら、調査が可能になった部分から遺跡（埋蔵文化財包蔵地）毎にアルファベットによる地点名を付けて、随時調査を実施している。そのため、調査地点は調査対象区域内で細かく錯乱したような配置になっているが、年度毎に発掘調査を実施した地点は、以下のとおりである。

- ＜平成18年度＞ 機構負担区域 — 七色塚遺跡B1地点、北堀新田前遺跡A1地点
市負担区域 — 七色塚遺跡B2地点、北堀新田前遺跡A2～A4地点
- ＜平成19年度＞ 機構負担区域 — 浅見山I遺跡A1・A2地点、久下東遺跡A1・B1地点、
北堀久下塚北遺跡A地点
市負担区域 — 浅見山I遺跡B1・B2地点、久下東遺跡A2・B2地点
- ＜平成20年度＞ 機構負担区域 — 久下東遺跡C1・D1・E1地点、久下前遺跡A1・B1地点、
北堀久下塚北遺跡B地点
市負担区域 — 久下東遺跡B3・C2・D2・D3・E2・E3地点、
北堀久下塚北遺跡C1・D1地点
- ＜平成21年度＞ 機構負担区域 — 久下前遺跡C1地点、北堀新田遺跡A1地点、
宥勝寺北裏遺跡A1・B1地点
市負担区域 — 久下前遺跡C2・C3地点、北堀新田遺跡A2地点（南側）、
北堀久下塚北遺跡C2・D2地点、
宥勝寺北裏遺跡A2・B2地点
- ＜平成22年度＞ 機構負担区域 — 久下東遺跡F1・G1地点、久下前遺跡D1・E1・F1地点
市負担区域 — 久下東遺跡E4・F2地点、
久下前遺跡A2・C4・D2・D3・E2・F2・F3地点、
北堀新田遺跡A2地点（北側）・B地点
- ＜平成23年度＞ 市負担区域 — 久下東G2・G3地点・H地点、久下前遺跡G地点
- ＜平成24年度＞ 機構負担区域 — 宥勝寺北裏遺跡C地点

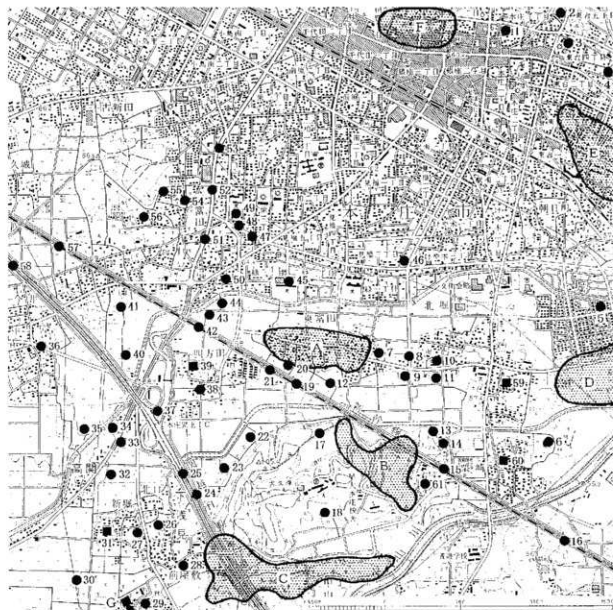
今回報告するのは、市負担区域として平成22年度に調査した久下前遺跡のA2・D2・D3地点、平成23年度に調査した久下前遺跡G地点の計4地点分である。



第2図 北堀久下塚北・久下東・久下前・北堀新田・北堀新田前道跡調査地点配置図



第3図 久下前遺跡本報告地点位置図



第4図 周辺の主要遺跡

1. 城山遺跡 2. 天神林遺跡 3. 天神林Ⅱ遺跡 4. 薬師堂遺跡 5. 田端屋敷遺跡 6. 東本庄遺跡 7. 北堀久下塚北遺跡
8. 久下東遺跡 9. 久下前遺跡 10. 北堀新田遺跡 11. 北堀新田前遺跡 12. 七色塚遺跡 13. 有勝寺裏墳輪堂跡 14. 有勝寺北裏遺跡 15. 東谷遺跡 16. 古川端遺跡 17. 浅見山I遺跡 18. 大久保山遺跡 19. 下田遺跡 20. 元富遺跡 21. 東富田観音塚遺跡 22. 山根遺跡 23. 根田遺跡 24. 雷電下遺跡 25. 飯玉東遺跡 26. 中畑遺跡 27. 天神耕地遺跡 28. 南ノ前遺跡 29. 鷺山南遺跡 30. 浅見境北遺跡 31. 関根氏館跡 32. 東牧西分遺跡 33. 梅沢遺跡 34. 川越田遺跡 35. 今井川越田遺跡 36. 北郷遺跡 37. 後張遺跡 38. 四方田遺跡 39. 四方田氏館跡 40. 今井条里遺跡 41. 地神・塔頭遺跡 42. 九反田遺跡 43. 西富田前田遺跡 44. 西富田・四方田条里遺跡 45. 離塚遺跡 46. 笠ヶ谷戸遺跡 47. 南大通り線内遺跡 48. 薬師元屋鋪遺跡 49. 薬師遺跡 50. 西富田本郷遺跡 51. 社具路遺跡 52. 夏目遺跡 53. 二本松遺跡 54. 夏目西遺跡 55. 赤藤次遺跡 56. 西富田新田遺跡 57. 諏訪遺跡 58. 九城前遺跡 59. 北堀本田館跡 60. 栗崎館跡 61. 大久保山寺院跡
- A. 東富田古墳群 B. 大久保山古墳群 C. 塚本山古墳群 D. 西五十子遺跡群 E. 塚合古墳群 F. 北原古墳群 G. 鷺山古墳

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

今回報告する久下前遺跡 A 2・D 2・D 3・G 地点の 4カ所は、上越新幹線本庄早稲田駅の北側に位置する(第 4 図)。遺跡の周辺は、埼玉県と群馬県の県境をなす神流川によって形成された神流川扇状地の東端部にあたり、秩父山地の北縁にあたる上武山地内の湧水を水源とする金鑽川や旧赤根川などの小河川を集めて北東方向に流れる現在の女堀川の下流域にあたる。久下前遺跡は、この女堀川低地の女堀川と児玉町高閑地内で同河川から分岐する男堀川に挟まれた標高 59 ~ 63 m を測る東西方向に帯状に延びる微高地上に立地し、北側には、女堀川を挟んで水田部とあまり比高差がない低平で広大な本庄台地が、南側には男堀川を挟んで児玉丘陵から列状に並ぶ残丘性独立丘陵の大久保山が対峙している。

本遺跡周辺の女堀川下流域の各時代の集落遺跡は、低地内の自然堤防や微高地上、低地周縁の本庄台地の南側縁辺部、大久保山残丘上やその残丘斜面下の低台地上の主に 3ヶ所に立地している。また、低地内の水田部には、現代の土地改良事業によるほ場整備が実施される以前までは、一町四方の方格地割りが連続する条里形地割りが連続して認められた。

当地域では、古くは旧石器時代から遺跡の存在が認められるが、古墳時代になって遺跡数が爆発的に増加し、特に前時代の丘陵部を集落立地の主体とした弥生時代後期と異なり、古墳時代前期より低地内への集落の進出が顕著に認められる。これらの低地内に進出した集落は、弥生時代からの伝統的な在来系土器ではなく、東海・畿内・北陸・南関東地方などの系譜をもつ外来系土器を主体としており、おそらく当地域の弥生時代までの水田経営とは技術的系譜を異にした集団によって、在来集団を取り込んだ労働力の再編成と、灌漑水路の掘削による低地内の開発が積極的に行われていったものと思われる。この当地域における低地開発の成功は、その後の中・後期の集落遺跡の安定的な増加からも窺え、当地域でも地域社会の再編成の象徴として、前期後葉には大久保山残丘上に前方後円墳の可能性もある前山 1 号墳、中期前葉には円墳とされる前山 2 号墳(柿沼 1978、松本・町田 2002)、中期中葉には低地内の微高地上に大形円墳の公卿塚古墳(増田・坂本他 1986)などの首長墓級の古墳が築造され、後期には多数の小円墳を主体とする東富田古墳群、大久保山古墳群、西五十子古墳群(太田 2007)などの群集墳が形成される。当地域周辺では、7 世紀後半の白鳳時代になると、流域の低地全域にみられる条里形地割りが(児玉条里)の施工と呼応してか、低地内の集落は低地周辺部に移動する傾向が見られる。しかしながら、下流域では本遺跡をはじめ、古墳時代後期から継続的に立地する集落が多く、古墳時代前期から平安時代中期まで、集落の立地傾向にあまり大きな変化は見られないようである。

中世の遺跡は、本遺跡周辺の下流域では比較的多く確認されているが、その性格を明らかにできたものは非常に少ない。児玉地方は、平安時代末から鎌倉時代初期にかけて活躍した武蔵七党の児玉党の本貫地であり、当地域は地名から児玉党久下塚氏との関係が深い地域と考えられる。中世後期の 15 世紀中頃には、関東内乱の象徴でもある古河公方と敵対した関東管領上杉氏側の一大防衛線の拠点である五十子陣が、本遺跡の東側約 1.5km の女堀川と身馴川(現小山川)の合流地点に築かれており、それに関係する遺跡も当地域には多く存在するものと思われる。また、本遺跡周辺では中世の屋敷や村落の一部と考えられる遺構も多く検出されているが、南側の大久保山残丘を中心にして、鎌倉永福寺の創建期瓦など、中世初期からの瓦の出土が比較的多く見られる傾向がある(本庄市教委 2016)。

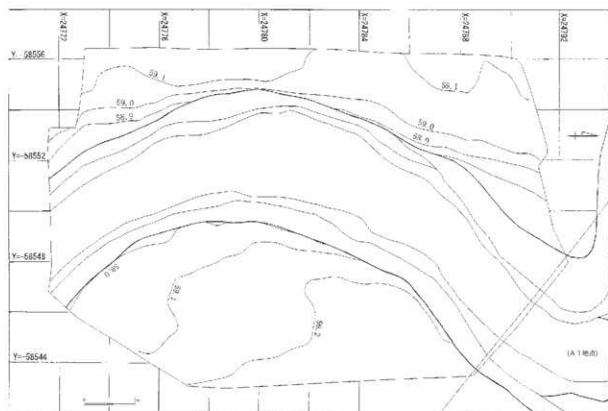
第三章 A 2 地点の調査

第1節 A 2 地点の概要

久下前遺跡のA 2地点は、遺跡東側の南端に位置している。北側には都市計画道路建設部分のA 1地点(恋河内・的野2010)が隣接している。調査区は、北側の女堀川と南側の男堀川に挟まれた東西方向に帯状に延びる平坦な微高地の南側緩斜面下の低地内にあり、いわゆる集落が立地する微高地と南側の大久保山残丘との間の男堀川低地に位置している。調査区内の確認面における標高は59m前後で、南側に向かって若干傾斜している。

調査区内で検出されたのは、古墳時代前期の河川跡1条だけである。この河川跡は、北側に隣接するA 1地点で南側の方向に90°流路を変えた河川跡の延長部分である。調査区内の地山は暗褐色粘土層で、その下は砂礫を多く含む暗灰緑色土である。この暗灰緑色砂礫層には、多くの木材が含まれており、それらは本遺跡のA 2地点(本書)、B 1地点(恋河内・的野2010)、C 4地点(恋河内2018)、G地点(本書第V章)の河川跡下でも確認されている。この低地内の木材を含む暗灰緑色砂礫及び粘土層は、本遺跡の西側約1100mの低地内の微高地上に立地する川越田遺跡B地点(恋河内1993)の河川跡の下でも確認されている。この暗灰緑色砂礫層に埋蔵されている木材は、放射性炭素年代測定の結果では、弥生時代前期の年代範囲の暦年代範囲が示されている(本書第VI章)。

出土遺物は、河川跡内から古墳時代前期後葉頃を主体とする土器片及び木材や木製品の破片が出土しているが、隣接するA 1地点に比べると非常に少ない。



第5図 A 2 地点全体図

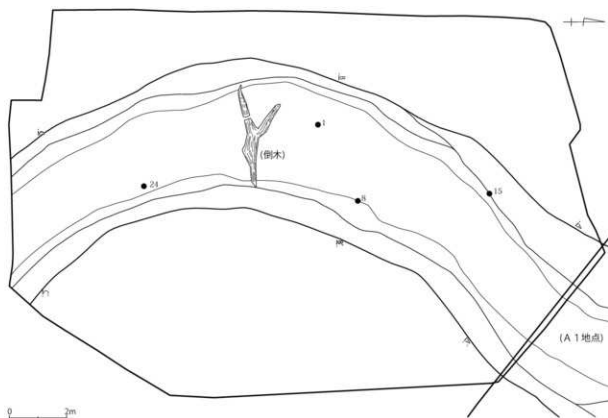
第2節 検出された遺構と遺物

1. 河川跡

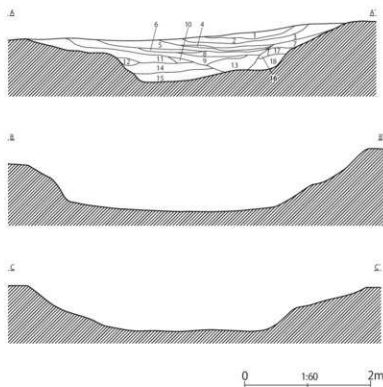
調査区内で検出された河川跡は、北側に隣接するA 1地点の河川跡と同一のもので、A 1地点で東西方向に向いていた流路を急激に南に変えたその延長部分にあたる。調査区内では流路を南北方向にしているが、弓状に大きく湾曲している。その南側延長は、調査区外で東に向かって大きく回り込み、本調査区の東側約20 mに位置するE 1地点(恋河内 2012)の河川跡に繋がるものと思われる。このE 1地点の河川跡は、北側に隣接するG地点の河川跡に繋がり、そこで流路を急激に東に変えて、東側約15 mにあるC 4地点の河川跡にさらに繋がるのが予想される。

河川跡の形態は、規模が上幅4.00 m～5.50 m、下幅2.00 m～3.50 mの比較的均一な幅である。断面の形態は、上半は緩やかに傾斜しているが、中位から下半は傾斜の方向を変えて急になっている。河川跡の掘り込みは、暗褐色粘土層下の暗灰緑色砂礫層に達しており、確認面からの深さは95 cm程度ある。底面は、広く平坦である。底面の傾斜は調査区内ではあまりわからないが、周辺の地形から見ると、おそらく水流は北から南に流れていたものと思われる。

遺物は、覆土中から古墳時代前期後葉を主体とする土器の破片が少量出土している(第8図)。土器以外では、棒状に固まった漆の破片(第8図 No24)、木材の破片、種実などが出土している(第VI章第4節・第5節)。土器は、壺、S字状口縁台付甕、く字状口縁台付甕、S字状口縁小形鉢、小形直口壺、高環、器台、小形土器など多くの器種が見られるが、完形品は少なくいずれも破片である。



第6図 河川跡



第7図 河川跡断面図

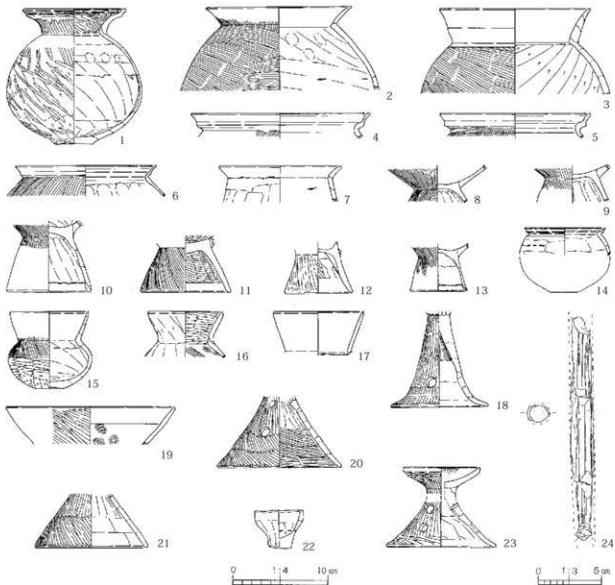
河川跡土層説明

- 第1層：黒褐色シルト層（粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：黒色土層（シルト質に、下部を中心に黄色砂を少量含む。炭を含むが第4・6層よりは少ない。粘性に富み、しまりを有する。）
 第3層：黒褐色シルト層（粘性に富み、しまりを有する。）
 第4層：黒色土層（シルト質に炭粒子を多く含む。6層と類似する。粘性に富み、しまりを有する。）
 第5層：黒褐色シルト層（粘性に富み、しまりを有する。）
 第6層：黒色土層（シルト質に炭粒子を多く含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第7層：黒褐色土層（やや砂っぽいシルト質。上部に黄色砂を少量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
 第8層：砂層（部分的にシルト質ブロックを含み、下部を中心に褐色礫を多く含む。粘性、しまりともない。）
 第9層：黒褐色シルト層（砂っぽい。粘性に富み、しまりを有する。）

- 第10層：黒褐色土層（11層に似る。粘性に富み、しまりを有する。）
 第11層：黒褐色土層（シルト質ブロック、砂層を含む。鉄跡で斑に変色している。粘性に富み、しまりを有する。）
 第12層：黒褐色土層（11層と同じでやや砂を多く含む。）
 第13層：砂礫層（径0.5～1cmの礫層を含む。特に下部の方が礫径が大きい。粘性、しまりともない。）
 第14層：黒褐色～オリーブ黒色土層（砂粒を多く含む。径1～2cmのシルト質ブロックを少量含む。）
 第15層：オリーブ黒色土層（砂粒を多く含む。径0.2～0.3cmの小礫を多く含む。）
 第16層：黒褐色土層（砂っぽいシルト質。粘性はなく、しまりを有する。）
 第17層：暗褐色土層（シルト質中に径0.5cm礫を含む。黒色土ブロック、ロームブロック少量含む。）
 第18層：砂利層（径1～2cm礫を多く含む。粘性に富み、しまりはない。）

第1表 河川跡出土遺物観察表

1	壺	A. 口縁部径(11.0)、推定高(14.3)、底部径4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ミガキ。胴部外面ケズリの後縁なミガキ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一明橙茶褐色、内一淡橙褐色。F. 1/2。G. 胴部内面に指頭圧痕を残す。H. 底面付近。
2	甕	A. 口縁部径(15.4)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡灰褐色。F. 胴部上半1/4。G. 胴部外面に煤付着。胴部内面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
3	甕	A. 口縁部径(16.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 口縁部1/4。G. 胴部外面に煤付着。H. 覆土中。
4	S字状口縁台付甕	A. 口縁部径(19.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一黒褐色、内一淡灰褐色。F. 口縁部1/6。H. 覆土中。
5	S字状口縁台付甕	A. 口縁部径(16.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡灰褐色。F. 口縁部1/4弱。H. 覆土中。
6	S字状口縁台付甕	A. 口縁部径(15.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡灰褐色、内一暗灰褐色。F. 口縁部1/6。G. 胴部内面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
7	小形甕	A. 口縁部径(13.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面篋ナデ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一暗褐色。F. 口縁部1/6。H. 覆土中。
8	S字状口縁台付甕	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ハケ、内面指ナデ。D. 白色粒。E. 外一暗褐色、内一淡褐色。F. 台部上半。G. 胴部内面に煤付着。H. 底面付近。
9	S字状口縁台付甕	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ナデの後ハケ、内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明黄褐色。F. 台部上半。G. 底部内外面に砂付着。H. 覆土中。



第8図 河川跡出土遺物

10	S字状口縁台付甕	A. 台部径9.0。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ハケ、内面笠ナデ。台部外面ナデの後ハケ、内面指ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙茶褐色。F. 台部のみ。G. 底部内面に煤付着。H. 覆土中。
11	台付甕	A. 台部径(9.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ナデ、内面ハケ。台部内外面ハケ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外上半一淡橙褐色。下半一淡黄褐色。F. 台部2/3。G. 底部内面中央に指面汗痕を残す。H. 覆土中。
12	台付甕	A. 台部径(7.2)。B. 粘土組織み上げ。C. 台部外面笠ナデ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡赤褐色。F. 台部1/3。H. 覆土中。
13	S字状口縁台付甕	A. 台部径6.0。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ハケ、内面ナデ。台部外面ナデの後ハケ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗橙褐色。F. 台部1/2。G. 底部内面に砂付着。H. 覆土中。
14	S字状口縁小形鉢	A. 口縁部径(8.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 口縁部1/4。H. 覆土中。
15	小形直口甕	A. 口縁部径(8.4)。器高8.1。底部径2.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ハケの後下半ケズリの後ミガキ、内面ナデ。底部外面ミガキ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部1/4。胴部完形。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 底部付近。
16	小形甕	A. 口縁部径(8.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ケズリ、内面ミガキ。胴部外面笠ナデ、内面ナデの後ハケ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部1/2弱。H. 覆土中。
17	小形直口甕	A. 口縁部径(9.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部1/4。H. 覆土中。

18	高 坏	A. 脚端部径 10.4. B. 粘土組織み上げ. C. 脚部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデ. D. 片岩粒、赤色粒、白色粒. E. 内外一淡褐色. F. 脚部のみ. G. 脚部門孔は3方向. H. 覆土中.
19	高 坏	A. 口縁部径 (18.0). B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部外面ミガキ、内面ハケの後ナデ. D. 赤色粒、白色粒. E. 外一暗褐色、内一淡褐色. F. 口縁部 1/6. G. 内面に風斑あり. H. 覆土中.
20	高 坏	A. 脚端部径 13.2. B. 粘土組織み上げ. C. 脚部外面ミガキ、内面ナデの後ハケ. D. 赤色粒、白色粒. E. 内外一明茶褐色. F. 脚部 3/4. G. 脚部門孔は縦2個1組で3方向. H. 覆土中.
21	高 坏	A. 脚端部径 (12.0). B. 粘土組織み上げ. C. 脚部外面ミガキ、内面鏡ナデ. D. 赤色粒、白色粒. E. 内外一淡茶褐色. F. 脚部 1/6. G. 器表面は荒れている. H. 覆土中.
22	小形土器	A. 口縁部径 5.2、器高 4.0、底部径 2.4. B. 粘土組織み上げ. C. 内外面ナデ. D. 赤色粒、白色粒. E. 内外一淡褐色. F. ほぼ完形. H. 覆土中.
23	器 台	A. 口縁部径 (4.2)、推定高 (8.5)、脚端部径 (11.6). B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部外面ミガキ、内面不明. 脚部外面ミガキ、内面鏡ナデ. D. 片岩粒、赤色粒、白色粒. E. 外一淡茶褐色、内一淡褐色. F. 器受部 1/4、脚部 1/3. G. 脚部門孔は縦2個1組で、おそらく3方向. H. 覆土中.
24	漆	A. 残存長 17.7、最大径 1.80. B. 漆が竹桿に入ったまま固形化. F. 両端欠損. G. 表面には一部竹の繊維が付着. H. 底面付近.

2. A 2 地点調査区内出土遺物



A 2 地点調査区内出土銭貨

1

第2表 調査区内出土遺物観察表

I	銭 貨	A. 直径 25.67mm、厚さ 1.72mm、重さ 5.5g. B. 鋳造. D. 銅製. F. 完形. G. 永楽通宝 (15 世紀初頭頃初鑄). 背面無文. H. 調査区内.



A 2 地点遠景 (南より)

第IV章 D 2・D 3地点の調査

第1節 D 2・D 3地点の概要

D 2地点は、都市計画道路建設予定地として発掘調査したD 1地点（恋河内 2012）の北西側に隣接している。調査区内では、地形的には東に向かって緩やかに傾斜している。

D 2地点で検出された遺構は、土坑2基（第388号土坑・第389号土坑）と、溝跡4条（第24～27号溝跡）である。調査区の北端に位置する第388号土坑は、平面形が比較的整った隅丸方形を呈し、覆土中にロームブロックを多く含む性格不明の土坑で、江戸時代中期以降と推測される。近くには、類似した形態の土坑が複数見られるが、これらは覆土中に碎石等を多く含む現代の建物などの構造物の基礎に関係するものである。調査区の南端に位置する第389号土坑は、平面形がやや規模の大きな瓢箪形を呈し、覆土の埋没状態から天井部をもち東側に入口部を有する地下式坑のような形態と推測されるもので、時期は中世後半の15世紀以降と考えられる。この土坑は、各壁面に小規模なピット状の掘り込みを複数もつ特異な形態であるが、東西方向に主軸を持つ構造のようである。この本土坑の主軸線の東側延長には、同時期の内耳鍋の破片や、五輪塔の水輪、粉挽き臼、板碑の破片を出土し、本土坑に向かって底面がやや傾斜するD 1地点の第390号土坑があり、本土坑と第390号土坑は何か有機的な関係をもつものかもしれない。

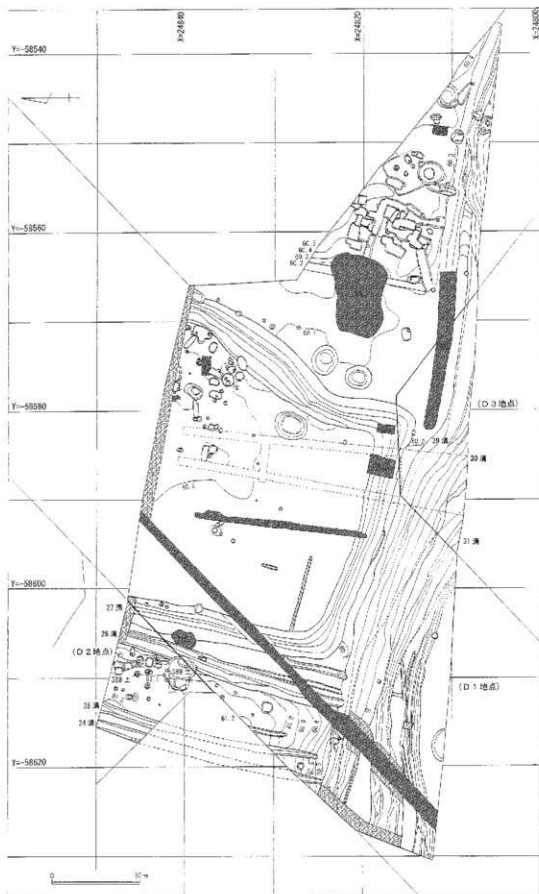
溝跡は、いずれも北東から南西方向に向いて直線的な流路をとっており、その南側は隣接するD 1地点で検出されている。第24・25・26号溝跡は、江戸時代中期後半以降の道路側溝的性格の溝と考えられ、調査区東端の第27号溝跡は、南北方向が約56m、東西方向が約37mの土地を不整形に囲繞する中世後期の15世紀後半頃の区画溝である。

遺物は、中世後期の内耳鍋や在地産片口鉢の破片と、近世の陶磁器や石製品（砥石・砥石）の破片及び銭貨（寛永通宝）などが出土している。

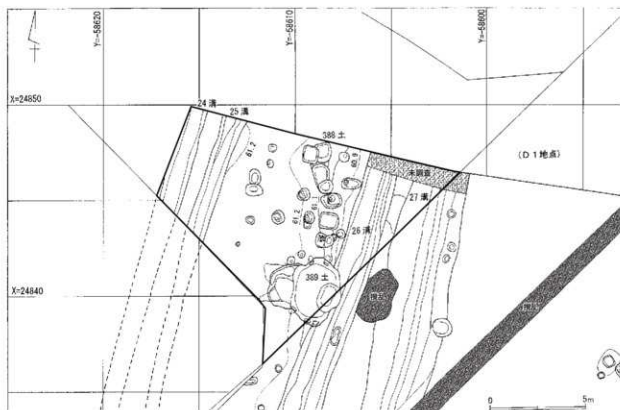
D 3地点は、都市計画道路建設予定地として発掘調査したD 1地点（恋河内 2012）の南側に隣接している。調査区内の西側半分については、昭和58年（1983年）に第1地点として発掘調査が実施されている（増田 1985）。

D 3地点で検出された遺構は、溝跡4条（第27・29・30・31号溝跡）である。D 1地点やD 2地点でも検出されている土地を囲繞する区画溝の第27号溝跡は、東西方向から南北方向に流路を変える南東側コーナー部の南端部分が検出されただけである。第29・30・31号溝跡は、調査区内ではいずれも北西から南東方向に向いた流路をとっている。溝群の西側延長は、隣接するD 1地点で検出されており、遺跡が立地するローム土の微高地と黒色土の低地の境に沿って、概ね東西方向に向いた流路をとっている。溝群の南側延長は、調査区外に延びているため不明である。第29号溝跡は、覆土上半に浅間山系A軽石を含むことから、近世の江戸時代中期後半以降の時期と考えられる。第30号溝跡は、隣接するD 1地点で15世紀後半頃の内耳鍋や茶臼の破片が出土していることから、中世の室町時代後期の時期と考えられる。第31号溝跡は、隣接するD 1地点で7世紀後半から8世紀前半の土師器や須恵器の破片が多く出土していることから、古代の白鳳時代～奈良時代前半頃の時期と考えられる。

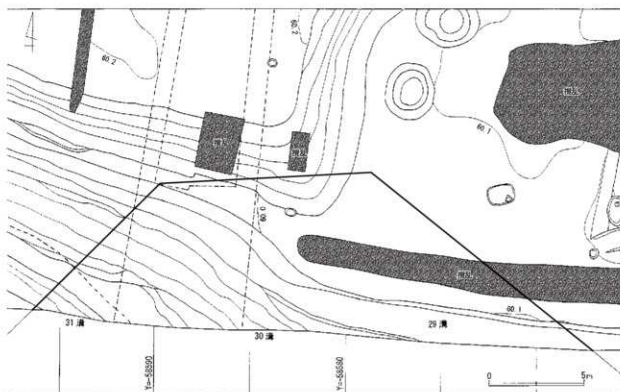
遺物は、他の地点に比べて非常に少なく、古代の土師器の破片や近世のかわらけの破片などが少量出土しただけである。



第9图 D地点全体图



第10图 D 2地点全体图



第11图 D 3地点全体图

第2節 検出された遺構と遺物

1. 土 坑

第 388 号土坑 (第 13 図、図版 5)

D 2 地点の調査区北端に位置する。浅い隅丸長方形ぎみの形態を呈する掘り込みと重複し、それを切っている。本土坑の周辺には近現代の建物と関係するピットや土坑状の掘り込みが多くみられるが、本土坑との関係は不明である。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ整った隅丸方形を呈している。規模は南北方向 87cm、東西方向 82cm を測る。壁は、直線的に立ち上がり、確認面からの深さは 53cm ある。底面は、広く平坦である。覆土は、上半が浅間山系 A 軽石やローム粒子やロームブロックを均一に含む暗灰褐色土を、下半がロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を主体にしている。

遺物は、近世の肥前系磁器碗と瀬戸美濃系鉄釉鉢の小破片や、銭貨の寛永通宝(新寛永)が 1 枚、覆土中から出土している。

本土坑の時期は、出土遺物の様相や、覆土上半に江戸時代中期の天明 3 年(1783 年)に噴火した浅間山系 A 軽石を含むことから、江戸時代中期後半以降と推測される。

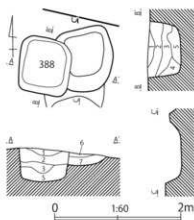


1
0 2cm

第12図 第388号土坑
出土遺物

第 3 表 第 388 号土坑出土遺物観察表

1	銭 貨	A. 直径23.50mm, 厚さ1.20mm, 重さ2.5g. B. 鋳造. D. 割製. F. 完形. G. 寛永通宝(新寛永1697年初鋳). H. 覆土中。
---	-----	---



第 13 図 第 388 号土坑

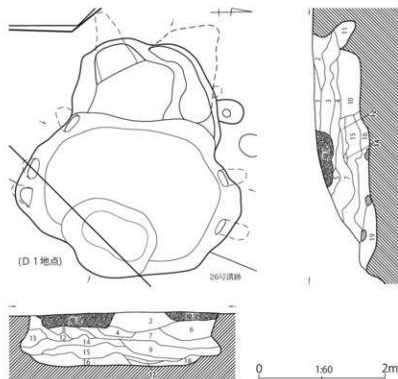
第 388 号土坑土層説明 第 388 号土坑土層説明

- 第 1 層: 暗灰褐色土層 (浅間山系 A 軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。)
- 第 2 層: 暗灰褐色土層 (浅間山系 A 軽石・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。)
- 第 3 層: 暗黄褐色土層 (ロームブロックを多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。)
- 第 4 層: 暗黄褐色土層 (ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。)
- 第 5 層: 暗灰褐色土層 (ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量に含む。粘性・しまりともない。)
- 第 6 層: 暗 褐色 土 層 (ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)
- 第 7 層: 暗黄褐色土層 (ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。)

第 389 号土坑 (第 14 図、図版 5)

D 2 地点の調査区南端に位置する。北東～南西方向に直線的な流路をとる江戸時代の第 26 号溝跡と重複しており、それによって土坑の東端を切られている。

平面形は、楕円形状の土坑が二つ重なったような瓢箪形を呈している。規模は、東西方向が 3.80m、南北方向が最大 3.64m を測る。土坑の長軸は、N-83°-W の方向を向いている。壁は、西側壁は直線的に、南北両側壁はオーバーハングぎみに立ち上がっている。いずれの壁にも性格不明の掘り込



第 14 図 第 389 号土坑

第 389 号土坑土層説明

- 第 1 層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、浅間山系 A 軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 2 層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 3 層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 4 層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 5 層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 6 層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 7 層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

- 第 8 層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 9 層：黒褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 10 層：黒褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 11 層：暗灰褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
 第 12 層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 13 層：暗灰褐色土層（鉄斑・ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 14 層：黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 15 層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 16 層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第 17 層：暗黄褐色土層（ローム粒子・細砂を均一に含む。粘性・しまりともない。）
 第 18 層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
 第 19 層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第 15 図 第 389 号土坑出土遺物

第 4 表 第 389 号土坑出土遺物観察表

1	内 耳 銅	A. 口縁部径 (32.0)。B. 粘土組織み上げ。内耳貼り付け。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体内内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗灰褐色、内一淡褐色。F. 口縁部 1/6。H. 覆土中。
2	在 地 産 片 口 鉢	A. 口縁部径 (27.0)。B. 粘土組織み上げ後ロウコ型。C. 口縁部内外面回転ナデ。体外外面ナデ、内面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一灰色。F. 口縁部 1/4。G. 還元焼成。体内内面はよく揃っている。H. 覆土中。

みが見られるが、西側壁は規模の大きな不整形の掘り込みが2カ所、南北両側壁は小規模な楕円形の掘り込みが2カ所と3カ所ある。底面は、広く平坦であるが、西側に向かって段々状に浅くなっている。確認面からの深さは、東側105cm、西側で76cmあり、中央部から東側の底面はローム層下の淡褐色粘土層を掘り込んでいる。

覆土は、ロームブロックやローム粒子を多量に含む暗黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土が不規則的な互層をなしており、地下式坑に見られるような天井部の崩落土のような埋没がうかがえる。

遺物は、在地産の内耳鍋 (No 1) や「了」の字状口縁の系譜を引く片口鉢 (No 2) の他、古代の土師器や須恵器の破片が、覆土中から比較的多く出土している。

本土坑の時期は、出土遺物の様相から、中世後期の15世紀以降と考えられる。

本土坑は、その性格についてはよくわからないが、覆土の埋没状況から掘り残しの天井部を持つ構造と推測され、東側に入口部を有する地下式坑のような形態であったと思われる。

2. 溝 跡

第24号溝跡 (第16図、図版5)

D 2地点の調査区北側に位置する。東側には第25号溝跡が並走している。調査区内では、概ね南北方向に向いて直線的な流路をとっている。南側延長は、隣接するD 1地点 (恋河内 2012) で検出されており、東西方向に流路をとる第29号溝跡まで延びている。北側延長は、道路を挟んで北側に近接する久下東遺跡のB 2・B 3地点の第5号溝跡かその東側に並走する溝群のどれかである可能性が高い。

規模は、溝の上幅約130cm・下幅70cm程度の均一な幅で、確認面からの深さは43cmある。断面の形態は、逆台形の箱堀を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、浅間山系A軽石・ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。

遺物は、古墳時代～白鳳時代の土師器や須恵器の破片が、覆土中から多く出土している。

本溝跡の時期は、隣接する他地点での状況や、覆土中に江戸時代中期の天明3年(1783年)に噴火した浅間山系A軽石を含むことから、江戸時代中期後半以降と考えられる。

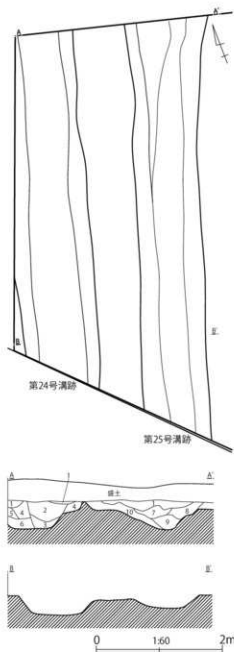
本溝跡の性格については、D地点からB地点に向いて南北方向に延びる道路の側溝的性格の溝と推測される。

第25号溝跡 (第16図、図版5)

D 2地点の調査区北側に位置する。西側には第24号溝跡が近接して並走している。調査区内では、概ね南北方向に向いて直線的な流路をとっている。その南側延長は、隣接するD 1地点 (恋河内 2012) で検出されており、東西方向に流路をとる第29号溝跡の近くまで延びている。北側延長は、道路を挟んで北側に近接する久下東遺跡のB 2・B 3地点の第5号溝跡かその東側に並走する溝群のどれかである可能性が高い。

規模は、溝の上幅約110cm・下幅45cm程度の均一な幅で、確認面からの深さは45cmある。断面の形態は、逆台形ぎみの箱堀を呈している。壁は、直線的に傾斜して緩やかに立ち上がり、底面は広く平坦である。覆土は、浅間山系A軽石とローム粒子を含む暗茶褐色土を主体にしている。

遺物は、古代の土師器の破片が、覆土中から少量出土している。



第16図 第24・25号溝跡

第24・25号溝跡土層説明

<第24号溝跡>

第1層：暗灰色土層（浅間山系A軽石を均一に、ロームブロックを微量含む。下端に鉄分凝集層を伴う。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（浅間山系A軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に、浅間山系A軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、鉄斑・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

<第25号溝跡>

第7層：暗茶褐色土層（浅間山系A軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8層：暗茶褐色土層（浅間山系A軽石・ローム粒子を均一に、焼土粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第9層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第10層：暗茶褐色土層（浅間山系A軽石・ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

本溝跡の時期は、隣接する他地点での状況や、覆土中に江戸時代中期の天明3年(1783年)に噴出した浅間山系A軽石を含むことから、江戸時代中期後半以降と考えられる。

本溝跡は、第24号溝跡と同じく、道路の側溝的性格の溝と推測されるが、第24号溝跡との関係は不明である。

第26号溝跡（第18図）

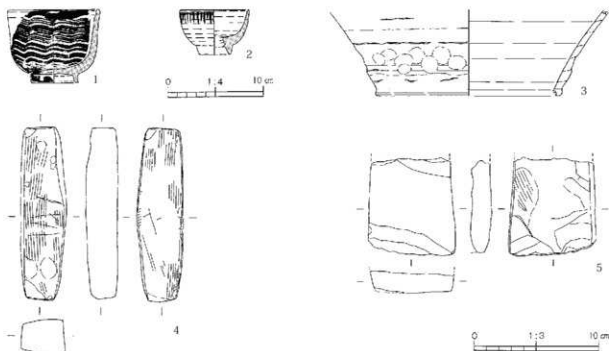
D 2地点の調査区東側に位置する。重複する第389号土坑を切っている。調査区内では、東側の第27号溝跡と並走し、概ね南北方向に向いて直線的な流路をとっている。本溝跡の南側の延長は、隣接するD 1地点で検出されており、そのまま直線的な流路をとっているようである。北側の延長は、道

路を挟んで近接する久下東遺跡のB 3地点(恋河内・的野 2014)で検出されている。

規模は、溝の上幅が約 180cm、下幅が 130cm 程度の均一な幅で、確認面からの深さは 87cm ある。壁は、緩やかに直線的に傾斜して立ち上がり、断面の形態は逆台形を呈している。溝の東側は、細い溝状に 18cm 程度深くなっている。覆土は、ローム粒子や白色粘土粒子を含む暗茶褐色土を主体としている。

遺物は、近世の遺物が主体で、肥前系の陶器(No 1)と磁器(No 2)や瀬戸美濃系陶器の破片、在地産の大形鉢(No 3)や焙烙の破片、柱状砥石(No 4)や硯(No 5)の破片が、覆土中から出土している。

本溝跡の時期は、出土遺物の様相から、江戸時代中期以降と考えられる。



第 17 図 第 26 号溝跡出土遺物

第 5 表 第 26 号溝跡出土遺物観察表

1	肥前系陶器	A. 口縁部径(9.8)、器高 9.7、高台部径(5.0)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデの後施釉。外面に波状文を施す。D. 白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 1/2。G. 内面貫入顕著。H. 覆土中。
2	肥前系磁器	A. 口縁部径(7.4)、器高 4.7、高台部径(3.4)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデの後施釉。外面染付による模様を施す。D. 白色粒。E. 内外一白色。F. 1/3。G. 内外面貫入顕著。H. 覆土中。
3	大形鉢	A. 底部径(19.8)。B. 粘土層積み上げ。C. 体部外面ナデ、内面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一黒褐色、内一暗灰色、内一淡褐色。F. 底部 1/4 弱。G. 体部外面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
4	砥石	A. 長さ 13.6、最大幅 3.6、最大厚 2.7、重さ 211.8g。B. 髻ケズリ。C. 表面はよく磨れて摩滅している。各面に髻ケズリ痕を残す。D. 流紋岩。F. 完形。G. 各表面には鉄分が付着。H. 覆土中。
5	硯	A. 残存長 7.7、最大幅 6.9、重さ 125.5g。B. 板状に剥離後整形。C. 裏表面とも剥落顕著。側面研磨。D. 粘板岩。E. 破片。H. 覆土中。

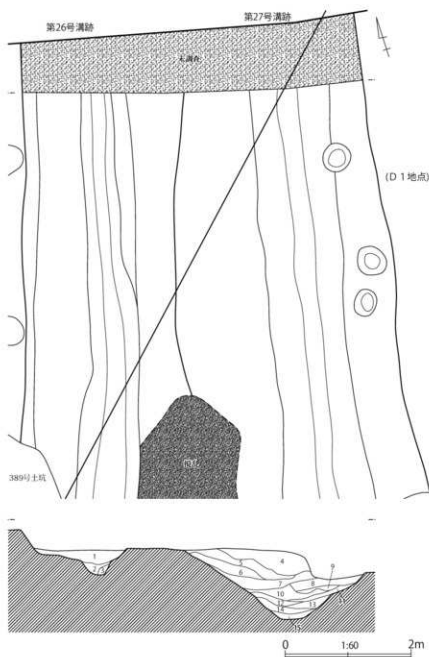
第 27 号溝跡 (第 18 図)

D 2 地点の調査区東端に位置する。本溝跡の大部分は、東側に隣接する D 1 地点(恋河内 2012)にあり、北側に隣接する久下東遺跡 B 1 地点(松本・大熊 2009、恋河内・的野 2014)の第 1 号溝跡や B 2 地点(恋河内・的野 2014)の第 9 号溝跡と連続する溝で、南北方向が約 56 m、東西方向が約 37 m の土

地を不整形に圍繞して区画する性格の溝である(第19図)。

規模は、溝の上幅が300cm～350cm、下幅が30～35cmを測り、確認面からの深さは145cmある。断面の形態は、壁が直線的に傾斜し、底面が狭い平坦をなす箱菜研である。

覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土、ロームブロックを含む暗黄褐色土、鉄斑や白色粘土ブロックを含む暗灰色土を主体としており、明確な掘り返しは認められない。溝底面付近に細砂が見られる

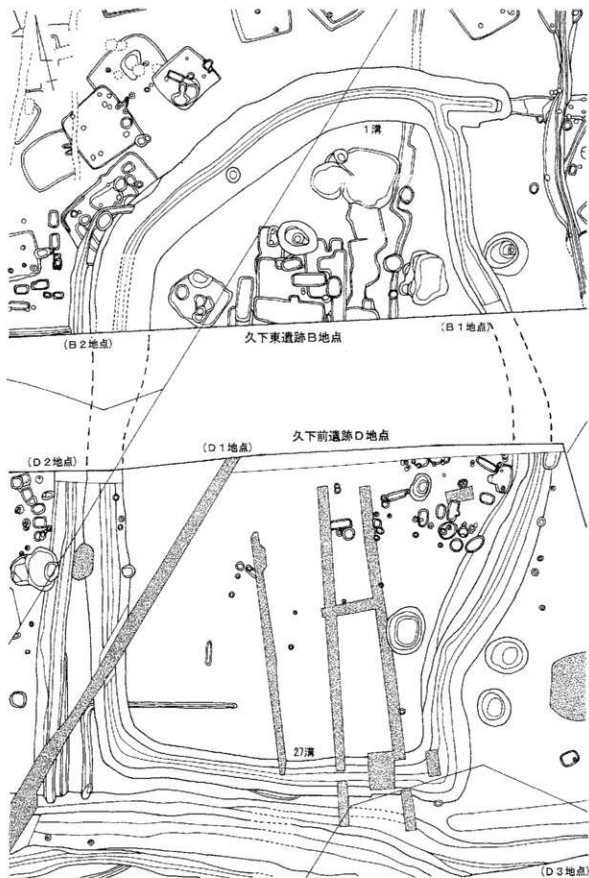


第18図 第26・27号溝跡

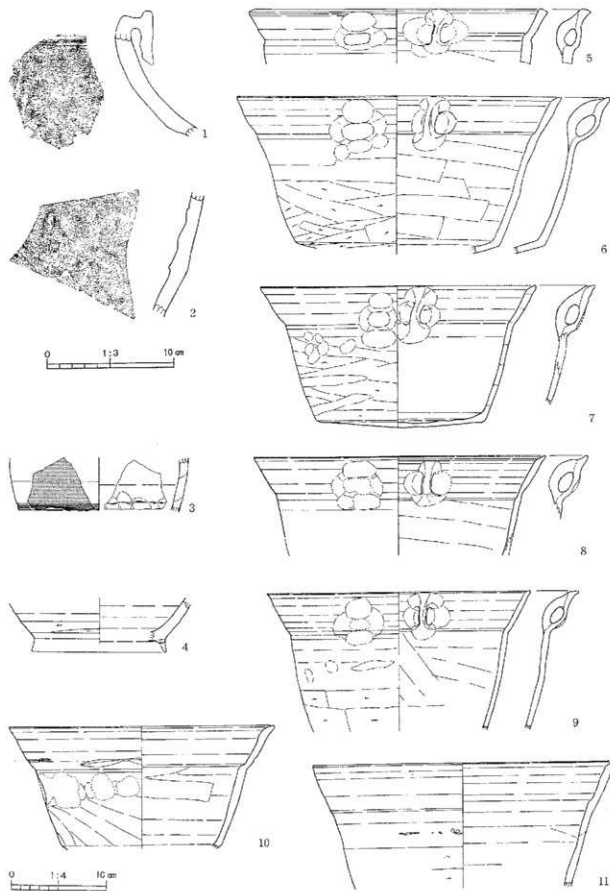
26・27号溝跡土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子・白色粘土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子・白色粘土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第7層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、白色粘土粒子・白色粘土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第8層：暗茶褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・白色粘土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第9層：暗褐色土層（鉄斑を均一に、白色粘土粒子・白色粘土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第10層：暗灰褐色土層（ローム粒子・白色粘土ブロックを均一に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

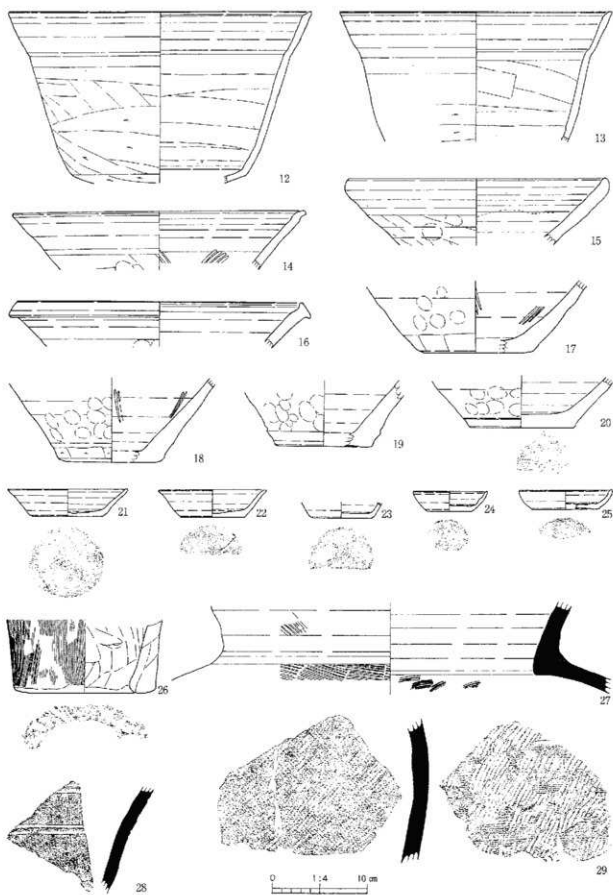
- 第11層：暗黄灰色土層（淡黄灰色粘土を主体に、マンガン塊・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第12層：暗灰色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第13層：淡灰色土層（鉄斑・黄白色粘土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第14層：淡灰色土層（細砂・黄白色粘土ブロック・黄白色粘土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第15層：淡灰色土層（細砂・黄白色粘土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



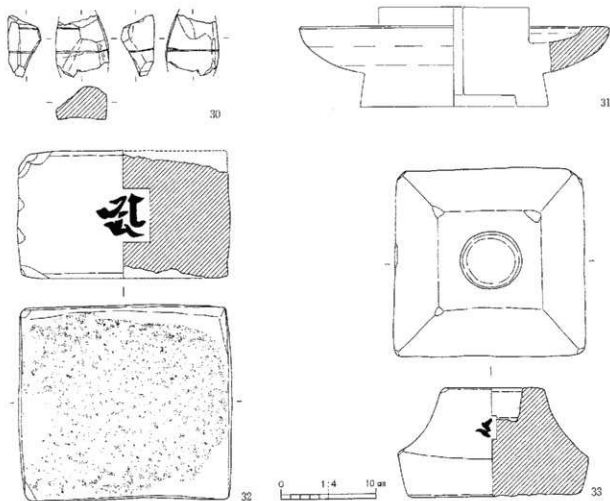
第 19 図 久下東遺跡B地点第 1 号溝跡と久下前遺跡D地点第 27 号溝跡 (恋河内 2012 より)



第 20 図 D 1 地点第 27 号溝跡出土遺物 (1) (恋河内 2012 より)



第21图 D1地点第27号溝跡出土遺物(2)(恋河内2012より)



第22図 D1地点第27号溝跡出土遺物(3) (恋河内2012より)

程度で、あまり流水はなかったようである。

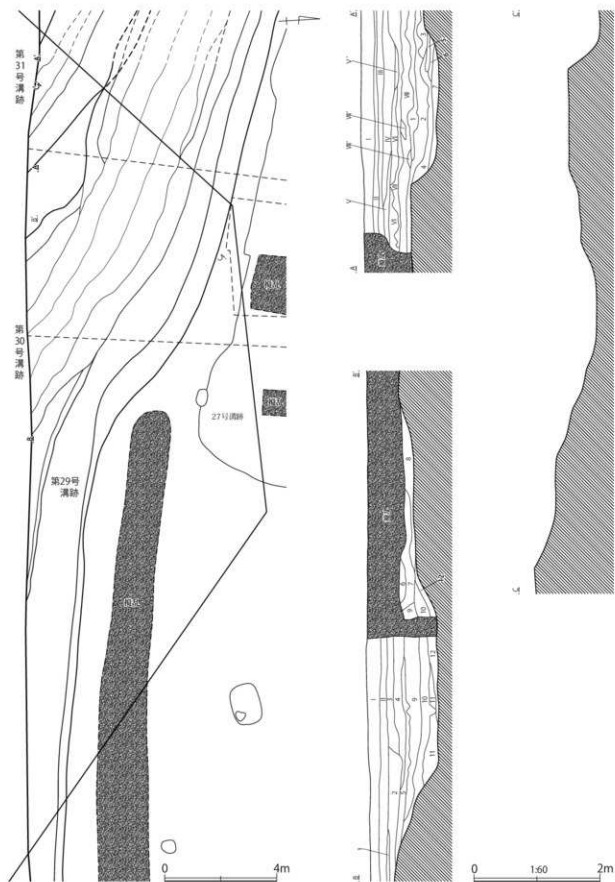
遺物は、古代の土師器の破片が、覆土中から少量出土しただけであるが、隣接するD1地点では内耳鍋やかわらけのほか、茶白の破片や五輪塔(火輪・地輪)などが出土している(第20～22図)。

本溝跡の時期は、南側に隣接するD1地点(恋河内2012)や、同一の溝と考えられる北側に近接する久下東遺跡B地点(恋河内・的野2014)の第9号溝跡の様相から、中世後期の15世紀後半頃と推測される。

第29号溝跡(第23図、図版6)

D3地点の調査区北西側から南側にかけて位置する。重複する第30号溝跡を切っている。遺跡が立地する北側微高地のローム土と南側低地の黒色土の境界付近を、調査区内では若干湾曲しながら東西方向に向けて流路を取っている。溝跡の西側は、隣接するD1地点(恋河内2012)でその延長が検出されている。

規模は、溝の上幅が約140cm、下幅が約50cmを測り、確認面からの深さは30cm程度ある。断面の形態は、壁が緩やかに傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。



第23図 第29～31号溝跡

第 30 号溝跡土層説明

- 第1層：黄褐色粘質砂層（ローム粒子・径0.5cmの礫を少量、径1cmのロームブロック・径1cmの礫を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色粘質砂層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・径1cmの礫・径1cmの明黄褐色粘質土ブロック・明黄褐色粘質土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第3層：黄褐色粘質砂層（ローム粒子・径1cmの明黄褐色粘質土ブロックを少量、炭化物・径1cmの礫を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色粘質砂層（焼土粒子・炭化物・径1cmの礫・径1cmの明黄褐色粘質土ブロック・明黄褐色粘質土粒子・黄色土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第5層：黒褐色粘質砂層（径1cmの明黄褐色粘質土ブロック・明黄褐色粘質土粒子・酸化鉄を少量、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：黒褐色粘質砂層（明黄褐色粘質土粒子・酸化鉄を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第7層：灰黄褐色粘質砂層（酸化鉄を多量、径10cm・径1cmの明黄褐色粘質土ブロックを少量、径1cmの礫を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第8層：灰黄褐色粘質砂層（ローム粒子・炭化物・径1cmの明黄褐色粘質土ブロック・酸化鉄を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第9層：黒褐色粘質土層（径1cmの焼土ブロック・径10cm・径3cmの礫、酸化鉄を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第10層：黒褐色粘質砂層（ローム粒子・焼土粒子・径1cmの礫・酸化鉄を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第11層：黒褐色粘質土層（酸化鉄を少量、径3cmのロームブロック・径1cmの明黄褐色粘質土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第12層：灰黄褐色粘質砂層（径3cmの礫を多量、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第 31 号溝跡土層説明

- 第I層：灰黄褐色砂質層（浅間山系A軽石・径1cmのロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第II層：黄褐色砂質層（ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第III層：灰黄褐色粘質砂層（ローム粒子を少量、径1cmのロームブロック・径0.5cmの焼土ブロックを微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第IV層：黒褐色粘質砂層（径3cmの礫・酸化鉄を少量、炭化物・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第V層：暗褐色粘質砂層（炭化物・焼土粒子・径1cmの礫・酸化鉄を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第VI層：黒褐色粘質砂層（ローム粒子・酸化鉄を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第VII層：黒褐色粘質砂層（酸化鉄を少量、ローム粒子・焼土粒子・暗褐色土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第VIII層：黒褐色粘質砂層（暗褐色土粒子を少量、径1cmのロームブロック・炭化物・焼土粒子・径1cmの礫を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第IX層：黒褐色粘質土層（酸化鉄を少量、径1cmのロームブロック・径1cmの焼土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第X層：灰褐色砂層（浅間山系B軽石を含む。粘性・しまりともない。）
- 第1層：灰褐色粘質砂層（径1cmのロームブロックを少量、径3cmのロームブロック・径0.5cmの炭化物・焼土粒子・酸化鉄を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：黒褐色粘質砂層（径1cmのロームブロック・径0.5cmの炭化物・焼土粒子・酸化鉄を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：黒色粘質砂層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第4層：黒褐色粘質砂層（ローム粒子を少量、径1cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第5層：黒褐色粘質砂層（ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを少量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第6層：黒褐色粘質砂層（ローム粒子を少量、径1cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第7層：黒褐色粘質土層（ローム粒子を少量、径1～3cmのロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

覆土は、細砂や淡黄白色ローム粒子を含む暗灰褐色土を主体とし、覆土上半には浅間山系A軽石の含有が見られる。

遺物は何も出土していないが、隣接するD1地点では覆土中から近世以降の陶磁器の破片が少量出土している。

本溝跡の時期は、覆土中に江戸時代中期の天明3年(1783年)に噴火した浅間山系A軽石を含むことや隣接するD1地点の出土遺物の様相から、近世後半以降と考えられる。

第 30 号溝跡 (第 23 図、図版 6)

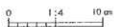
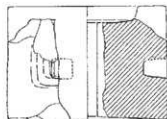
D 3 地点の調査区西側に位置する。重複する第 29 号溝跡に切られている。調査区内における本溝跡の大部分は、第 1 地点 (増田 1985) としてすでに調査されている。流路は、ほぼ東西方向に向いており、その西側延長は隣接する D 1 地点 (恋河内 2012) で検出されている。

規模は、溝の上幅が約 340cm、下幅が約 100cm を測り、確認面からの深さは 50cm 程度ある。断面の形態は、壁が緩やかに傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。

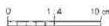
覆土は、明黄褐色粘質土や鉄分の凝集塊を含む砂層を主体とし、底面付近には径 3cm 程度の礫を多量に含んでいる。覆土の堆積は、概ね自然堆積を示す。

遺物は、覆土中から No 1 の近世前半頃のかかわりの破片 (第 25 図) が出土しているが、これは重複する第 29 号溝跡からの混入と考えられる。D 1 地点では、古代の土師器や須恵器の破片とともに、15 世紀後半以降の内耳鍋の破片や茶臼の破片が覆土中より出土している (第 24 図)。

本溝跡の時期は、隣接する D 1 地点で第 27 号溝跡と並走することが推測されていることから、それと同じく中世後半の 15 世紀後半頃に推測される。



第 24 図 D 1 地点第 30 号溝跡出土遺物 (恋河内 2012 より)



第 25 図 第 30 号溝跡出土遺物

第 6 表 第 30 号溝跡出土遺物観察表

1	かわらけ	A. 口縁部径 (9.0)、器高 2.0、底部径 (6.0)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 口縁部 1/4。H. 覆土中。
---	------	--

第 31 号溝跡 (第 23 図、図版 6)

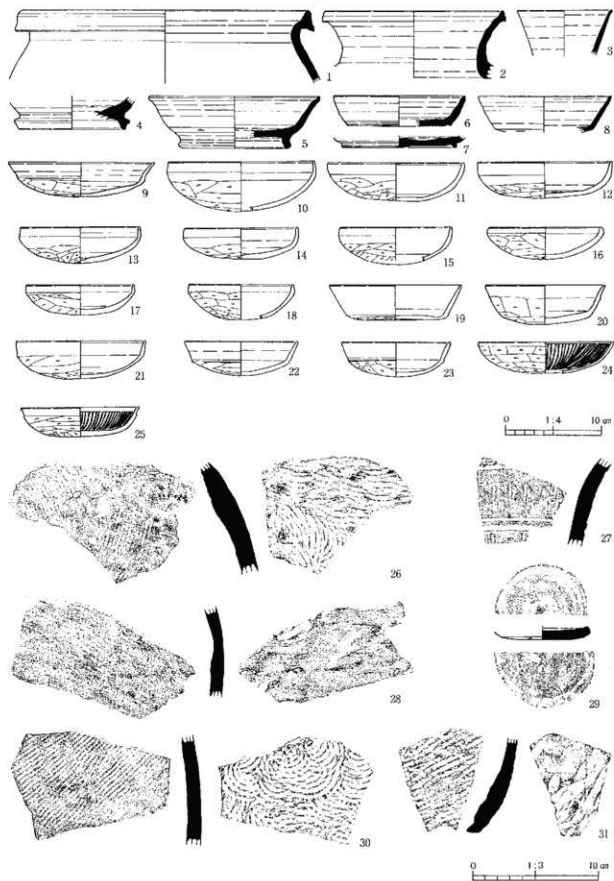
D 3 地点の調査区南西端に位置する。重複する第 30 号溝跡に切られている。調査区内では、溝跡の一部が検出されただけであるが、その西側延長は隣接する D 1 地点 (恋河内 2012) で検出されている。流路は、西側の D 1 地点では弓状に緩やかに湾曲しており、D 3 地点で南側調査区外に延びている。

規模は、溝の上幅が約 160cm、下幅が約 45cm を測り、確認面からの深さは 50cm 程度ある。断面の形態は、壁が緩やかに傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。

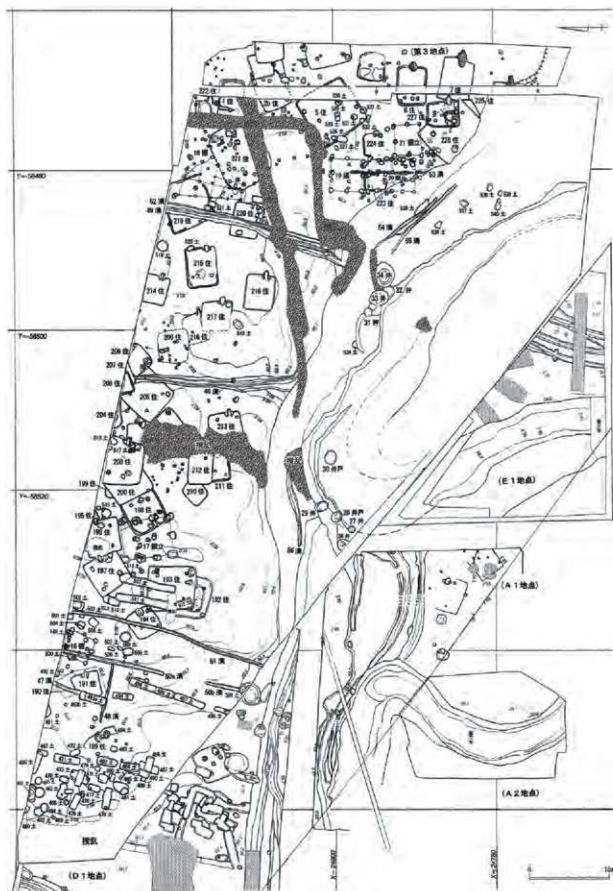
覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む黒褐色の粘質砂層を主体としている。覆土の堆積は、概ね自然堆積を示す。

遺物は、D 3 地点では古代の土師器の破片が覆土中から少量出土しただけであるが、隣接する D 1 地点では古墳時代後期後半から奈良時代前半頃の土師器や須恵器の破片が、覆土中から多く出土している (第 26 図)。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係や D 1 地点の出土遺物の様相から、白鳳時代から奈良時代前半頃に機能していたと考えられる。



第 26 図 D 1 地点第 31 号溝跡出土遺物 (恋河内 2012 年より)



第 27 图 G地点全体图

第V章 G地点の調査

第1節 G地点の概要

G地点は、本遺跡が立地する東西方向に帯状に延びる微高地の緩やかに傾斜する南側斜面の中央付近から西側に位置する。調査区の西側には都市計画道路建設予定地として調査したD1地点(恋河内2012)、南西側にはA1地点(恋河内・約野2010)やE1地点(恋河内2012)が隣接している。調査区の東側は、道路の拡幅工事に伴って調査した第3地点(松本・町田2002)が隣接し、その道路を挟んでさらに東側にはC3地点やC4地点(恋河内2018)が近接している。

G地点の調査区内から検出された遺構は、主に古墳時代～江戸時代のものであり、竪穴式住居跡44軒、掘立柱建物跡6棟、井戸跡9基、土坑83基、溝跡12条、河川跡1条が確認されている。

古墳時代の遺構は、前期～後期にわたり、住居跡19軒、井戸跡1基、土坑1基である。前期の遺構は、住居跡6軒と河川跡がある。住居跡は調査区中央と東端に見られるが、遺存状態の良好なものではなく、出土遺物も比較的少ない。規模は、第221号住居跡が8m程度あるが、その他は5m以下のものである。河川跡は、溝の上幅が12m～15m程度の規模のもので、調査区内で大きく湾曲した流路をとっている。覆土中からは前期を主体とする土器の破片や木製品を含む木片等が多く出土している。中期の遺構は、住居跡1軒だけである。第193号住居跡は、規模が6m程度の中型で、住居の壁より内側にある初期的なカマドを作っている。後期の遺構は、住居跡12軒、井戸跡1基、土坑1基である。これらの時期は、後期中葉～後葉を主体とし、前葉頃のものは見られない。住居跡は、規模は3m～6m程度のものがあり、この時期から住居の向きを北東方向に向けるものが多くなる。

白願時代の遺構は、住居跡8軒と井戸跡1基である。住居跡は、調査区の中央部に分布しているが、東側(第215・216・217・218・220号住居跡)と西側(第196・198・211号住居跡)の2群に分かれている。規模は、4m程度のものが主体で、ほとんどが住居の向きを東～北東方向に向けている。

奈良時代の遺構は、住居跡7軒である。住居跡は、調査区の中央部から東側に分布している。規模は3m～4m程度のものが主体で、ほとんどが住居の向きを東側に向けている。

平安時代の遺構は、住居跡6軒、掘立柱建物跡4棟、井戸跡3基である。時期は、いずれも前期を主体としており、明確に中期に下るものはないようである。住居跡と掘立柱建物跡は、調査区の中央部(第203号住居跡、第17号掘立柱建物跡)と東側(第6・7・222・224・227号住居跡、第10・20・21号掘立柱建物跡)に分かれて分布している。住居跡は主軸の向きを東側に、掘立柱建物跡の長方形建物は長軸を南北方向に、方形建物は南北か東西方向に向けている。井戸跡は、調査区南側の旧河川跡が埋没して形成された低地の縁辺部に掘削されており、G地点の東側に隣接するC3地点で見られた井戸の配置のあり方と類似している。住居跡や建物跡と同じく中央部(第27・29号井戸跡)と東側(第31号井戸跡)に分かれて位置しているが、C3地点と同様に灌漑用の溜井的性格も推測される。

中世の遺構は、掘立柱建物跡1棟、井戸跡3基、土坑9基、溝跡1条である。この中の第500・501・504・505・508・510号土坑は、中世後期(戦国時代前期以降)の土坑墓である。これらは、調査区の北西側にまとまって分布していることから、墓地を形成していたものと思われる。平面形は隅丸長方形ぎみのものが多く、埋葬姿勢が分かるものはすべて北頭位の横臥屈葬である。副葬品は、2基からかわらけが、6基から銭貨が出土している。銭貨は、このうちの3基が6枚1組の六道銭である。

第2節 検出された遺構と遺物

1. 竪穴式住居跡

第1号住居跡（第28図、図版8）

G地点の調査区北東端に位置する。第222号住居跡と重複し、それによって切られている。

調査区内で検出されたのは、住居跡の西側の一部だけであるが、隣接する第3地点（松本・町田 2002）の調査で本住居跡の東側の一部が検出されているため、住居跡の形態をある程度推測することが可能である。

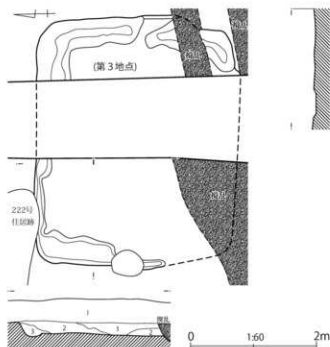
平面形は、本地点と第3地点で検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い比較的整った隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が3.96 m、東西方向が3.30 mを測る。住居跡の長軸方向は、N-90°-Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で20cmある。残存する各壁の壁下には、幅14cm～45cm、床面からの深さ6cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。

カマドや柱穴等のピットは見られない。

遺物は、覆土中から土師器の小片が少量出土しただけである。第3地点の報告書（松本・町田 2002）では、覆土中から出土した3点の土器が図示されているが、No 1の土師器環は7世紀後半の白鳳時代、No 2の土師器環は8世紀の奈良時代、No 3の甕は10世紀中頃の平安時代中期と思われる、いずれも時期が異なっている（第29図）。

本住居跡の時期は、第3地点側の覆土中から白鳳時代から平安時代中期までの土器片が少量出土しているが、平安時代前期前半頃の第222号住居跡に切られていることから、白鳳時代から奈良時代頃のものとして推測される。



第28図 第1号住居跡

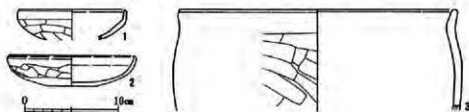
第1号住居跡土層説明

第1層：表土。

第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層

第3層：暗褐色土層



第29図 第3地点側第1号住居跡出土遺物（松本・町田 2002より）

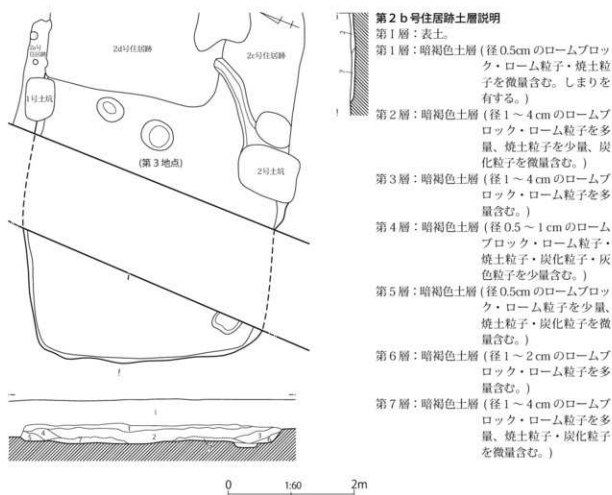
第2 b号住居跡 (第30図、図版8)

G地点の調査区東端に位置する。調査区内で検出されたのは住居跡の西側だけであるが、本住居跡の東側半分は隣接する第3地点(松本・町田2002)で調査されているため、ある程度遺構の全容を推測することができる。第3地点側では、重複する第2 c・2 d号住居跡や第1・2号土坑に切られている。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を基調にしていたと思われる。規模は、南北方向が4.18 m、東西方向は4.74 mまで測れる。住居跡の長軸方向は、N-66°-Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。第3地点側で検出された住居南側壁の壁下には、幅20cm、床面からの深さが10cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は強く締まっているが壁際の周辺部はやや軟弱である。G地点側の住居跡内からは、ピットは検出されていない。

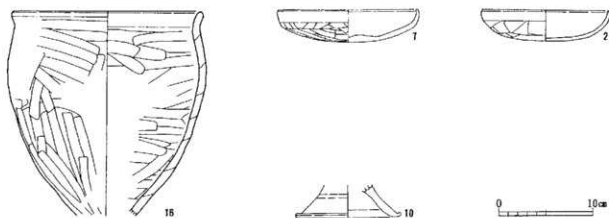
カマドは、残存する部分からは検出されなかったが、おそらく第3地点側の第2 d号住居跡に切られている住居東側壁に構築されていた可能性が高いと思われる。



第30図 第2 b号住居跡

遺物は、G地点側では覆土中から土師器の小片が少量出土しただけである。隣接する第3地点側では、奈良時代の土師器の坏 (No 7・2) や小型台付甕 (No10) などが出土している (第31図)。この中のNo16の土師器甕は、おそらく平安時代中期の10世紀中頃以降のものと思われ、本住居跡に伴うものではなく混入品と考えられる。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、奈良時代頃と推測される。



第31図 第3地点側第2b号住居跡出土遺物 (松本・町田 2002 より)

第5号住居跡 (第32図、図版8)

G地点の調査区東端に位置する。住居跡の北西側壁の一部を後世の攪乱によって切れ、重複する第526・527・528・529・530・531・532・533号土坑に切られている。調査区内で検出されたのは住居跡の西側半分だけであるが、本住居跡の東側コーナー部は隣接する第3地点 (松本・町田 2002) で調査されているため、ある程度遺構の全容を推測することができる。

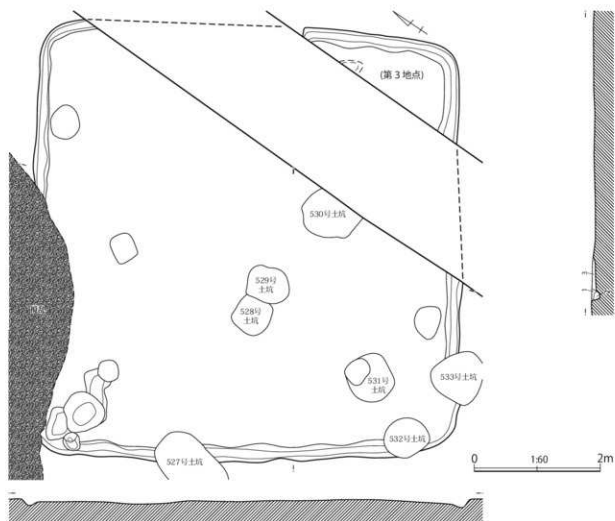
平面形は、コーナー部の丸みが強い比較的整った隅丸方形を呈している。規模は、北西～南東方向が6.75 m、北東～南西方向が6.86 mを測る。住居跡の北西壁と南東側壁は、N-56°-Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは5 cm程度ある。各壁の壁下には、幅20 cm前後、床面からの深さが5 cm程度の壁溝が巡っているが、南側コーナー部と北東側壁の中央付近は途切れている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。住居跡内からはビットが複数検出されているが、本住居跡に伴うものは明確ではない。

調査区内では戸やカマドは検出されなかったため、おそらくG地点と第3地点の間の未調査区に存在するものと思われる。

遺物は、覆土中から土師器の小片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、住居跡の形態が整った隅丸方形を呈することから、おそらく古墳時代頃までのものと思われる。



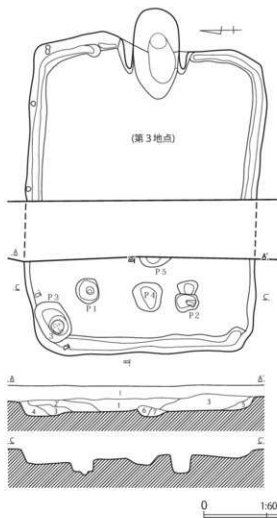
第32図 第5号住居跡

第6号住居跡（第33図、図版8）

G地点の調査区東端に位置する。調査区内で検出されたのは、住居跡の西側の一部だけであるが、隣接する第3地点（松本・町田2002）の調査で本住居跡の東側が検出されている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い比較的整った隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が5.15m、南北方向が3.70mを測る。住居跡の主軸方向は、N-90°-Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。第3地点側の住居各壁の壁下とG地点側の住居西側壁の壁下には、幅25cm前後、床面からの深さが14cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、G地点側の住居西側で、P1～P5の5カ所が検出されている。この中でP1とP2は、ほぼ住居の対角線上に位置していることから、住居の上屋を支える4本主柱穴の一部の可能性が考えられるが、第3地点の住居東側では対応するピットは検出されていない。P3は、北西側コーナー部に位置する。形態は、70cm×48cmの隅丸長方形を呈し、床面からの深さは60cmある。ピット底面からは、No3の土師器裏の下半部が正位に埋設された状態で出土している。P4とP5は、住居西側の中央付近に位置する。いずれも床面からの深さ



第6号住居跡土層説明

第1層：表土。

第2層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子を少量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（径0.5cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、0.5cmのロームブロック・ローム粒子・炭化粒子・径0.5～1cmの灰褐色粘土ブロックを少量含む。）

第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子・白色粒子を微量含む。）

第6層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）

第8層：暗褐色土層（ローム粒子・黒褐色土を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）

第9層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、黒褐色土を中量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）

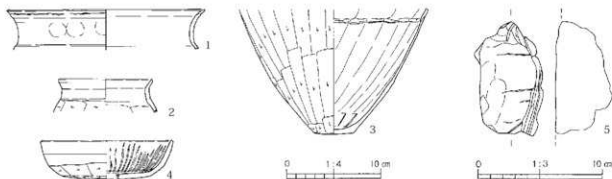
第10層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）

第11層：暗褐色土層（径5cmのロームブロックを主体とする。）

第12層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第13層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを少量含む。）

第33図 第6号住居跡

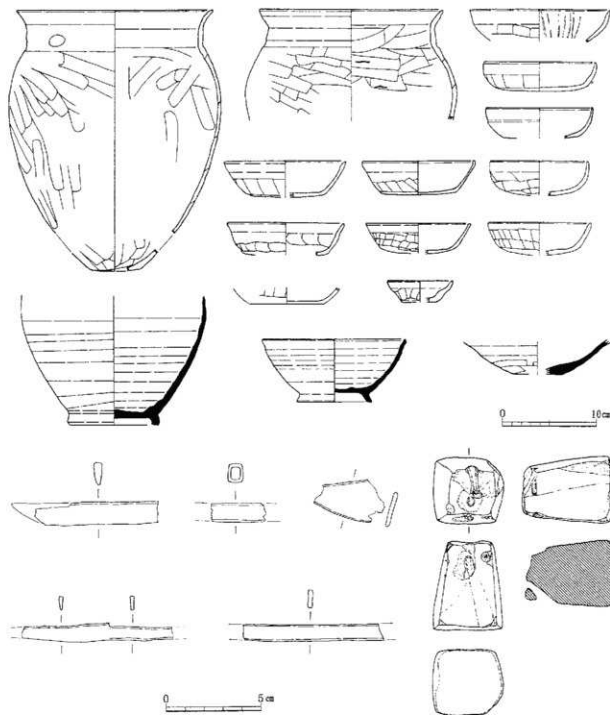


第34図 G地点側第6号住居跡出土遺物

第7表 G地点側第6号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(21.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 口縁部1/6。H. 覆土中。
2	小形甕	A. 口縁部径(10.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 口縁部1/3。H. 覆土中。
3	甕	A. 底部径4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗褐色、内一明茶褐色。F. 胴部下平のみ。G. 胴部外面煤付着。H. P.3内。

4	暗文環	A.口縁部径(14.0)、器高4.1、底部径(9.4)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.白色粒。E.内外一暗茶褐色。F.口縁部1/4強。G.体部内面に放射状暗文を施す。H.覆土中。
5	土壁状土製品	A.残存長8.8、残存幅5.5、厚さ4.6、重さ165.4g。B.手捏ね。C.表面ナデ。D.白色粒。E.内外一明茶褐色。F.破片。G.表面に植物繊維状の圧痕あり。H.覆土中。



第35図 第3地点側第6号住居跡出土遺物（松本・町田2002より）

が10cm程度の浅いもので、その性格は不明である。

カマドは、第3地点（松本・町田2002）側の住居東側壁の中央に位置し、住居の壁をほぼ直角に掘り

込んで構築している。規模は、残存長 145cm、最大幅 120cm を測る。本住居跡のカマドの詳細については、第 3 地点の報告書を参照されたい。

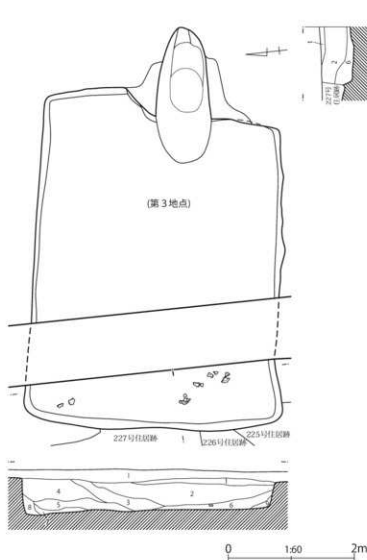
出土遺物は、G 地点側からは住居跡の覆土中や P 3 内から、平安時代前期を主体とする土師器の甕や環の破片が出土している。土器以外では、覆土中から雑な平坦面をもつ土壁状の土製品の破片が出土している（第 34 図）。また、第 3 地点側では土師器や須恵器などの土器の他に、刀子などの鉄製品の破片や鉄滓、及び権状の石製品が出土している（第 35 図）。

本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土土器の様相から、平安時代前期と考えられる。

第 7 号住居跡（第 36 図、図版 8）

G 地点の調査区東端に位置する。重複する第 225・226 号住居跡を切り、第 227 号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは住居跡の西側の一部だけであるが、隣接する第 3 地点で本住居跡の東側が調査されているため、遺構の全容を推測することができる。

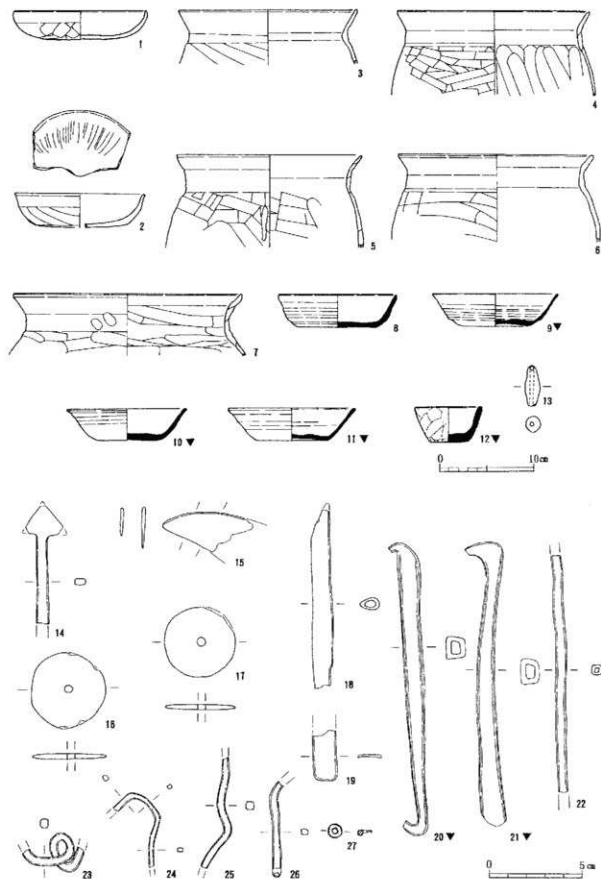
平面形は、コーナー部がやや丸みを持つ長方形を基調にしているが、第 3 地点側の住居東側壁は、



第 36 図 第 7 号住居跡

第 7 号住居跡土層説明

- 第 1 層：表土。
 第 1 層：暗褐色土層（径 0.5cm のロームブロック・ローム粒子・白色粒子を多量、径 1cm の焼土ブロック・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）
 第 2 層：暗褐色土層（径 1～2cm のロームブロック・ローム粒子を多量、径 1cm の焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子を少量、小礫を微量含む。）
 第 3 層：暗褐色土層（径 1～5cm のロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第 4 層：暗褐色土層（径 1～3cm のロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子・白色粒子を少量含む。）
 第 5 層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径 1～2cm のロームブロックを少量含む。）
 第 6 層：暗褐色土層（径 0.5～3cm のロームブロックを多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
 第 7 層：黄褐色土層（径 1～3cm のロームブロック・ローム粒子の混合土。）
 第 8 層：黄褐色土層（径 1～4cm のロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、径 1cm の炭化ブロックを少量含む。）
 第 9 層：黄褐色土層（径 1cm のロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、焼土粒子を微量含む。）



第37図 第3地点側第7号住居跡出土遺物（松本・町田2002より）

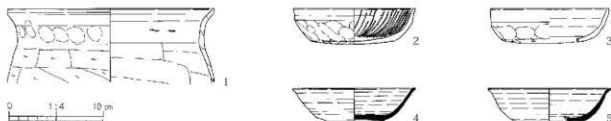
カマドの両側で壁の位置が異なる、いわゆる段違い壁になっている。規模は、東西方向が5.44 m、南北方向が4.10 mを測る。住居跡の主軸方向は、N-98°-Eを向いている。

壁は、直線的に立ち上がり、確認面からの深さは57cmある。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

カマドは、第3地点側の住居東側壁の中央に位置し、住居の壁をほぼ直角に掘り込んで構築している。規模は、残存長214cm、最大幅210cmを測る。本住居跡のカマドの詳細については、第3地点の報告書を参照されたい。

遺物は、G地点側では土師器や須恵器などの土器が、覆土中や床面付近から少量出土している(第38図)。また、第3地点側では土師器や須恵器などの土器の他に、鉄鍔・鉄製紡錘車などの比較的多くの鉄製品や、土錘が1点出土している(第37図)。

本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土土器の様相から、平安時代前期と考えられる。



第38図 G地点側第7号住居跡出土遺物

第8表 G地点側第7号住居跡出土遺物観察表

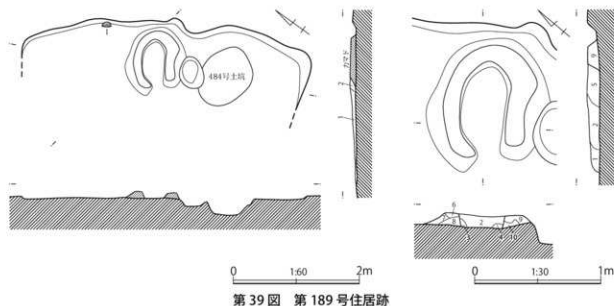
1	窰	A. 口縁部径(22.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ。内面捲ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 口縁部1/4弱。H. 覆土中。
2	暗文環	A. 口縁部径13.0。器高3.8。底部径9.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. ほぼ完形。G. 体部内面に放射状暗文を施す。H. 覆土中。
3	環	A. 口縁部径12.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部1/2。G. 体部外面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
4	須恵器環	A. 口縁部径13.0。器高3.5。底部径6.5。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 長石。E. 内外一灰色。F. A/5。H. 覆土中。
5	須恵器環	A. 口縁部径(13.0)。器高3.5。底部径(7.0)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一灰色。F. 口縁部1/4弱。H. 覆土中。

第189号住居跡(第39図、写真図版8)

G地点の調査区西側に位置する。重複する第484号土坑に切られている。本住居跡の南西側の大半はすでに削平されており、住居跡の北東側壁の壁際だけが残存しているだけであるため、遺構の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い隅丸方形か隅丸長方形を呈していると思われる。規模は、北西～南東方向が4.58 m、北東～南西方向は1.16 mまで測れる。住居跡の主軸方向は、概ねN-56°-Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。床面は、ロームブロックを均



第39図 第189号住居跡

第189号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を含む。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径2cmのロームブロックを微量含む。）

第189号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子を少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）
 第4層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量、径1cmのロームブロックを微量含む。）
 第6層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）
 第7層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）
 第8層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第9層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を微量含む。）
 第10層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）

一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、残存する範囲内からは検出されていない。

カマドは、住居北東側壁際のほぼ中央に位置し、住居の壁を掘り込まないで壁に対してほぼ直角に構築されている。規模は、残存長108cm、最大幅98cmを測る。燃烧部は、住居の壁に接しないで住居内にある。燃烧面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平をなし、あまり焼けていない。燃烧部の覆土中には、カマド天井部の崩落土と考えられるような土層は見られない。袖は、黄褐色粘土ブロックやロームブロックを含む暗褐色土を、馬蹄形に巡らせて構築している。煙道部の形態や構造は不明である。本住居跡のカマドの形態は、5世紀後半頃のいわゆる「初期カマド」と呼ばれる諸形態の一類型に酷似しているが、本住居跡の時期の6世紀後半頃の住居跡ではほとんど見られない形態である。



遺物は、住居北東側壁際の床面付近から出土した第40図No1の土師器環以外には、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。本住居

第40図 第189号住居跡出土遺物

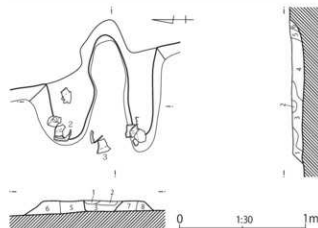
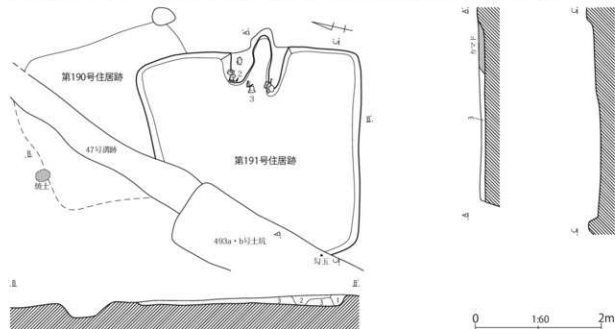
跡の時期は、カマドの形態に時期的な違和感があるが、出土遺物の様相からすると、古墳時代後期後半頃と考えられる。

第9表 第189号住居跡出土遺物観察表

1	横 倣 坪	A. 口縁部径 13.2、器高 4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面ヨコナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 2/3。H. 床面付近。
---	-------	---

第190号住居跡（第41図、写真図版8）

G地点の調査区北西側に位置する。重複する第47号溝跡に切られているが、第191号住居跡との新旧関係は不明である。本住居跡は、床面より上がすべて削平されており、住居床下の掘り方の一部が残存しているだけであるため、遺構の全容は不明である。遺物は何も出土しなかった。



第41図 第190・191号住居跡

第190・191号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（浅間山系A軽石・ローム粒子を多量含む。）
 第2層：黄褐色土層（ロームブロックを主体とする。）
 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第191号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（浅間山系A軽石を多量、ローム粒子を少量含む。）
 第2層：明赤褐色粘土層（赤化した粘土ブロック。）
 第3層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）
 第4層：暗褐色土層（黄褐色粘土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・暗褐色土を多量含む。）
 第5層：黄褐色粘土層（ローム粒子・径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子・暗褐色土を含む。しまりを有する。）
 第6層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～5cmのロームブロック・焼土粒子を含む。しまりを有する。）
 第7層：黄褐色粘土層（ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子・暗褐色土を少量含む。しまりを有する。）
 第8層：暗褐色土層（黄褐色粘土・ローム粒子・焼土粒子を含む。しまりを有する。）

第 191 号住居跡 (第 41 図、図版 9)

G地点の調査区北西側に位置する。重複する第 47 号溝跡と第 493a・493b 号土坑に切られている。第 190 号住居跡との新旧関係は不明である。

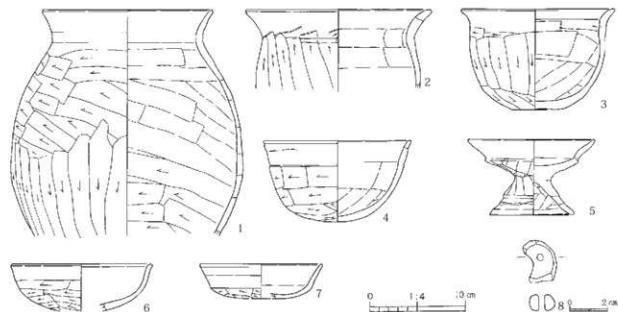
平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みを持つ隅丸長方形を基調にしていたと思われる。規模は、東西方向が 3.26 m、南北方向が 3.58 m を測る。住居跡の主軸方向は、N-78°-E を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 17cm ある。残存する各壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

カマドは、住居東側壁の中央に位置し、壁に対してほぼ直角に構築している。規模は、残存長 102cm、最大幅 111cm を測る。燃烧部は、住居の壁を掘り込んでおり、内面はあまり焼けていない。燃烧面は、住居の床面と同じ高さで、ほぼ水平に作られている。袖は、黄橙色粘土を燃烧部奥壁から廻しており、両袖の先端部には土師器の長胴甕を埋設して補強している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居の床面付近から、土器の破片が多く出土している。土器以外では、覆土中から No 8 の滑石製勾玉の破片が 1 点出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第 42 図 第 191 号住居跡出土遺物

第 10 表 第 191 号住居跡出土遺物観察表

1	胴張甕	A. 口縁部径 18.0。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ケズリ、内面下位ケズリ後上半ナデ。D. 石英、角四石。E. 外一にふい褐色、内一橙色。F. 口縁部～胴部下位 1/5。H. 覆土中。
2	長胴甕	A. 口縁部径 (19.4)。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部上位外面ケズリ、内面踵ナデ。D. 片岩粒、角四石。E. 外一明赤褐色、内一橙色。F. 口縁部～胴部上位破片。G. 内外面に粘土付着。H. カマド袖。
3	小形鉢	A. 口縁部径 (16.0)、器高 10.6、底部径 5.1。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、石英。E. 外一暗赤灰色、内面一黒褐色。F. 4/5。H. カマド内。

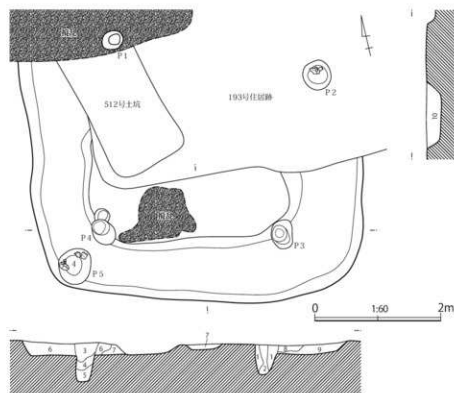
4	小形鉢	A. 口縁部径(15.5)、器高8.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角四石、赤色粒。E. 外一橙色、内一黄橙色。F. 1/2。G. 外面口縁部に黒斑あり。H. 覆土中。
5	高 環	A. 口縁部径(13.4)、器高(8.0)、脚端部径(8.7)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。脚部内外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、石突。E. 内外一橙色。F. 1/2。H. 覆土中。
6	環	A. 口縁部径(14.7)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 1/5。H. カマド内。
7	横 徹 環	A. 口縁部径(12.8)、器高3.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一橙色、内一にふい橙色。F. 1/2。H. 覆土中。
8	石製勾玉	A. 残存長1.1、最大幅0.6、最大厚0.4、重さ0.504g。D. 滑石製。F. 下端部欠損。H. 覆土中。

第192号住居跡(第43図、図版9)

G地点の調査区西側に位置する。住居跡の北側半分を重複する第193号住居跡と第512号土坑に切られている。本住居跡は、後世の耕作等によって住居の床面下まで削平され、住居の掘り方部分しか残存していないため、遺構の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い隅丸方形か隅丸長方形を基調にしていたと思われる。規模は、東西方向が5.38m、南北方向は3.90mまで測れる。住居跡の東側壁は、 $N-8^{\circ}-E$ の方向を向いている。

住居掘り方は、住居中央部を掘り残して幅広の周溝状に巡る形態で、ロームブロックやローム粒子を含む黄褐色土や暗褐色土を埋め戻している。掘り方の壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高25cmある。本住居跡に関係すると思われるピットは、5カ所検出されている。P1・P3・P4は、ほぼ住居の対角線上に配置されていることから、本住居の上屋を支える4本本柱の柱穴の一部であったと思われる。長さ35cm～45cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは32cm～40cmある。P2は、住居北東側に位置する。直径46cmの円形を呈し、確認面からの深さは20cm程度ある。ピット内か



第192号住居跡土層説明

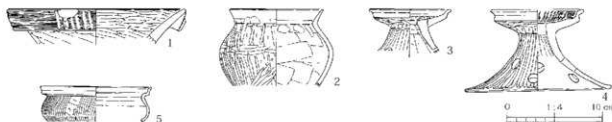
- 第1層：暗褐色土層(径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を含む。)
- 第2層：暗褐色土層(ローム粒子を多量含む。)
- 第3層：暗褐色土層(ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロックを少量含む。)
- 第4層：暗褐色土層(ロームブロック・ローム粒子を多量含む。)
- 第5層：暗褐色土層(ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。)
- 第6層：黄褐色土層(ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を含む。)
- 第7層：暗褐色土層(ローム粒子を少量含む。)
- 第8層：暗褐色土層(ローム粒子を少量、径0.5～0.8cmのロームブロックを微量含む。)
- 第9層：暗褐色土層(ローム粒子を少量、径0.5～4cmのロームブロックを微量含む。)
- 第10層：暗褐色土層(径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

第43図 第192号住居跡

らは、図示できなかったが高坏の脚部の破片が出土している。P 5は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、住居南西側コーナー部に位置する。60cm × 55cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは40cm程度ある。中からはNo 4の器台が出土している。

遺物は、掘り方理土中から、古墳時代前期のバレス壺 (No 1) ・小型鉢 (No 2) ・器台 (No 3) などの破片が少量出土し、P 5の貯蔵穴内からNo 4の器台が出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代前期後葉頃と考えられる。



第 44 図 第 192 号住居跡出土遺物

第 11 表 第 192 号住居跡出土遺物観察表

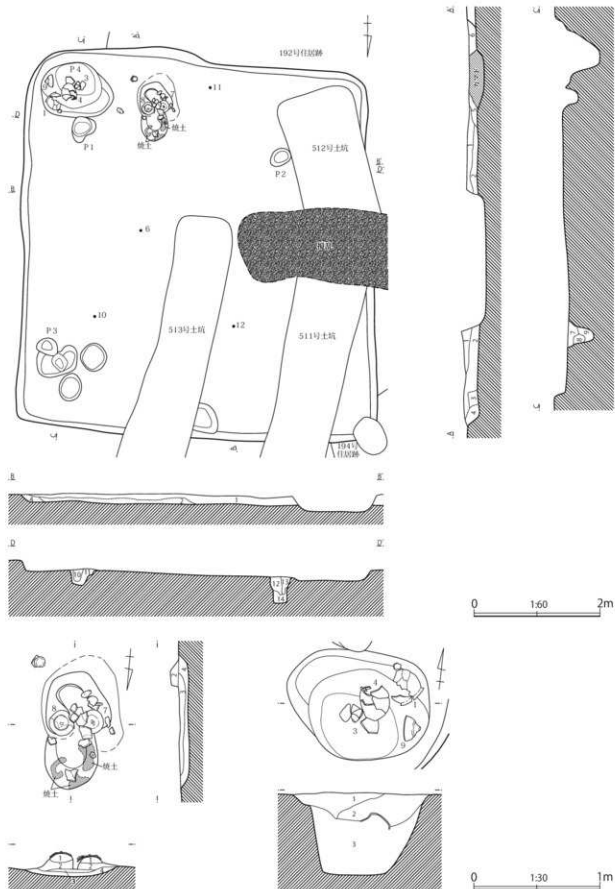
1	バレス壺	A. 口縁部径 19.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ハケ状の櫛掛横線文 (右回り) の後 6 本 1 組の棒状浮文、内面ミガキ。頸部外面ナデ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙黄褐色。F. 口縁部 1/4 弱。G. 口縁部内外面赤彩。H. 覆土中。
2	小形鉢	A. 口縁部径 10.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後縁ミガキ、内面寛ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 1/4。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 掘り方理土中。
3	器台	A. 口縁部径 8.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。器受部外面ケズリの後ミガキ、内面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 上半 1/2。G. 脚部穿孔は推定 3ヶ所。H. 覆土中。
4	器台	A. 口縁部径 9.8。器高 8.7。脚部径 15.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。器受部外面ケズリの後ミガキ、内面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 脚部径 1/3 欠損。G. 脚部穿孔は千鳥状に 6ヶ所。H. P 5 貯蔵穴内。
5	S 字状口縁小形鉢	A. 口縁部径 11.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 口縁部 1/2。H. 掘り方理土中。

第 193 号住居跡 (第 45 図、図版 9)

G 地点の調査区西側に位置する。重複する第 194 号住居跡や第 511・512・513 号土坑に切られ、第 192 号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、南北方向が 6.15 m、東西方向が 5.74 m を測る。住居跡の主軸方向は、N-178°-E を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 20cm ある。残存する各壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。本住居に関係すると思われるピットは、4カ所検出されている。P 1～P 3は、ほぼ住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える 4 本主柱の柱穴の一部であったと思われる。長さ 36cm～45cm の楕円形を呈し、確認面からの深さは 25cm～42cm ある。P 4は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド左側の住居南東側コーナー部に位置する。114cm × 90cm の楕円形を呈し、床面からの深さは 66cm ある。覆土中からは、土器が多く出土している。



第45图 第193号住居跡

第193号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・ロームブロックを少量含む。）
 第2層：暗褐色土層（浅間山系A軽石・径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・ロームブロックを少量含む。）
 第5層：暗褐色土層（浅間山系A軽石・ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む。）
 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・径0.5～5cmのロームブロックを少量含む。）
 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。しまりを有する。）
 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径3cmのロームブロックを微量含む。しまりを有する。）
 第9層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。しまりを有する。）
 第10層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）
 第11層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）
 第12層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を含む。しまりを有する。）
 第13層：暗褐色土層（ロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。しまりを有する。）
 第14層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。しまりを有する。）

第193号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黄褐色粘土層（赤化したローム。）
 第2層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量含む。）
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

第193号住居跡貯蔵穴土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。しまりを有する。）
 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。しまりを有する。）
 第3層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。径6～7cmのロームブロックを微量含む。しまりを有する。）

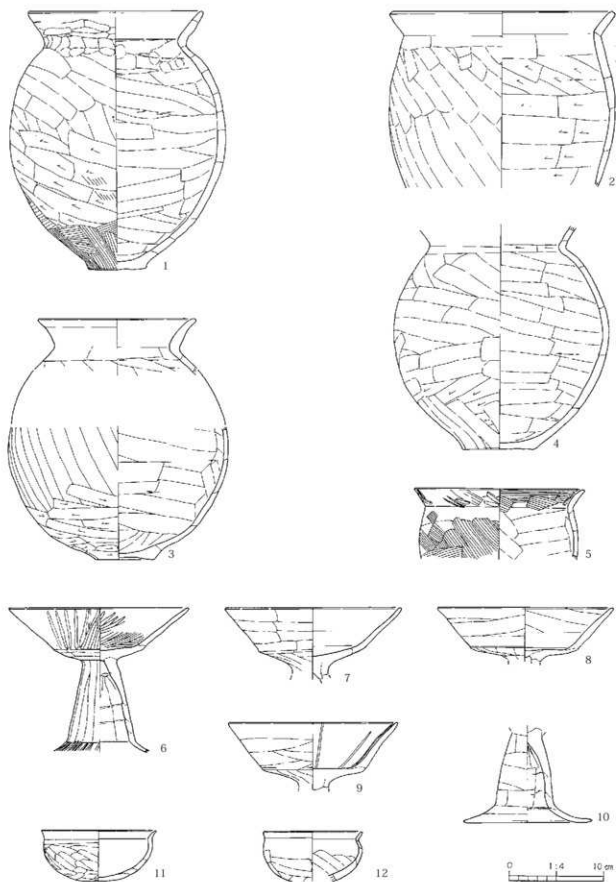
カマドは、住居南側壁際のやや南東側コーナー部に寄った位置に構築されている。規模は、残存長108cm、最大幅64cmを測る。燃焼部は、住居の壁に接しないで住居内にある。燃焼面は、住居の床面とほぼ同じ高さで水平をなし、あまり焼けていない。袖は、黄褐色粘土を含む暗褐色土を、馬蹄形に巡らせたような形状に見えるが明確ではない。煙道部の形態や構造は不明である。燃焼部の中央部には、伏せた高環の坏部が2個並んで出土しているが、甕の掛け方が2個並置式の支脚に転用された可能性もある。このような高環を2個伏せて並べた転用支脚の例は、当地域でも比較的珍しいが、5世紀後半の本遺跡北側に隣接する久下東遺跡E3地点第172号住居跡（恋河内2016）や、女堀川中流域の辻堂遺跡第5号住居跡（恋河内1996）でも見られる。

出土遺物は、カマドや貯蔵穴内から、土器が多く出土している。

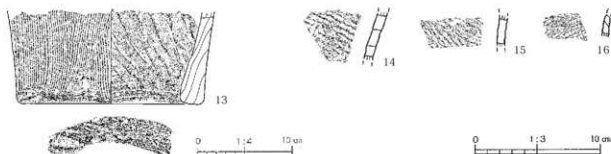
本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代中期中頃と考えられる。

第12表 第193号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径18.5、器高27.4、底部径6.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上位ナデ後下位ケズリ後下位ハケ、内面ナデ、上位一部に指頭圧痕。D. 石英、角閃石、白色粒。E. 外一黒褐色、内一にふい黄褐色。F. 3/4。G. 外面口縁から胴部中位、内面口縁部に煤全斑。H. 貯蔵穴内。
2	大形甕	A. 口縁部径(23.8)、B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部外面ナデ、内面ケズリ後上位ナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一にふい赤褐色。F. 口縁から胴部破片。H. 覆土中。
3	甕	A. 口縁部径16.7、器高(25.5)、底部径6.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部上半ナデ後下位ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一にふい黄褐色。F. 1/3。G. 内外面胴部、外面口縁部に黒斑あり。H. 貯蔵穴内。
4	甕	A. 底部径7.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面下位ケズリ後上位・下位ナデ、内面ナデ後下位ケズリ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、石英、白色粒。E. 内外一にふい赤褐色。G. 外面胴部中に黒斑あり。外面胴部に帯状に煤付着。F. 5/6。H. 貯蔵穴内。



第46图 第193号住居跡出土遺物(1)



第47図 第193号住居跡出土遺物(2)

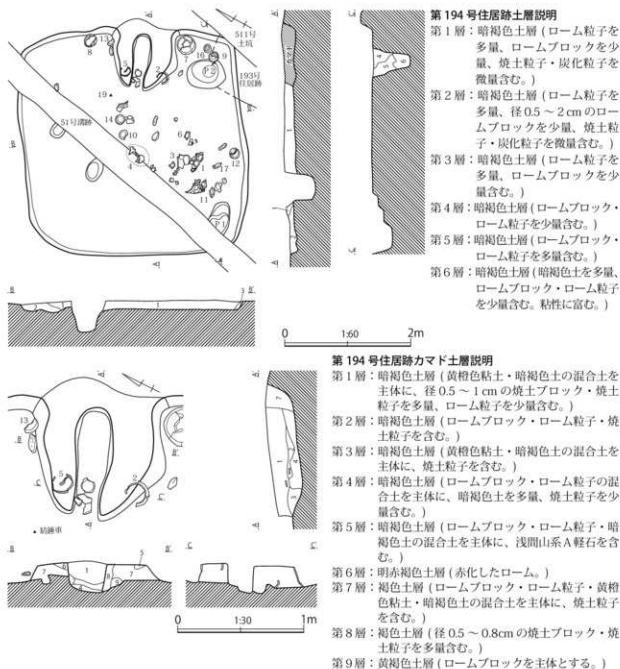
5	小形甕	A. 口縁部径 18.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ナデ工具の当たり痕、内面ハケ。胴部ナデ後ハケ、内面ナデ。D. 角閃石、チャート、白色粒、石英。E. 外一にふい赤褐色、内面一灰黄褐色。F. 口縁部破片。H. 覆土中。
6	高 環	A. 口縁部径 19.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ。脚柱部内外面ナデ。脚端部外面ヨコナデ後ミガキ、内面ヨコナデ。D. 石英、白色粒、片岩粒。E. 外一赤褐色、内面一黒色。F. 3/5。G. 環部内面に黒炭あり。H. 覆土中。
7	高 環	A. 口縁部径 18.7。B. 粘土組織み上げ。C. 内外面ナデ。D. 白色粒、角閃石、石英。E. 内外一赤褐色。F. 1/2。H. カマド支脚。
8	高 環	A. 口縁部径 18.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。D. 白色粒、石英、角閃石。E. 外一にふい赤褐色、内一赤褐色。F. 1/3。H. カマド支脚。
9	高 環	A. 口縁部径 18.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ナデ、内面ナデ後放射状ミガキ。退部内外面ナデ。D. 白色粒、石英。E. 内外一赤褐色。F. 1/2。G. 外面口縁部に黒炭あり。内外面に黒色付着物あり。H. 貯蔵穴内。
10	高 環	A. 脚端部径 13.7。B. 粘土組織み上げ。C. 脚柱部外面ナデ、内面較り目の後ナデ。脚端部内外面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一にふい赤褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
11	環	A. 口縁部径 12.1。器高 5.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ナデ。体部外面ナデ。内面器表面剥落。D. 石英、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
12	環	A. 口縁部径 10.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。体部内外面ナデ。D. 石英、角閃石、赤色粒。E. 内外一にふい赤褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
13	円筒埴輪	A. 底部径 (20.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 外面ハケ、内面指ナデ。D. 石英、角閃石、白色粒。E. 外一明赤褐色、内一にふい褐色。F. 破片。H. 覆土中。
14	深 鉢	B. 粘土組織み上げ。C. 外面無脚 r 縄文、内面ナデ。D. 白色粒、チャート。E. 内外一にふい褐色。F. 胴部破片。G. 縄文土器。H. 覆土中。
15	深 鉢	B. 粘土組織み上げ。C. 外面無脚 r 縄文、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡黄褐色。F. 胴部破片。G. 縄文土器。H. 覆土中。
16	甕	B. 粘土組織み上げ。C. 外面無脚 LR 縄文、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一灰黄褐色。F. 胴部破片。G. 弥生後期古ヶ谷式。H. 覆土中。

第194号住居跡(第48図、写真図版9)

G地点の調査区西側に位置する。重複する第511号土坑や第51号溝跡に切られ、第193号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部の丸み強い隅丸方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3.65 m、北西～南東方向が3.60 mを測る。住居の主軸方向は、N-56°-Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。残存する各壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。本住居に関係すると思われるピットは、2カ所検出されている。P1は、住居の南側コーナー部に位置する。長軸が50cm以上の楕円形を呈している。床面からの深さは最高18cmあり、二段に深くになっている。P2は、いわゆる貯蔵

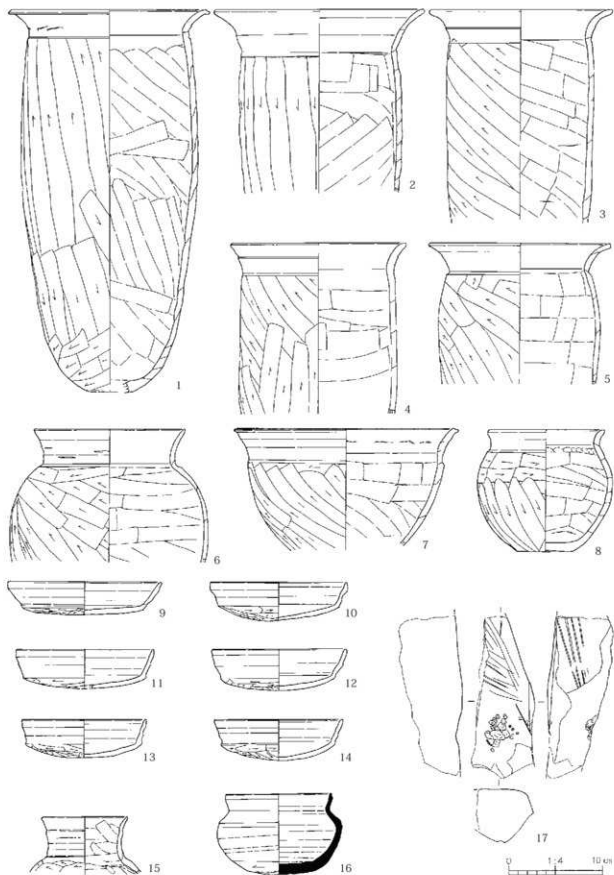


第48図 第194号住居跡

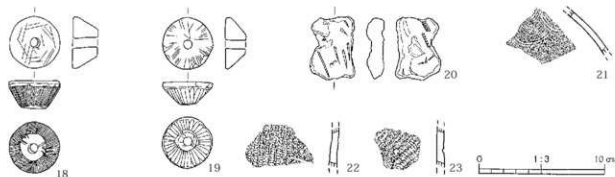
穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居東側コーナー部に位置する。62cm×45cmの楕円形を呈している。床面からの深さは60cmある。

カマドは、住居北東側壁の中央に位置し、住居の壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、残存長220cm、最大幅205cmを測る。燃焼部は住居内にある。燃焼部底面は、住居床面とほぼ同じ高さで若干傾斜して作られ、奥壁は住居の壁よりもやや内側にある。袖は、ロームブロックや黄橙色粘土を含む褐色土を、住居の壁を若干掘り込んで馬蹄形に廻して構築している。両袖の先端付近には、No 2とNo 5の土師器の甕を伏せて補強している。袖の内面はあまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内やその周辺の床面付近及び住居跡中央部の覆土中から、古墳時代後期後半頃を主体とする土器が多く出土している。土器以外では、覆土中から大形砥石の破片（No 17）や石製紡錘車



第49图 第194号住居跡出土遺物(1)



第50図 第194号住居跡出土遺物(2)

(No18・19)が2個出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。

第13表 第194号住居跡出土遺物観察表

1	長胴甕	A. 口縁部径(212)、器高40.4、底部径(4.8)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 石英、角閃石、片岩粒。E. 外一明赤褐色、内一にぶい褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
2	長胴甕	A. 口縁部径22.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 片岩粒、角閃石、石英。E. 外一にぶい褐色、内一褐色。F. 1/2。G. 外面胴部中位以下帯状に煤付着。H. カマド右袖先端。
3	長胴甕	A. 口縁部径(19.5)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部上位外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 石英、白色粒。E. 外一褐色、内一灰黄褐色。F. 1/4。G. 内外面黒炭あり。H. 覆土中。
4	長胴甕	A. 口縁部径(18.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 角閃石、石英、チャート。E. 内外一にぶい褐色。F. 1/4。G. 外面胴部に黒炭あり。H. 覆土中。
5	長胴甕	A. 口縁部径(19.4)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 角閃石、石英。E. 内外一にぶい褐色。F. 1/4。G. 内外面口縁部に煤全周。H. カマド左袖先端。
6	胴張甕	A. 口縁部径(16.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、チャート、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 1/5。H. 覆土中。
7	大形鉢	A. 口縁部径23.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。体外部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒子。E. 内外一褐色。F. 底部以外ほぼ完形。G. 内外面黒炭あり。内面胴部全面に煤。H. 床面付近。
8	小形甕	A. 口縁部径12.4、器高13.0、底部径6.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面頸部指押さの後上位以下ナデ。D. 角閃石、チャート、白色粒、石英。E. 内外一にぶい赤褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
9	有段口縁杯	A. 口縁部径16.3、器高3.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体外部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 片岩粒、石英、白色粒。E. 外一にぶい黄褐色、内一にぶい褐色。G. 内外面口縁部黒炭あり。F. 完形。H. 床面付近。
10	有段口縁杯	A. 口縁部径14.6、器高4.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体外部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 石英、白色粒。E. 外一にぶい黄褐色、内一黒色。F. 4/5。G. 内外面黒炭あり。内面体部は黒色処理。H. 床面付近。
11	有段口縁杯	A. 口縁部径(14.6)、器高4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体外部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、片岩粒。E. 外一灰黄褐色、内一黒色。G. 内外面黒炭あり。内面黒色処理。F. 1/3。H. 覆土中。
12	有段口縁杯	A. 口縁部径14.3、器高3.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体外部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 完形。G. 内外面口縁部に黒炭あり。H. 床面付近。
13	有段口縁杯	A. 口縁部径(13.2)、器高4.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体外部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。G. 内外面黒色処理。F. 1/2。H. 床面付近。
14	有段口縁杯	A. 口縁部径13.7、器高4.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体外部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 白色粒、石英。E. 内外一にぶい褐色。G. 内外面黒炭あり。F. 完形。H. 床面付近。
15	甕	A. 口縁部径9.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ヨコナデ・指押さ。D. 石英、白色粒。E. 外一黒褐色、内面一にぶい赤褐色。F. 口縁部1/3。H. 覆土中。
16	須恵器短頸甕	A. 口縁部径11.2、器高8.5。B. 粘土組織み上げ後ロクロ整形。C. 口縁部内外面回転ナデ。胴部外面回転ナデ後下位回転ケズリ、内面回転ナデ。底部外面工具の当たり痕目立つ、内面指ナデ。D. 片岩粒、石英。E. 内外一黄灰色。G. 還元焼成。F. 完形。H. 床面付近。
17	砥石	A. 残存長17.1、最大幅6.8、最大厚6.7、重さ617.72g。C. 表面・側面の2面研磨。敲打痕・刃痕顕著。D. 砂岩製。F. ほぼ完形。G. 二次焼成。欠損後二次使用の痕跡あり。H. 覆土中。
18	石製紡錘車	A. 上面径4.1、下面径2.2、最厚2.2、孔径0.8、重さ49.09g。C. 全面研磨。D. 滑石製。F. 完形。H. 覆土中。
19	石製紡錘車	A. 上面径4.1、下面径1.3、最厚1.7、孔径0.7、重さ35.54g。C. 全面研磨。D. 滑石製。F. 完形。H. 覆土中。

20	粘土塊	A. 長5.1、幅3.6、厚1.4、重さ23.03g。B. 手捏ね。D. 白色粒、石英。E. 明赤褐色。F. 成形。H. 覆土中。
21	壺	B. 粘土細積み上げ。C. 外面柳掻き弧状文の後下端に矢羽状の連続刺突文、内面ナデ。D. 角閃石、石英、チャート。E. 内外一橙色。F. 胴部破片。H. 覆土中。
22	深鉢	B. 粘土細積み上げ。C. 外面単節LR縄文、内面ナデ。D. 角閃石、片岩粒、石英。E. 内外一灰黄褐色。F. 胴部破片。C. 縄文土器。H. 覆土中。
23	深鉢	B. 粘土細積み上げ。C. 外面単節LR縄文、内面ナデ。D. 角閃石、片岩粒、石英。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 胴部破片。G. 縄文土器。H. 覆土中。

第195号住居跡（第51図、写真図版10）

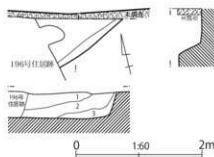
G地点の調査区中央部北端に位置する。重複する第196号住居跡に住居跡の西側を切られている。調査区内で検出されたのは、住居跡の南側壁一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形や規模は、不明である。住居跡の南側壁は、 $M-65^{\circ}-E$ の方向を向いている。

壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは36cmある。壁溝は検出されていない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、壁際まで全体的に堅く締まっている。

遺物は、何も出土しなかった。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、白鳳時代以前と推測される。



第51図 第195号住居跡

第195号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）

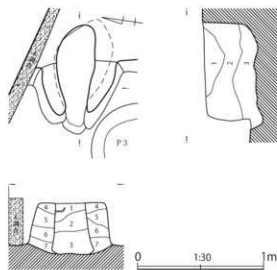
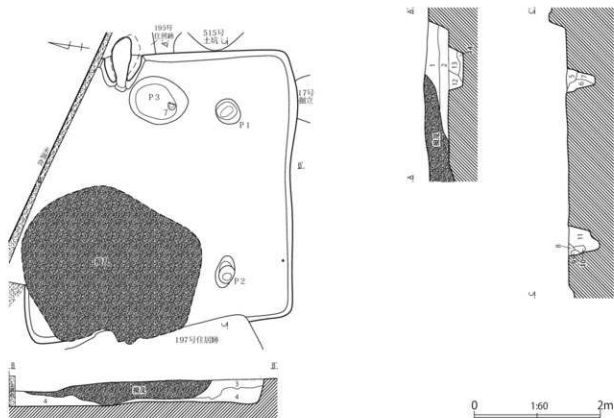
第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを微量含む。）

第196号住居跡（第52図、図版10）

G地点の調査区中央部北端に位置する。重複する第197号住居跡と第17号掘立柱建物跡に切れ、第195号住居跡を切っている。また、住居跡内の北西側は、攪乱を受けている。住居跡の北東側コーナー部は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ隅丸方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が4.26m、南北方向が4.23mを測る。住居跡の主軸方向は、 $N-80^{\circ}-E$ を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは38cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、3カ所検出されている。P1とP2は、住居のほぼ対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱を構成する主柱穴の一部と考えられる。44cm×52cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さは45cm前後ある。P3は、カマド焚口部の右隣りに位置し、位置的には床下土坑の可能性が高いと思われる。94cm×73cmの楕円形を呈し、床面からの



第196号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～3cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・焼土粒子を含む。）
- 第3層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土。）
- 第4層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～3cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（黄褐色粘土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子・暗褐色土を少量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む。）

第52図 第196号住居跡

第196号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第5層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量含む。しまりは無い。）
- 第6層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を多量含む。しまりは無い。）
- 第7層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、径3cmの焼土ブロックを微量含む。しまりは無い。）
- 第8層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

第9層：黄褐色土層（ロームブロックを主体とする。）

第10層：暗褐色土層（第8層に近いが、暗褐色土を多量含む。）

第11層：褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量含む。）

第12層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、炭化物を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）

第13層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、炭化物・黄褐色粘土を少量含む。）

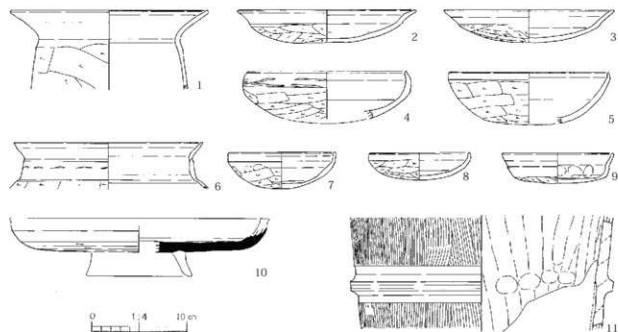
第14層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・炭化物を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）

深さは24cmある。埋土中には、焼土粒子や炭化粒子を多く含み、中からはNo 2の土師器皿やNo 4の土師器杯の破片が出土している。

カマドは、住居東側壁の中央やや北側寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、残存長85cm、最大幅74cmを測る。燃烧部は、住居の壁を掘り込んで作られている。燃烧部底面は、カマド第3層上面付近の可能性が高いと考えられ、焚口部の住居床面から奥壁に向かって若干傾斜していたと思われる。奥壁は、垂直ぎみに立ち上がっている。袖は、黄褐色粘土を含む暗褐色土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面はあまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、覆土中を主体に、白鳳時代と平安時代の土器の破片や、カマド内から円筒埴輪の破片が出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、白鳳時代と考えられる。



第53図 第196号住居跡出土遺物

第14表 第196号住居跡出土遺物観察表

1	表	A. 口縁部径(21.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 口縁部1/4弱。H. 覆土中。
2	皿	A. 口縁部径18.8。器高3.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 1/2。H. P 3内。

3	皿	A. 口縁部径(18.0)、器高3.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
4	坏	A. 口縁部径(17.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 口縁部 1/3。H. P 3内。
5	坏	A. 口縁部径(17.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 口縁部 1/4。H. 覆土中。
6	甕	A. 口縁部径(20.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部 1/4。G. 混入品。H. カマド内。
7	坏	A. 口縁部径(11.4)。器高3.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 3/4。H. P 3内。
8	坏	A. 口縁部径(10.8)。器高2.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 口縁部 1/3。H. 覆土中。
9	坏	A. 口縁部径11.8。器高3.2。底部径9.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 3/4。G. 体部内面に指頭圧痕を残す。混入品。H. 覆土中。
10	須恵器 高台付甕	A. 最大径(27.2)。B. ロコウ成形。高台部貼り付け。C. 体部内外面ヨコナデ。底部外面回転ケズリ、内面回転ナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一灰色。F. 体部 1/4。H. 覆土中。
11	円筒埴輪	A. 最大径(28.0)。B. 粘土組織み上げ。凸帯貼り付け。C. 外面ハケ、内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一明褐色、内一暗赤茶褐色。F. 破片 1/4。G. 凸帯部内面に指頭圧痕を残す。混入品。H. カマド内。

第197号住居跡(第54図、図版10)

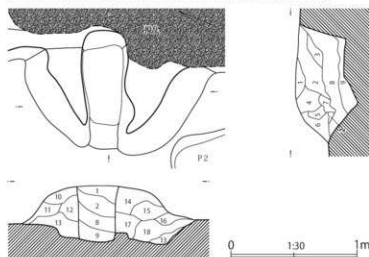
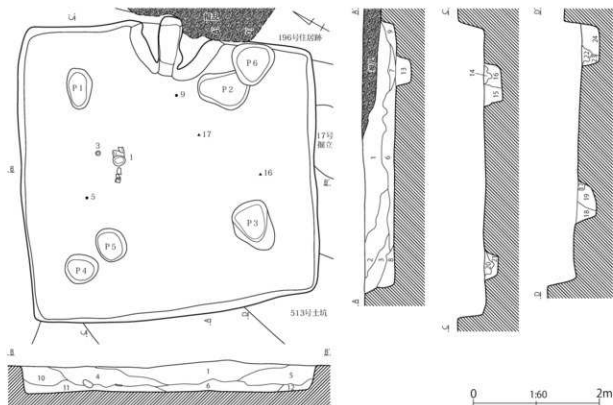
G地点の調査区中央部の北西端に位置する。重複する第17号掘立柱建物跡と第513号土坑に切れ、第196号住居跡を切っている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を基調にしているが、北東側壁はカマドの左右で壁がずれている。規模は、北東～南西方向が4.62m、北西～南東方向が4.64mを測る。住居跡の主軸方向は、N-60°-Eを向いている。

壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは48cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、6カ所検出されている。P1～P3とP5は、住居のほぼ対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱を構成する主柱穴と考えられる。54cm×84cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さは30cm前後ある。P4は、住居の西側コーナー部に位置する。54cm×45cmの楕円形を呈し、床面からの深さは20cm程度ある。P6は、カマド右側の住居北東側壁際に位置する。いわゆる貯蔵穴と呼ばれるものかもしれないが、覆土の状態からは床下土坑の可能性もある。68cm×63cmの隅が丸い三角形の形態を呈し、床面からの深さは30cmある。

カマドは、住居北東側壁のほぼ中央に位置し、住居の壁を若干掘り込んでやや斜めに付設されている。規模は、残存長96cm、最大幅150cmを測る。燃焼部は、住居の壁を若干掘り込んで作られている。燃焼部底面は、カマド第8層上面付近と推測され、焚口部の住居床面から奥壁に向かって若干傾斜していたと思われる。奥壁は、緩やかに傾斜して立ち上がっている。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土や黄褐色土を、壁に直接貼り付けて構築している。袖の内面はあまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居中央部の床面付近や覆土中から、土器の破片が多く出土している。この中で、No2の小形のS字状口縁台付甕やNo3とNo4の小形浅鉢は古墳時代前期のもので、本住居跡に伴うものではなく混入品である。また、覆土中から縄文時代中期や弥生時代の土器片も出土している。土器以外では、床面付近から角四石安山岩の自然石を利用した砥石(No9)、覆土中から石製紡錘車(No17)や土錘



第54図 第197号住居跡

第197号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。焼土粒子・炭化物を少量含む。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロックを多量含む。）
 第6層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～5cmのロームブロックを少量含む。）

- 第8層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を多量含む。）
 第9層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）
 第10層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～4cmのロームブロックを少量含む。）
 第11層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～4cmのロームブロックを微量含む。）
 第12層：黄褐色土層（暗褐色土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第13層：黄褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・黄褐色ローム粒子・暗褐色土を含む。しまりを有する。）
 第14層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
 第15層：褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
 第16層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。）
 第17層：褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
 第18層：褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量含む。）
 第19層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を微量含む。）

- 第20層：褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を微量含む。）
 第21層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を微量含む。）
 第22層：黄褐色土層（ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、径7cmのロームブロックを微量含む。）
 第23層：褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第24層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を微量含む。）

第197号住居跡カマド土層説明

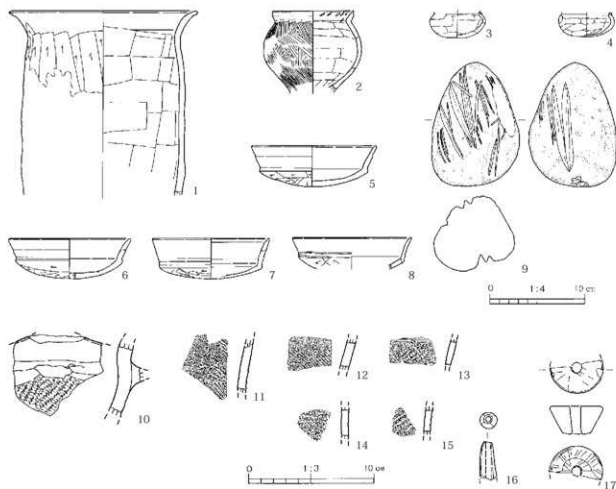
- 第1層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土の混合土を主体に、焼土粒子・暗褐色土を少量含む。）
 第2層：黄褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を多量含む。）
 第3層：黄褐色土層（崩落土。）
 第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土を多量、焼土粒子を少量含む。）
 第5層：黄褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を含む。）
 第6層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を含む。）
 第7層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）
 第8層：暗褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を多量、暗褐色土を少量含む。）
 第9層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第10層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土の混合土を主体に、焼土粒子・暗褐色土を少量含む。しまりを有する。）
 第11層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・暗褐色土を少量含む。しまりを有する。）
 第12層：黄褐色粘土層（焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）
 第13層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・暗褐色土を含む。しまりを有する。）
 第14層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土の混合土を主体に、焼土粒子・暗褐色土を多量含む。しまりを有する。）
 第15層：黄褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・径0.5～3cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）
 第16層：褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土の混合土を主体に、暗褐色土を含む。しまりを有する。）
 第17層：褐色土層（径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を多量含む。しまりを有する。）
 第18層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土の混合土を主体に、暗褐色土を含む。しまりを有する。）

(No16)の破片が出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。

第15表 第197号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 罌	A. 口縁部径20.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面直ナデ。D. 角四石、石英、片岩粒、白色粒。E. 外-内-外に赤褐色、内-赤褐色。F. 1/3。G. 外面胴部に粘土付着。H. 床面直上。
2	S字状口縁台付罌	A. 口縁部径8.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ後ハケ、内面ナデ。D. 角四石、白色粒。E. 内外-内-外に黄褐色。F. 1/2。G. 内外面黒斑あり。内面口縁部に等間隔に爪痕あり。混入品。H. 覆土中。
3	小形浅鉢	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部内外面ナデ。D. 角四石、石英、白色粒、赤色粒。E. 外-赤褐色、内-外に赤褐色。F. 1/2。G. 外面胴部黒斑あり。混入品。H. 覆土中。
4	小形浅鉢	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部内外面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 外-内-外に赤褐色、内-赤褐色。F. 1/2。G. 外面胴部黒斑あり。混入品。H. 覆土中。
5	有段口縁杯	A. 口縁部径(13.2)、器高4.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 片岩粒、角四石、白色粒、赤色粒。E. 外-内-外に赤褐色、内-外に赤褐色。F. 1/2。G. 内外面体部黒斑あり。H. 覆土中。
6	有段口縁杯	A. 口縁部径(13.0)、器高4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角四石、白色粒。E. 内外-内-外に赤褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
7	模 倣 杯	A. 口縁部径(12.4)、器高4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角四石。E. 外-内-外に赤褐色、内-黒褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
8	模 倣 杯	A. 口縁部径12.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 黒色粒。E. 内外-外-内-外に赤褐色。F. 口縁部1/4。G. 軟質な焼成。H. 覆土中。
9	砥 石	A. 長さ13.1、幅9.3、厚さ7.9、重さ369.43g。B. 自然石。C. 磨り面1、敲打面1。D. 角四石安山岩。F. 完形。G. 刃痕跡あり。H. 床面付近。
10	深 鉢	B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部単脚LR縄文施文後除帯脇に沈線。内面ミガキ。D. 石英、角四石、白色粒。E. 内外-内-外に赤褐色。F. 口縁部破片。G. 橋状突起欠損。縄文中期加曾利EⅢ式。混入品。H. 覆土中。
11	罌	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面S字状口縁部3段以上、内面ナデ。D. 石英。E. 外-内-外に赤褐色、内-外に赤褐色。F. 胴部破片。G. 赤生土。混入品。H. 覆土中。



第55図 第197号住居跡出土遺物

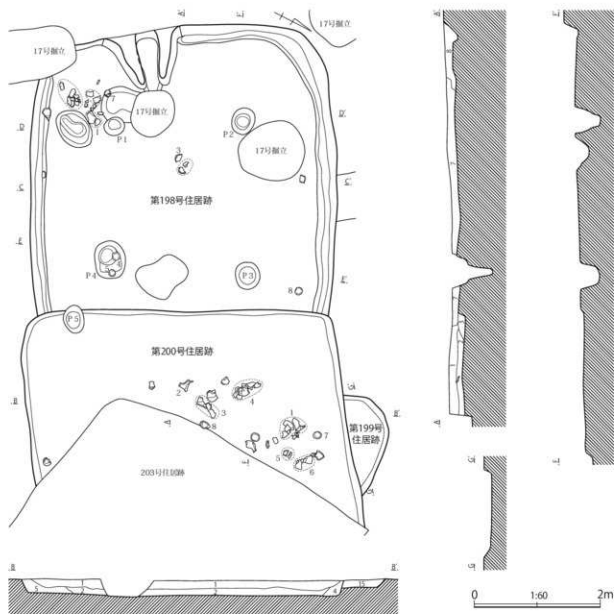
12	甕	B. 粘土粗積み上げ。C. 胴部外面単節 RL 縄文、内面ナデ。D. 石英。E. 内外一にぶい黄褐色。F. 胴部破片。G. 弥生土器。混人品。H. 覆土中。
13	甕	B. 粘土粗積み上げ。C. 胴部外面上位縹緞状文の後単節 LR 縄文を施文、内面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 外一黒色、内一黒褐色。F. 胴部破片。G. 弥生土器。混人品。H. 覆土中。
14	甕	B. 粘土粗積み上げ。C. 胴部外面単節 LR 縄文、内面ナデ。D. 石英。E. 内外一にぶい褐色。F. 胴部破片。混人品。H. 覆土中。
15	甕	B. 粘土粗積み上げ。C. 胴部外面単節 LR 縄文、内面ナデ。D. 石英。E. 内外一にぶい褐色。F. 胴部破片。G. 弥生土器。混人品。H. 覆土中。
16	土 鏃	A. 残存長 3.0、最大幅 1.4、孔径 0.45、重さ 3.95g。B. 手捏ね。D. 白色粒。E. ぶい褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
17	石製紡錘車	A. 上面径 4.2、下面径 2.3、厚さ 2.2、孔径 0.8、重さ 27.01g。B. 全面研磨。D. 滑石製。F. 1/2。H. 覆土中。

第198号住居跡 (第56図、図版11)

G地点の調査区中央部の北西側に位置する。重複する第200号住居跡を切り、第17号掘立柱建物跡に切られている。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、北西～南東方向が4.85 m、北東～南西方向は4.68 mまで測れる。住居跡の主軸方向は、N-117°-Wを向いている。

壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、4カ所検出されている。P1～P4は、住居のほぼ対角線上に

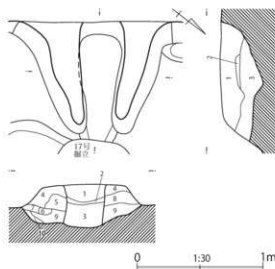


第198・199・200号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径3～5cmのロームブロックを少量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロックを含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロックを少量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを少量含む。）

第56図 第198・199・200号住居跡

- 第9層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第10層：褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。しまりはない。）
 第11層：黄褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を含む。しまりを有する。）
 第12層：黄褐色土層（ロームブロック・暗褐色土の互層。）
 第13層：黄褐色土層（径0.5～7cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
 第14層：暗褐色土層（径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）
 第15層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）



第57図 第198号住居跡カマド

第198号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。）
 第2層：明赤褐色土層（径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子・暗褐色土の混合土。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
 第4層：褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）
 第5層：黄褐色土層（粘質ロームブロックを主体とする。しまりを有する。）
 第6層：黄褐色土層（ロームブロックを主体とする。しまりを有する。）
 第7層：褐色土層（径0.5～3cmのロームブロックを多量、ローム粒子・径2cmの焼土ブロック・暗褐色土を少量含む。しまりを有する。）

- 第8層：褐色土層（径0.5～3cmの焼土ブロック・焼土粒子を含む。）
 第9層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）
 第10層：褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・暗褐色土を少量含む。しまりを有する。）

配置されていると思われることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴と考えられる。34cm～58cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さは32cm～43cmある。

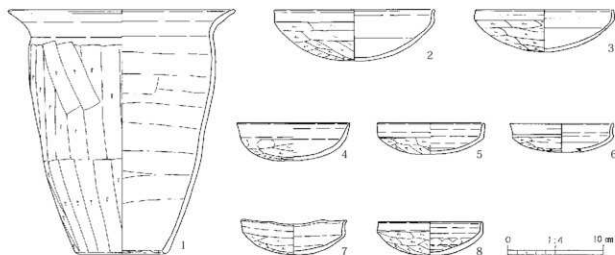
カマドは、住居南西側壁の中央よりやや南側コーナー部に寄った位置に、住居の壁に対して直角に付設されている。規模は、残存長98cm、最大幅127cmを測る。燃焼部は住居内にあり、燃焼部奥壁は住居の壁と一致している。燃焼部底面は、カマド第3層上面付近と思われ、住居の床面とほぼ同じ高さで平坦に作られている。袖は、ロームブロックを含む褐色土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、古墳時代後期からの大形甕（No 1）や模倣坏の系譜を引く坏（No 4～8）と、白鳳時代の内屈口縁坏（No 2・3）などの土器や破片が、床面付近から比較的多く出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期末～白鳳時代初頭頃と考えられる。

第16表 第198号住居跡出土遺物観察表

1	大形甕	A. 口縁部径(24.0)、器高25.8、底部径(10.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面蹴ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/4。G. 内面に黒炭あり。H. 床面付近。
2	坏	A. 口縁部径(17.0)、器高5.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 1/4。H. 覆土中。
3	坏	A. 口縁部径(14.4)、器高4.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 1/2。H. 床面付近。
4	模倣坏	A. 口縁部径12.0、器高4.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面蹴ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 完形。H. P. 4上面。



第58図 第198号住居跡出土遺物

5	模倣 坏	A. 口縁部径 11.4、器高 3.3、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ヨコナデ、D. 白色粒、E. 内外一暗茶褐色、F. 完形、H. P 4 上面。
6	模倣 坏	A. 口縁部径 11.0、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ナデ、D. 白色粒、E. 内外一暗茶褐色、F. 口縁部 1/2、H. 覆土中。
7	模倣 坏	A. 口縁部径 11.2、器高 3.6、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ヨコナデ、D. 赤色粒、白色粒、E. 内外一明褐色、F. 2/3、H. 床面付近。
8	模倣 坏	A. 口縁部径 11.0、器高 3.6、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面ヨコナデ、D. 白色粒、E. 内外一暗茶褐色、F. ほぼ完形、G. 体部内面に指頭圧痕を残す、H. 床面付近。

第199号住居跡 (第56図、図版11)

G地点の調査区中央部の北西側に位置する。重複する第200号住居跡に、住居跡の大半を切られている。残存しているのは、住居跡の北西側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、不明である。規模は、南北方向は90cmまで、東西方向は1.43mまで測れる。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは13cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的にやや軟弱である。

遺物は、住居跡の覆土中から、奈良時代後半頃の土器の破片が少量出土しているが、これらは遺構の重複関係からすると、住居廃絶後に混入したものと思われる。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、古墳時代後期後半以前と考えられる。



第59図 第199号住居跡出土遺物

第17表 第199号住居跡出土遺物観察表

1	裏	A. 口縁部径(17.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 口縁部破片。H. 覆土中。
2	坏	A. 口縁部径(12.6)、底部径(11.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒、赤色粒。E. 内外一褐色。F. 口縁部1/6。H. 覆土中。
3	小形台付甕	A. 台端部径(11.7)。B. 粘土組織み上げ。C. 台部内外面ヨコナデ。D. 角閃石、雲母。E. 内外一褐色。F. 台部1/2。G. 台部外面に指摺痕を残す。H. 覆土中。

第200号住居跡(第56図、図版11)

G地点の調査区中央部の北西側に位置する。重複する第198・203号住居跡に切られ、第199号住居跡を切っている。住居跡の東側半分を第203号住居跡に切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形が隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北西～南東方向が5.08m、北東～南西方向は3.45mまで測れる。住居跡の北西側壁は、N-53°-Eの方向を向いている。

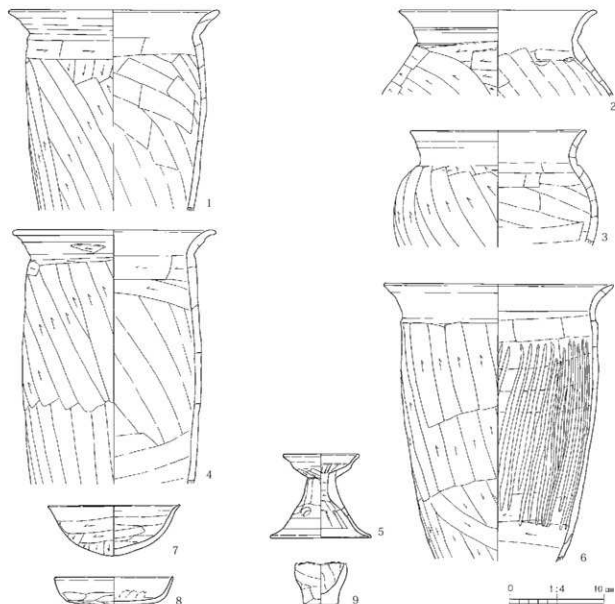
壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式である。住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

遺物は、住居中央部の床面付近から、古墳時代後期後半を主体とする土器が多く出土している。この中の古墳時代前期の器台(No 5)や古墳時代中期末～後期初頭頃の坏(No 7)及び平安時代前期の坏(No 8)は、時期的に本住居に伴うものではなく混入品である。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期後半と考えられる。

第18表 第200号住居跡出土遺物観察表

1	長胴甕	A. 口縁部径22.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 片岩粒、チャートなど小礫多量。E. 内外一にぶい褐色。F. 口縁～胴部中位2/3。G. 外面胴部に煤付着。H. 床面直上。
2	胴張甕	A. 口縁部径(21.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 角閃石、片岩粒などの小礫多量。E. 内外一にぶい褐色。F. 口縁部～胴部上位1/4。G. 内面胴部全面に煤付着。H. 床面直上。
3	甕	A. 口縁部径18.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面笠ナデ。D. 片岩粒などの小礫多量。E. 内外一にぶい褐色。F. 口縁部から胴部上半3/4。H. 床面直上。
4	長胴甕	A. 口縁部径21.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ後上位ケズリ。D. 片岩粒など小礫多量。E. 外一にぶい黄褐色、内面一褐色。F. 口縁部～胴部下位1/2。G. 外面胴部下位二次焼熱による器面剥落。内面胴部煤付着。H. 床面直上。
5	器台	A. 口縁部径8.1、器高8.8、脚端部径(10.7)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面笠ナデ。脚部上半外面ナデ、内面ナデ、内面ナズリ後指ナデ。脚部下内外面ヨコナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. A.4/5。G. 内外面に黒斑あり。脚部穿孔3単位。混入品。H. 覆土中。
6	大形甕	A. 口縁部径24.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半部笠ナデ・下半部ケズリ後ミガサ。D. 片岩粒など小礫多量。E. 内外一にぶい褐色。F. 口縁部～胴部下位1/2。G. 外面胴部に黒斑あり。H. 床面付近。
7	坏	A. 口縁部径14.0、器高5.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 欠形。G. 外面体部に黒斑あり。混入品。H. 床面付近。
8	坏	A. 口縁部径12.6、器高3.0、底部径9.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部ナデ、内面指ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 雲母、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。G. 外面口縁部に黒斑あり。内面体～底部に黒色付着物。混入品。F. 5/6。H. 覆土中。
9	小形土器	A. 口縁部径(5.2)、器高4.5、底部径3.7。B. 手捏ね。C. 外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一褐色、内一にぶい褐色。G. 内外面に黒斑あり。F. 1/3。H. 覆土中。



第60図 第200号住居跡出土遺物

第201号住居跡 (第61図、図版11)

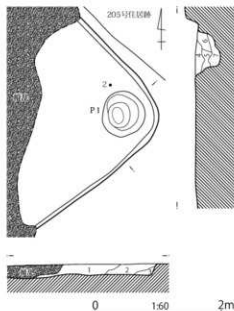
G地点の調査区中央の北側寄りに位置する。住居跡の大半は擾乱によって破壊されており、残存しているのは住居跡の東側コーナー付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部の丸みが強いつ丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向は2.32 mまで、北西～南東方向は3.00 mまで測れる。住居跡の南東側壁は、N-52°-Eの方向を向いている。

壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、1カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、住居東側コーナー部に位置する。72cm×70cmの楕円形を呈し、床面からの深さは40cmある。

遺物は、住居跡の覆土中から、古墳時代後期の土器の破片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土遺物の様相から古墳時代後期中葉頃と考えられる。



第 61 図 第 201 号住居跡

第 201 号住居跡土層説明

- 第 1 層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、径 0.5～2 cm のロームブロックを少量含む。）
 第 2 層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第 3 層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）
 第 4 層：暗褐色土層（径 0.5～1.5 cm のロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）
 第 5 層：暗褐色土層（径 0.5～1 cm のロームブロック・ローム粒子を含む。）
 第 6 層：暗褐色土層（径 2～4 cm のロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）
 第 7 層：黄褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）



第 62 図 第 201 号住居跡出土遺物

第 19 表 第 201 号住居跡出土遺物観察表

1	有段口縁	A. 口縁部径 (14.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明褐色。F. 口縁部 1/4。H. 覆土中。
2	模倣環	A. 口縁部径 (12.2)。器高 4.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 1/2 弱。H. 覆土中。

第 202 号住居跡 (第 63 図、図版 11)

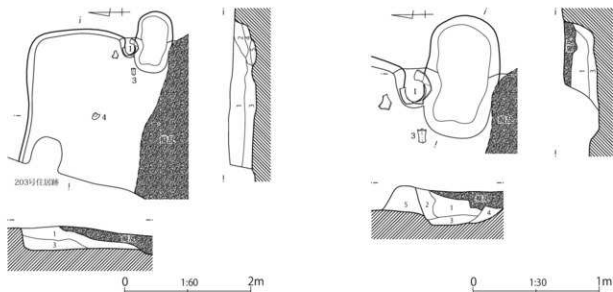
G 地点の調査区中央部の北端に位置する。住居跡の南側は攪乱に、西側は第 203 号住居跡に切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する範囲から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向は 2.36 m まで、南北方向は 2.20 m まで測れる。住居跡の主軸方向は、N-94°-E を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 34 cm ある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は強く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

カマドは、住居東側壁の中央付近に位置し、住居の壁を掘り込んでほぼ直角に付設されている。規模は、残存長 96 cm、最大幅 57 cm を測る。燃焼部は、住居の壁を掘り込んで作られている。燃焼部底面は、カマド第 3 層上面付近と思われ、住居床面とほぼ同じ高さで水平に作られている。袖は、左側のみ残存しており、黄褐色粘土やロームブロックを含む黄褐色土を住居の壁に直接貼り付けて構築している。袖の先端には土器器裏を伏せて補強している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居跡の覆土中から、土器や須恵器の破片が少量出土しただけである。この



第63図 第202号住居跡

第202号住居跡土層説明

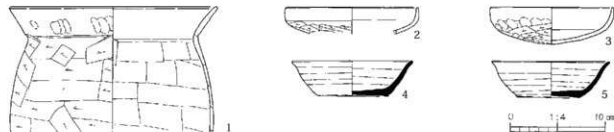
- 第1層：褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子・径0.5～1cmの暗褐色土ブロックを少量含む。）
 第2層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・黒味の強い暗褐色土の混合土。）
 第3層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、径2～4cmのロームブロックを多量含む。）
 第4層：褐色土層（径3cmの黄褐色粘土ブロックを主体とする。）
 第5層：褐色土層（ロームブロックを多量、ローム粒子・暗褐色土を少量含む。）

第202号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黄褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子・炭化物を多量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土を多量、焼土粒子を少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、焼土粒子を少量含む。）
 第4層：黄褐色土層（暗褐色土を多量、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）
 第5層：黄褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

うち、土師器の甕（No 1）と壺（No 2・3）は奈良時代前半の8世紀前半頃、須恵器の壺（No 4・5）は平安時代前期の9世紀前半頃のものと考えられ、時期差が認められる。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、奈良時代前半頃と考えられる。



第64図 第202号住居跡出土遺物

第20表 第202号住居跡出土遺物観察表

1	長胴甕	A. 口縁部径22.1. B. 粘土粗積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ケズリ、内面莚ナデ. D. 角閃石、白色粒. E. 外一明赤褐色、内一赤褐色. F. 口縁部～胴部上位1/2. G. 口縁部外面に指頭圧痕残す. H. カマド軸.
---	-----	---

2	環	A. 口縁部径 (13.0)、器高 3.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一にぶい橙色。F. 1/4。G. 外面体部に指頭圧痕残す。H. 覆土中。
3	環	A. 口縁部径 (14.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 口縁部 1/4。G. 外面に黒炭あり。H. 覆土中。
4	須恵器 環	A. 口縁部径 12.8、器高 3.7、底部径 7.5。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 石英、片岩粒。E. 内外一黄灰色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
5	須恵器 環	A. 口縁部径 12.5、器高 3.8、底部径 6.6。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。外面底部回転系切り。D. 片岩粒、石英。E. 内外一灰色。G. 還元焼成。F. 5/6。H. 覆土中。

第 203 号住居跡 (第 65 図、図版 12)

G地点の調査区中央部の中央北端に位置する。重複する第 516・517 号土坑に切られ、第 200・202 号住居跡を切っている。住居跡の北側壁は、調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を基調にしていたと思われるが、住居東側壁のカマド左側の壁はやや北東側に開いている。規模は、東西方向が 6.02 m、南北方向は 4.60 m まで測れる。住居跡の主軸方向は、N-98°-E を向いている。

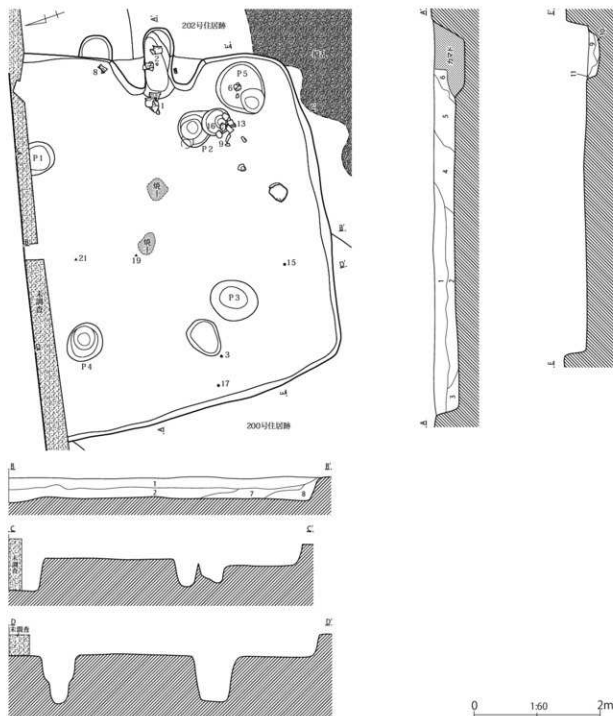
壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 37cm ある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。住居に関係すると思われるピットは、5カ所検出されている。P1~P4は、住居のほぼ対角線上に配置されていると思われることから、住居の上屋を支える4本主柱の柱穴と考えられる。50cm~77cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さは35cm~75cmある。P5は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。80cm×77cmの円形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは20cmある。

カマドは、住居東側壁の中央やや南東側コーナー部寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、残存長 112cm、最大幅 156cm ある。燃焼部は、住居の壁を 45cm ほど掘り込んで作られている。燃焼部底面は、住居の床面よりも一段低く平坦に作られ、奥壁は垂直ぎみに立ち上がっている。袖は、黄褐色粘土やロームブロックを含む黄褐色土や暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

カマド以外では、住居中央部で床面が焼けて赤色化した部分が2カ所見られ、単純な火床としての炉の可能性も考えられる。

遺物は、カマド内や貯蔵穴周辺及び住居跡の覆土中から、平安時代前期を主体とする土器の甕や環、須恵器の環や环蓋及び無頸壺などが出土している。この中のNo10の須恵器大形壺は、頸部の割れ口をきれいに擦って疑口縁を作り、無頸壺として再利用している。また、No11~18の須恵器の環や蓋は、いずれも胎土に片岩粒を含んでおり、末野窯産の可能性が高いと思われる。土器以外では、鉄製の刀子片 (No20) や、「コ」の字状に屈曲した断面が長方形を呈する鉄製品 (No19) と、断面の形態が高い台形と隅丸長方形を呈する土製紡錘車 (No21・22) が出土している。この中のNo22の土製紡錘車は、断面の形態が隅丸長方形を呈し、表裏面に同様の放射状の櫛描文、側面に同一工具による横線文を施すもので、その特徴から弥生時代後期~古墳時代前期頃のものと考えられる。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、平安時代前期前半頃と考えられる。

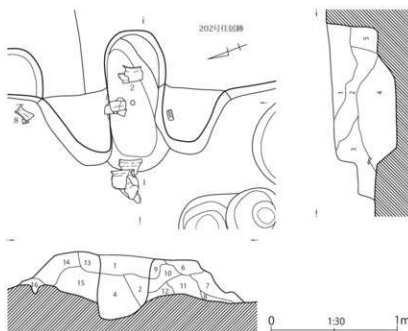


第65図 第203号住居跡

第203号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量、ロームブロック・炭化物を少量含む。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量含む。）
 第5層：暗褐色土層（焼土粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子・炭化物を少量含む。）
 第6層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化物を多量、ロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土を少量含む。）
 第7層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

- 第8層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第9層：黄褐色土層（黄褐色粘質土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～1.5cmの焼土ブロック・焼土粒子・径0.5～2cmの黄褐色粘土ブロックを多量含む。しまりを有する。）
 第10層：褐色土層（黄褐色粘質土・暗褐色土の混合土を主体に、径5cmのロームブロック・ローム粒子を含む。しまりを有する。）
 第11層：褐色土層（黄褐色粘質土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。しまりを有する。）



第66図 第203号住居跡カマド

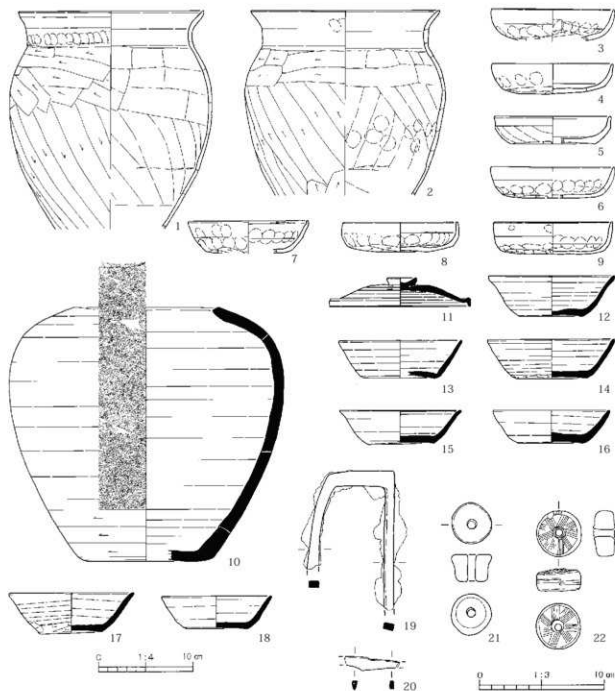
第203号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～3cmの焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。しまりを有する。）
 第2層：暗褐色土層（径0.5～3cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物・黄褐色粘土を微量含む。しまりを有する。）
 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子・黄褐色粘土を少量含む。しまりを有する。）
 第4層：暗褐色土層（黄褐色粘土を多量、ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）

- 第5層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含む。しまりを有する。）
 第6層：黄褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）
 第7層：黄褐色土層（黄褐色粘土を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を少量含む。）
 第8層：黄褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第9層：暗褐色土層（暗褐色土を多量、径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）
 第10層：暗褐色土層（暗褐色土を多量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）
 第11層：暗褐色土層（黄褐色粘土を多量、径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第12層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を多量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）
 第13層：暗褐色土層（黄褐色粘土を多量、焼土ブロックを少量含む。）
 第14層：暗褐色土層（黄褐色粘土を多量、焼土ブロックを微量含む。）
 第15層：暗褐色土層（黄褐色粘土を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）
 第16層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘土・暗褐色土の混合土。）

第21表 第203号住居跡出土遺物観察表

1	裏	A. 口縁部径19.6。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D. 角閃石。E. 内外一橙色。G. 内面胴部にヨコレ。口縁部外面に指頭圧痕残す。F. 口縁～胴部下位1/3。H. 床面直上。
2	裏	A. 口縁部径(20.0)。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面窪ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一明赤褐色、内一赤褐色。F. 口縁部～胴部中心1/5。G. 口縁部外面と胴部内面に指頭圧痕を残す。H. カマド内。
3	坏	A. 口縁部径(13.0)。底部径(9.6)。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一に赤い橙色。F. 1/3。G. 体部内外面に指頭圧痕残す。H. 覆土中。
4	坏	A. 口縁部径12.9。器高3.2。底部径10.6。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。石英。E. 内外一に赤い橙色。F. 2/3。G. 体部内外面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
5	坏	A. 口縁部径(12.4)。器高2.9。底部径(8.8)。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石。E. 内外一灰褐色。F. 1/3。H. 覆土中。



第 67 図 第 203 号住居跡出土遺物

6	坏	A. 口縁部径(13.0)、器高 3.3、底部径(10.4)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、赤色粒。E. 内外一に赤い褐色。F. 1/2。G. 体部内外面に指頭圧痕残す。H. P 5 内。
7	坏	A. 口縁部径(12.8)、器高 3.4、底部径(9.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 1/3。G. 口縁～体部内外面に指頭圧痕残す。H. 覆土中。
8	坏	A. 口縁部径(12.3)、器高 3.1、底部径 11.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒、赤色粒。E. 内外一褐色。F. 1/2。G. 体部内外面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
9	坏	A. 口縁部径(12.6)、器高 3.4、底部径(11.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一に赤い褐色、内一に赤い褐色。F. 1/2。G. 体部内外面に指頭圧痕残す。H. P 2 上。

10	須恵器壺	A. 底部径(14.0)。B. 粘土組織み上げ後ロクロ成形。C. 胴部外面平行引き目後回転ナデ・下位は回転度ケズリ、内面回転ナデ。底部外面ケズリ。内面指頭圧痕。D. 片岩粒。E. 内外一灰褐色。F. 胴部～底部 1/3。G. 還元焼成。頸部割れ口二次調整。H. 床面付近。
11	須恵器蓋	A. 口縁部径(15.0)。器高 3.0。幅み部径 3.2。B. ロクロ成形。幅み部取り付け。C. 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転ケズリ。内面回転ナデ。天井部外面回転系切後幅み貼り付け。D. 片岩粒。E. 外一黄灰色、内一灰白色。F. 1/2。G. 還元焼成。H. 覆土中。
12	須恵器杯	A. 口縁部径(13.4)。器高 4.3。底部径(6.8)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 石英、片岩粒。E. 内外一黄灰色。F. 1/4。G. 還元焼成。H. 覆土中。
13	須恵器杯	A. 口縁部径(13.0)。器高 3.9。底部径(7.4)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 石英、片岩粒。E. 内外一灰白色。F. 1/3。G. 還元焼成。H. 覆土中。
14	須恵器杯	A. 口縁部径 13.5。器高 4.1。底部径 7.4。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転系切後外側手持ち蓋ケズリ。D. 片岩粒。E. 内外一灰白色。F. 5/6。G. 還元焼成。H. 覆土中。
15	須恵器杯	A. 口縁部径 12.9。器高 3.6。底部径 7.0。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 片岩粒、石英。E. 内外一灰色。F. ほぼ完形。G. 還元焼成。H. 覆土中。
16	須恵器杯	A. 口縁部径 12.4。器高 4.5。底部径 7.0。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。外面底部回転系切り。D. 石英、片岩粒。E. 内外一灰褐色。F. ほぼ完形。G. 還元焼成。H. P.2上。
17	須恵器杯	A. 口縁部径(13.3)。器高 4.3。底部径 6.4。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り後外側手持ち蓋ケズリ。D. 片岩粒、石英。E. 内外一灰白色。G. 還元焼成。F. 2/3。H. 覆土中。
18	須恵器杯	A. 口縁部径 11.7。器高 3.4。底部径 6.4。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 片岩粒。E. 内外一灰色。F. 4/5。H. 覆土中。
19	鉄製品	A. 残存長 111。最大厚 0.5。重さ 7690g。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 両端部欠損。G. 断面長方形の棒状を呈す。H. 覆土中。
20	鉄製品	A. 残存径 4.5。最大幅 1.1。最大厚 0.4。重さ 4.10g。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 両端部欠損。H. 覆土中。
21	土製土紡錘車	A. 上面径 3.2。下面径 2.5。厚さ 2.2。孔径 0.6～0.7。重さ 20.86g。B. 手捏ね。C. 全面ナデ。D. 石英。F. 完形。H. 覆土中。
22	土製土紡錘車	A. 上面径 3.5。下面径 3.4。厚さ 1.7。孔径 0.5～0.9。重さ 26.60g。B. 手捏ね。C. 上・下及び側面に磨擦文を施す。D. 白色粒。F. 完形。G. 混入品。弥生時代後期～古墳時代前期頃。H. 覆土中。

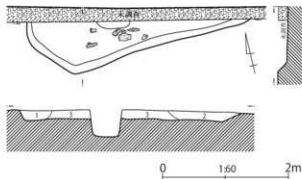
第 204 号住居跡 (第 68 図、図版 12)

G地点の調査区中央部北端に位置する。調査区内で検出されたのは住居の南西側コーナ部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

規模は、南北方向は 1.03 m まで、東西方向は 3.45 m まで測れる。住居跡の南側壁は、N-86°-E の方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 14 cm ある。壁溝は検出されていない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、壁際まで全体的に堅く締まっている。

遺物は、覆土中から古墳時代後期の土師器や須恵器の破片が少量出土している。土器以外では、住居南側壁の中央付近の覆土中から、長さ 15 cm 前後の礫が 5 個まとまって出土している。

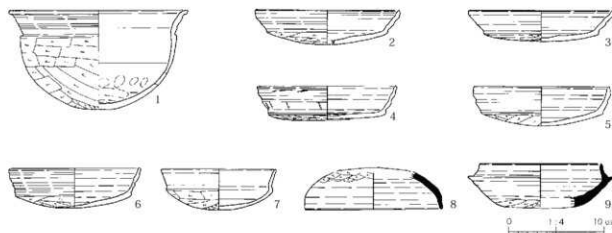
本住居跡の時期は、出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第 68 図 第 204 号住居跡

第 204 号住居跡土層説明

- 第 1 層：暗褐色土層 (径 0.5～1 cm のロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系 A 軽石を少量含む。)
- 第 2 層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、径 0.5～5 cm のロームブロックを少量含む。)
- 第 3 層：暗褐色土層 (ローム粒子を多量、径 2～5 cm のロームブロックを微量含む。)



第 69 図 第 204 号住居跡出土遺物

第 22 表 第 204 号住居跡出土遺物観察表

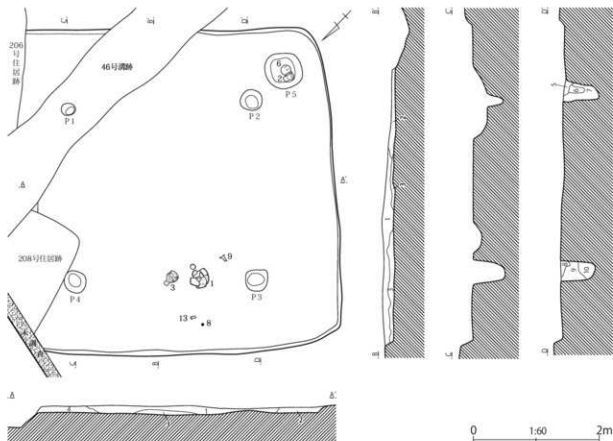
1	鉢	A. 口縁部径 19.0、器高 10.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 完形。G. 内外面に帯状の黒色付着物あり。体部内面に指頭圧痕を残す。H. 覆土中。
2	有段口縁環	A. 口縁部径 (15.4)、器高 3.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 口縁部 1/3。H. 覆土中。
3	有段口縁環	A. 口縁部径 (15.4)、器高 3.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 口縁部 1/4 強。H. 覆土中。
4	有段口縁環	A. 口縁部径 14.8、器高 3.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 完形。H. 覆土中。
5	有段口縁環	A. 口縁部径 (14.4)、器高 4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 口縁部 1/2 弱。H. 覆土中。
6	有段口縁環	A. 口縁部径 14.0、器高 4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 完形。H. 覆土中。
7	模倣環	A. 口縁部径 12.2、器高 4.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 完形。H. 覆土中。
8	須恵器 環蓋	A. 口縁部径 (14.6)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面手持ち袋ケズリ、内面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一暗灰色。F. 口縁部 1/4。H. 覆土中。
9	須恵器 環	A. 口縁部径 (13.0)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。体部外面回転ナデ、内面回転ナデ。底部外面袋ケズリ。D. 白色粒。E. 内外一淡灰色。F. 口縁部 1/3。H. 覆土中。

第 205 号住居跡 (第 70 図、図版 12・13)

G地点の調査区中央部北端に位置する。重複する第 206・207・208 号住居跡と第 46 号溝跡に切られている。本住居跡は、住居の床面近くまで後世の耕作により削平されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みを持つ隅丸方形を呈していたと思われる。規模は、北西～南東方向が 5.00 m、北東～南西方向は 4.90 m まで測れる。住居跡の南東側壁は、N-45°-W の方向を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 16cm ある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、5カ所検出されている。P1～P4は、住居のほぼ対角線上に配置されていると思われることから、住居の上屋を支える 4 本主柱の柱穴と考えられる。23cm～35cm の円形や楕円形を呈し、床面からの深さは 55cm 程度ある。P5は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、住



第205号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロック・焼土粒子・炭化物を少量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）
 第4層：土層説明なし。
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）
 第6層：暗褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第7層：褐色土層（暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）
 第9層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第10層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量含む。）

第70図 第205号住居跡

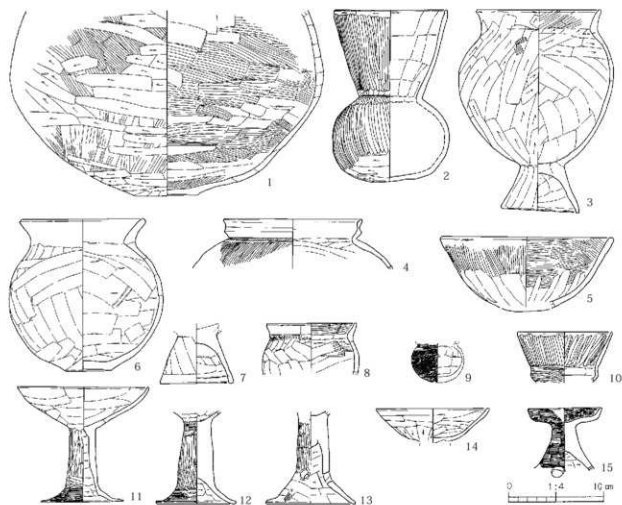
第205号住居跡貯蔵穴土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を含む。）
 第2層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

居南側コーナー部に位置する。58cm×56cmの隅丸方形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは50cmある。中からは完形の小型平底甕と中形の直口壺が出土している。

遺物は、住居北西側の床面付近や貯蔵穴P5内及び覆土中から、古墳時代前期後葉を主体とする土器が比較的多く出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代前期後葉頃と考えられる。



第 71 図 第 205 号住居跡出土遺物

第 23 表 第 205 号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A. 底部径 6.6. B. 粘土組織み上げ. C. 胴部外面ハケの後ケズリ、内面ハケ後一ナデ. 底部外面ケズリ、内面ハケ. D. 石英、角閃石、白色粒. E. 内外一にぶい赤褐色. F. 胴部～底部 1/5. G. 胴部～底部外面に黒炭あり. H. 床面付近.
2	中形直口壺	A. 口縁部径 10.9. 器高 16.6. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部外面ケズリ後ミガキ、内面ヨコナデ. 胴部外面ハケの後ミガキ、内面調整観察不可. 底部外面ケズリ. D. 石英、片岩、白色粒. E. 内外一明赤褐色. F. 完形. G. 口縁から胴部上位外面に黒炭あり. H. 貯藏穴内.
3	台付甕	A. 口縁部径 13.2. 器高 21.3. 台端部径 8.4. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部外面ナデ、外面ハケ. 胴部外面ケズリ、内面ナデ後上位ケズリ. 台部外面ナデ、内面ナデ・指ナデ. D. 石英、角閃石. E. 内外一にぶい赤褐色. F. 5/6. G. 台部内面に指印正痕を残す. H. 床面付近.
4	S 字状口縁台付甕	A. 口縁部径 13.2. 器高 21.3. 台端部径 8.4. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ナデ. 胴部上位外面ハケ後一ナデ、内面ナデ. D. 角閃石、石英. E. 外一にぶい黄褐色、内一にぶい褐色. F. 口縁部破片. H. 覆土中.
5	小形甕	A. 口縁部径 (18.5). B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部外面ナデ、内面ハケ. 体部内外面ハケ後下半ナデ. D. 角閃石、白色粒. E. 内外一明赤褐色. F. 口縁～体部 1/3. G. 底部内外面に黒炭あり. H. 覆土中.
6	平底甕	A. 口縁部径 13.4. 器高 16.1. 底部径 4.9. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ナデ. 胴部内外面ナデ. 底部外面ケズリ. D. 角閃石、白色粒. E. 内外一褐色. F. 完形. G. 胴部下外面煤・コゲ付着、内面コゲ付着. H. 貯藏穴内.
7	台付甕	A. 台端部径 7.8. B. 粘土組織み上げ. C. 台部内外面ナデ. D. 角閃石、石英. E. 内外一にぶい黄褐色. G. 外面煤付着. 台部内面粘土貼り付け. F. 台部完形. H. 覆土中.
8	小形鉢	A. 口縁部径 8.7. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ. 胴部ハケ後ナデ、内面ナデ. D. 角閃石、石英、白色粒. E. 内外一にぶい褐色. F. 口縁～胴部 1/2. G. 口縁部内外面に黒炭あり. H. 覆土中.
9	小形直口壺	B. 粘土組織み上げ. C. 胴部外面細かいミガキ、内面指ナデ後ナデ. 底部外面細かいミガキ. D. 角閃石、白色粒. E. 内外一黒色. F. 胴部～底部 4/5. H. 覆土中.

10	小形浅鉢	A. 口縁部径(9.1)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ミガキ、内面ナデ後ミガキ。体部外面ミガキ、内面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 口縁-体部1/5。H. 覆土中。
11	高 環	A. 口縁部径(14.0)。器高12.3。脚端部径8.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁-体部内外面ナデ。脚柱部外面ミガキ、内面ケズリ。脚端部外面ミガキ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外-にぶい黄褐色。F. 1/3。G. 脚部外面に黒炭あり。H. 覆土中。
12	高 環	A. 脚端部径(8.5)。B. 粘土組織み上げ。C. 脚柱部外面ミガキ。脚端部外面ミガキ、内面上位ケズリ後下位ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一明赤褐色、内面-にぶい黄褐色。F. 脚部のみほぼ4/5。G. 脚部内外面に黒炭あり。H. 覆土中。
13	高 環	A. 脚端部径(9.5)。B. 粘土組織み上げ。C. 脚柱部外面ナデ後ミガキ、内面ケズリ。脚端部外面ナデ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、白色粒、石英。E. 内外一褐色。F. 脚部2/3。H. 覆土中。
14	高 環	A. 口縁部径(12.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 外-にぶい褐色、内面-にぶい黄褐色。F. 坏部1/2。G. 内外面に黒炭あり。H. 覆土中。
15	器 台	A. 口縁部径(7.1)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部-体部内外面細かいミガキ。脚柱部外面細かいミガキ、内面ケズリ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外-にぶい黄褐色。F. 口縁-脚端部1/2。G. 脚部外面に黒炭あり。脚部円孔3カ所。H. 覆土中。

第206号住居跡(第72図、図版12・13)

G地点の調査区中央部北端に位置する。重複する第207号住居跡と第46号溝跡に切れ、第205号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは、住居跡の南側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北東～南西方向は3.48mまで、北西～南東方向は3.05mまで測れる。住居跡の主軸方向は、N-132°-Wを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は強く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、3カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド左側の住居南側コーナー部に位置している。80cm×66cmの隅丸長方形さみの形態を呈し、床面からの深さは42cmある。P1の住居中央側にあたる北東側には、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土による帯状の土堤がある。P2とP3は、住居東側コーナー部付近に位置する。それぞれ楕円形や円形を呈し、床面からの深さは20cm程度ある。

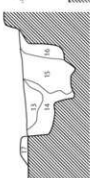
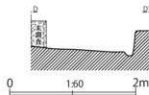
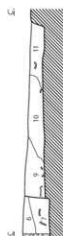
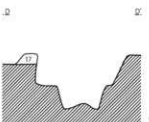
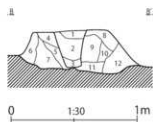
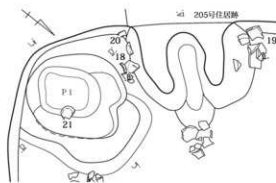
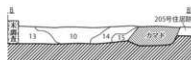
カマドは、住居南西側壁のほぼ中央に位置し、住居の壁を掘り込まずに壁に対して直角に付設されている。規模は、残存長84cm、最大幅98cmある。燃焼部は、住居内にある。燃焼部底面は、住居の床面よりも若干低く平坦に作られている。奥壁は、住居壁面よりも内側にあり、直線的に傾斜して立ち上がっている。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居の床面上から、古墳時代後期後半の土器が多く出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。

第24表 第206・207号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A. 口縁部径(19.8)。器高31.0。底部径3.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面内ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、白色粒、片岩粒。E. 外-灰黄褐色、内-にぶい褐色。F. 4/5。G. 胴部内外面に黒炭あり。H. 床面直上。
2	長 胴 甕	A. 口縁部径21.0。器高35.4。底部径5.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面内ナデ。底部内外面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外-にぶい褐色。F. 4/5。G. 胴部中位以下の外面と底部内面にヨゴシ。H. 床面直上。
3	長 胴 甕	A. 口縁部径20.7。器高37.4。底部径4.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面内ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒、石英。E. 外-褐色、内-にぶい褐色。F. 4/5。G. 外面胴部下位から底部に黒炭あり。H. 床面直上。



第206・207・208号住居跡土層説明

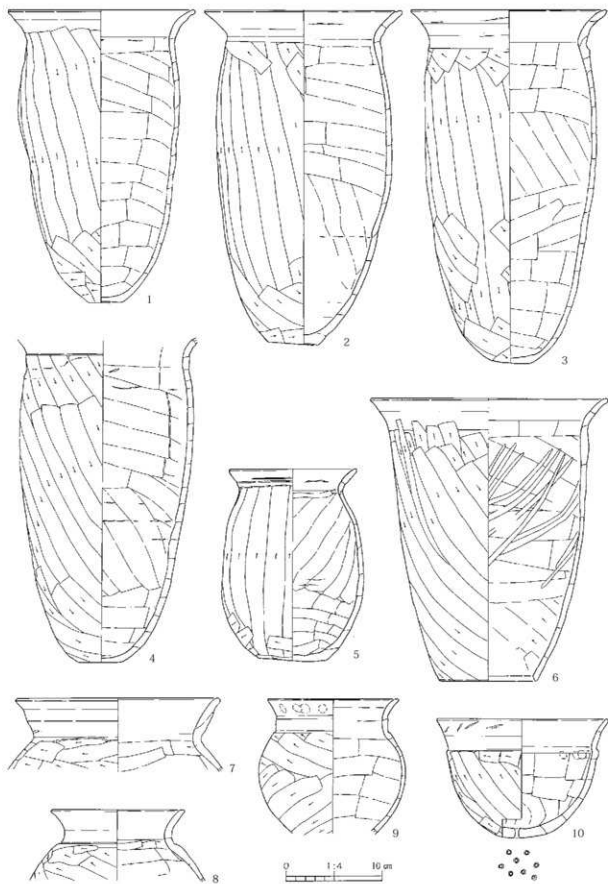
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを少量、焼土粒子を少量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、径4cmのロームブロックを微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、径0.5～1cmのロームブロックを微量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～4cmのロームブロックを微量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径3～5cmのロームブロック・焼土粒子を微量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、径0.5～1cmのロームブロックを微量含む。）
- 第12層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第13層：暗褐色土層（径3～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）
- 第14層：暗褐色土層（径3～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・粘質ロームを微量含む。）
- 第15層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土ブロック・焼土粒子を少量、径2～3cmの黄褐色粘土ブロック・粘土粒子を微量含む。）
- 第16層：褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第72図 第206・207・208号住居跡

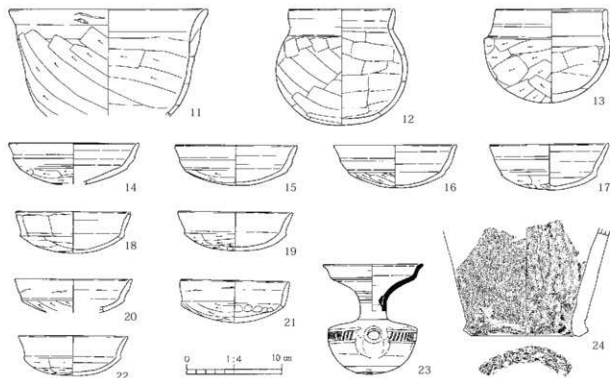
第206号住居跡カマド・貯蔵穴土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。しまりを有する。）
- 第2層：黄褐色土層（径0.5～5cmの黄褐色粘土ブロック・黄褐色粘土粒子・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。しまりを有する。）
- 第3層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。しまりを有する。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・黄褐色粘土を含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径0.5～4cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、ローム粒子・黄褐色粘土を少量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径0.5～4cmの黄褐色粘土ブロック・暗褐色土の混合土を主体に、ローム粒子・径0.5～0.8cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量、黄褐色粘土を少量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子・径4～5cmの黄褐色粘土ブロックを少量含む。）
- 第9層：暗褐色土層（径0.5～4cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、黄褐色粘土ブロックを少量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（焼土粒子を多量、焼土ブロック・黄褐色粘土ブロックを少量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmの焼土ブロック・径0.5～3cmの黄褐色粘土ブロックを少量含む。）
- 第12層：黄褐色土層（黄褐色粘土ブロックを主体に、暗褐色土を少量含む。）
- 第13層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
- 第14層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量含む。）
- 第15層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）
- 第16層：褐色土層（暗褐色土を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第17層：土層説明なし。

4	長 胴 甕	A. 底部径 4.6, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面甕ナデ, 底部外面木炭痕, D. 片岩粒, 白色粒, E. 内外一灰褐色, F. 頸部以下 3/4, G. 胴部外面埋付着, 内面斑点状剥落あり, H. 床面付近。
5	小 形 甕	A. 口縁部径 13.5, 器高 20.4, 底部径 7.1, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面ナデ, 底部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 角閃石, 赤色粒, E. 内外一赤褐色, F. 5/6, G. 外面胴部に黒斑, H. 床面直上。
6	大 形 甕	A. 口縁部径 25.2, 器高 29.8, 底部径 (10.1), B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面下位ケズリ後上半甕ナデ後放射状にミガキ, D. 角閃石, 石英, 白色粒, 片岩, E. 内外一赤褐色, F. 4/5, G. 胴部下位の内外面に黒斑あり, H. 床面直上。
7	胴 張 甕	A. 口縁部径 21.6, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ヨコケズリ, 内面甕ナデ, D. 角閃石, 白色粒, 石英, E. 内外一灰褐色, F. 口縁～胴部上位 4/5, G. 口縁部内面に黒斑あり, H. 床面直上。
8	小 形 甕	A. 口縁部径 14.1, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面甕ナデ, D. 角閃石, 白色粒, E. 内外一褐色, F. 口縁～胴部上位 3/4, H. 床面直上。
9	小 形 甕	A. 口縁部径 13.8, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面甕ナデ, D. 石英, 角閃石, 白色粒, E. 内外一赤褐色, F. 口縁～胴部下位 4/5, G. 口縁部内面・胴部外面に黒斑あり, 口縁部外面に指頭圧痕残す, H. 床面直上。
10	小形多孔甕	A. 口縁部径 18.1, 器高 12.7, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面甕ナデ, 底部焼成前穿孔 8ヶ所, D. 角閃石, 赤色粒, E. 内外一褐色, F. ほぼ完形, G. 頸部内面に指頭圧痕残す, H. 床面直上。
11	鉢	A. 口縁部径 (21.0), B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面甕ナデ後ケズリ, D. 角閃石, 石英, 白色粒, E. 内外一褐色, G. 体部外面に黒斑あり, F. 1/5, H. 床面付近。
12	小 形 鉢	A. 口縁部径 11.2, 器高 12.3, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデ, 内面甕ナデ, D. 赤色粒, 角閃石, 白色粒, E. 内外一褐色, F. 5/6, G. 内外面摩耗, H. 床面直上。
13	小 形 鉢	A. 口縁部径 11.8, 器高 10.0, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面甕ナデ, D. 角閃石, 白色粒, E. 内外一褐色, F. 3/4, G. 底部内外面に黒斑あり, H. 床面付近。
14	有段口縁鉢	A. 口縁部径 13.8, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 角閃石, 白色粒, E. 内外一褐色, F. ほぼ完形, H. 床面直上。
15	有段口縁鉢	A. 口縁部径 13.0, 器高 4.3, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 角閃石, 白色粒, E. 内外一褐色, F. ほぼ完形, H. 床面直上。
16	有段口縁鉢	A. 口縁部径 13.0, 器高 4.5, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 角閃石, 白色粒, E. 内外一赤褐色, F. 完形, G. 外面黒斑あり, 内面黒色処理か, H. 覆土中。
17	有段口縁鉢	A. 口縁部径 12.6, 器高 4.8, B. 粘土組積み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 角閃石, E. 内外一褐色, F. 完形, H. 覆土中。



第73图 第206·207号住居跡出土遺物(1)



第74図 第206・207号住居跡出土遺物(2)

18	模倣 坏	A. 口縁部径 12.2、器高 4.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面髹ナデ。D. 赤色粒。E. 内外一橙色。F. 1/2。G. 内外面器面摩耗。H. 覆土中。
19	模倣 坏	A. 口縁部径 12.2、器高 4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒。E. 内外一橙色。F. ほぼ完形。G. 内外面摩耗。H. 覆土中。
20	模倣 坏	A. 口縁部径 12.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒。E. 内外一橙色。F. 口縁一体部 1/2。G. 内外面摩耗。H. 覆土中。
21	模倣 坏	A. 口縁部径 11.6、器高 4.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒。E. 内外一橙色。F. 5/6。G. 内外面摩耗。内面体部に指頭圧痕残す。H. 貯蔵穴内。
22	模倣 坏	A. 口縁部径 11.6、器高 4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、赤色粒。E. 内外一橙色。F. ほぼ完形。G. 内外面摩耗。H. 床面直上。
23	須 恵 器 座	A. 口縁部径 (10.6)、器高 11.7。B. ロクロ成形。C. 口縁部から頸部内外面回転ナデ。胴部外面二条洗線間に櫛歯状工具による刺突文を施文、下位～底部回転ケズリ。D. 白色粒。E. 内外一灰色。G. 内外面自然粘厚く付着。還元焙焼成。F. 5/6。H. 床面直上。
24	埴 輪	A. 底部径 (13.2)。B. 粘土組織み上げ。C. 外面タテハケ、内面タテナデ。D. 角閃石、赤色粒、片岩、石英。E. 内外一橙色。F. 底部破片。H. 覆土中。

第207号住居跡(第72図、図版13)

G地点の調査区中央部北端に位置する。重複する第208号住居跡や第46号溝跡に切られ、第206号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは住居跡の南東側壁の一部だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南西～北東方向は3.00mまで、南東～北西方向は60cmまで測れる。住居の南東側壁は、N-67°-Eの方向を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは39cmある。検出された各壁の壁下には、

壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、壁際のせいかやや軟弱である。

遺物は、調査区の北側壁際付近から土器が多く出土しているが、重複する第206号住居跡との分別は困難である。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係から古墳時代後期後半以降と考えられる。

第208号住居跡（第72図、図版13）

G地点の調査区中央部北端に位置する。重複する第46号溝跡に切られ、第205・207号住居跡を切っている。住居跡の北側半分は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたものと思われる。規模は、南西～北東方向は2.73cmまで、南東～北西方向は1.75cmまで測れる。住居跡の南東側壁は、N-69°-Eの方向を向いている。

壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは42cmある。調査区内で検出された各壁の壁下には、壁溝が途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。

遺物は、住居跡の覆土中より、土器の破片が少量出土しただけである。第75図に図示した土器は、いずれも古墳時代前期の土器であるが、遺構の重複関係からすると混入品と考えられる。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、古墳時代後期後半以降と考えられる。



第75図 第208号住居跡出土遺物

第25表 第208号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A. 底部径2.9。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ナデの後継かイミガキ、内面笊ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一にぶい黄褐色。F. 胴部～底部1/3。G. 内外面風痕あり。H. 覆土中。
2	壺	A. 底部径(5.4)。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ミガキ、内面ハケ。底部外面ミガキ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 底部1/2。H. 覆土中。
3	器台	A. 器受部径(8.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、片岩粒、白色粒。E. 外一にぶい橙色、内一にぶい赤褐色。F. 器受部1/4。H. 覆土中。

第209号住居跡（第76図、図版13）

G地点の調査区中央部の北側に位置する。第216号住居跡と重複し、それによって切られている。本住居跡は、後世の耕作によって住居の床面間際まで削平されており、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

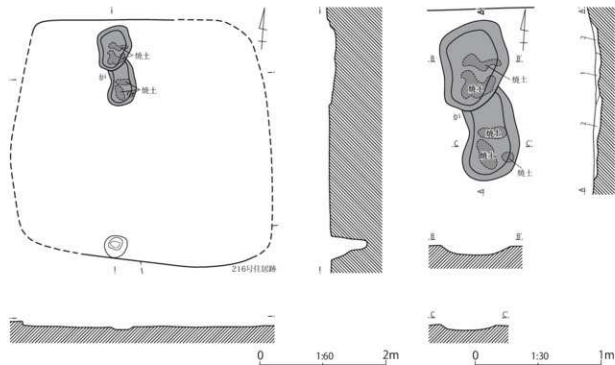
平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みを持つ隅丸長方形を基調にしていたと思われる。規模は、南北方向が3.90m、東西方向が4m程度と推測される。住居跡の主軸方向は、N-4°-Wを向いている。

壁は、ほとんど残存しておらず、壁溝も見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、住居の南側壁際に1カ所見られるが、本住居に伴うものか判断できない。

炉は、住居北側の北側壁際に位置する。楕円形の炉が南北に2ヵ所重複したような形態で、いずれも床面を若干掘り窪めた地皿炉である。炉の底面は、部分的に焼けて赤色化している。

遺物は、弥生時代後期の東関東系の二軒屋式土器、南関東系の土器、在地の吉ヶ谷式土器の系譜を引く土器の破片が、住居跡の覆土中から少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土遺物の様相から、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃と推測される。

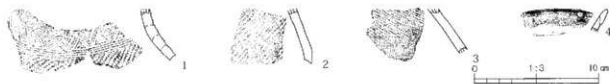


第76図 第209号住居跡

第209号住居跡炉跡土層説明

第1層：黒褐色土層（炭化物・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量、焼土ブロック・焼土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）



第77図 第209号住居跡出土遺物

第26表 第209号住居跡出土遺物観察表

1	炭	B. 粘土組織み上げ。C. 外面は胴部と頸部の境に4本歯の櫛描横線を施し、頸部はナデの後二段以上の櫛描波状文(右回り)、胴部は縄文(LR)を施す。内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 破片。G. 外面に煤付着。二軒屋式。H. 覆土中。
2	炭	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面縄文(LR)、内面ナデ。D. 片岩粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 胴部破片。G. 外面に煤付着。吉ヶ谷式。H. 覆土中。
3	壺	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面上半縄文(RL)、下半ミガキ。内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 胴部破片。G. 南関東系。H. 覆土中。
4	壺	B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ミガキ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一赤茶褐色。F. 口縁部破片。G. 口縁部内外面に赤彩を施す。吉ヶ谷式。H. 覆土中。

第210号住居跡 (第78図、図版13)

G地点の調査区中央部の中央付近に位置する。住居跡の東側コーナー部を、重複する第212号住居跡に切られている。

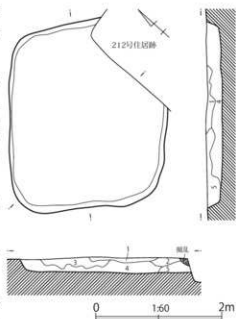
平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、北東から南西方向が3.00m、北西～南東方向が2.55mを測る。住居跡の長軸方向は、N-49°-Eの方向を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量含む暗褐色土を平坦に薄く埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。カマド・貯蔵穴・ピット等の住居内施設は、まったく検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期を主体とする土器の破片が、覆土中から少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。

本住居跡は、調査時には住居跡と考えられていたが、規模が小さく、住居内の施設も全く見られないことから、住居とは異なる施設であった可能性もあろう。



第78図 第210号住居跡

第210号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層 (径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)
 第2層：暗褐色土層 (径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。)
 第3層：暗褐色土層 (径3～5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土ブロックを微量含む。)
 第4層：暗褐色土層 (径1～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。)
 第5層：暗褐色土層 (径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)



第79図 第210号住居跡出土遺物

第27表 第210号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 裏	A. 口縁部径 (19.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面髭ナデ。D. 石英、角閃石、白色粒。E. 外-に灰、黄褐色、内-に灰、褐色。F. 口縁-胴部上位 1/4。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
2	有段口縁環	A. 口縁部径 (15.1)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外-黒褐色、内-灰褐色。F. 口縁部破片。G. 内面黒色処理か。H. 覆土中。
3	裏	A. 底部径 6.9。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、白色粒。E. 外-に灰、褐色、内-明赤褐色。F. 底部のみ。G. 外面に黒斑あり。H. 覆土中。

第211号住居跡 (第80図、図版13)

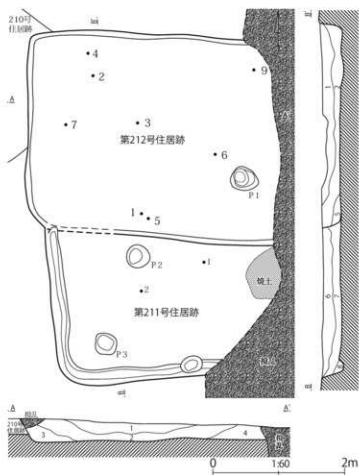
G地点の調査区中央部の中央付近に位置する。住居跡の東側は後世の攪乱によって壊され、北側は重複する第212号住居跡に切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向は2.43mまで、東西方向は4.00mまで測れる。住居跡の南側壁は、 $N-83^{\circ}-E$ の方向を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝が途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に薄く埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。住居東側の床面上には、焼土の分布が見られる。ピットは、P2とP3の2カ所が検出されている。P2は、住居中央部にある。径36cm程度の円形を呈し、床面からの深さは15cm程度ある。P3は、住居南西側コーナー部付近にある。32cm×34cmの隅丸方形ぎみの形態を呈し、床面からの深さは10cm程度ある。いずれもその性格は不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、白鳳時代を主体とする土器の破片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、白鳳時代と考えられる。



第211・212号住居跡土層説明

<第211号住居跡>

第6層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～2cmの焼土ブロック・炭化粒子を少量、白色粒子を微量含む。）

第7層：黒褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土ブロックを少量、炭化粒子を微量含む。）

第8層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

<第212号住居跡>

第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量、炭化粒子を少量含む。）

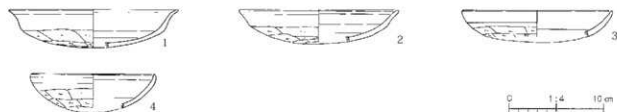
第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmの焼土ブロックを多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、炭化粒子を少量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量、炭化粒子を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

第5層：暗褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第80図 第211・212号住居跡



第81図 第211号住居跡出土遺物

第28 第211号住居跡出土遺物観察表

1	皿	A. 口縁部径 (18.0). B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ, 内面ナデ. D. 赤色粒, 白色粒. E. 内外一淡茶褐色. F. 1/3. H. 覆土中.
2	皿	A. 口縁部径 (16.8). B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ, 内面ナデ. D. 赤色粒, 白色粒. E. 内外一淡褐色. F. 口縁部 1/6 破片. H. 覆土中.
3	皿	A. 口縁部径 (16.0). B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ナデの後ケズリ, 内面ヨコナデ. D. 赤色粒, 白色粒. E. 内外一淡茶褐色. F. 口縁部 1/5 破片. H. 覆土中.
4	坏	A. 口縁部径 (13.2). B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ナデの後ケズリ, 内面ヨコナデ. D. 白色粒. E. 外一淡褐色, 内一淡茶褐色. F. 口縁部 1/6 破片. H. 覆土中.

第212号住居跡 (第80図、図版14)

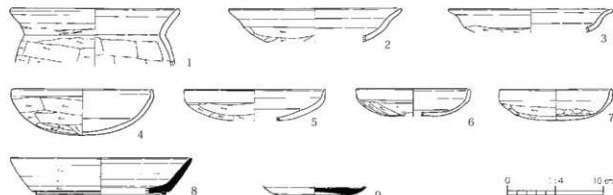
G地点の調査区中央部の中央付近に位置する。重複する第210・211住居跡を切っている。住居跡の東側は、後世の擾乱によって壊されているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が3.02m、東西方向は3.76mまで測れる。住居跡の北側壁は、N-92°-Eの方向を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは32cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に薄く埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、1カ所検出されている。P1は、住居東側に位置する。径42cm×33cmの楕円形を呈し、床面からの深さは20cm程度ある。

遺物は、住居跡の覆土中から、白鳳時代～奈良時代の土器の破片が少量出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、奈良時代前半頃と考えられる。



第82図 第212号住居跡出土遺物

第29表 第212号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A. 口縁部径(18.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面麗ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一褐色、内一にぶい褐色。F. 口縁～胴部上位1/6。G. 内外面黒斑あり。H. 覆土中。
2	皿	A. 口縁部径(18.3)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒、赤色粒。E. 内外一褐色。F. 口縁～体部1/5。H. 覆土中。
3	皿	A. 口縁部径(17.5)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一にぶい褐色、内一褐色。F. 口縁～体部1/5。H. 覆土中。
4	坏	A. 口縁部径(15.0)。器高4.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D. 白色粒、角閃石、石英。E. 内外一明赤褐色。F. 1/2。G. 内外面に粘土付着。H. 覆土中。
5	坏	A. 口縁部径(15.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一褐色、内一にぶい褐色。F. 1/5。G. 内面黒斑あり。H. 覆土中。
6	坏	A. 口縁部径(12.2)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一にぶい黄褐色、内一褐色。F. 口縁～体部1/4。G. 体部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
7	坏	A. 口縁部径12.0。器高3.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒、石英。E. 内外一褐色。F. 4/5。G. 体部内面に指頭圧痕残す。H. 覆土中。
8	須 恵 器 高 台 付 坏	A. 口縁部径(19.3)。器高4.9。底部径(13.8)。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転脱切り。高台限付後回転ナデ。D. 白色粒。E. 外一灰色、内一灰白色。F. 1/5。G. 還元焼成。H. 掘り方埋土中。
9	須 恵 器 坏	A. 底部径7.1。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面手持脱ケズリ。D. 石英、白色粒。E. 内外一灰色。F. 底部のみ。G. 還元焼成。H. 床面付近。

第213号住居跡(第83図、図版14)

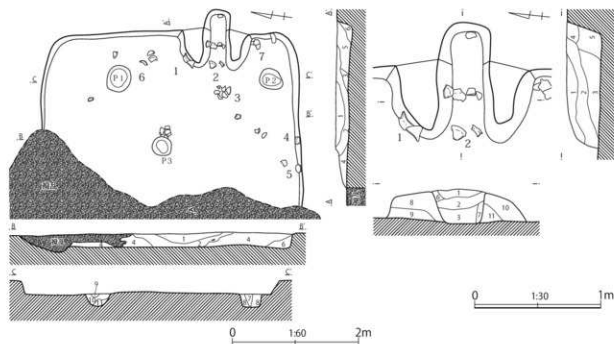
G地点の調査区中央部の中央付近に位置する。住居跡の西側半分は後世の攪乱によって壊されているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形が隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が4.06m、東西方向は2.75mまで測れる。住居跡の主軸方向は、N-77°-Eを向いている。

壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。残存する各壁の壁下には壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に薄く埋め戻した貼床式で、住居中央部は強く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、3ヶ所検出されている。P1とP2は、住居のほぼ対角線に近い位置にあり、あるいは住居の上屋を支える主柱の柱穴の可能性もある。長軸が40cm前後の楕円形を呈し、床面からの深さは20cm程度ある。P3は、住居中央部に位置する。径30cmの円形を呈し、床面からの深さは20cm程度ある。

カマドは、住居東側壁の南東側コーナー部寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、残存長92cm、最大幅118cmある。燃焼部は、住居の壁を35cm程度掘り込んである。燃焼部底面は、住居の床とほぼ同じ高さで水平に作られ、奥壁は直線的に傾斜して立ち上がっている。袖は、灰褐色粘土やロームブロックを含む灰褐色粘質土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。内面は、あまり焼けていない。左側袖の先端付近から裏の口縁部が出土しており、袖の補強に使われたものかもしれない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や床面付近から、白鳳時代末～奈良時代初頭頃の土器が比較的多く出土している。本住居跡の時期は、出土遺物の様相から、白鳳時代末～奈良時代初頭頃と考えられる。



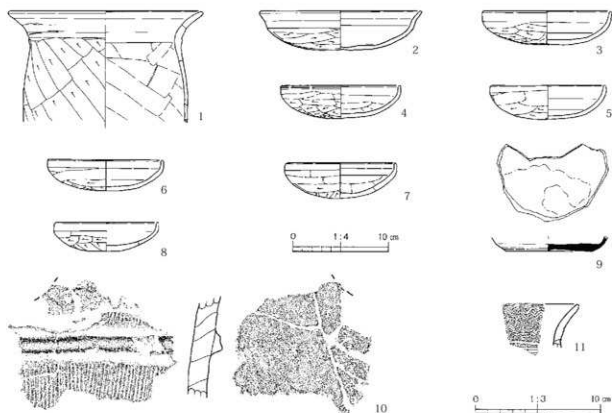
第 83 図 第 213 号住居跡

第 213 号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
 第3層：黒褐色土層（0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第5層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子・黒褐色土を少量、炭化粒子を微量含む。）
 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～2cmのロームブロックを少量含む。）
 第7層：黄褐色土層（暗褐色土を多量、径1cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を中量、焼土粒子を少量含む。）
 第8層：黄褐色土層（径2cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第9層：黄褐色土層（ロームブロックを主体に、暗褐色土を少量含む。）
 第10層：暗褐色土層（径2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・黒褐色土を少量含む。）
 第11層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）

第 213 号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（灰褐色粘土粒子を多量、径1cmのロームブロック・径0.5cmの焼土ブロックを中量、ローム粒子を少量含む。）
 第2層：暗灰褐色土層（灰褐色粘土粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。）
 第3層：黒褐色土層（径0.5～2cmの焼土ブロックを多量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、炭化物を微量含む。）
 第4層：暗灰褐色土層（灰褐色粘土粒子を多量、径0.5～2cmの焼土ブロックを少量、ローム粒子を微量含む。）
 第5層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・灰褐色粘土粒子を少量含む。）
 第6層：灰褐色土層（灰褐色粘土粒子を多量、ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）
 第7層：暗灰褐色土層（灰褐色粘土粒子を主体とする。）
 第8層：灰褐色粘質土層（径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径1cmのロームブロック・炭化物を少量含む。）
 第9層：灰褐色粘質土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第10層：灰褐色粘質土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
 第11層：黄褐色土層（ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）



第 84 図 第 213 号住居跡出土遺物

第 30 表 第 213 号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A. 口縁部径 (26.0)。B. 粘土組積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面髷ナデ。D. 角閃石、石英。E. 内外一にぶい橙色。F. 口縁部上半 1/4。H. カマド左袖。
2	坏	A. 口縁部径 (17.2)、器高 4.1。B. 粘土組積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面髷ナデ。D. 雲母。E. 内外一にぶい褐色。F. 1/2。G. 底部内外面に黒斑あり。H. カマド焚口。
3	坏	A. 口縁部径 (13.7)、器高 3.6。B. 粘土組積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面髷ナデ。D. 角閃石。E. 内外一褐色。F. 3/5。G. 体部内外面に黒斑あり。H. 床面直上。
4	坏	A. 口縁部径 12.6、器高 3.5。B. 粘土組積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面下半ケズリ後上位ヨコナデ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒、石英。E. 外一にぶい黄褐色、内一褐色。F. ほぼ完形。G. 底部外面に黒斑あり。H. 住居南側壁面。
5	坏	A. 口縁部径 12.0、器高 3.6。B. 粘土組積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面下半ケズリ後上位ヨコナデ、内面髷ナデ。D. 石英、白色粒、雲母。E. 内外一褐色。F. 完形。G. 底部外面に黒斑あり。H. 住居南側壁面。
6	坏	A. 口縁部径 12.3、器高 3.3。B. 粘土組積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面下半ケズリ後上位ヨコナデ、内面髷ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一褐色。F. 完形。G. 底部外面黒斑あり。H. 床面付近。
7	坏	A. 口縁部径 11.2、器高 3.9。B. 粘土組積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後上位ヨコナデ、内面髷ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
8	坏	A. 口縁部径 (11.0)、器高 3.1。B. 粘土組積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面下半ケズリ後上位ヨコナデ、内面髷ナデ。D. 角閃石。E. 内外一褐色。F. 1/2。G. 外面やや摩耗。H. 覆土中。
9	須 恵 器 坏	A. 底部径 9.4。B. ロケロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。D. 石英、片岩粒。E. 内外一黄灰色。F. 底部 2/3。G. 内面朱黒。還元焼成。H. 覆土中。
10	埴 輪	B. 粘土組積み上げ。C. 外面ハケ。内面指ナデ。D. 角閃石、石英、片岩粒。E. 内外一褐色。F. 破片。H. 覆土中。
11	甕	B. 粘土組積み上げ。C. 外面頸部帯環状文の後口縁部帯環状文、内面ヨコナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一にぶい褐色、内一灰黄褐色。F. 口縁部破片。G. 弥生時代後期様式。H. 覆土中。

第214号住居跡（第85図、図版14）

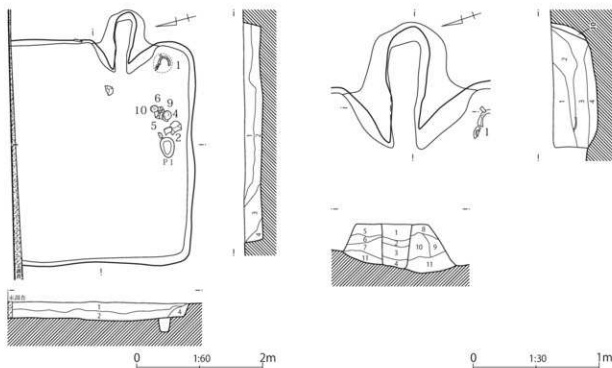
G地点の調査区中央部の北東端に位置する。住居跡の北側は調査区外にあるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が3.60m、南北方向は2.95mまで測れる。住居跡の主軸方向は、N-106°-Eを向いている。

壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。検出された各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、1カ所検出されている。P1は、住居南側壁際中央にあり、位置的には入口部の梯子穴の可能性も考えられる。径34cm×23cmの楕円形を呈し、床面からの深さは24cmある。

カマドは、住居東側壁の南東側コーナー部寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、残存長105cm、最大幅103cmある。燃焼部は、住居の壁を47cm程度掘り込んでいる。燃焼部底面は、カマド第4層上面付近と推測され、住居の床とほぼ同じ高さで水平に作られている。奥壁は、直線的に傾斜して立ち上がっている。袖は、ロームブロックを含む暗褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡南側壁際中央の床面付近から、奈良時代前半頃の土器がまとまって出土している。本住居跡の時期は、出土遺物の様相から、奈良時代前半頃と考えられる。



第85図 第214号住居跡

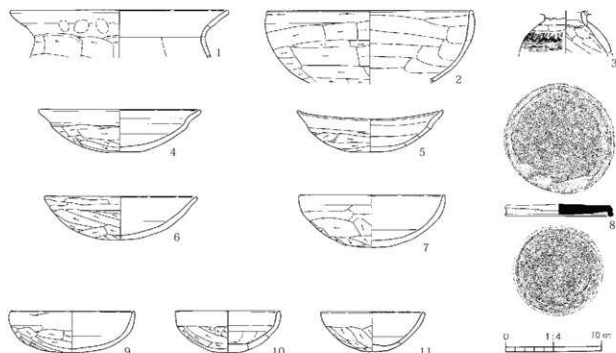
第214号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・炭化物を少量含む。）

- 第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・炭化物を多量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロックを多量、径0.5～0.8cmの炭化物を少量含む。）
 第4層：褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを微量含む。）

第214号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を多量、ロームブロックを少量、径0.5～1cmの焼土ブロックを微量含む。）
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量、ロームブロックを少量、径5cmの炭化物を微量含む。）
 第4層：褐色土層（ローム粒子・焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）
 第5層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
 第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。）
 第7層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・暗褐色土を少量含む。）
 第8層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量、ロームブロック・暗褐色土を少量含む。）
 第9層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロック・焼土ブロックを少量含む。）
 第10層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を多量、焼土ブロックを少量、ロームブロックを微量含む。）
 第11層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）



第86図 第214号住居跡出土遺物

第31表 第214号住居跡出土遺物観察表

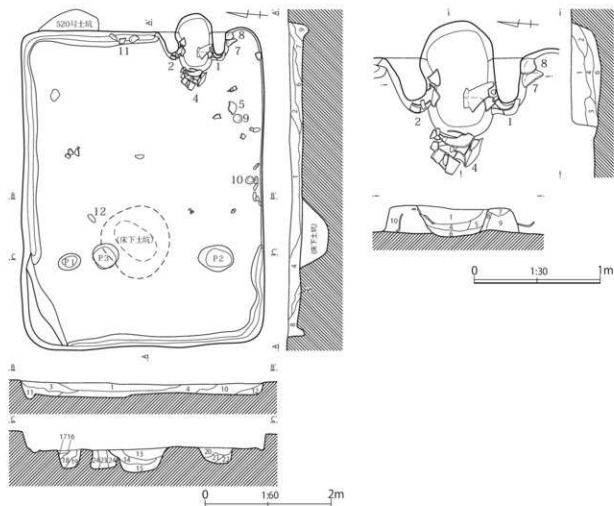
1	長胴甕	A. 口縁部径 23.2. B. 粘土細積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ケズリ, 内面跽ナデ. D. 角閃石, 白色粒, 石英. E. 内外一橙色. F. 口縁部のみ. G. 口縁部外面に指頭圧痕を残す. 口縁部内面に黒炭あり. H. 床面直上.
2	鉢	A. 口縁部径 (21.8). B. 粘土細積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ナデ後ケズリ, 内面ナデ. D. 角閃石, 石英, 白色粒. E. 外一にふい橙色, 内一橙色. F. 口縁部1/2. G. 内外面黒炭あり. H. 床面直上.
3	二重口縁甕	B. 粘土細積み上げ. C. 頸部内外面ヨコナデ. 胴部上位外面ヨコナデ後文様施文, 内面指ナデ. 胴部中位外面ミガキ. D. 片岩粒, 角閃石, 石英. E. 内外一にふい赤褐色. F. 頸部～胴部上半破片. G. 頸部外面に工具の当たり痕を残す. H. 覆土中.
4	坏	A. 口縁部径 17.2. 器高 4.6. B. 粘土細積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ, 内面跽ナデ. D. 石英, 角閃石, 白色粒. E. 内外一橙色. F. 完形. G. 内外面黒炭あり. H. 床面直上.
5	坏	A. 口縁部径 15.4. 器高 4.4. B. 粘土細積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ, 内面跽ナデ. D. 角閃石, 石英, 白色粒. E. 内外一橙色. F. 完形. G. 口縁部内外面黒炭あり. 歪み激しい. H. 床面直上.

6	環	A. 口縁部径 16.2、器高 4.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面甃ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一橙色。F. ほぼ完形。G. 口縁部外面黒斑あり。H. 床面直上。
7	環	A. 口縁部径 15.4、器高 5.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位ヨコナデ後下位ケズリ、内面甃ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒、チャート。E. 内外一にふい橙色。F. 2/3。H. カマド内。
8	転用 甕	A. 底部径 11.4。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転甃ケズリ。D. 石英、片岩粒。E. 内外一灰色。F. 底部のみ。G. 還元焙焼成。底部内面はよく摺れている。須臾器高台付環を甕に転用。H. 覆土中。
9	環	A. 口縁部径 13.0、器高 4.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヨコナデ後下位ケズリ、内面甃ナデ。D. 石英、角閃石。E. 内外一橙色。F. 完形。G. 口縁部内面に煤付着。H. 床面直上。
10	環	A. 口縁部径 11.0、器高 4.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一橙色。F. ほぼ完形。H. 床面付近。
11	環	A. 口縁部径 11.0、器高 4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面甃ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一橙色。F. 3/5。H. 覆土中。

第 215 号住居跡 (第 87 図、図版 15)

G 地点の調査区中央部の北東側に位置する。重複する第 520 号土坑に切られている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ整った隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が 4.96 m、南北方向が 3.84 m を測る。住居跡の主軸方向は、N-85°-E を向いている。



第 87 図 第 215 号住居跡

第 215 号住居跡土層説明

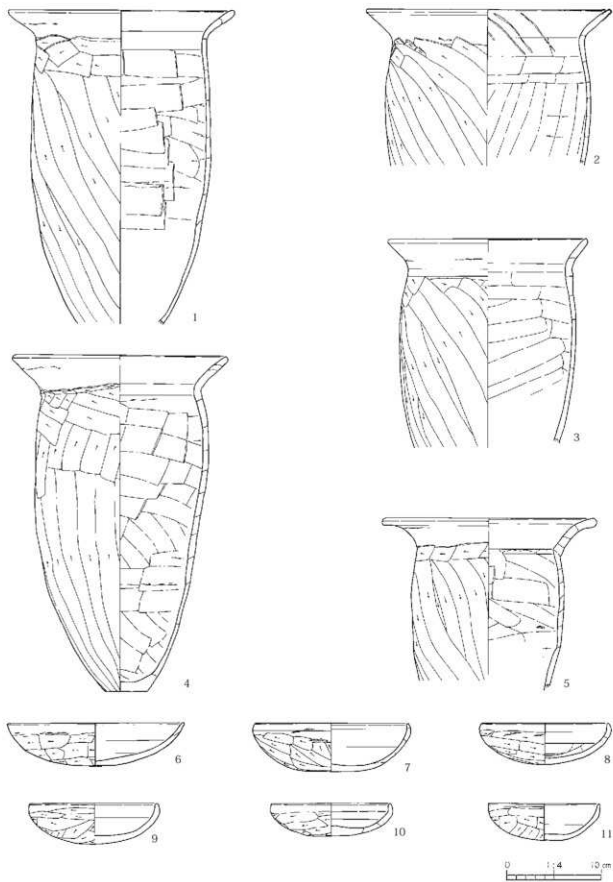
- 第1層：暗褐色土層(径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。)
- 第2層：暗褐色土層(径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)
- 第3層：暗褐色土層(径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)
- 第4層：暗褐色土層(径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。)
- 第5層：黄褐色土層(径1～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。)
- 第6層：暗褐色土層(径1～2cmの灰褐色粘土ブロックを多量、径1cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第7層：暗褐色土層(ローム粒子・径1cmの灰褐色粘土ブロックを少量、焼土粒子を微量含む。)
- 第8層：暗褐色土層(径0.5cmのロームブロックを多量、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。)
- 第9層：黒褐色土層(ローム粒子を微量含む。)
- 第10層：黒褐色土層(径0.5～1cmのロームブロックを多量、暗褐色土を少量含む。)
- 第11層：暗褐色土層(径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)
- 第12層：暗褐色土層(径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)
- 第13層：暗褐色土層(径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)
- 第14層：黒褐色土層(径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)
- 第15層：暗褐色土層(ローム粒子を多量、径2～5cmのロームブロックを中量、黒褐色土を少量含む。)
- 第16層：黄褐色土層(径0.5cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。)
- 第17層：黄褐色土層(ローム粒子を主体とする。)
- 第18層：黄褐色土層(ローム粒子・暗褐色土を多量含む。)
- 第19層：黄褐色土層(径2cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を多量含む。)
- 第20層：暗褐色土層(ローム粒子を多量、径2cmのロームブロック・黒褐色土を少量含む。)
- 第21層：暗褐色土層(ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを少量、黒褐色土を微量含む。)
- 第22層：暗褐色土層(径2～4cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。)
- 第23層：黄褐色土層(径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を微量含む。)
- 第24層：黒褐色土層(径2～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。)

第 215 号住居跡カマド土層説明

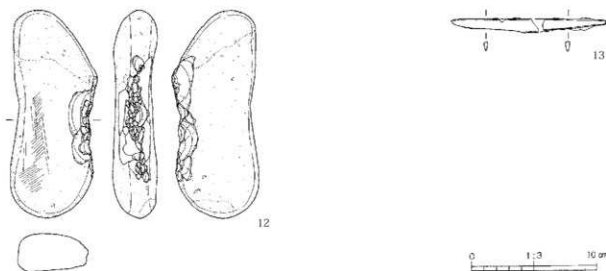
- 第1層：灰褐色粘土層(ローム粒子を少量、焼土粒子・黒褐色土を微量含む。)
- 第2層：黒褐色土層(径1～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、灰褐色粘土粒子を少量含む。)
- 第3層：黒褐色土層(灰褐色粘土粒子を主体に、径1cmのロームブロック・径1cmの焼土ブロックを微量含む。)
- 第4層：黒褐色土層(径2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。)
- 第5層：灰褐色粘土層(第1層に似るが、径2cmのロームブロックを少量含む。)
- 第6層：黒褐色土層(第4層に似るが、焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。)
- 第7層：暗褐色土層
- 第8層：赤褐色土層(焼土ブロック・焼土粒子を主体に、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。)
- 第9層：暗褐色土層
- 第10層：黄褐色土層(ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・黄灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子・黒褐色土を少量含む。)

壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは28cmある。各壁の壁下には、壁溝が巡っているが、南側壁の東側半分には見られない。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く縮まっている。ピットは、3カ所検出されている。P1とP2は、住居のほぼ対角線上に位置することから、住居の上屋を支える主柱の柱穴の可能性が考えられる。長軸が37cmと56cmの楕円形を呈し、床面からの深さは25cmと30cmある。P3は、P1の南側に近接してあり、床下土坑に切られている。径40cmの円形を呈し、床面からの深さは35cmある。住居中央部の西側寄りには、性格不明の床下土坑がある。104cm×111cmの不整円形を呈し、床面からの深さは35cmある。埋土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。

カマドは、住居東側壁の南東側コーナー部寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、残存長91cm、最大幅120cmある。燃焼部は、住居の壁を28cm程度掘り込んでいる。燃



第 88 图 第 215 号住居跡出土遺物 (1)



第 89 図 第 215 号住居跡出土遺物 (2)

焼部底面は、住居の床面よりも若干低くほぼ水平に作られている。奥壁は、直線的に傾斜して立ち上がっている。袖は、ロームブロックを含む黄褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。右側袖の内面は、よく焼けて赤色化している。両袖の先端には、No 1 と No 2 の土師器の裏を伏せて補強している。カマド焚口部付近の床面上からは、No 3 の土師器裏が横転した状態で出土しているが、その出土状態から焚口部天井の補強に使用していたものが、天井部の崩壊に伴って落下した可能性もある。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居南側壁際の床面付近から、白鳳時代を主体とする土師器の裏や坏が多く出土しており、良好な一括資料と言える。土器以外では、敲き石 (No12) や鉄製品の刀子 (No13) が、覆土中から出土している。

本住居跡の時期は、出土遺物の様相から、白鳳時代と考えられる。

第 32 表 第 215 号住居跡出土遺物観察表

1	長 胴 甕	A. 口縁部径 (24.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面甕ナデ。底部外面ケズリ。D. 角四石。E. 内外一にぶい橙色。F. 口縁～胴部下位 1/3。G. 胴部下位内外面に黒斑あり。H. カマド右側袖先端。
2	長 胴 甕	A. 口縁部径 (26.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面甕ナデ。D. 雲母、石英。E. 内外一にぶい橙色。F. 口縁～胴部上位 1/4。G. 口縁部内面に工具の当たり痕。H. カマド左側袖先端。
3	長 胴 甕	A. 口縁部径 21.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角四石、石英、白色粒。E. 内外一にぶい橙色。F. 上半のみ。G. 胴部上位外面に煤付着。H. 覆土中。
4	長 胴 甕	A. 口縁部径 22.7。器高 35.7。底部径 4.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面甕ナデ。底部外面ケズリ。D. 石英、片岩粒。E. 外一にぶい橙色、内一橙色。F. 4/5。G. 胴部下位内外面に黒斑あり。H. カマド焚口部床面上。
5	長 胴 甕	A. 口縁部径 22.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面甕ナデ。D. 角四石、石英、白色粒。E. 外一橙色、内一にぶい橙色。F. 口縁～胴部上半 3/4。G. 内外面に黒斑あり。H. カマド内。
6	坏	A. 口縁部径 18.7。器高 4.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面甕ナデ。D. 雲母、白色粒。E. 内外一橙色。F. 3/5。G. 外面に粘土塊付着。H. 床面直上。
7	坏	A. 口縁部径 (16.2)。器高 5.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面甕ナデ。D. 角四石、石英。E. 内外一橙色。F. 1/2。G. 体部外面に黒斑あり。H. 床面直上。
8	坏	A. 口縁部径 (13.4)。器高 4.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面甕ナデ。D. 角四石、石英、白色粒。E. 内外一橙色。F. 3/5。H. 床面付近。
9	坏	A. 口縁部径 13.6。器高 4.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面甕ナデ。D. 角四石、石英、白色粒、黒色粒。E. 内外一橙色。F. ほぼ完形。G. 口縁部外面に煤付着。H. 床面直上。

10	環	A. 口縁部径 12.7、器高 3.5。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面髷ナデ。D. 石英、白色粒。E. 外一にぶい・棕色、内一にぶい・褐色。F. ほぼ完形。G. 内外面黒色処理。H. 床面直上。
11	環	A. 口縁部径 11.8、器高 3.9。B. 粘土紐積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面髷ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一にぶい・棕色。F. 4/5。G. 内面黒色処理。H. 床面付近。
12	巖石	A. 長 16.4、最大幅 6.9、最大厚 3.5、重さ 521.68g。C. 右側面に剝離痕と敲打痕。D. 流紋岩。F. 完形。G. 表面の一部に摩擦痕あり。H. 覆土中。
13	鉄製品 刀	A. 最大幅 1.2、最大厚 0.3、重さ 8.44g。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 4/5。H. 覆土中。

第 216 号住居跡 (第 90 図、図版 15)

G地点の調査区中央部の北東側に位置する。重複する第 217 号住居跡に切られ、第 209 号住居跡を切っている。本住居跡の西側半分は、後世の耕作によって住居の床面下まで削平されているため、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向は 3.20 m 程度、南北方向は 3.70 m 程度と推測される。住居跡の主軸方向は、N-72°-E を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 3 cm ある。残存する壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に薄く埋め戻した貼床式で、住居中央部は堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは、2ヶ所検出されているが、本住居跡と関係するものか不明である。

カマドは、住居東側壁の南東側コーナー部寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、残存長 104cm、幅は 80cm まで測れる。燃焼部は、住居の壁を 60cm 程度掘り込んで作られている。燃焼部底面は、住居の床面とほぼ同じ高さで若干傾斜しており、奥壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。袖は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。内面は、あまり焼けていない。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、白鳳時代と考えられる。

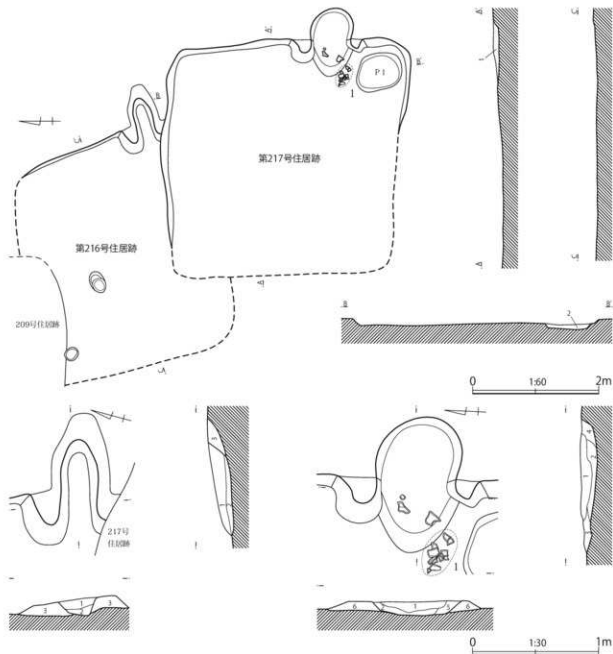
第 217 号住居跡 (第 90 図、図版 15)

G地点の調査区中央部の北東側に位置する。重複する第 216 号住居跡を切っている。本住居跡の西側半分は、後世の耕作によって住居の床面下まで削平されるため、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向は 3.80 m 程度、南北方向は 3.95 m 程度と推測される。住居跡の主軸方向は、N-90°-E を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは 13cm ある。残存する壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に薄く埋め戻した貼床式で、住居中央部は堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。

カマドは、住居東側壁の南東側コーナー部寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されて



第90図 第216・217号住居跡

第216・217号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、黒褐色土を微量含む。）

第216号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロック・径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量、炭化物を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径2～3cmのロームブロック・径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量、炭化物を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）

第217号住居跡カマド土層説明

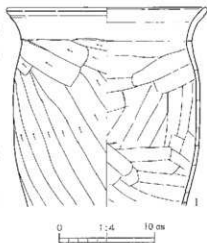
第1層：暗灰褐色土層（灰褐色粘土粒子多量、径1～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を中量、ローム粒子を少量含む。）

- 第2層：暗褐色土層（灰褐色粘土粒子を多量、径1cmのロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
 第3層：暗灰褐色土層（灰褐色粘土粒子を多量、ローム粒子を少量含む。しまりを有する。）
 第4層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を多量含む。）
 第5層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第6層：暗褐色土層（灰褐色粘土ブロック・ロームブロックを均一に含む。）

いる。規模は、残存長110cm、最大幅128cmを測る。燃烧部は、住居の壁を50cm掘り込み、内面はあまり焼けていない。燃烧部底面は、住居の床面より一段低くほぼ水平に作られ、奥壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。袖は、灰褐色粘土やロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内やその周辺の床面上から、土器の破片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、白鳳時代と考えられる。



第91図 第217号住居跡出土遺物

第33表 第217号住居跡出土遺物観察表

1	長	副	表
A. 口縁部径(21.2)。B. 粘土層積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面クズリ、内面窪ナデ。D. 石英、角閃石、白色粘、片岩粒。E. 外-にぶい褐色、内-にぶい褐色。F. 1/3。G. 胴部外面下半に煤付着。H. 床面直上。			

第218号住居跡（第92図、図版16）

G地点の調査区中央部の北東側に位置する。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

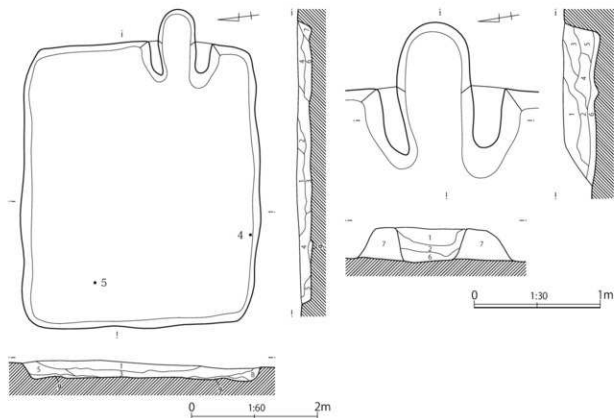
平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が4.44m、南北方向が3.76mを測る。住居跡の主軸方向は、N-96°-Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは27cmある。残存する壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗褐色土を平坦に薄く埋め戻した貼床式で、全体的にやや軟弱である。

カマドは、住居東側壁の南東側コーナー部寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、残存長116cm、最大幅122cmを測る。燃烧部は、住居の壁を50cm掘り込み、内面はあまり焼けていない。燃烧部底面は、住居の床面とほぼ同じ高さでほぼ水平に作られ、奥壁は直線的に傾斜して立ち上がっている。袖は、灰褐色粘土ブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居跡の覆土中から、白鳳時代を主体とする須恵器(No 1・2)や土師器(No 3～5)の破片が少量出土しており、その他に縄文時代後期堀の内式の土器片(No 7)、弥生時代後期の甕の破片(No 9・10)、古墳時代前期の二重口緑壺の破片(No 8)、及び縄文時代の石鉄の未成品と推測される頁岩製の小形の石器(No 6)などが出土している(第93図)。

本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土土器の様相から、白鳳時代末頃と考えられる。



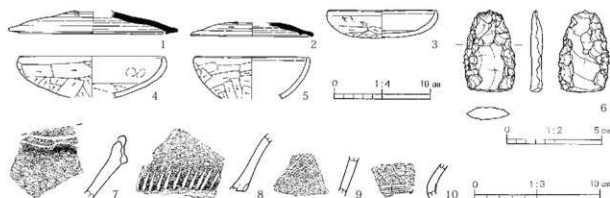
第92図 第218号住居跡

第218号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径1cmの焼土ブロックを少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第6層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・径1cmの灰色粘土ブロックを多量、径1～2cmの焼土ブロック・黒褐色土を少量含む。）
 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・灰色粘土粒子を少量含む。）
 第8層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第9層：褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を中量、焼土粒子を少量含む。）

第218号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土ブロック・焼土粒子・炭化物を微量含む。）
 第2層：黒褐色土層（径2～4cmの灰色粘土ブロックを多量、径1～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を中量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第3層：黒褐色土層（径1～2cmの焼土ブロック・灰色粘土粒子を多量、炭化粒子を少量、径1cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）
 第4層：黒褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）
 第6層：赤褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子・黒褐色土を多量含む。）
 第7層：暗褐色土層（灰色粘土ブロック・ロームブロックを均一に、ローム粒子を微量含む。）



第 93 図 第 218 号住居跡出土遺物

第 34 表 第 218 号住居跡出土遺物観察表

1	須 罎 蓋	A. 口縁部径(18.0)。B. ロクロ成形。C. 外面回転ナデの後天井部回転ケズリ、内面回転ナデ。D. 石英。E. 内外一黄灰色。F. 1/6。G. 還元焙焼成。H. 覆土中。
2	須 罎 蓋	A. 口縁部径(13.0)。B. ロクロ成形。C. 外面回転ナデの後天井部回転ケズリ、内面回転ナデ。D. 石英。E. 内外一灰白色。F. 1/4。G. 還元焙焼成。H. 覆土中。
3	罎	A. 口縁部径(11.4)。器高2.9。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D. 石英、角閃石、白色粒。E. 内外一橙色。F. 2/5。H. 覆土中。
4	罎	A. 口縁部径(15.2)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、雲母。E. 内外一深い橙色。F. 口縁～体部1/3。G. 体部内面に指頭圧痕を残す。H. 床面付近。
5	罎	A. 口縁部径(12.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面鈍ナデ。D. 角閃石、石英。E. 内外一深い橙色。F. 口縁～体部2/5。G. 体部内面に斑点状剥落あり。H. 床面直上。
6	石 器 石鏝未成品	A. 長さ4.3、最大幅2.7、最大厚0.65、重さ9.11g。C. 二側縁に両面加工。D. 頁岩。F. 完形。H. 覆土中。
7	深 鉢	B. 粘土組織み上げ。C. 外面口縁部に沿って2条沈線後山形の小さく起付、内面ミガキ。D. 角閃石、片岩粒、石英、チャート。E. 外一灰黄褐色、内一褐色。F. 口縁部破片。G. 波状口縁。縄文時代後期～内式。H. 覆土中。
8	二重口縁罎	B. 粘土組織み上げ。C. 二重口縁部外面ヨコナデの後下端にキザミ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、黒色粒、石英。E. 外一浅黄褐色、内一灰黄褐色。F. 口縁部破片。G. 内面に黒斑あり。古墳時代前期。H. 覆土中。
9	甕	B. 粘土組織み上げ。C. 外面ナデの後縁指波状文、内面ナデ。D. 白色粒、石英。E. 内外一灰褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代後期式。H. 覆土中。
10	甕	B. 粘土組織み上げ。C. 頸部外面3連止帯縞波状文を備え後にミガキ、内面ミガキ。D. 角閃石。E. 外一深い黄褐色、内一深い橙色。F. 頸部破片。G. 口縁部内外面に赤彩を施す。弥生時代後期式。H. 覆土中。

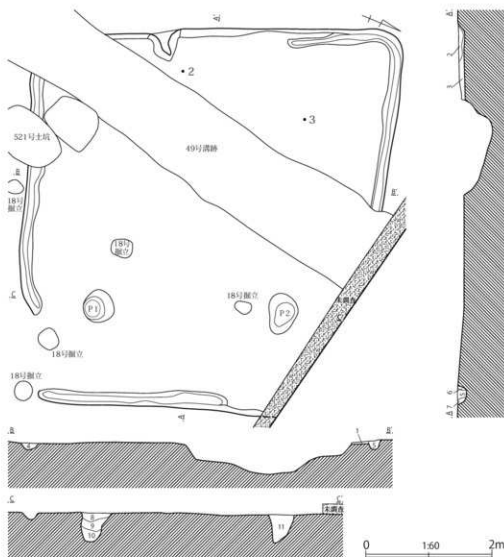
第 219 号住居跡 (第 94 図、図版 16)

G地点の調査区東側の北端に位置する。重複する第18号掘立柱建物跡・第521号土坑・第49号溝跡に切られている。本住居跡は、床面近くまで後世の耕作によって掘平されており、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形を呈している。規模は、東西方向が6.08m、南方方向が5.90mを測る。住居跡の主軸方向は、N-112°-Wを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは8cmある。各壁の壁下には、壁溝が途切れながら巡っている。床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を平坦に薄く埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、2カ所検出されている。P1とP2は、住居のほぼ対角線上に配置されることから、住居の上屋を支える支柱の柱穴の可能性が高い。50cm～65cmの円形や楕円形を呈し、床面からの深さはいずれも45cmある。

カマドは、住居西側壁の中央やや南西側コーナー部寄りに位置する。検出されたのは、カマドの左



第94図 第219号住居跡

第219号住居跡土層説明

第1層：土層説明なし。

第2層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を多量、径1cmのV層土ブロックを少量含む。）

第3層：暗褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を中量、径1cmのV層土ブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）

第4層：黄褐色土層（径3cmのロームブロックを主体に、暗褐色土を多量含む。）

第5層：黄褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を多量、焼土粒子を微量含む。）

第6層：黄褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を主体とする。）

第7層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、黒褐色土を微量含む。）

第8層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）

第9層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を多量、V層土粒子を少量、小礫を微量含む。）

第10層：暗褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子・V層土を多量含む。）

第11層：黄褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子・V層土粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）

側袖だけであるため、カマドの全容は不明である、

遺物は、古墳時代後期を主体とする土器の破片が、住居跡の覆土中から少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第95図 第219号住居跡出土遺物

第35表 第219号住居跡出土遺物観察表

1	壺	A. 口縁部径 16.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。D. 角閃石、白色粒、石英。E. 内外一橙色。F. 口縁部～頸部 1/4。G. 内面粘土付着。H. 覆土中。
2	鉢	A. 口縁部径 12.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、雲母。E. 外一にふい橙色、内一橙色。F. 口縁部～体部下位 4/5。G. 体部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
3	模倣 坏	A. 口縁部径 11.7。器高 4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一橙色。F. 完形。G. 口縁部外面に斑点状剥落あり。H. 覆土中。

第220号住居跡 (第96図、図版16)

G地点の調査区東側の北西側に位置する。重複する第49・52号溝跡に切られている。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を基調にしている。規模は、東西方向が4.39m、南北方向が3.84mを測る。住居跡の主軸方向は、N-200°-Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは26cmある。各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。ピットは4カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。64cm×63cmの隅丸長方形を呈し、床面からの深さは10cmある。P2は、住居の対角線上に位置することから、住居の上屋を支える4本主柱を構成する柱穴の一部の可能性が考えられる。58cm×40cmの楕円形を呈し、床面からの深さは15cmある。P3とP4は、いずれも土坑状の形態で、それぞれ住居の南側壁と西側壁の壁際に位置している。

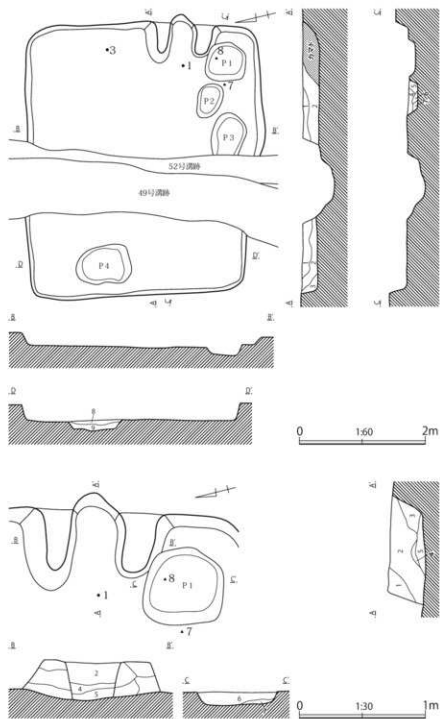
カマドは、住居東側壁の南東側コーナー部寄りに位置し、住居の壁を若干掘り込んで直角に付設されている。規模は、残存長78cm、最大幅125cmを測る。燃焼部は、住居の壁を15cm掘り込み、内面はあまり焼けていない。燃焼部底面は、住居の床面とほぼ同じ高さでほぼ水平に作られ、奥壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。袖は、灰褐色粘土ブロックとロームブロックを含む暗褐色土を、住居の壁に直接貼り付けて構築している。煙道部は、すでに削平されているため不明である。

遺物は、住居跡西側の覆土中から、古墳時代～白鳳時代の土器の破片が出土している。土器以外では、覆土中から羽口の破片(No 6)や長さ10cm程度の鉄滓(No 7・8)が出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、白鳳時代と考えられる。

第36表 第220号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口縁部径 14.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一橙色。F. 口縁部 1/4。H. 覆土中。
2	坏	A. 口縁部径 12.0。器高 4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石。E. 外一にふい黄褐色、内一橙色。F. 1/4。G. 体部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
3	須 恵 器 壁	A. 口縁部径 27.0。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。体部外面下端回転ケズリ。D. 石英。E. 外一灰白色、内一黄灰色。F. 口縁部破片。G. 還元焼成。H. 覆土中。



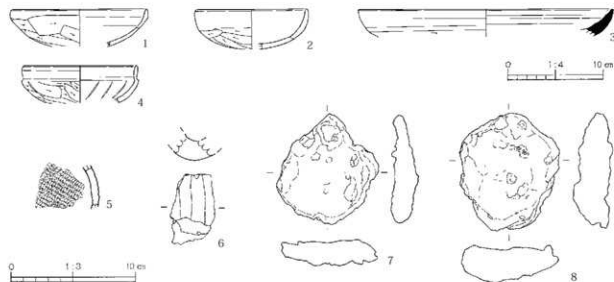
第96図 第220号住居跡

第220号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を多量含む。）
- 第4層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
- 第5層：黄褐色土層（ローム粒子を多量、径1cmのロームブロックを中量、黒褐色土を少量含む。）
- 第6層：黄褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、小礫を少量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～2cmのロームブロックを中量、黒褐色土を少量含む。）
- 第9層：黄褐色土層（ローム粒子・V層土粒子を多量、径3cmのロームブロックを中量、小礫を少量含む。）

第220号住居跡カマド・貯蔵穴土層説明

- 第1層：暗褐色土層（白色粒子を多量、径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径1～3cmの灰褐色粘土ブロック・灰褐色粘土粒子の混合土を主体に、径1cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
- 第3層：黒褐色土層（焼土粒子を少量、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・炭化物を微量含む。）
- 第4層：赤褐色土層（径0.5～1cmの焼土ブロック・焼土粒子の混合土を主体に、灰褐色粘土を少量含む。）
- 第5層：黒褐色土層（灰褐色粘土を少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第7層：黄褐色土層（ローム粒子・灰褐色粘土粒子の混合土。）
- カマド袖：土層説明なし。



第97図 第220号住居跡出土遺物

4	環	A. 口縁部径 12.2. B. 粘土粗積み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 体部外面ケズリ、内面髷ナデ. D. 角閃石. E. 外一にふい橙色、内一橙色. F. 口縁部 1/3. H. 覆土中.
5	甕	B. 粘土粗積み上げ. C. 胴部外面 LR 単節縄文施文、内面指ナデ. D. 白色粒. E. 外一にふい橙色、内一橙色. F. 胴部破片. H. 覆土中.
6	羽口	A. 厚さ 1.5. B. 手程ね. C. ナデ. D. 角閃石、白色粒. E. 外一橙色、内一明赤褐色. F. 破片. G. 先端部ガラス化. H. 覆土中.
7	鉄滓	A. 長さ 8.8. 幅 8.2. 厚 2.1. 重さ 152.57g. F. 完形. G. 鉄分を含む. H. 覆土中.
8	鉄滓	A. 長さ 9.5. 幅 8.0. 厚 2.7. 重さ 277.82g. F. 完形. G. 鉄分を含む. H. P 1 上面.

第221号住居跡 (第98図、図版16)

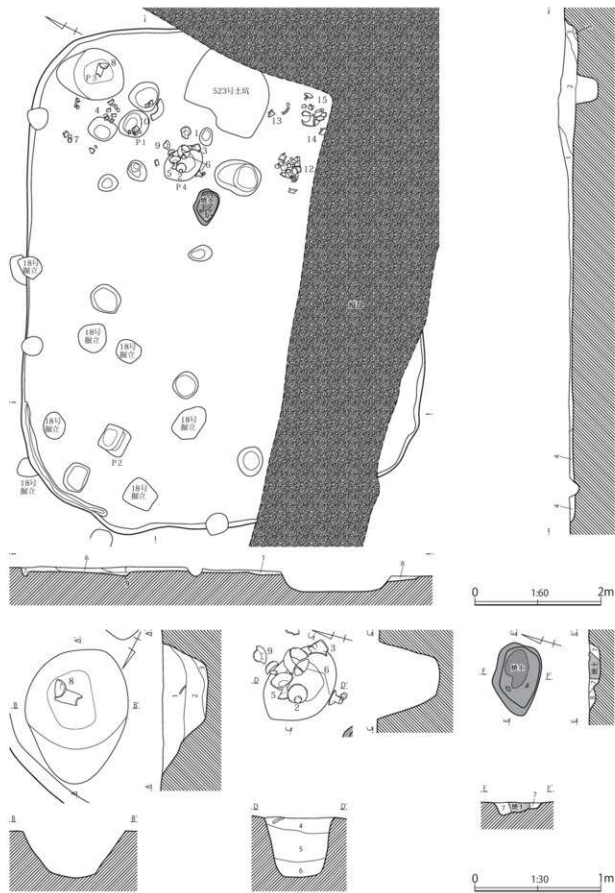
G地点の調査区東側の北側寄りに位置する。重複する第18号掘立柱建物跡と第523号土坑に切られている。住居跡の東側壁と南側の一部を、後世の攪乱によって壊され、住居跡の上面は床面近くまで削平されており、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、北東～南西方向が7.84 m、北西～南東方向が6.30 mを測る。住居跡の主軸方向は、N-64°-Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。住居北西側コーナー部の壁下には、壁溝が見られる。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。住居に関係すると思われるピットは、4カ所検出されている。P1とP2は、住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱を構成する支柱穴の一部と考えられる。50cm×40cm程度の楕円形を呈し、床面からの深さは35cm前後ある。P3は、住居北東側コーナー部に位置することから、いわゆる貯蔵穴と考えられる。107cm×80cmの楕円形を呈し、床面からの深さは36cmある。P4は、炉の北東側に位置する。70cm×48cm程度の楕円形を呈し、床面からの深さは46cmある。P4内からは古墳時代中期の高環や甕などが出土している。

炉は、住居中央部の東側寄りに位置する。住居の床面を8cm程度掘り窪めた地皿炉で、58cm×36cmの楕円形ぎみの形態を呈している。内部はよく焼けて赤色化している。

遺物は、住居跡東側の覆土中より、古墳時代中期後半と後期後半の土器が多く出土している(第99



第98图 第221号住居迹

第 221 号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子・径4cmの灰褐色粘土ブロック・小礫を微量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・径1～2cmの黒褐色粘土ブロックを多量、灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を多量含む。）
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～2cmのロームブロックを少量含む。）
 第7層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・黒褐色土を多量、径1cmのV層土ブロックを少量含む。）
 第8層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）
 第9層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を多量含む。）

第 221 号住居跡貯蔵穴・炉跡土層説明

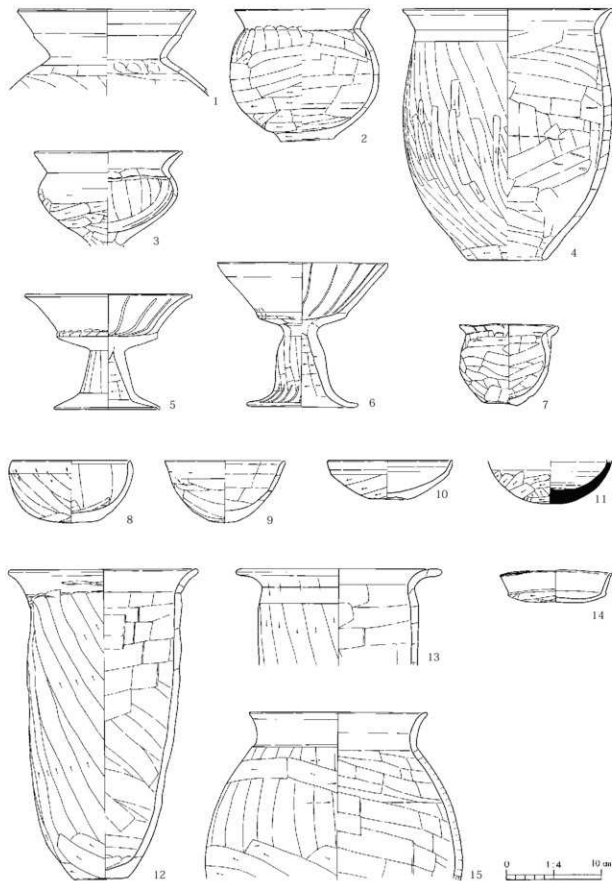
- 第1層：黒褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物・V層土粒子を微量含む。）
 第2層：黄褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）
 第3層：黄褐色土層（V層土を主体に、黒褐色土を少量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）
 第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第6層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子・V層土粒子を多量含む。）
 第7層：黒褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径1cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）
 第8層：黒褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

図)。これらの遺物は、本住居跡の形態から推測される住居の時期と合わない遺物と考えられ、本住居跡廃絶後の混入品と思われる。

本住居跡の時期は、住居の形態から、古墳時代前期以前と考えられる。

第 37 表 第 221 号住居跡出土遺物観察表

1	二重口縁蓋	A. 口縁部径 18.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 口縁部 4/5。H. 覆土中。
2	小形甕	A. 口縁部径 14.2、器高 14.1、底部径 5.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上平ナデ、内面寛ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、角閃石、白色粒。E. 内外一黒褐色、内一にぶい赤褐色。F. 完形。G. 内外面に黒斑あり。H. P4 上面。
3	台付鉢	A. 口縁部径 15.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後に上位ヨコナデ、内面寛ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一褐色。F. 口縁～胴部 1/2。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
4	大形甕	A. 口縁部径 (22.3)、器高 26.7、底部径 8.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面寛ナデの後中細なケズリ、内面寛ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一赤褐色。F. 1/3。G. 胴部上位外面に黒斑あり。H. 覆土中。
5	高 環	A. 口縁部径 17.7、器高 12.2、脚端部径 (11.2)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後放射状暗文。環部内外面ナデ。脚柱部外面寛ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. ほぼ完形。G. 口縁部内外面に黒斑あり。H. P4 上面。
6	高 環	A. 口縁部径 18.0、器高 15.3、脚端部径 11.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後放射状暗文。環部内外面ナデ。脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部外面ヨコナデの後放射状暗文。内面ヨコナデ。D. 角閃石、片岩粒、白色粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. ほぼ完形。G. 口縁部と脚端部の外面に黒斑あり。H. P4 上面。
7	小形甕	A. 口縁部径 10.5、器高 8.6、底部径 3.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 完形。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
8	環	A. 口縁部径 12.5、器高 6.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面寛ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 完形。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
9	環	A. 口縁部径 12.7、器高 6.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面寛ナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 2/3。H. 覆土中。
10	環	A. 口縁部径 (13.2)、器高 4.2、底部径 4.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
11	須 恵 器 跡	B. ロウロ成形。C. 胴部縮ナデ後下半手持ち寛ケズリ、内面回転ナデ。D. 黒色粒。E. 外一灰白色、内一灰色。F. 底部 4/5。C. 還元焼成。H. 覆土中。



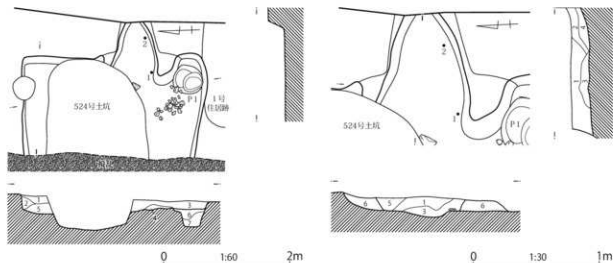
第99图 第221号住居跡出土遺物

12	長胴甕	A. 口縁部径20.2、器高32.7、底部径5.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一色。F. 5/6。G. 胴部外面下半部付着。H. 覆土中。
13	長胴甕	A. 口縁部径(21.8)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D. 角閃石、白色粒、片岩粒、石英。E. 内外一色。F. 口縁～胴部上位1/2。G. 胴部外面に黒炭あり。H. 覆土中。
14	横徹環	A. 口縁部径11.9、器高3.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、赤色粒。E. 内外一色。F. 4/5。G. 内外面摩擦痕著。H. 覆土中。
15	胴張甕	A. 口縁部径18.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ後部分的なケズリ、内面篋ナデ。D. 白色粒、角閃石、石英。E. 外一色、内一明赤褐色。F. 上半1/2。H. 覆土中。

第222号住居跡(第100図、図版17)

G地点の調査区東側の北東端に位置する。重複する第524号土坑に切られ、第1号住居跡を切っている。住居跡の西側半分は攪乱によって壊されているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸をもつ隅丸方形か隅丸長方形を基調にしていたと思われる。規模は、南北方向が2.98m、東西方向は1.63mまで測れる。住居跡の主軸方向は、N-91°-Eを向いている。



第100図 第222号住居跡

第222号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層(径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。)
- 第2層：暗褐色土層(径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。)
- 第3層：暗褐色土層(径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・黒褐色土を微量含む。)
- 第4層：黄褐色土層(径0.5～2cmのロームブロックを多量、黒褐色土を少量含む。しまりを有する。)
- 第5層：黄褐色土層(径2～4cmのロームブロックを多量、黒褐色土を少量含む。しまりを有する。)
- 第6層：黄褐色土層(径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。)
- 第7層：黄褐色土層(径2～5cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、黒褐色土を少量含む。)

第222号住居跡カマド土層説明

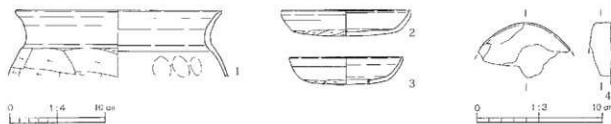
- 第1層：黄褐色土層(ローム粒子を多量、径1～2cmのロームブロックを中量、焼土粒子・黒褐色土を少量含む。)
- 第2層：黄褐色土層(ローム粒子を多量、径1～2cmのロームブロックを中量、焼土粒子を少量含む。)
- 第3層：暗褐色土層(径1～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、黒褐色土を少量、灰褐色土を微量含む。)
- 第4層：黒褐色土層(径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を多量含む。)
- 第5層：暗褐色土層(径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・黒褐色土を多量含む。)
- 第6層：カマド底。

壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、1カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。径45cm程度の円形を呈し、床面からの深さは28cmある。

カマドは、住居東側中央からやや南東側コーナー部に寄った位置に、壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、残存長100cm、残存幅148cmある。燃焼部は、住居の壁を54cm掘り込んでおり、内面はあまり焼けていない。燃焼部底面は、住居の床面と同じ高さでほぼ平坦に作られている。袖は、灰褐色粘土ブロックやロームブロックを含む暗灰褐色土を、燃焼部奥壁から廻して構築している。煙道部は、調査区外のため不明である。

遺物は、カマド内や住居跡の覆土中から、奈良時代末から平安時代前期前半頃の土器や円盤状の土製品の破片が少量出土している。土器以外では、P1手前の床面上から、長さ5cm前後の自然石が20個まとまって出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、平安時代前期前半頃と考えられる。



第101図 第222号住居跡出土遺物

第38表 第222号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径(22.0)。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗茶褐色、内一黒褐色。F. 口縁部1/4破片。G. 胴部内面に指頭圧痕を残す。H. カマド内。
2	坏	A. 口縁部径(13.8)、器底2.8、底部径(11.4)。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/5。H. カマド内。
3	坏	A. 口縁部径(12.0)。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 口縁部1/6破片。H. カマド内。
4	円盤状土製品	A. 直径(4.0)、厚さ1.7。B. 手捏ね。C. 表裏面・側面ともナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 1/4。H. 覆土中。

第223号住居跡(第102図、図版17)

G地点の調査区東側の中央付近に位置する。重複する第19・20号掘立柱建物跡や第53号溝跡に切られている。本住居跡は、住居の床面近くまで後世の耕作によって削平されているため、遺構の遺存状態は良好とは言えない。

平面形は、コーナー部が丸みをもつ隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向が2.16m、南北方向が3.00mを測る。住居跡の主軸方向は、N-90°-Eを向いている。

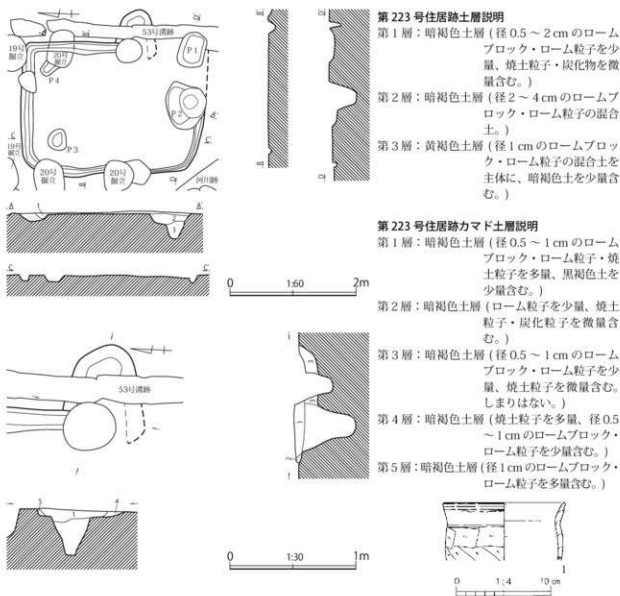
壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは4cmある。各壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、4カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、

カマド右側の住居南東側コーナー部に位置している。84cm × 58cmの隅丸長方形を呈し、床面からの深さは10cmある。P 2は、住居南側壁中央付近の壁際位置する。80cm × 66cmの楕円形の土坑状の形態を呈し、床面からの深さは45cmある。P 3とP 4は、住居の北東側と南西側のコーナー部に位置する。住居の上屋を支える主柱穴の可能性もあるが明確ではない。30cm程度の楕円形ぎみの形態で、床面からの深さは10cmある。

カマドは、住居東側壁の中央やや南東コーナー部寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、残存長78cm、最大幅66cmある。燃焼部は、住居の壁を50cm掘り込んでおり、内面はほとんど焼けていない。燃焼部底面は、住居の床面寄り若干低く皿状に作られている。袖や煙道部は、すでに掘平されているため不明である。

遺物は、カマド内や住居跡の覆土中より、古代の土器の破片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、奈良時代後半頃と考えられる。



第102図 第223号住居跡及び出土遺物

第39表 第223号住居跡出土遺物観察表

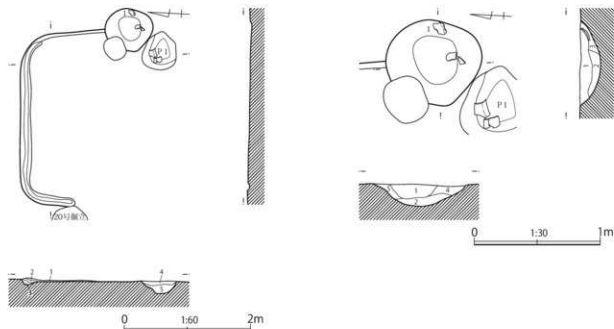
1	小形甕	A. 口縁部径(13.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部1/4強。H. カマド内。
---	-----	--

第224号住居跡(第103図、図版17)

G地点の調査区東側の中央付近に位置する。第20号掘立柱建物跡と接しているが、相互の新旧関係は不明である。本住居跡は、住居跡の南側半分はすでに後世の耕作によって破壊され、また住居跡の東側半分も床面間隙まで削平されているため、遺構の遺存状態は劣悪である。

平面形は、残存する部分とP1の貯蔵穴の位置から推測すると、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、東西方向が2.76m、南北方向は2.50mまで測れる。住居跡の主軸方向は、N-88°-Eを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは3cmある。住居の北側壁から西側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。ピットは、1ヵ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と



第103図 第224号住居跡

第224号住居跡土層説明

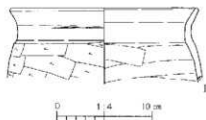
- 第1層: 暗褐色土層(径0.5~1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子微量含む。)
 第2層: 暗褐色土層(径1~3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。)
 第3層: 暗褐色土層(径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。)
 第4層: 暗褐色土層(ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。)
 第5層: 暗褐色土層(径0.5~1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)

第224号住居跡カマド土層説明

- 第1層: 暗褐色土層(径0.5~1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。)
 第2層: 暗褐色土層(径2~4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含む。)
 第3層: 暗褐色土層(径0.5~1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。)
 第4層: 暗褐色土層(径0.5~1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。)
 第5層: 暗褐色土層(径0.5~1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。)

呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部付近に位置するものと思われる。60cm × 55cmの不整形円形を呈し、床面からの深さは17cmある。

カマドは、住居東側壁に住居の壁を掘り込んで構築されている。規模は、残存長66cm、最大幅76cmある。燃烧部は、住居の壁を30cmほど掘り込んでいる。燃烧部底面は、カマド第2層上面付近と思われ、住居の床面よりも一段低くほぼ水平に作られている。袖や煙道部は、すでに掘平されているため不明である。



第104図 第224号住居跡出土遺物

遺物は、カマドや貯蔵穴内より、土器の破片が少量出土しただけである。

本住居跡の時期は、出土遺物の様相から、平安時代前期頃と考えられる。

第40表 第224号住居跡出土遺物観察表

1	炭	A. 口縁部径(20.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面艶ナデ。D. 白色粒。E. 内外一帯茶褐色。F. 口縁部1/4弱。H. カマド内。
---	---	--

第225号住居跡(第105図、図版17)

G地点の調査区中央東端に位置する。重複する第7号住居跡と第226号住居跡に切られている。残存するのは、住居跡の南東側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、不明である。規模は、南北方向は1.24mまで、東西方向は2.60mまで測れる。住居跡の東側壁は、N-3°-Wの方向を向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的にやや軟弱である。

遺物は、住居跡の覆土中から、土器の破片が少量出土しただけである。

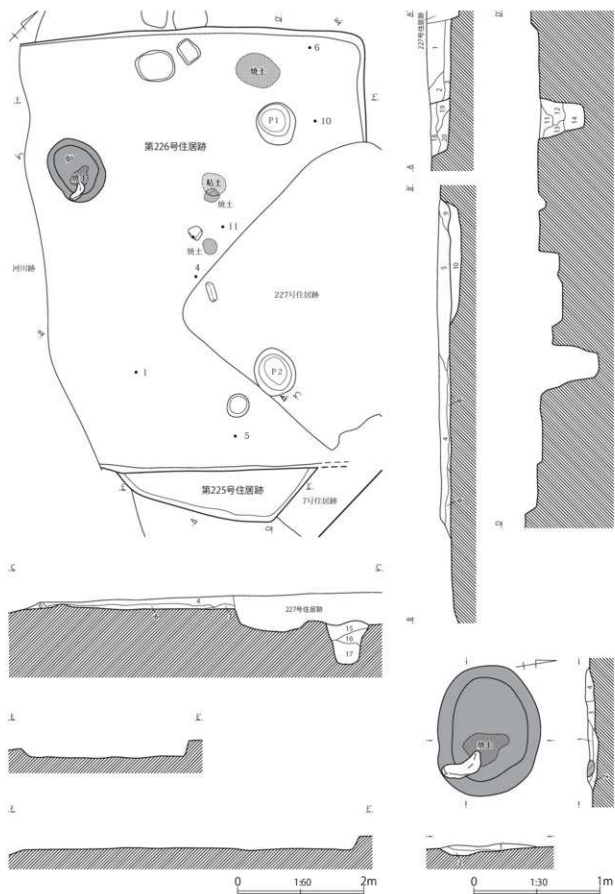
本住居跡の時期は、遺構の重複関係から、古墳時代前期と考えられる。

第226号住居跡(第105図、図版17)

G地点の調査区中央東端に位置する。重複する第7号住居跡と第227号住居跡に切られ、第225号住居跡を切っている。住居跡の南西側壁付近から南側コーナー部は、河川跡に切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形か隅丸長方形を呈していたと思われる。規模は、北西～南東方向が7.12m、北東～南西方向は5.58mまで測れる。住居跡の主軸方向は、N-46°-Wを向いている。

壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。残存する各壁の壁下には、壁溝は見られない。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的強く締まっているが、壁際の周辺部はやや軟弱である。住居の中央部から北西側の床面上には、焼土の分布が3ヶ所見られる。住居と関係すると思われるピットは、2ヶ所検出されている。P1とP2は、住居の対角線上に配置されていることから、住居の上屋を支える4本主柱を構成する



第105图 第225・226号住居跡

第 225・226 号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を中量、炭化物を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物・黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を多量、炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径1～2cmの灰褐色粘土ブロック・黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム粒子・灰白色粘土粒子を多量、焼土粒子を中量、径0.5cmのロームブロックを少量、炭化物を微量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を中量、焼土粒子を少量含む。しまり有する。）
- 第9層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）
- 第10層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物・黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第11層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・径1cmのV層土ブロックを少量含む。）
- 第12層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、黒褐色土を少量、炭化物を微量含む。）
- 第13層：暗褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第14層：暗褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、V層土粒子を少量含む。）
- 第15層：黄褐色土層（V層土粒子を多量、径2cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）
- 第16層：暗褐色土層（ローム粒子・V層土粒子を多量、径2～5cmのロームブロック・黒褐色土を少量含む。）
- 第17層：黄褐色土層（ローム粒子を多量、径3cmのロームブロック・暗褐色土・黒褐色土を少量含む。）
- 第18層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を多量、炭化粒子を微量含む。）
- 第19層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第20層：黄褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）

第 226 号住居跡炉跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・径2～4cmの灰褐色粘土ブロックを少量、炭化粒子を微量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロック・黒褐色土・灰褐色粘土を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第3層：黄褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土・白色粒子を少量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・灰褐色粘土を少量、白色粒子を微量含む。）

主柱の柱穴の一部と考えられる。長軸70cmと80cmの楕円形を呈し、床面からの深さは72cmと95cmある。

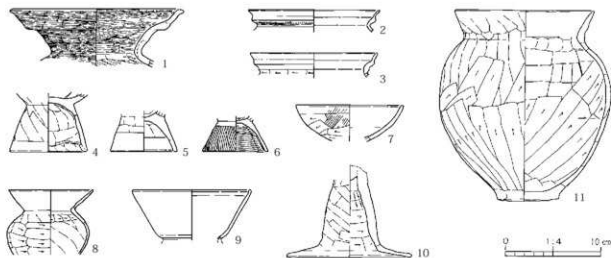
炉は、住居中央部の北西側寄りに位置する。住居の床面を6cm程度掘り下げた地皿炉で、105cm×84cmの楕円形を呈している。原位置からやや動いているが、炉の南東側に灰石をもち、内面の一部は焼けて赤色化している。

遺物は、住居跡南東側の覆土中から、古墳時代前期を主体とする土器の破片が多く出土している。

本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、古墳時代前期と考えられる。

第 41 表 第 226 号住居跡出土遺物観察表

1	二重口縁鉢	A. 口縁部径(18.5)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ミガキ。胴部外面ミガキ、内面タテハ後ナデ。D. 角四石、石英、チャート。E. 外一にふい、褐色、内一褐色。F. 口縁～胴部上位1/3。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
2	S字状口縁台付甕	A. 口縁部径(14.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D. 角四石、白色粒、石英。E. 内外一にふい、褐色。F. 口縁部1/5。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
3	S字状口縁台付甕	A. 口縁部径(13.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ。D. 角四石、白色粒、石英、片岩粒。E. 外一灰褐色、内一にふい、赤褐色。F. 口縁部1/5。G. 外面に黒斑あり。H. 覆土中。
4	S字状口縁台付甕	A. 台端部径8.3。B. 粘土組織み上げ。C. 台部外面ナデ、内面ナデ。D. 角四石、石英、白色粒。E. 外一灰褐色、内一灰黄褐色。F. 台部1/2。G. 台部内面に粘土付着。H. 覆土中。
5	台付甕	A. 台端部径7.1。B. 粘土組織み上げ。C. 台部内外面ナデ後下位ヨコナデ。D. 角四石、白色粒。E. 外一褐色、内一灰黄褐色。F. 台部のみ。G. 内面に粘土付着。H. 覆土中。
6	台付甕	A. 台端部径7.1。B. 粘土組織み上げ。C. 台部内外面ハケ。D. 角四石、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. 台部のみ。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。



第106図 第226号住居跡出土遺物

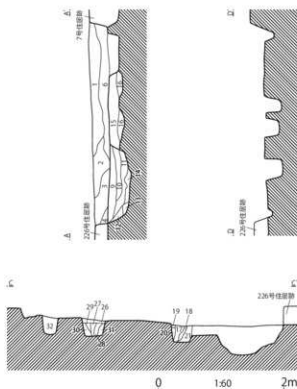
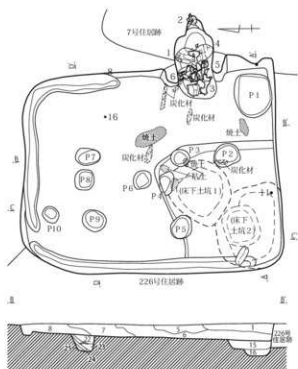
7	高 環	A. 口縁部径(11.5)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケ後雑なケズリ、内面荒ヨコナデ。D. 石英、白色粒。E. 外一にふい橙色、内一橙色。F. 口縁部1/5。G. 外面に黒炭あり。H. 覆土中。
8	小形 甕	A. 口縁部径(9.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ後ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 口縁部~胴部中位2/3。G. 胴部内外面に黒炭あり。H. 覆土中。
9	小形 浅鉢	A. 口縁部径(12.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。D. 角閃石、石英、片岩粒、赤色粒。E. 内外一橙色。F. 口縁部1/4。H. 覆土中。
10	高 環	A. 脚端部径13.2。B. 粘土組織み上げ。C. 脚柱部外面ケズリの後ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一橙色。F. 脚部のみ。G. 脚端部内面に黒炭あり。H. 覆土中。
11	平底 甕	A. 口縁部径(14.7)、器高20.2、底部径6.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ。胴部外面ナデ後下平ケズリ、内面ナデの後下平ケズリ。底部外面ケズリ。D. チャート、白色粒。E. 外一黒褐色、内一赤褐色。F. 4/5。G. 胴部外面煤付着。H. 床面付近。

第227号住居跡(第107図、図版18)

G地点の調査区中央東端に位置する。重複する第7号住居跡と第226号住居跡を切っている。

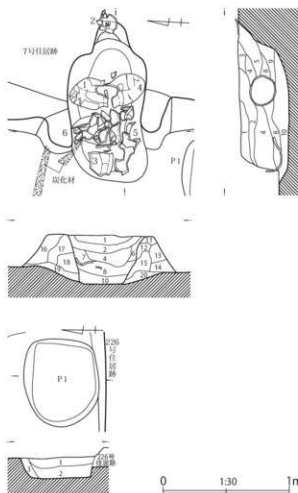
平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は東西方向が3.40 m、南北方向が4.14 mを測る。住居跡の主軸方向は、N-88°-Eを向いている。

壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは28cmある。住居東側壁の北側半分から北側壁及び西側壁の壁下には、壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を平坦に埋め戻した貼床式で、全体的に堅く締まっている。住居南西側の床下からは、2基の床下土坑が検出されている。この中の住居南西側コーナー部にある床下土坑2は、土坑の壁面から底面にかけて灰褐色粘土が不規則に見られることから、おそらく貯蔵目的で灰褐色粘土を充填していた床下粘土土坑と思われる。この粘土土坑の灰褐色粘土は、カマド袖等の構築材に使われた粘土と類似することから、カマドの再構築か、あるいは何かの製作に使用された後に、埋められた可能性が高いと思われる。ピットは、10カ所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、カマド右側の住居南東側コーナー部に位置する。68cm×60cmの不整形長方形を呈し、床面からの深さは18cmある。P2～P9は、住居中央部の西側半分にあり、長方形に囲う規則的な配置が窺えることから、何か住居内の構造物に関係するピットの可能性がある。長軸が30cm～40cmの楕円形を呈するものが多く、床面からの



第 227 号住居跡土層説明

- 第 1 層：黒褐色土層 (径 0.5～2 cm のロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を多量、灰褐色粘土粒子を少量含む。)
- 第 2 層：黒褐色土層 (径 1～3 cm の焼土ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を多量、径 0.5～1 cm のロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を少量、白色粒子を微量含む。)
- 第 3 層：黒褐色土層 (径 0.5～2 cm のロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。)
- 第 4 層：黒褐色土層 (径 0.5 cm のロームブロック・ローム粒子・径 0.5 cm の灰褐色粘土ブロックを少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。)
- 第 5 層：黒褐色土層 (径 0.5～2 cm のロームブロック・ローム粒子・灰褐色粘土を多量、径 0.5～3 cm の焼土ブロック・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含む。)
- 第 6 層：黒褐色土層 (灰褐色粘土を多量、径 0.5～2 cm のロームブロック・ローム粒子・径 0.5～2 cm の焼土ブロック・焼土粒子を中量、炭化粒子を少量、炭化物を微量含む。)
- 第 7 層：黒褐色土層 (径 1～3 cm のロームブロック・ローム粒子を多量、灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。)
- 第 8 層：黒褐色土層 (径 2～4 cm のロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量、炭化物を微量含む。)



第 107 図 第 227 号住居跡

- 第9層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。）
 第10層：暗褐色土層（径2～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第11層：暗褐色土層（径2～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第12層：暗褐色土層（灰褐色粘土を多量、ローム粒子を中量、径2cmのロームブロックを少量含む。）
 第13層：暗褐色土層（径3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第14層：暗褐色土層（灰褐色粘土を主体に、径2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第15層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第16層：暗褐色土層（V層土を主体に、焼土粒子を微量含む。）
 第17層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第18層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・径2cmのV層土ブロックを少量、炭化粒子を微量含む。）
 第19層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。しまりを有する。）
 第20層：暗褐色土層（ローム粒子・径2cmのV層土ブロックを多量、径2cmのロームブロックを少量、炭化粒子を微量含む。）
 第21層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。）
 第22層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を微量含む。）
 第23層：黒褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第24層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第25層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを少量含む。）
 第26層：暗褐色土層（径2～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。しまりを有する。）
 第27層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを中量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第28層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第29層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第30層：暗褐色土層（第3層に似る。）
 第31層：暗褐色土層（第4層に似る。）
 第32層：暗褐色土層（白色粒子を多量、径2～3cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）

第227号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径1cmの焼土ブロック・焼土粒子・径0.5～2cmの灰褐色粘土ブロックを多量、ローム粒子・炭化物を少量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径1～3cmの灰褐色粘土ブロックを多量、径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子を中量、径1cmのロームブロックを少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（焼土粒子を少量、ローム粒子・灰褐色粘土粒子を微量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を中量、炭化粒子を少量含む。）
 第5層：暗褐色土層（径1～3cmの焼土ブロックを多量、径2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）
 第6層：赤褐色土層（径0.5～4cmの焼土ブロック・焼土粒子の混合土を主体に、炭化物・黒褐色土を少量含む。）
 第7層：暗褐色土層（ローム粒子・径1～2cmの焼土ブロック・灰褐色粘土粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）
 第8層：黒褐色土層（径0.5～1cmの焼土ブロック・灰褐色粘土粒子を多量、炭化粒子を少量含む。）
 第9層：黒褐色土層（径1～2cmの焼土ブロックを多量、炭化粒子を少量含む。）
 第10層：黒褐色土層（径1～2cmの焼土ブロック・径1cmの灰褐色粘土ブロックを多量、径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第11層：暗褐色土層（径0.5～2cmの焼土ブロック・黒褐色土を多量、径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第12層：赤褐色土層（径0.5～2cmの焼土ブロックを多量、灰褐色粘土粒子を中量、黒褐色土を少量含む。）
 第13層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
 第14層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
 第15層：灰褐色粘土層（灰褐色粘土を主体に、黒褐色土を多量、径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第16層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・径1cmの炭化物を多量、径1cmの灰褐色粘土ブロックを少量含む。）
 第17層：暗褐色土層（灰褐色粘土粒子を多量、径0.5～2cmの焼土ブロック・焼土粒子を少量含む。）
 第18層：暗褐色土層（灰褐色粘土を多量、径1cmのロームブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・炭化物を少量含む。）
 第19層：黒褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・径1～2cmの灰褐色粘土ブロックを少量含む。）
 第20層：黒褐色土層（径0.5～1cmの灰褐色粘土ブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）

第227号住居跡貯蔵穴土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子・径2cmの灰褐色粘土ブロックを少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）

深さはいずれも25cm前後ある。P10は、住居北側の壁際に位置する。径25cmの円形を呈し、床面からの深さは27cmある。

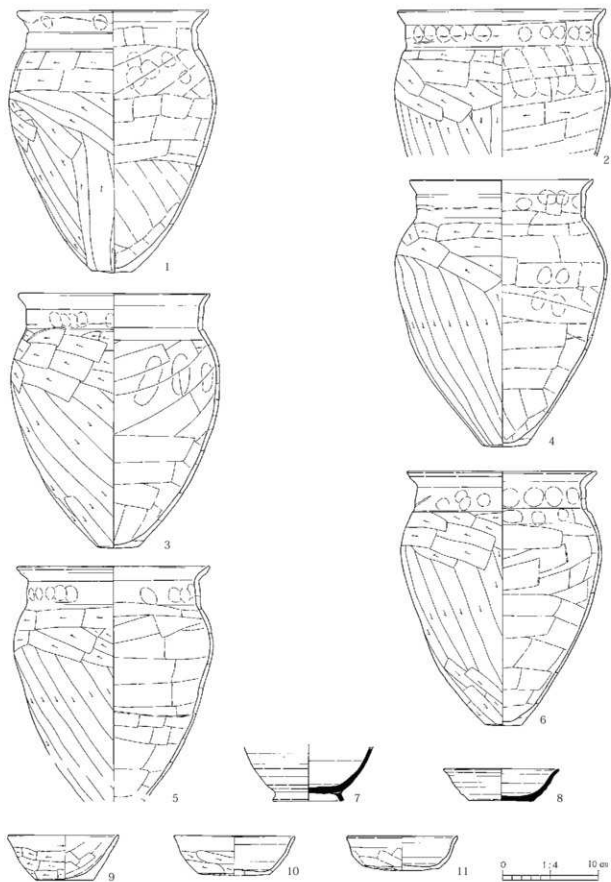
カマドは、住居東側壁の南東側コーナー部寄りに位置し、住居の壁を掘り込んで直角に付設されている。規模は、残存長126cm、最大幅61cmある。燃焼部は、住居の壁を47cm掘り込んでおり、内面はよく焼けて赤色化している。燃焼部底面は、カマド第10層上面あたりと思われる、住居の床面とほぼ同じ高さで、水平に作られている。奥壁は、緩やかに立ち上がっている。燃焼部内からは、完形に近い5個の土師器甕が出土している。焚口部に近いNo5とNo6の土師器甕は、入れ子状に重なって焚口部に平行した状態で出土していることから、焚口部天井の補強に使用していたものが天井部の崩壊に伴って落下した可能性が推測される。その奥の燃焼部奥壁に近いNo1とNo4の土師器甕は、それぞれ甕の口縁部を内側に向けて横転したような状態で出土していることから、2個並置してカマドに掛けられていたものが、天井部の崩壊に伴って内側に横転したのではないかとと思われる。煙道部は、燃焼部奥壁の上半から斜方向に傾斜しているが、そこからNo2の土師器甕の大形破片が出土しており、おそらく煙道部の煙道入口には甕がはめ込まれていたものと思われる。

遺物は、カマド内や住居跡西側の覆土中から、土器が多くは出土している。土器以外では、住居南西側コーナー部付近の床面上から、大形の長い自然石が1個出土している。また、住居中央部の床面上から、複数の焼土や炭化材が検出されていることから、本住居跡は焼失した可能性が高い。

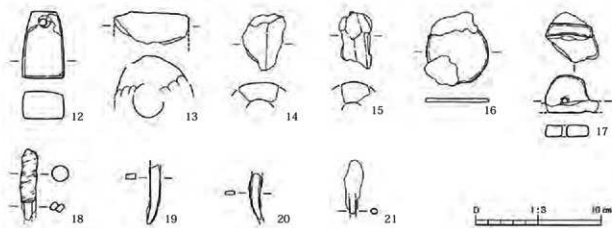
本住居跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、平安時代前期中頃と考えられる。

第42表 第227号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A. 口縁部径20.3、器高27.7、底部径4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、石英、白色粒。チャート。E. 外一褐色、内一明赤褐色。F. 4/5。G. 胴部外面下半に煤付着。口縁部外面と胴部内面上部に指頭圧痕を残す。H. カマド内。
2	甕	A. 口縁部径(22.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデの後提ナデ。D. 石英、角閃石。E. 内外一にぶい褐色。F. 口縁～胴部上半1/4。G. 胴部外面上半に煤付着。H. カマド煙道部。
3	甕	A. 口縁部径20.3、器高26.8、底部径4.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、白色粒、石英。E. 外一褐色、内一にぶい赤褐色。F. ほぼ完形。G. 口縁部外面に煤付着。胴部外面の一部に粘土付着。頸部外面に指頭圧痕を残す。H. カマド焚口部。
4	甕	A. 口縁部径19.5、器高28.3、底部径4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、白色粒、石英。E. 外一にぶい褐色、内一にぶい赤褐色。F. 4/5。G. 胴部下面位面にスス付着。頸部内面に指頭圧痕を残す。H. カマド内。
5	甕	A. 口縁部径(20.4)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデ。D. 白色粒、片岩粒、角閃石。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 口縁～胴部下位1/2。G. 胴部外面に黒斑あり。口縁部内外面に指頭圧痕を残す。H. カマド内。
6	甕	A. 口縁部径20.0、器高26.8、底部径3.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒、赤色粒、片岩粒。E. 外一にぶい黄褐色、内一にぶい赤褐色。F. ほぼ完形。G. 底部内外面に黒斑あり。頸部内面に指頭圧痕を残す。H. カマド内。
7	須恵器高台付環	A. 高台部径7.4。B. ロコロ成形。高台部貼り付け。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面高台部貼付後回転ナデ。D. 石英、片岩粒。E. 内外一黄灰色。F. 体部～底部3/4。G. 還元焙焼成。H. 覆土中。
8	須恵器環	A. 口縁部径(12.2)。器高3.9。底部径6.8。B. ロコロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 片岩粒、石英粒。E. 内外一黄灰色。F. 1/4。G. 還元焙焼成。H. 覆土中。
9	環	A. 口縁部径(11.8)。器高4.9。底部径5.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、石英、白色粒。E. 外一にぶい褐色、内一黒褐色。F. 2/3。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
10	環	A. 口縁部径(12.8)。器高4.2。底部径(7.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、角閃石。E. 内外一にぶい褐色。F. 1/2。G. 内面に黒斑あり。H. 覆土中。
11	環	A. 口縁部径11.7。器高3.5。底部径8.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 外一にぶい褐色、内一褐色。F. 完形。H. 覆土中。
12	砥石	A. 残存高5.2、幅3.4、厚さ2.2、重さ54.5g。D. 流紋岩。F. ほぼ完形。H. 床下土塊1埋土内。
13	羽口	A. 厚さ2.2、孔径(2.5)。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 外一オリーブ黒色、内一にぶい褐色。F. 先端部破片。G. 外面先端部ガラス化発泡する。H. 覆土中。



第 108 图 第 227 号住居跡出土遺物 (1)



第109図 第227号住居跡出土遺物(2)

14	羽 口	A. 厚さ 1.3, B. 手控ね, C. ナデ, D. チャート、白色粒, E. 外-にぶい黄褐色, 内-に褐色, F. 破片, H. 覆土中。
15	羽 口	A. 厚さ 1.6, B. 手控ね, C. ナデ, D. チャート、白色粒, E. 外-灰色, 内-にぶい褐色, F. 破片, H. 覆土中。
16	円盤状鉄製品	A. 径 5.0, 厚さ 0.3, 重さ 41.39g, B. 鍛造, D. 鉄製, F. 完形, H. 覆土中。
17	不明鉄製品	A. 孔径 0.4, 厚さ 0.9, 重さ 58.32g, B. 鍛造, D. 鉄製, F. 破片, H. 覆土中。
18	棒状鉄製品	A. 長さ <5.7>, 幅 1.3, 厚さ 1.4, 重さ 1328g, B. 鍛造, D. 鉄製, F. 破片, G. 一部二本を束ねている, H. 覆土中。
19	不明鉄製品	A. 長さ <4.5>, 最大幅 0.8, 厚さ 0.4, 重さ 3.80g, B. 鍛造, D. 鉄製, F. 破片, H. 覆土中。
20	不明鉄製品	A. 長さ <3.7>, 最大幅 0.8, 厚さ 0.3, 重さ 3.14g, B. 鍛造, D. 鉄製, F. 破片, H. 覆土中。
21	棒状鉄製品	A. 長さ <4.2>, 幅 1.4, 厚さ 1.3, 重さ 10.02g, B. 鍛造, D. 鉄製, F. 破片, H. 覆土中。



2. 掘立柱建物跡

第16号掘立柱建物跡（第110図、図版18）

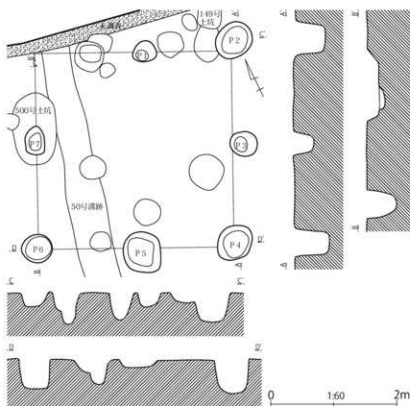
G地点の調査区西側の北東端に位置する。重複する第500号土坑と第50号溝跡に切られている。建物跡の形態は、東西・南北方向とも2間の方形を呈する側柱式建物と思われる。規模は、東西・南北方向とも約3.10mを測る。建物の南北方向は、N-25°-Eを向いている。

柱通りは、東西・南北方向の柱穴列とも比較的良く、いずれもほぼ直線上に並んでいる。柱心間は、東西・南北方向とも1間が約1.55mの等間隔で、1間×1間の平面形はほぼ正方形を呈している。

柱穴は、建物の四隅に位置するP2・P4・P6がやや規模が大きく、長軸が50cm～63cmの楕円形を呈し、確認面からの深さも46cm～58cmあり、他の柱穴よりも深くなっている。東西・南北両方向の側柱穴の真ん中の柱穴は、P5が規模が大きいものの他の柱穴は長軸が38cm～45cmの楕円形を呈し、確認面からの深さも15cm～40cmで、四隅の柱穴に比べて浅くなっている。

遺物は、柱穴覆土中から古代の土器の小片が数片出土しただけである。

本建物跡の時期は、不明である。



第110図 第16号掘立柱建物跡

第17号掘立柱建物跡（第111図、図版18）

G地点の調査区中央部の北西側に位置する。重複する第196・197・198号住居跡を切っている。建物跡の形態は、東西方向が2間、南北方向が3間の長方形を呈し、内部に東柱をもつ総柱式建物のようなものである。規模は、東西方向が約4.80m、南北方向が約6.60mを測る。建物の長軸方向は、N-7°-Wを向いている。

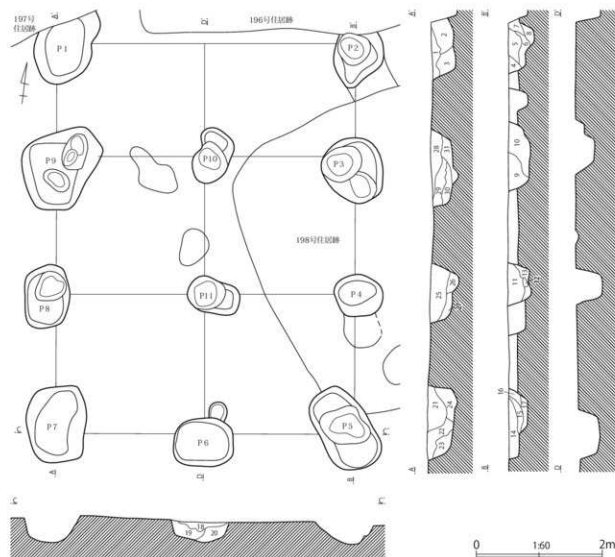
柱通りは、東西・南北方向の柱穴列とも比較的良く、いずれもほぼ直線上に並んでいる。柱心間は、東西方向が1間約2.40mの等間隔、南北方向が1間約2.20mの等間隔で、1間×1間の平面形はほぼ正方形を呈している。

柱穴は、側柱穴は長軸100cm～140cmの規模の大きな楕円形や隅丸長方形を呈するものが多く、確認面からの深さは38cm～50cmある。東柱は、側柱穴に比べて規模が小さく、長軸60cm程度の楕円形を呈し、確認面からの深さはP10が35cm、P11が42cmある。柱穴掘り方の覆土中には、明確な柱痕が見

られないことから、柱は建物の廃絶に伴って抜き取られた可能性が高いと思われる。

遺物は、弥生時代後期末～平安時代前期の土器や須恵器の破片が、柱穴の覆土中より少量出土している。土器以外では、土錘が1点出土している。

本建物跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、平安時代前期と考えられる。

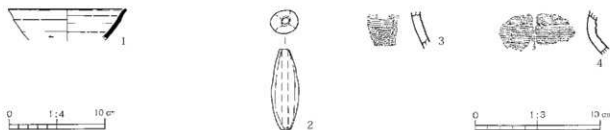


第111図 第17号掘立柱建物跡

第17号掘立柱建物跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～4cmのロームブロックを少量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
- 第5層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
- 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）
- 第7層：暗褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
- 第8層：暗褐色土層（第2層に近いが、黒味が強い。）
- 第9層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。しまりは無い。）
- 第10層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。しまりは無い。）

- 第11層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）
 第12層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）
 第13層：黄褐色土層（ロームブロックを主体とする。）
 第14層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）
 第15層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを微量含む。）
 第16層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第17層：褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）
 第18層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。しまりを有する。）
 第19層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。しまりを有する。）
 第20層：暗褐色土層（径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。しまりを有する。）
 第21層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを微量含む。）
 第22層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）
 第23層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第24層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）
 第25層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。）
 第26層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。）
 第27層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第28層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）
 第29層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロックを主体とする。）
 第30層：暗褐色土層（第28層に近いが、黒味が強い。しまりを有する。）
 第31層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）



第112図 第17号掘立柱建物跡出土遺物

第43表 第17号掘立柱建物跡出土遺物観察表

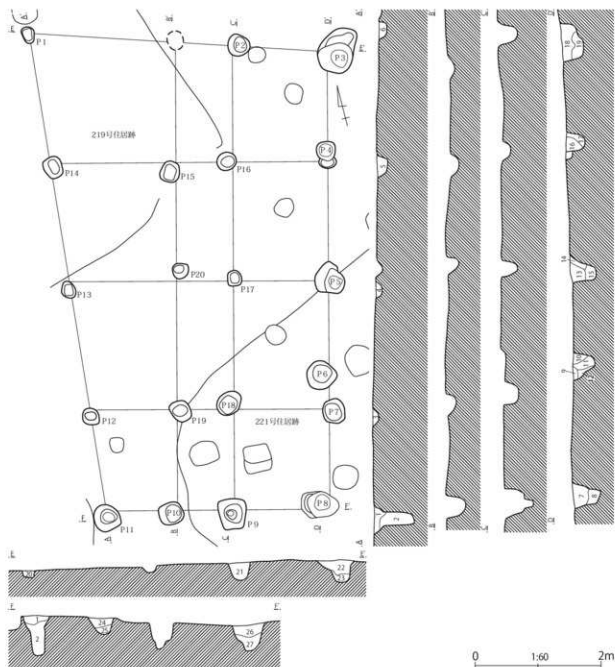
1	須恵 罎	A. 口縁部径(12.5)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。外面ナデの後に下半ケズリ、内面回転ナデ。D. 片岩粒、石英。E. 内外一灰色。F. 口縁部破片。G. 還元焙焼成。H. P7覆土中。
2	土 鏝	A. 長さ6.4、厚さ2.2、孔径0.5、重さ24.58g。B. 手捏ね。C. 外面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内ふい褐色。F. 完形。H. P9覆土中。
3	罎	B. 粘土層積み上げ。C. 外面柳葉文の後下位柳波状文、内面ナデ。D. 白色粒。E. 外一ふい褐色、内一浅黄褐色。F. 頸部破片。G. 内面上位赤彩。弥生時代後期式。H. P5覆土中。
4	罎	B. 粘土層積み上げ。C. 外面柳葉文状。内面ナデ。D. 角閃石。E. 外一浅黄褐色、内一黄灰色。F. 頸部破片。G. 弥生時代後期式。H. P7覆土中。

第18号掘立柱建物跡（第113図、図版18）

G地点の調査区東側の北端に位置する。重複する第219号住居跡と221号住居跡を切っている。

建物跡の形態は、南北方向が4間、東西方向が3間の台形に似た不整四角形を呈する総柱式建物
 のようである。規模は、南北方向が7.10m、東西方向が北側4.70m、南側3.50mを測る。建物の長
 軸方向は、N-14°-Eを向いている。

柱通りは、南北方向の柱穴列は概ね直線上に並んでいるが、東西方向は柱穴列は蛇行ぎみである。柱
 心間は、南北方向が北から1間約1.80m・1.80m・2.00m・1.50mであり、東西方向は東から1間



第113図 第18号掘立柱建物跡

第18号掘立柱建物跡土層説明

- 第1層：土層説明なし。
 第2層：土層説明なし。
 第3層：土層説明なし。
 第4層：土層説明なし。
 第5層：土層説明なし。
 第6層：土層説明なし。
 第7層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径2cmのロームブロック・V層土粒子を少量、小礫を微量含む。）
 第9層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）
 第10層：黒褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第11層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第12層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

- 第13層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。しまりはない。）
- 第14層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第15層：黒褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第16層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・小礫を少量含む。）
- 第17層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
- 第18層：土層説明なし。
- 第19層：土層説明なし。
- 第20層：土層説明なし。
- 第21層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
- 第22層：暗褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
- 第23層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）
- 第24層：土層説明なし。
- 第25層：土層説明なし。
- 第26層：土層説明なし。
- 第27層：土層説明なし。

約1.50m・0.90m・1.10m～2.30mの不揃いである。1間×1間の平面形は、南北方向の真中と東側は長方形を基調としているが、西側は不規則な台形になっている。

柱穴は、東側と南側の側柱穴は、長さ36cm～55cm程度の楕円形や隅丸長方形を呈し、他に比べてやや規模が大きく、深さも25cm～62cmで深くなっている。他の柱穴は、規模が小さく深さも浅い構造になっている。

遺物は、古代の土師器や須恵器の破片が、柱穴覆土中から少量出土しただけである。

本建物跡の時期は、遺構の重複関係や柱穴の形態等から、中世以降と考えられる。

本建物跡は、4間×3間の台形に似た不整四角形を呈する建物として復元されているが、その他の間取りによる建物構造を考えることも可能である。いずれにしても、柱穴も貧弱なものが多く柱通りも悪いものが多いことから、簡易的な建物と推測される。

第19号掘立柱建物跡（第114図、図版18）

G地点の調査区東側の中央付近に位置する。重複する第223号住居跡と第20号掘立柱建物跡を切っている。

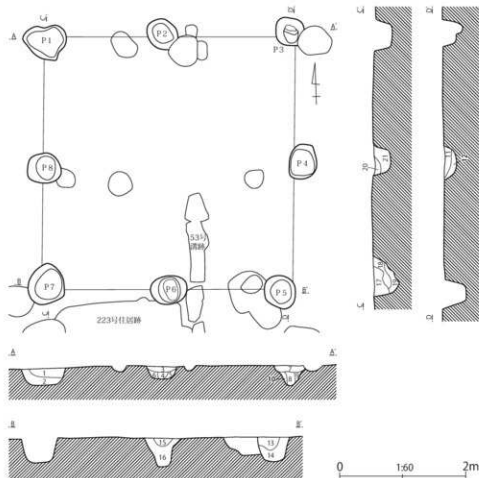
建物跡の形態は、東西・南北方向とも2間の方形を呈する側柱式建物である。規模は、東西・南北方向とも約4.00mを測る。建物の南北方向は、N-3°-Eを向いている。

柱通りは、東西・南北両方向の柱穴列とも比較的良く、いずれもほぼ直線上に並んでいる。柱心間は、東西・南北両方向とも1間が約2.00mの等間隔で、1間×1間の平面形はほぼ正方形を呈している。

柱穴は、いずれも長さ60cm前後の楕円形や不整形を呈している。確認面からの深さは、四隅の柱穴が34cm～40cmとやや深く、東西・南北両方向の中間の柱穴はそれらよりも若干浅くなっている。本建物跡は、P2とP3の埋土には柱痕らしき土層が見られるが、他の柱穴覆土中には柱痕は見られないようである。

遺物は、古墳時代から平安時代の土師器や須恵器の破片が、柱穴覆土中から少量出土している。

本建物跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、平安時代前期以降と推測される。



第114図 第19号掘立柱建物跡

第19号掘立柱建物跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を多量含む。）
 第2層：暗褐色土層（黒褐色土・V層土ブロックを多量、径0.5cmのロームブロックを少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第5層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子・炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第6層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第7層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子・白色粒子・黒褐色土を少量含む。）
 第8層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量含む。）
 第9層：暗褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第10層：暗褐色土層（ロームブロックを主体に、暗褐色土を少量含む。）
 第11層：暗褐色土層（ローム粒子を主体に、径1～2cmのロームブロックを少量含む。）
 第12層：暗褐色土層（ローム粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。）
 第13層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第14層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径3cmのロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第15層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を微量含む。）
 第16層：暗褐色土層（径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第17層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径3cmのロームブロックを少量、炭化粒子・黒褐色土を微量含む。）
 第18層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。）
 第19層：暗褐色土層（ローム粒子を主体に、V層土粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）
 第20層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物・黒褐色土を微量含む。）
 第21層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。）

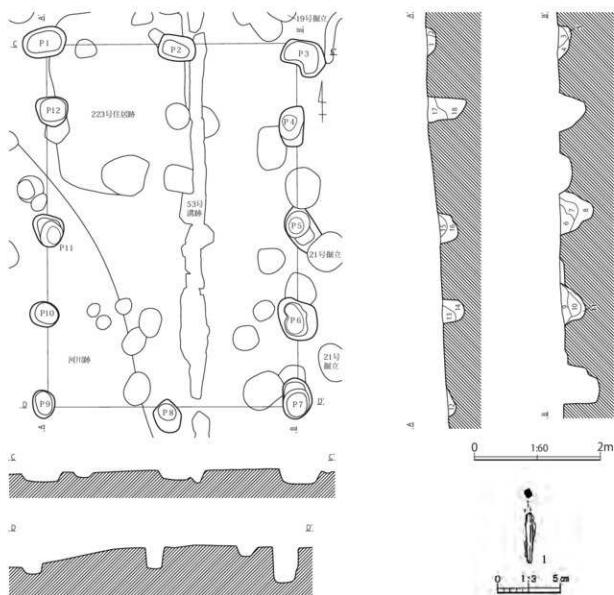
第20号掘立柱建物跡（第115図、図版18）

G地点の調査区東側の中央付近に位置する。重複する第21号掘立柱建物跡や第53号溝跡に切れ、第223号住居跡を切っている。

建物跡の形態は、南北方向が4間、東西方向が2間の長方形を呈する側柱式建物である。規模は、南北方向が約5.80m、東西方向が約4.00mを測る。建物の南北方向は、 $N-10^{\circ}-E$ を向いている。

柱通りは、東西・南北両方向の柱穴列とも比較的良く、いずれもほぼ直線上に並んでいる。柱心間は、南北方向が1間約1.45mの等間隔、東西方向が1間約2.00mの等間隔で、1間×1間の平面形は長方形を呈している。

柱穴は、長さ50cm前後の不整形形や、60cm～70cmの隅丸長方形ぎみの形態を呈するものがあり、確認面からの深さは15cm～60cmある。柱穴掘り方の覆土中に明確な柱痕が見られないことから、柱は



第115図 第20号掘立柱建物跡及び出土遺物

第20号掘立柱建物跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、黒褐色土・炭化物を微量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、炭化物を微量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）
 第6層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～1cmの炭化ブロックを多量、焼土粒子を微量含む。）
 第7層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径4cmのロームブロックを少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～3cmのロームブロック・V層土粒子を中量、炭化粒子を少量含む。しまりはない。）
 第9層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
 第10層：暗褐色土層（径2～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を少量含む。）
 第11層：暗褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）
 第12層：黄褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第13層：黄褐色土層（ローム粒子を多量、径1～2cmのロームブロックを中量、炭化粒子を少量含む。）
 第14層：黄褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を中量、炭化粒子を少量。）
 第15層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒を多量、炭化物を微量含む。）
 第16層：黄褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を中量、炭化物を少量含む。）
 第17層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第18層：暗褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化物を微量含む。）

建物の廃絶に伴って抜き取られた可能性が高いと思われる。

遺物は、古墳時代前期から平安時代前期までの土師器や須恵器の破片が出土している。土器以外では、長さ2cm程度のお小さな鉄滓が2個と、鉄釘の破片が出土している。

本建物跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、平安時代前期以降と推測される。

第44表 第20号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	鉄釘	A. 残存長4.0、最大幅0.4、重さ2.9g。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 1/2。H. 柱穴覆土中。
---	----	--

第21号掘立柱建物跡（第117図、図版18）

G地点の調査区東側の中央付近に位置する。重複する第20号掘立柱建物跡を切っている。第226号住居跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、東西・南北方向とも2間の方形を呈する小型の側柱式建物である。規模は、東西・南北方向とも約3.40mを測る。建物の南北方向は、N-3°-Wを向いている。

柱通りは、東西・南北両方向の柱穴列とも比較的良く、いずれもほぼ直線上に並んでいる。柱心間は、東西・南北両方向とも1間が約1.70mの等間隔で、1間×1間の平面形はほぼ正方形を呈している。

柱穴は、長さ50cm～65cmの楕円形を呈している。確認面からの深さは、30cm～65cmある。柱穴の覆土中には、柱痕が見られるものがいくつかある。

遺物は、古墳時代から平安時代の土師器や須恵器の破片が、柱穴覆土中から少量出土している。土器以外では、円盤状の鉄製品や鉄滓が出土している。

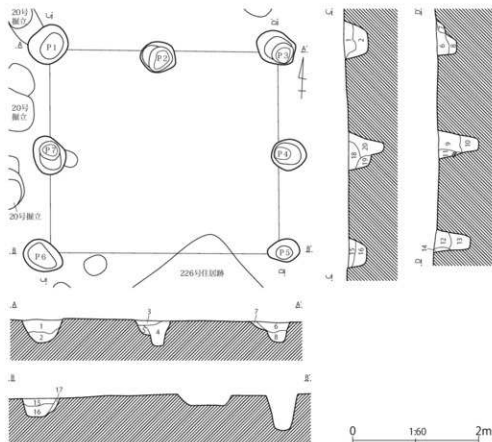
本建物跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、平安時代前期以降と推測される。



第116図 第21号掘立柱建物跡出土遺物

第45表 第21号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	円盤状 鉄製	A. 径4.7、厚さ0.5、重さ16.50g。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 欠形。H. 一括
---	-----------	--



第117図 第21号掘立柱建物跡

第21号掘立柱建物跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径2～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径2cmのV層土ブロックを少量、炭化粒子を微量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を多量、焼土粒子を微量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径1～2cmのロームブロックを少量、炭化粒子を微量含む。）
 第6層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第7層：黄褐色土層（径3～5cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量含む。）
 第8層：暗褐色土層（径2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第9層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第10層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）
 第11層：暗褐色土層（径2～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径2cmのV層土ブロックを少量含む。）
 第12層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を多量、炭化粒子を微量含む。）
 第13層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）
 第14層：黄褐色土層（径3～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）
 第15層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第16層：暗褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、炭化粒子を微量含む。）
 第17層：黄褐色土層（径3～4cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量含む。）
 第18層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、径1cmの焼土ブロックを少量含む。）
 第19層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化物を微量含む。）
 第20層：暗褐色土層（径2～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

3. 井戸跡

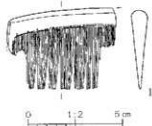
第26号井戸跡 (第120図、図版19)

G地点の調査区中央部の中央南端に位置し、重複する河川跡を切っている。井戸掘り方の南西側は調査区外に位置するため、本井戸跡の全容は不明である。

井戸掘り方の平面形は、検出された部分から推測すると、南北方向に長い楕円形を呈すると思われる。規模は、東西方向が145cm、南北方向は140cmまで測れる。断面の形態は、上半が漏斗状に緩やかに傾斜し、下半は直径50cmの円筒状を呈する。下半部が未調査のため、深さは不明である。井筒の構造は、下半の井筒の縁に沿って、石組の根石と考えられる大型の自然石の小口面を揃えて一段巡らせていた痕跡が見られることから、上半は石組によって井筒が構築されていた可能性が高い。おそらく石組は、井戸の廃棄に伴って解体され、使用された石の大半は持ち去られたものと推測される。覆土の堆積は、自然堆積のようである。

遺物は、古代～近世の土器や陶磁器の小破片が、覆土中から少量出土している。土器以外では、覆土中から櫛(第118図)やクワの加工木(図版49、第VI章第6節参照)を含む木片が多く出土している。

本井戸跡の時期は、覆土の状態や出土物の様相から、近世の江戸時代と思われる。



第118図 第26号井戸跡
出土遺物

第46表 第26号井戸跡出土遺物観察表

1	櫛	A. 残存高4.3, 残存幅5.8, 最大厚0.85, 重さ9.43g, D. ツゲ, F. 1/2, H. 覆土中。
---	---	---

第27号井戸跡 (第120図、図版19)

G地点の調査区中央部の中央南端に位置し、重複する河川跡を切っている。

井戸掘り方の平面形は、径80cmの円形に近い形態を呈している。壁は、垂直ぎみに立ち上がり、円筒状に深くなっている。下半部が未調査のため、深さは不明である。覆土の堆積は、自然堆積のようである。

遺物は、古墳時代中期の土師器破片や平安時代前期の須恵器破片が、覆土中から少量出土しただけである。

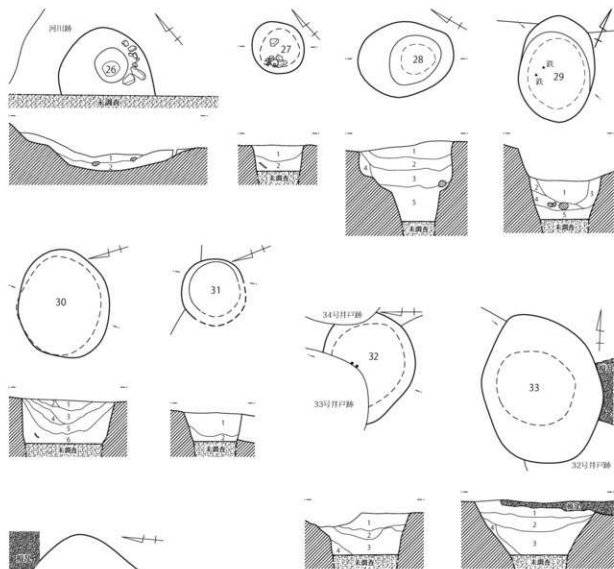
本井戸跡の時期は、覆土の状態や出土物の様相から、平安時代前期頃と考えられる。



第119図 第27号井戸跡出土遺物

第47表 第27号井戸跡出土遺物観察表

1	高 杯	A. 口縁部径(19.4), B. 粘土結構み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部内外面ナデ, D. 角閃石, 白色粒, E. 内外一明赤褐色, F. 杯部1/3, H. 覆土中。
2	高 杯	A. 口縁部径(16.9), B. 粘土結構み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ後放射状暗文, D. 角閃石, 白色粒, E. 外一褐色, 内一灰褐色, F. 杯部1/3, H. 覆土中。
3	須 恵 器 杯	A. 底部径(5.6), B. ロクロ成形, C. 口縁部内外面回転ナデ, 底部外面回転糸切り, D. 白色粒, E. 内外一褐色, F. 底部4/5, G. 還元焼成, H. 覆土中。

**第26号井戸跡土層説明**

第1層：黒褐色粘質砂層（ローム粒子を少量、径0.5～1cmのロームブロック・黄褐色粘土を微量含む。粘性に富む。）

第2層：黒褐色粘質砂層（ローム粒子を少量、ロームブロック・径0.5～2cmの黄褐色粘土ブロックを微量含む。粘性に富む。）

第27号井戸跡土層説明

第1層：黒褐色粘質砂層（川砂を多量、鉄分・黄褐色粘土を微量含む。）

第2層：黒褐色粘質土層（鉄分を所々に含む。粘性に富む。）

第28号井戸跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～0.8cmのロームブロックを少量、鉄分を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（鉄分を多量、ローム粒子を微量含む。粘性に富む。）

第3層：黒褐色粘質土層（鉄分を少量含む。粘性に富む。）

第4層：暗褐色土層（鉄分を多量、ローム粒子を少量含む。粘性に富む。）

第5層：黒褐色粘質土層（鉄分を多量含む。粘性に富む。）

第120図 井戸跡

第29号井戸跡土層説明

- 第1層：暗褐色粘質砂層（暗褐色粘質土を主体に、川砂を多量、ローム粒子を少量含む。）
 第2層：褐色粘質土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色粘質土の混合土。川砂を多量含む。）
 第3層：暗褐色粘質土層（川砂を多量、ロームブロック・ローム粒子少量含む。）
 第4層：暗褐色粘質土層（ロームブロック・ローム粒子・川砂を多量含む。粘性に富む。）
 第5層：暗褐色粘質土層（川砂を多量、ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富む。）

第30号井戸跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（黒褐色粘質土を主体とする。）
 第2層：黒褐色土層（黒褐色粘質土を主体に、川砂を含む。）
 第3層：黒褐色土層（黒褐色粘質土を主体に、川砂を多量含む。）
 第4層：灰褐色粘質砂層（鉄分を所々に含む。）
 第5層：灰黄褐色砂層（鉄分を少量含む。）
 第6層：灰黄褐色粘質砂層（第3層に近いが、黒味が強い。）

第31号井戸跡土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（鉄分・礫を少量含む。）
 第2層：暗灰褐色土層（礫を少量、白色粒子・鉄分を微量含む。）

第32号井戸跡土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・径1～2cmの黄灰色土ブロックを多量、白色粒子・小砂礫を少量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・小砂礫を少量、白色粒子を微量含む。）
 第3層：暗灰褐色土層（白色粒子・砂礫を多量、径0.5cmのロームブロックを微量含む。）
 第4層：暗灰褐色土層（粘質土を主体とする。）

第33号井戸跡土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（白色粒子・小礫を多量、径1cmのロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量含む。）
 第2層：暗灰褐色土層（砂質土を主体に、径3cmの礫を多量、白色粒子を少量、径1cmのロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・鉄分を微量含む。）
 第3層：暗灰褐色土層（砂質土・粘質土の混合土を主体に、小礫を少量、径1cmのロームブロック・白色粒子を微量含む。）
 第4層：暗灰褐色砂礫層（砂礫を主体に、暗灰褐色土を多量、径2cmのロームブロックを少量含む。）

第34号井戸跡土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・径1～2cmの黄灰色土ブロックを多量、白色粒子・小砂礫を少量含む。）
 第2層：暗灰褐色土層（白色粒子・砂礫を多量、径0.5cmのロームブロックを微量含む。）
 第3層：暗灰褐色土層（粘質土を主体とする。）
 第4層：暗灰褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・小砂礫を多量含む。）
 第5層：暗灰褐色土層（第4層に似るが、砂質土を主体とする。）
 第6層：暗灰褐色土層（径2～5cmの黄灰色土ブロック・径2～5cmの礫を多量、焼土粒子を微量含む。）
 第7層：暗灰褐色土層（径1～2cmのロームブロック・径1cmの黄灰色土ブロックを多量、炭化粒子を少量含む。）

第28号井戸跡（第120図、図版19）

G地点の調査区中央部の中央南側に位置し、重複する河川跡を切っている。

井戸掘り方の平面形は、上面が北西～南東方向に長い楕円形を呈している。規模は、北西～南東方向が154cm、北東～南西方向が116cmを測る。断面の形態は、二段に深くなっており、下半は90cm×74cmの楕円形を呈し、筒状に深くなっている。下半部が未調査のため、深さは不明である。覆土の堆積は、自然堆積のようである。

遺物は、古代の土師器片や中世の大形のかわらけの破片（第121図No1）が、覆土中から出土しただけである。

本井戸跡の時期は、覆土の状態や出土物の様相から、中世後期と考えられる。



第121図 第28号井戸跡出土遺物

第48表 第28号井戸跡出土遺物観察表

1	かわらけ	A. 底部径7.4, B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 雲母。E. 内外一にぶい橙色。F. 底部のみ。H. 覆土中。
---	------	--

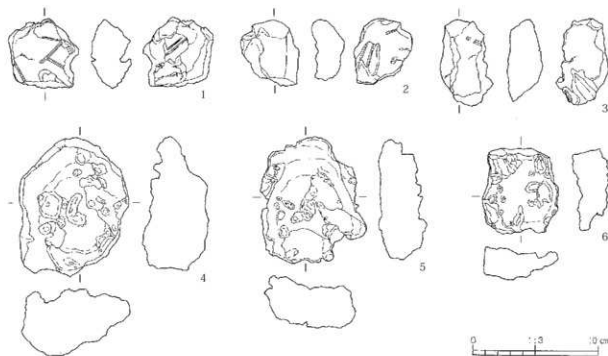
第29号井戸跡 (第120図、図版19)

G地点の調査区中央部の中央南側に位置し、重複する河川跡を切っている。

井戸掘り方の平面形は、北西～南東方向に長い楕円形を呈している。規模は、北西～南東方向が165cm、北東～南西方向が120cmを測る。断面の形態は、上半が漏斗状に緩やかに傾斜し、下半は長軸が140cmの楕円形の筒状に深くなっている。下半部が未調査のため、深さは不明である。覆土の堆積は、自然堆積のようである。

遺物は、古代の土師器や須恵器の破片と、植物の茎状の圧痕が見られる焼成された粘土塊3点 (No 1～3) や鉄滓3点 (No 4～6) が、覆土中から出土している。

本井戸跡の時期は、覆土の状態や出土遺物の様相から、平安時代前期以降と考えられる。



第122図 第29号井戸跡出土遺物

第49表 第29号井戸跡出土遺物観察表

1	粘土塊	A. 長さ5.7, 幅5.6, 厚さ3.2, 重さ63.54g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 角閃石、白色粒、赤色粒。E. にぶい橙色。F. 完形。G. 両面に植物の茎のような圧痕あり。H. 覆土中。
2	粘土塊	A. 長さ5.3, 幅4.7, 厚さ2.6, 重さ39.99g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 白色粒、石英。E. 橙色。F. 完形。H. 覆土中。
3	粘土塊	A. 長さ6.9, 幅4.2, 厚さ2.8, 重さ51.12g。B. 手捏ね。C. ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 橙色。F. 完形。G. 片面に植物の茎のような圧痕あり。H. 覆土中。
4	鉄滓	A. 長さ11.1, 幅8.8, 厚さ5.3, 重さ598.86g。F. 完形。G. 鉄分を含む。楕円形。H. 覆土中。
5	鉄滓	A. 長さ10.1, 幅8.5, 厚さ3.8, 重さ354.97g。F. 完形。G. 鉄分を含む。楕円形。H. 覆土中。
6	鉄滓	A. 長さ6.8, 幅6.1, 厚さ2.9, 重さ146.00g。F. 完形。G. 楕円形。H. 覆土中。

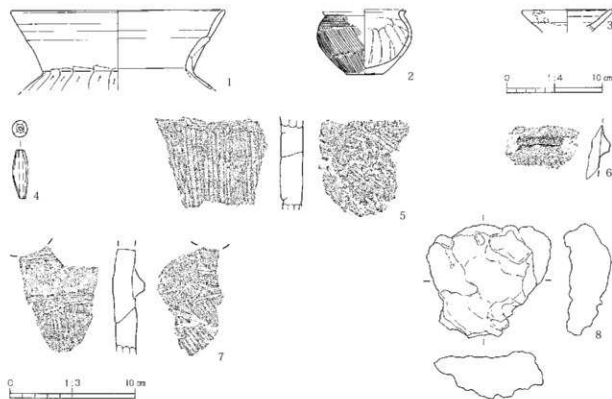
第30号井戸跡 (第120図、図版19)

G地点の調査区中央部の中央南側に位置し、重複する河川跡を切っている。

井戸掘り方の平面形は、東西方向に長い楕円形を呈している。規模は、東西方向が174cm、南北方向が145cmを測る。断面の形態は、壁が直線的に急傾斜し、楕円形の筒状に深くなっている。下半部が未調査のため、深さは不明である。覆土の堆積は、自然堆積のようである。

遺物は、古代の土師器や須恵器の破片が、覆土中から少量出土している。土器以外では、土錘や鉄滓が1点ずつ出土している。

本井戸跡の時期は、覆土の状態や出土物の様相から、中世と考えられる。



第123図 第30号井戸跡出土遺物

第50表 第30号井戸跡出土遺物観察表

番号	遺物	観察内容
1	甕	A. 口縁部径(22.8)。B. 粘土細積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面剥落。D. 石英、白色粒。E. 外一にぶい褐色、内一にぶい褐色。F. 口縁部1/2。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
2	S字状口縁小形鉢	A. 底部径3.8。B. 粘土細積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後上位ヨコハケ、内面ヨコナデの後下半指ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 外一灰黄褐色、内一にぶい褐色。F. 1/4。G. 胴部~底部外面に黒斑あり。口縁~胴部内面に煤付着。H. 覆土中。
3	かわらけ	A. 口縁部径(9.6)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。D. 雲母。E. 内外一灰褐色。F. 口縁~体部2/3。G. 外面に煤付着。H. 覆土中。
4	土錘	A. 長さ3.9、厚さ1.2、孔径0.3、重さ4.85g。B. 手握ね。C. ナデ。D. 角閃石。E. 褐色。F. 完形。H. 覆土中。
5	埴輪	B. 粘土細積み上げ。C. 外面ハケ、内面ナデ。D. チャート。E. 外一にぶい褐色、内一灰黄褐色。F. 破片。H. 覆土中。
6	埴輪	B. 粘土細積み上げ。凸帯貼り付け。C. 外面ハケ。凸帯ヨコナデ。D. チャート、石英。E. 外一にぶい赤褐色。F. 破片。G. 内面剥落。H. 覆土中。
7	埴輪	B. 粘土細積み上げ。C. 外面ハケ、内面ナデ。D. 片岩粒、石英、チャート。E. 外一にぶい褐色、内一褐色。F. 破片。G. 外面凸帯剥離。H. 覆土中。
8	鉄滓	A. 長さ9.0、幅10.0、厚さ3.8、重さ388.41g。F. 完形。G. 鉄分を含む。桶形滓。H. 覆土中。

第31号井戸跡 (第120図、図版19)

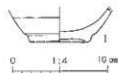
G地点の調査区中央部の東側に位置し、重複する河川跡を切っている。

井戸掘り方の平面形は、径100cm程度の円形を呈している。断面の形態は、壁が直線的に急傾斜して円筒状に深くなっている。下半部が未調査のため、深さは不明である。

覆土の堆積は、自然堆積のようである。

遺物は、古代の土師器や須恵器の破片が、覆土中から少量出土しただけである。

本井戸跡の時期は、覆土の状態や出土物の様相から、平安時代前期末～中世初頭と考えられる。



第124図 第31号井戸跡
出土遺物

第51表 第31号井戸跡出土遺物観察表

1	高台付埴	A. 高台部径6.5。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 内外面回転ナデ。D. 角閃石、石英、片岩粒。E. 外一浅黄色、内一灰黄色。F. 底部成形。H. 覆土中。
---	------	---

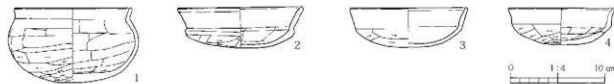
第32号井戸跡 (第120図、図版19)

G地点の調査区中央部の東側に位置する。重複する第33・34号井戸跡に切られ、河川跡を切っている。

井戸掘り方の平面形は、残存する部分から推測すると、東西方向に長い楕円形を呈していたと思われる。規模は、南北方向が150cm、東西方向は175cmまで測れる。断面の形態は、上半は漏斗状に緩やかに傾斜していたと思われる、下半は壁が直線的に急傾斜して直径120cm程度の円筒状に深くなっている。下半部が未調査のため、深さは不明である。覆土の堆積は、自然堆積のようである。

遺物は、覆土中より古墳時代後期を主体とする土師器の破片が少量出土している。

本井戸跡の時期は、覆土の状態や出土物の様相から、古墳時代後期後葉と考えられる。



第125図 第32号井戸跡出土遺物

第52表 第32号井戸跡出土遺物観察表

1	埴	A. 口縁部径(12.5)、器高8.4。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後上位ヨコナデ、内面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一橙色。F. 3/4。G. 体部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
2	模倣埴	A. 口縁部径13.2、器高4.3。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面腕ナデ。D. 角閃石、白色粒、石英、赤色粒。E. 内外一にふい赤褐色。F. 成形。H. 覆土中。
3	模倣埴	A. 口縁部径(12.4)、器高4.2。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、白色粒、片岩粒、赤色粒。E. 内外一橙色。F. 1/3。H. 覆土中。
4	模倣埴	A. 口縁部径11.2、器高3.9。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面剥落。体部外面ケズリ、内面腕ナデ。D. 角閃石・白色粒。E. 内外一橙色。F. ほぼ成形。G. 口縁部内面器面剥落。H. 覆土中。

第33号井戸跡 (第120図、図版19)

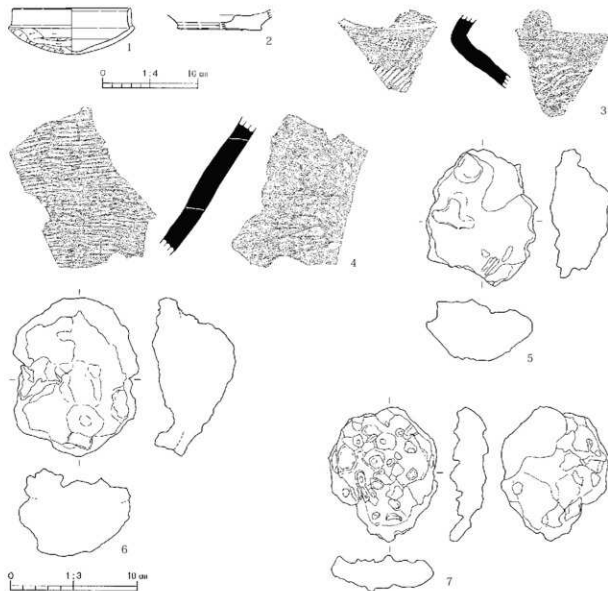
G地点の調査区中央部の東側に位置する。重複する第32号井戸跡と河川跡を切っている。

井戸掘り方の平面形は、南北方向に長い楕円形を呈している。規模は、南北方向が243cm、東西方向

が184cmを測る。断面の形態は、上半が漏斗状に緩やかに傾斜し、下半は直径120cm程度の円筒状になると思われる。下半部が未調査のため、深さは不明である。覆土の堆積は、自然堆積のようである。

遺物は、古代の土師器や須恵器の破片や中世のかわらけの破片が、覆土中から少量出土している。土器以外では、鉄滓が3点出土している。

本井戸跡の時期は、覆土の状態や出土遺物の様相から、中世と考えられる。



第126図 第33号井戸跡出土遺物

第53表 第33号井戸跡出土遺物観察表

1	模倣環	A. 口縁部径(12.6)、器高4.9。B. 粘土粗積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面隈ナデ。D. 角四石、白色粒。E. 内外一にふい赤褐色。F. 1/3。G. 外面に黒痕あり。H. 覆土中。
2	かわらけ	A. 底部径(8.8)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。底部外面摩耗。D. 雲母。E. 内外一灰黄褐色。F. 底部1/2。H. 覆土中。
3	須恵器 甕	B. 粘土粗積み上げ後叩き成形。C. 外面平行叩きの後ヨコナデ、内面同心門文の当て具痕を残す。D. 片岩粒、石英。E. 内外一灰色。F. 頸部破片。G. 還元焼成。H. 覆土中。

4	須恵器	B.粘土組織み上げ叩き成形。C.外面平行叩き目、内面ナデ。D.片岩粒、石英。E.内外一灰色。G.還元焼成。F.胴部下位破片。H.覆土中。
5	鉄滓	A.長さ11.0、幅8.9、厚さ4.9、重さ420.00g。F.完形。G.鉄分を含む。椀形滓。H.覆土中。
6	鉄滓	A.長さ12.7、幅10.0、厚さ7.0、重さ943.57g。F.完形。G.鉄分を含む。下半は砂礫を含む。椀形滓。H.覆土中。
7	鉄滓	A.長さ10.7、幅8.7、厚さ2.9、重さ275.56g。F.完形。G.鉄分少ない。H.覆土中。

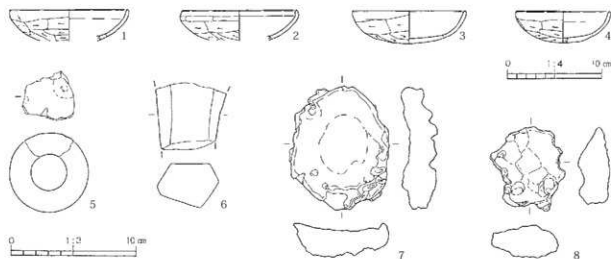
第34号井戸跡(第120図、図版20)

G地点の調査区中央部の東側に位置する。重複する第32号井戸跡と河川跡を切っている。

井戸掘り方の平面形は、東西方向に長い楕円形を呈している。規模は、東西方向が312cm、南北方向が235cmを測る。断面の形態は、上半が漏斗状に緩やかに傾斜し、下半は直径100cm程度の円筒状になると思われる。下半部が未調査のため、深さは不明である。覆土の堆積は、自然堆積のようである。

遺物は、白鳳時代を主体とする土師器の破片が、覆土中から少量出土している。土器以外では、羽口の破片1個、砥石片1点、鉄滓2点が出土している。

本井戸跡の時期は、覆土の状態や出土遺物の様相から、白鳳時代と考えられる。



第127図 第34号井戸跡出土遺物

第54表 第34号井戸跡出土遺物観察表

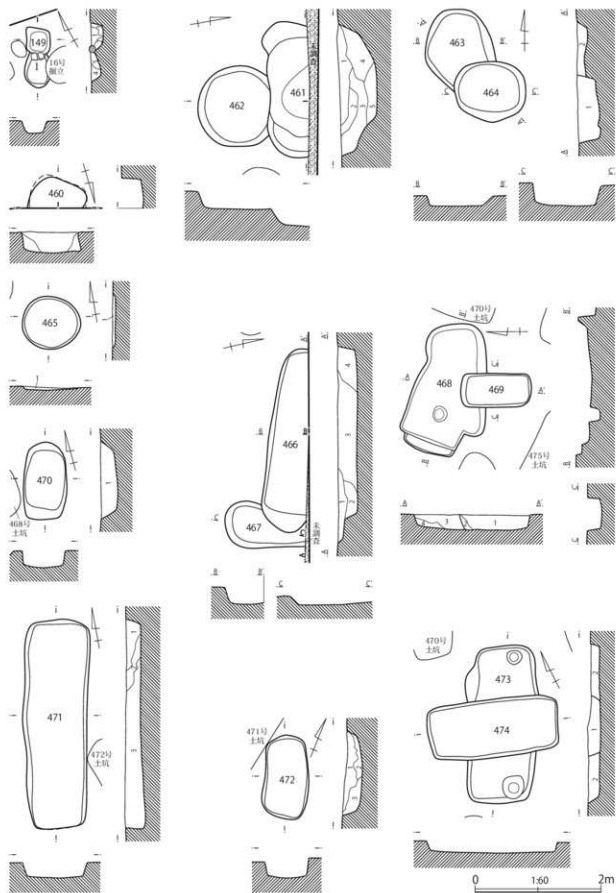
1	環	A.口縁部径(12.4)。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.内外一にふい橙色。F.口縁~体部1/5。H.覆土中。
2	環	A.口縁部径12.0。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D.角閃石、赤色粒。E.内外一にふい橙色。F.口縁~体部1/2。H.覆土中。
3	環	A.口縁部径(11.9)、器高3.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.角閃石、雲母、赤色粒。E.内外一にふい橙色。F.1/2。H.覆土中。
4	環	A.口縁部径(9.9)、器高3.5。B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D.角閃石、石英、白色粒。E.外一橙色、内一にふい橙色。F.1/3。C.外面或部に黒斑あり。H.覆土中。
5	羽口	A.外径(9.3)、孔径(2.9)、厚1.9、重さ25.00g。B.手捏ね。C.内外面ナデ。D.角閃石、白色粒。E.橙色。F.破片。C.表面はガラス化し発光する。H.覆土中。
6	柱状砥石	A.残存長(5.4)、幅5.7、厚さ3.5、重さ143.29g。C.各面ともよく擦れている。D.砂岩。F.破片。H.覆土中。
7	鉄滓	A.長さ9.9、幅8.0、厚さ2.9、重さ322.72g。F.完形。G.鉄分を含む。椀形滓。H.覆土中。
8	鉄滓	A.長さ6.7、幅6.0、厚さ2.6、重さ99.91g。F.完形。G.鉄分を含む。椀形滓。H.覆土中。

4. 土 抗

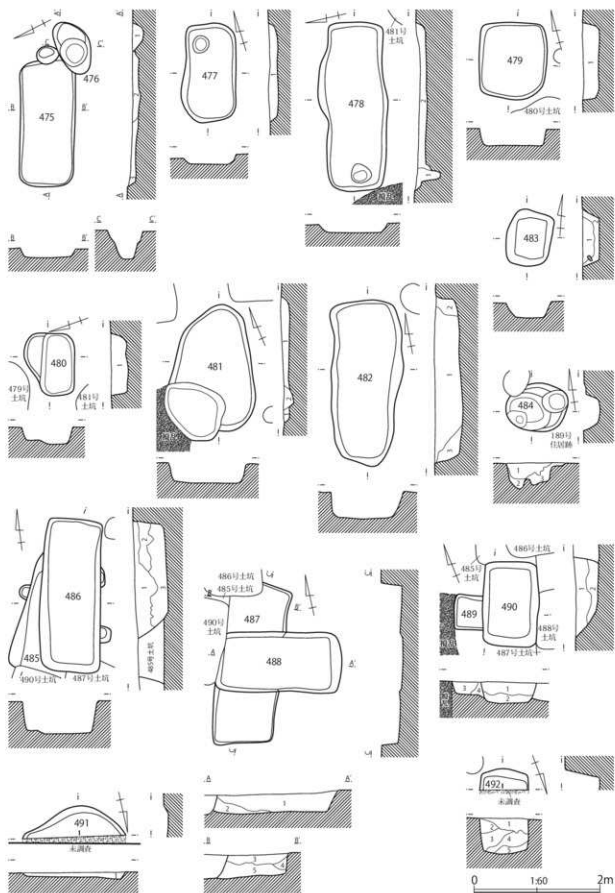
第55表 G地点土坑一覧表

番号	平面形	規 模	深さ	出 土 遺 物	時 期	備 考
149	隅丸方形	40×37	20	五輪塔(空風輪)	中世	
381	(楕円形)	(176)×(66)	82		古墳後期	D1地点のSK381と同一。
460	不 明	92×(49)	32	土師器片少量	不明	
461	不 明	215×(67)	60	土師器片少量	不明	SK462と重複。
462	円 形	133×130	28	土師器片少量	不明	SK461と重複。
463	不 整 形	110×(112)	16	土師器片少量	不明	SK464に切られる。
464	楕 円 形	114×98	35	土師器片少量	不明	SK463を切る。
465	円 形	94×85	5	内耳竈、土師器片少量	中世後期	
466	隅丸方形	280×(75)	31			SK467に切られる。
467	不 整 形	74×(135)	25			SK466を切る。
468	不 整 形	214×128	25	内耳竈、土師・須恵器片少量	中世後期以降	SK469に切られる。
469	隅丸長方形	113×54	24	内耳竈、土師・須恵器片少量	中世後期以降	SK468を切る。
470	隅丸長方形	122×69	26	内耳竈、土師・須恵器片少量	中世後期以降	
471	隅丸長方形	329×102	33	土師・須恵器片少量、須恵器転用紡錘車	不明	
472	隅丸長方形	133×72	27	土師器片少量	不明	
473	隅丸長方形	248×116	17	土師・須恵器片少量	不明	SK474に切られる。
474	隅丸長方形	208×90	21	内耳竈、土師器片少量	中世後期以降	SK473を切る。
475	隅丸長方形	197×86	11	土師器片少量	不明	SK476に切られる。
476	楕 円 形	89×50	46	土師器片(古墳後)少量	古墳後期以降	
477	隅丸長方形	154×87	15	土師器・須恵器・砥石片少量	古代以降	
478	隅丸長方形	265×110	14	土師・須恵器片少量	不明	
479	隅丸方形	120×107	27	土師・須恵器片少量	不明	
480	隅丸長方形	98×55	28	土師器片少量	不明	
481	不整楕円形	200×134	15	かわらけ、煮滑煮糞、在地産片口鉢	中世後期	
482	隅丸長方形	263×115	44	内耳竈、在地産片口鉢、土師・須恵器片少量	中世後期以降	
483	隅丸長方形	88×70	26			
484	楕 円 形	100×77	41			189住を切る。
485	不 明	(185)×(83)	43	内耳竈、土師・須恵器片少量	中世後期以降	SK486・490に切られる。
486	隅丸長方形	240×98	54	内耳竈、土師・須恵器片少量	中世後期以降	SK485を切る。
487	隅丸長方形	256×102	33	内耳竈、土師・須恵器片少量	中世後期以降	SK488に切られる。
488	隅丸長方形	200×98	30	内耳竈、土師器片少量	中世後期以降	SK490に切られ、SK487を切る。
489	隅丸長方形	(45)×56	19	内耳竈、土師・須恵器片少量	中世後期以降	SK490に切られる。
490	隅丸長方形	132×90	40	土師器片少量	不明	SK485・487・488・489を切る。
491	不 明	(114)×(47)	11	土師器片少量	不明	
492	不 明	77×(33)	56	土師・須恵器片少量	不明	
493a	隅丸長方形	263×108	56			191住・SK495b・48溝を切る。
493b	不 明	(120)×110	15			191住・47溝を切り、SK493aに切られる。
494	隅丸長方形	247×85	24	土師・須恵器片少量	不明	
495	隅丸長方形	(245)×98	13	土師・須恵器片少量	不明	SK496に切られる。
496	隅丸長方形	338×105	32	土師・須恵器片少量	不明	SK495を切る。
497	隅丸長方形	402×80	12	土師・須恵器片少量	不明	
498	隅丸長方形	(207)×55	7	土師・須恵器片少量	不明	

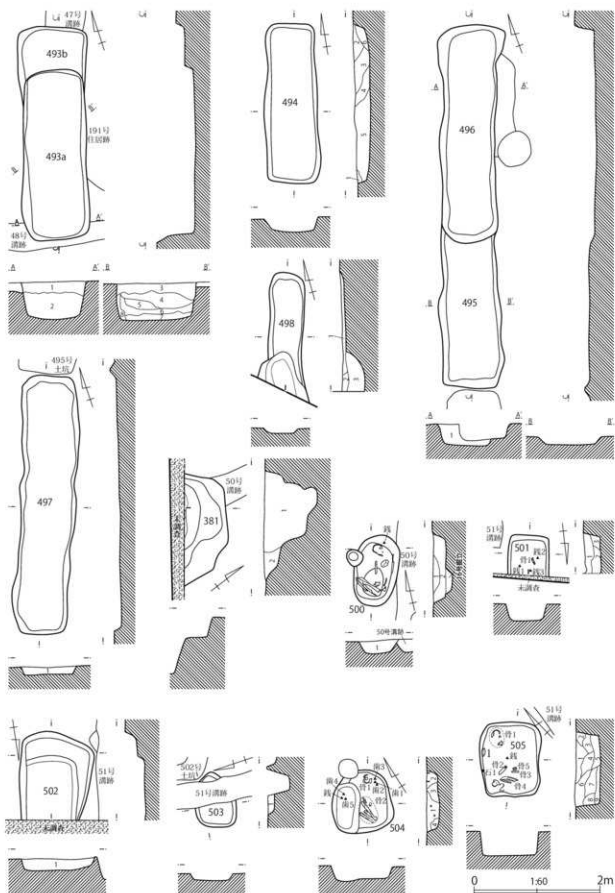
500	楕円形	112×70	20	人骨、銭貨(元豊通宝3、熙寧元宝、景德元宝、開通元宝)6枚	中世後期	16 掘立・50 溝を切る。
501	隅丸長方形	(62)×65	26	人骨、銭貨3(天聖元宝、宣和通宝、景德元宝)	中世後期	
502	(隅丸長方形)	(138)×111	30			
503	不明	87×64	10	土師器片少量	不明	51 溝に切られる。
504	隅丸長方形	100×98	25	人骨、銭貨2(永樂通宝、至和元宝)	中世後期	
505	隅丸長方形	106×98	40	人骨、かわらけ、銭貨(洪武通宝、至道元宝、治平元宝、天聖元宝、元豊通宝、他)6枚	中世後期	
506	不整楕円形	90×46	25	土師器片少量		
507	楕円形	70×40	20			
508	隅丸長方形	122×110	13	骨片、銭貨(嘉祐元宝)、土師・須恵器片少量	中世後期	
509	円形	128×135	38	土師・須恵器片少量	不明	
510	隅丸長方形	154×104	35	人骨、かわらけ、銭貨(永樂通宝、大觀通宝、朝鮮通宝、嘉祐元宝、元豊通宝、元祐通宝)6枚	中世後期	SK511に切られる。
511	隅丸長方形	(646)×111	48	土師・須恵器片少量(古墳前～平安前)		193住・SK510を切る。
512	隅丸長方形	(210)×124	26	土師・須恵器片多量(古墳前～奈良)		192・193住を切る。
513	隅丸長方形	704×130	29	土師・須恵器片多量、陶器少量(古墳前～近世)		193・197住・SK514を切る。
514	不整楕円形	85×52	46	土師器片少量	不明	SK513に切られる。
515	隅丸長方形	110×110	18	土師・須恵器片少量	不明	196住を切る。
516	不整形	106×84	5	土師器片少量	不明	203住を切る。
517	円形	74×72	12	土師・須恵器片少量	不明	203住を切る。
518	楕円形	130×91	34			
519	円形	135×142	19	土師・須恵器片少量	不明	
520	不整形	96×60	15			215住を切る。
521	隅丸長方形	110×75	22			219住を切る。
522	隅丸長方形	(132)×82	22	土師器片少量	不明	
523	不整形	130×(106)	30	土師・須恵器、近世磁器片	近世後期以降	
524	不明	(145)×163	39			222住を切る。
525	楕円形	70×55	65			
526	隅丸長方形	55×53	18	土師器片少量	不明	5住を切る。
527	隅丸長方形	134×77	12	割口片	不明	5住を切る。
528	楕円形	72×60	58	土師器(古墳前期)片少量	不明	
529	隅丸長方形	58×(55)	32	土師器片少量	不明	5住を切る。
530	楕円形	87×(67)	43	土師器片少量	不明	5住を切る。
531	隅丸長方形	75×70	39	土師器片少量	不明	5住を切る。
532	楕円形	75×64	31	土師器片少量	不明	5住を切る。
533	不整形	80×80	38	土師器片少量	不明	5住を切る。
534	不明	95×(64)	23	土師器片(古墳前期)少量	不明	河川跡に切られる。
535	不整形	253×76	20	鉄滓、土師・須恵器片少量	不明	54 溝に切られる。
536	不整形	100×71	16			
537	不整形	100×81	21	鉄滓、土師・須恵器片少量	不明	
538	楕円形	95×68	10	土師・須恵器片少量	不明	
539	隅丸長方形	68×52	20	土師器片少量	不明	
540	楕円形	96×68	25	土師・須恵器片少量	不明	



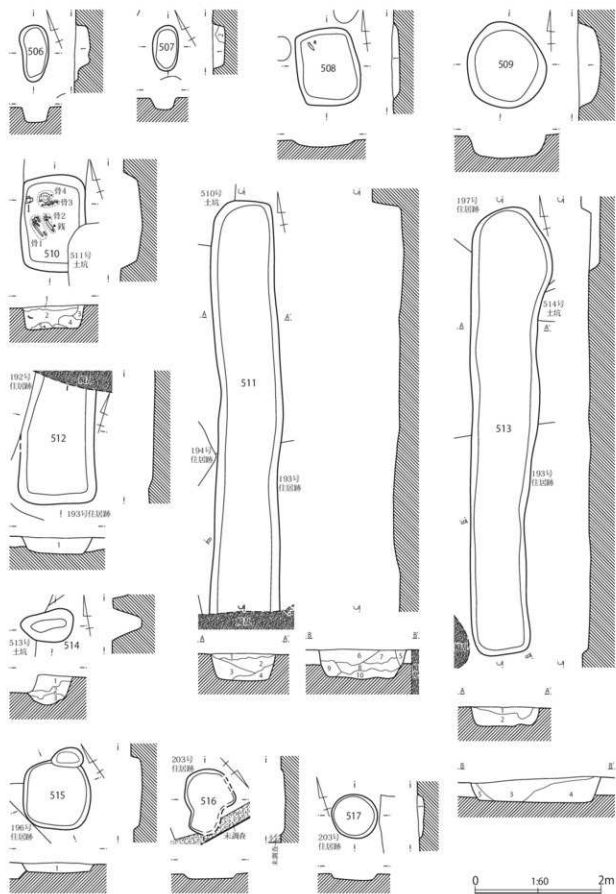
第128图 土坑(1)



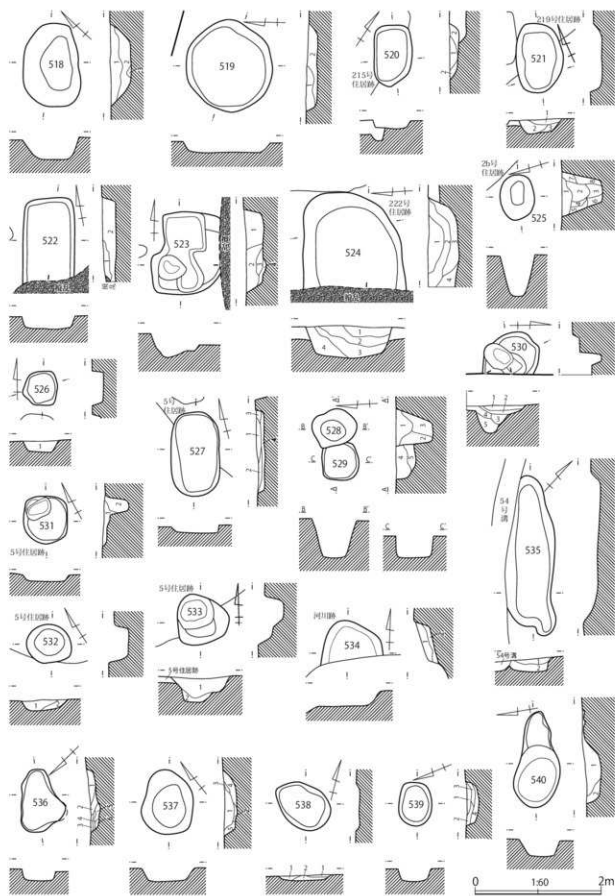
第129图 土坑(2)



第130图 土坑(3)



第131图 土坑(4)



第132图 土坑(5)

第 149 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを微量含む。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第5層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第 381 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第 460 号土坑土層説明

土層説明無し。

第 461・462 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（黄褐色土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
 第2層：暗褐色土層（黄褐色土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第3層：暗褐色土層（黄褐色土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第4層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第5層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を微量含む。）

第 463・464 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（黄褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第2層：黄褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを微量含む。）

第 465 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土。しまりを有する。）

第 466・467 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第2層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第4層：暗褐色土層（黒味の強い暗褐色土を多量、黄褐色土を少量含む。）

第 468・469 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（黄褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第2層：黄褐色土層（黄褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第3層：黄褐色土層（黄褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロックを多量、ローム粒を少量含む。）
 第4層：黄褐色土層（黄褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第 470 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（黄褐色粘質ロームを主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第 471 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（黄褐色土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。しまりを有する。）
 第2層：黄褐色土層（黄褐色土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を微量含む。しまりを有する。）
 第3層：黄褐色土層（黄褐色土を主体に、暗褐色土を少量、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。しまりを有する。）

第 472 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・径0.5～3cmの黄褐色土ブロック・黄褐色粒子の混合土を主体に、暗褐色土を微量含む。）
 第2層：黄褐色土層（径0.5～3cmの黄褐色土ブロック・黄褐色粒子の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を少量、暗褐色土を微量含む。）
 第3層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・黄褐色土ブロック・黄褐色粒子の混合土。）

第 473・474 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第2層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第 475・476 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土。）
 第2層：黄褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第3層：黄褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第 477 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（黄褐色粘土・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第 478 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第2層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第 479 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

第 480 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

第 481 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を多量含む。）
 第2層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を少量含む。）

第 482 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第2層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、径0.5～4cmの黄褐色ブロックを少量含む。）
 第3層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・径0.5～4cmの黄褐色ブロックを多量含む。）

第 483 号土坑土層説明

- 第1層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第2層：黄褐色土層（径0.5～5cmの黄褐色土ブロック・黄褐色粒子を主体に、暗褐色土を少量含む。）

第 484 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～0.8センチのロームブロックを少量含む。）
 第2層：褐色土層（ロームブロックを主体に、暗褐色土を含む。）
 第3層：黄褐色土層（径0.5～5cmの黄褐色土ブロック・黄褐色粒子を主体に、暗褐色土を含む。）

第 485・486 号土坑土層説明

- 第1層：灰黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～2cmの黄褐色土ブロック・黄褐色粒子を多量含む。しまりを有する。）
 第2層：灰黄褐色土層（黄褐色土ブロック・黄褐色粒子を多量、ロームブロック・ローム粒子を少量含む。しまりを有する。）
 第3層：黄褐色土層（径0.5～6cmの黄褐色粘質土ブロック・黄褐色粘質土粒子の混合土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・黄褐色土を含む。しまりを有する。）

第 487・488 号土坑土層説明

- 第1層：灰黄褐色土層（黄褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・径0.5～2cmの黄褐色粘質土ブロック・黄褐色粘質土粒子を多量含む。）
 第2層：灰黄褐色土層（径0.5～3cmの黄褐色土ブロック・黄褐色粒子の混合土を主体に、黄褐色土を少量含む。）
 第3層：灰黄褐色土層（黄褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘質土を多量含む。）
 第4層：灰黄褐色土層（黄褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・黄褐色粘質土を少量含む。）
 第5層：灰黄褐色土層（黄褐色土を主体に、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・径0.5～4cmの黄褐色土ブロックを少量含む。）

第 489・490 号土坑土層説明

第1層：灰黄褐色土層（黄褐色粘質土・暗褐色土の混合土を主体に、黄褐色粘質土粒子・径0.5～3cmの黄褐色土ブロックを多量含む。）

第2層：黄褐色土層（黄褐色粘質土・暗褐色土の混合土を主体に、黄褐色粘質土粒子・径0.5～5cmの黄褐色土ブロックを多量含む。）

第3層：灰黄褐色土層（黄褐色土を主体に、径0.5～1cmの黄褐色粘質土ブロック・黄褐色粘質土粒子を少量含む。）

第4層：黄褐色粘質土層（黄褐色土を少量含む。）

第 491 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、黄褐色土粒子を少量含む。）

第 492 号土坑土層説明

第1層：褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

第2層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。）

第4層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第5層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第 493a・b 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを少量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～7cmの黄褐色粘質ロームブロック・黄褐色粘質ローム粒子を多量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～1cmの黄褐色粘質ロームブロック・黄褐色粘質ローム粒子を多量、浅間山A軽石を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第5層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第6層：暗褐色土層（径0.5～6cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第7層：暗褐色土層（黄褐色粘質土を多量含む。）

第8層：黄褐色粘質土層（暗褐色土を微量含む。）

第 494 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（黄褐色粘土を主体に、暗褐色土を含む。）

第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を少量、径0.5～2cmのロームブロックを微量含む。）

第4層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第5層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）

第6層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第 495・496 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを微量含む。）

第 497 号土坑土層説明

第1層：褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子・黄褐色土・暗褐色土の混合土。）

第 498 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを少量含む。しまりを有する。）

第2層：黄褐色土層（黄褐色粘土を主体とする。しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを微量含む。しまりはない。）

第 500 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

第 501 号土坑土層説明

第1層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）

第2層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロックを微量含む。）

第3層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量含む。）

第502号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第503号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（黒味の強い暗褐色土を主体に、径0.5cmのロームブロックを多量含む。）

第504号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を含む。しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。しまりを有する。）

第3層：褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を含む。しまりを有する。）

第4層：黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を少量含む。しまりを有する。）

第505号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～3cmのロームブロックを少量含む。）

第3層：褐色土層（ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～1cmのロームブロックを少量含む。）

第4層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。）

第5層：褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、暗褐色土を微量含む。）

第6層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを微量含む。）

第7層：黄褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量含む。）

第8層：黄褐色土層（ローム粒子・暗褐色土を多量、径0.5～4cmのロームブロックを少量含む。）

第9層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土。粘性に富む。）

第506号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1.5cmのロームブロックを微量含む。）

第507号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第2層：褐色土層（暗褐色土を主体に、径0.5～1.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第508号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を含む。）

第509号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第510号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5cm～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・径3cmのロームブロックを少量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロック・焼土粒子を少量含む。）

第5層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

第511号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第5層：暗褐色土層（色調の明るい暗褐色土を主体とする。粘性・しまりともない。）

第6層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、浅間山系A軽石を少量含む。）

第7層：暗褐色土層（浅間山系A軽石を少量、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を微量含む。）

第8層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、浅間山系A軽石・径0.5～3cmのロームブロックを少量含む。）

第9層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第10層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第 512 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（黒味の強い暗褐色土を主体に、ローム粒子を多量、径0.5～5cmのロームブロックを少量含む。）

第 513 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（灰色がかった暗褐色土を主体に、径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第2層：暗褐色土層（灰色がかった暗褐色土を主体に、径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を多量含む。）

第 514 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～4cmのロームブロックを少量含む。）

第3層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を含む。）

第 515 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを少量含む。浅間山系A軽石・焼土粒子を少量含む。）

第 516 号土坑土層説明

土層無し。

第 517 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（黒味の強い暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。）

第 518 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（黒褐色土を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、白色粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径0.5～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、炭化粒子を微量含む。）

第3層：黄褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）

第 519 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・径1cmのV層土ブロック・焼土粒子を少量含む。）

第2層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）

第 520 号土坑土層説明

第1層：黒褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：黒褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）

第 521 号土坑土層説明

土層説明なし。

第 522 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・小礫を微量含む。）

第 523 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（浅間山系B軽石・径1～4cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・砂質を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（浅間山系B軽石を多量、径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・砂質・鉄分を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）

第4層：暗褐色土層（径1cmのV層土ブロックを多量、炭化物を微量含む。）

第 524 号土坑土層説明

第1層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）

第2層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土・焼土粒子を微量含む。）

第3層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、焼土粒子・炭化物・黒褐色土を少量含む。）

第4層：黄褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子・暗褐色土を多量含む。）

第 525 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）
 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。）
 第5層：黄褐色土層（径5cmのロームブロック・黒褐色土の混合土。）
 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を少量含む。）
 第7層：黄褐色土層（ローム粒子を主体とする。）
 第8層：黒褐色土層（ロームブロック・黒褐色土の混合土。）

第 526 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）

第 527 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・白色粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。しまりを有する。）

第 528・529 号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量、焼土粒子を微量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第3層：黒褐色土層（径1～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロックを多量、ローム粒子を少量含む。）
 第5層：黄褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量含む。）

第 530 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径2cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、焼土粒子を少量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）
 第5層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）

第 531 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第2層：黒褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5cmのロームブロックを少量含む。）

第 532 号土坑土層説明

- 第1層：黒褐色土層（径0.5～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径2～4cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）

第 533 号土坑土層説明

- 第1層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子を微量含む。）
 第2層：暗褐色土層（径1～3cmのロームブロック・ローム粒子の混合土。）

第 534 号土坑土層説明

土層説明なし。

第 535 号土坑土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（径0.5cmの灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子を少量含む。）
 第2層：灰黄褐色土層（灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子の混合土を主体に、暗褐色土を少量含む。）

第 536 号土坑土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（灰黄褐色粘質土粒子を少量含む。）
 第2層：灰黄褐色土層（径1～2cmの灰黄褐色粘質土ブロックを多量含む。）
 第3層：灰黄褐色土層（暗灰褐色土を多量、径1cmの灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子を少量含む。）

- 第4層：暗灰褐色土層（灰黄褐色粘質土粒子を多量含む。）
 第5層：暗灰褐色土層（灰黄褐色粘質土粒子を微量含む。）
 第6層：灰黄褐色土層（径1～2cmの灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子の混合物。）

第537号土坑土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（径1cmの灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子・白色粒子を少量、炭化粒子を微量含む。）
 第2層：暗灰褐色土層（径1cmの灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子を多量含む。）
 第3層：灰黄褐色土層（灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子の混合物を主体に、暗褐色土を少量含む。）
 第4層：暗灰褐色土層（灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子を多量含む。）
 第5層：暗灰褐色土層（径0.5～2cmの灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子を多量含む。）

第538号土坑土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（径1～2cmの灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子を多量含む。）
 第2層：灰黄褐色土層（灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子の混合物。）

第539号土坑土層説明

- 第1層：黒灰褐色土層（径1～2cmの灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子を少量、径0.5cmの焼土ブロックを微量含む。）
 第2層：暗灰褐色土層（径1～5cmの灰黄褐色粘質土ブロックを主体とする。）
 第3層：暗灰褐色土層（径1cmの灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子を少量、鉄分を微量含む。）
 第4層：黒灰褐色土層（灰黄褐色粘質土粒子を少量、小礫を微量含む。）

第540号土坑土層説明

- 第1層：黒褐色土層（径2～4cmの灰黄褐色粘質土ブロックを少量、小礫を微量含む。）
 第2層：黒褐色土層（径1～3cmの灰黄褐色粘質土ブロック・灰黄褐色粘質土粒子を多量含む。）

第56表 第149号土坑出土土物観察表

1	五輪塔	A. 残存長24.2、幅11.7、重さ2770g。C. 全面研磨。D. 砂岩。F. 空風輪2/3。G. 風輪に種子あり。H. 覆土中。
---	-----	---

第57表 第471号土坑出土土物観察表

1	須臾器転用紡錘車	A. 直径5.2、孔径0.65、重さ961g。B. ロック成形。C. 底部外面回転糸切り、内面回転ナデ。D. 角四石、片岩粒、白色粒。E. 内外一橙褐色。F. 底部3/4。G. 須臾器底部を転用。H. 覆土中。
---	----------	---

第58表 第477号土坑出土土物観察表

1	砥石	A. 残存長6.6、残存幅4.0、重さ11992g。C. 各面とも研磨。D. 凝灰岩。F. 破片。G. 一部に煤付着。H. 覆土中。
---	----	--

第59表 第481号土坑出土土物観察表

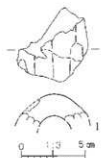
1	常滑窯系罌	B. 粘土縮積み上げ後叩き整形。C. 内外面回転ナデ。D. 白色粒。E. 外一黄灰色、内一灰褐色。F. 口縁部破片。H. 覆土中。
2	在地産片口鉢	A. 底部径(14.0)。B. 粘土縮積み上げ後ロック整形。C. 外面回転ナデの後下端回転袋ケズリ、内面回転ナデ。D. 片岩粒、石英、白色粒。E. 外一灰色、内一灰黄色。F. 底部破片。G. 還元不良。内面はよく擦れている。H. 覆土中。
3	かわらけ	A. 口縁部径(8.0)、器高1.7、底部径(4.8)。B. ロック成形。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 罌母。E. 内外一灰黄褐色。F. 1/5。H. 覆土中。

第60表 第500号土坑出土土物観察表

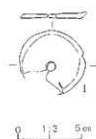
1	開元通宝	A. 直径23.54、厚さ1.46、重さ3.5g。B. 鑄造。D. 副製。F. 完形。G. 中国銭(621年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。背面に「一」字あり。H. 覆土中。
2	元豊通宝	A. 直径24.02、厚さ0.94、重さ2.5g。B. 鑄造。D. 副製。F. 完形。G. 北宋銭(1078年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H. 覆土中。
3	元豊通宝	A. 直径23.33、厚さ0.92、重さ2.2g。B. 鑄造。D. 副製。F. 完形。G. 北宋銭(1078年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H. 覆土中。
4	元豊通宝	A. 直径23.61、厚さ1.13、重さ3.1g。B. 鑄造。D. 副製。F. 完形。G. 北宋銭(1078年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H. 覆土中。
5	景德元宝	A. 直径24.77、厚さ1.03、重さ3.0g。B. 鑄造。D. 副製。F. 完形。G. 北宋銭(1004年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H. 覆土中。
6	熙寧元宝	A. 直径24.08、厚さ1.15、重さ3.6g。B. 鑄造。D. 副製。F. 完形。G. 北宋銭(1068年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H. 覆土中。



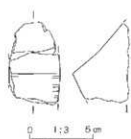
第 149 号土坑



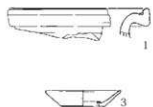
第 527 号土坑



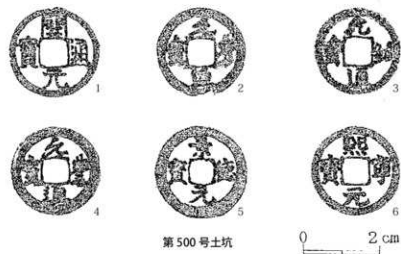
第 471 号土坑



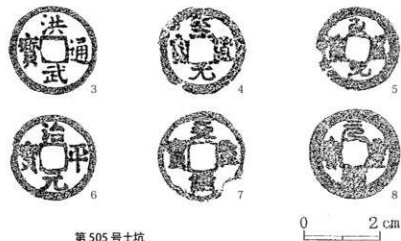
第 477 号土坑



第 481 号土坑

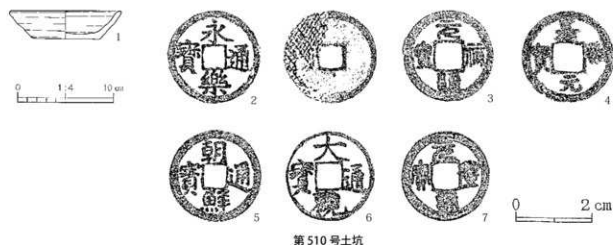
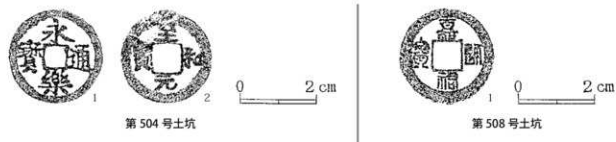


第 500 号土坑



第 505 号土坑

第 133 图 土坑出土遗物 (1)



第134図 土坑出土遺物(2)

第61表 第501号土坑出土遺物観察表

1	景徳元宝	A. 直径24.55、厚さ0.95、重さ2.36g。B. 铸造。D. 銅製。F. 完形。G. 北宋銭(1004年初铸)。H. 覆土中。
2	宣和通宝	A. 直径24.41、厚さ1.07、重さ2.57g。B. 铸造。D. 銅製。F. 完形。G. 北宋銭(1119年初铸)。H. 覆土中。
3	天聖元宝	A. 直径25.08、厚さ1.33、重さ3.64g。B. 铸造。D. 銅製。F. 完形。G. 北宋銭(1023年初铸)。H. 覆土中。

第62表 第504号土坑出土遺物観察表

1	永楽通宝	A. 直径25.57、厚さ1.03、重さ2.85g。B. 铸造。D. 銅製。F. 完形。G. 明銭(1411年初铸)。H. 覆土中。
2	至和元宝	A. 直径25.02、厚さ1.13、重さ2.90g。B. 铸造。D. 銅製。F. 完形。G. 北宋銭(1058年初铸)。H. 覆土中。

第63表 第505号土坑出土遺物観察表

1	かわらけ	A. 口縁部径12.8、器高2.9、底部径8.5。B. ロク口成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 雲母。E. 外一淡黄褐色、内一淡橙褐色。F. 4/5。H. 埋蔵覆土。
2	かわらけ	A. 口縁部径(8.4)、器高2.1、底部径(5.0)。B. ロク口成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 雲母。E. 内外一淡褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
3	洪武通宝	A. 直径23.59、厚さ1.19、重さ2.5g。B. 铸造。D. 銅製。F. 完形。G. 明銭(1368年初铸)。6道銭(6枚磨着して出土)。H. 覆土中。

4	至道元宝	A.直径23.29、厚さ1.12、重さ1.6g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.北宋銭(995年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H.覆土中。
5	□□元宝	A.直径22.39、厚さ1.26、重さ2.7g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.中国銭。6道銭(6枚融着して出土)。H.覆土中。
6	治平元宝	A.直径23.00、厚さ1.51、重さ3.4g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.北宋銭(1064年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H.覆土中。
7	天聖元宝	A.直径24.18、厚さ1.23、重さ2.6g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.北宋銭(1023年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H.覆土中。
8	元豊通宝	A.直径24.87、厚さ1.04、重さ3.0g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.北宋銭(1078年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H.覆土中。

第64表 第508号土坑出土遺物観察表

1	嘉祐元宝	A.直径25.14、厚さ1.10、重さ3.05g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.北宋銭(1056年初鑄)。H.覆土中。
---	------	---

第65表 第510号土坑出土遺物観察表

1	かわらけ	A.口縁部径11.8、器高3.0、底部径7.2。B.ロクロ成形。C.口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D.雲母。E.内外一淡褐色。F.A/5。H.壁際覆土。
2	永楽通宝	A.直径25.13、厚さ1.12、重さ2.9g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.明銭(1411年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。背面に布の繊維付着。H.覆土中。
3	元祐通宝	A.直径24.44、厚さ0.92、重さ2.3g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.北宋銭(1086年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H.覆土中。
4	嘉祐元宝	A.直径24.72、厚さ1.02、重さ2.8g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.北宋銭(1056年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H.覆土中。
5	朝鮮通宝	A.直径24.00、厚さ1.25、重さ3.6g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.李氏朝鮮(1423年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H.覆土中。
6	大観通宝	A.直径24.01、厚さ1.00、重さ2.4g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.北宋銭(1107年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H.覆土中。
7	元豊通宝	A.直径23.99、厚さ1.21、重さ3.1g。B.鑄造。D.銅製。F.完形。G.北宋銭(1078年初鑄)。6道銭(6枚融着して出土)。H.覆土中。

第66表 第527号土坑出土遺物観察表

1	羽口	A.厚さ1.6、孔径(2.7)。B.手握ね。C.内外面ナデ。D.角閃石。白色粒、石英。E.内外一橙色。F.破片。H.外面はガラス化し発泡している。H.覆土中。
---	----	---

5. 溝跡

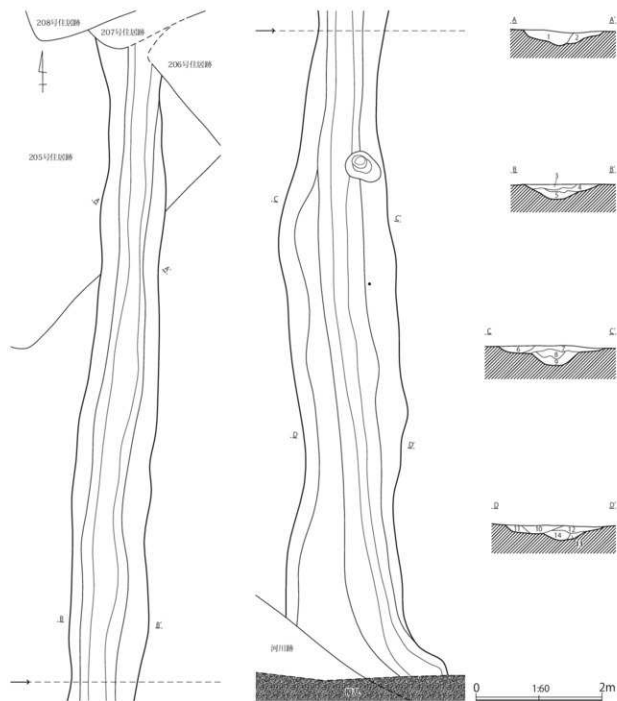
第46号溝跡(第135図、図版25)

G地点の調査区中央部の北側に位置する。重複する第205・206・207・208号住居跡を切っている。調査区内では、南北方向に向いてほぼ直線的な流路をとっているが、南端は河川跡と接する所で南東に方向を変えるようである。本溝跡の北側延長は、道路を挟んで北側に近接する久下東遺跡H地点(恋河内2019)の第107号溝跡の可能性が高いと思われる。

規模は、溝の上幅は北側半分が110cm前後、南側半分が175cm前後あり、南側に行くほど広がっているが、下幅は25cm～35cmで比較的均一な幅である。確認面からの深さは20cm～32cmある。断面の形態は、北側が緩やかに傾斜して立ち上がる逆台形で、南側は中位に平坦な面をもって二段に深くなっている。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。

遺物は、古代の土師器や須恵器の破片が、覆土中から少量出土しただけである。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係や同一の溝と思われる久下東遺跡H地点の第107号溝跡の時期から、中世以降と考えられる。



第135図 第46号溝跡

第46号溝跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）
 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～4cmのロームブロックを少量含む。）
 第3層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を中量、炭化粒子を少量含む。）
 第4層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、炭化粒子を少量含む。）
 第5層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、黒褐色土を少量含む。）
 第6層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～1cmのロームブロックを少量、白色粒子を微量含む。）
 第7層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を多量、焼土粒子を少量含む。）
 第8層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第9層：暗褐色土層（径0.5～2cmのロームブロック・ローム粒子を多量含む。）
 第10層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を多量、白色粒子を少量、焼土粒子を微量含む。）
 第11層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）

- 第12層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子・白色粒子を微量含む。）
 第13層：暗褐色土層（径0.5～1cmのロームブロック・ローム粒子を多量、焼土粒子・白色粒子を微量含む。）
 第14層：暗褐色土層（径0.5cmのロームブロック・ローム粒子・白色粒子を少量含む。）



第136図 第46号溝跡出土遺物

第67表 第46号溝跡出土遺物観察表

1	坏	A. 口縁部径 11.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一橙色。F. 口縁～体部 1/4。H. 覆土中。
2	須恵器 高台付埴	B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 体部内外面ヨコナデ。底部外面回転糸切り。高台部内外面ヨコナデ。D. 石英、片岩粒、白色粒。E. 内外一灰色。F. 底部 1/2。G. 還元焼成。H. 覆土中。
3	埴輪	B. 粘土組織み上げ。C. 外面ハケ、内面指ナデ。D. 角閃石、片岩粒。E. 内外一橙色。F. 破片。H. 覆土中。

第47号溝跡（第137図、図版25）

G地点の調査区西側の東寄りに位置する。重複する第439a・439b号土坑に切られ、第190・191号住居跡を切っている。調査区内では、南北方向に向いてほぼ直線的な流路をとっており、南側は第48号溝跡に繋がるか手前で途切れていたものと思われる。本溝跡の北側延長は、本調査区の北側に近接する久下東遺跡H地点（恋河内2019）の第79号溝跡の可能性が高いと思われる。

規模は、溝の上幅が50cm～65cm、下幅が20cm～45cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは23cm程度ある。断面の形態は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。

遺物は、何も出土しなかった。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係や久下東遺跡H地点の様相から、中世以降と推測される。

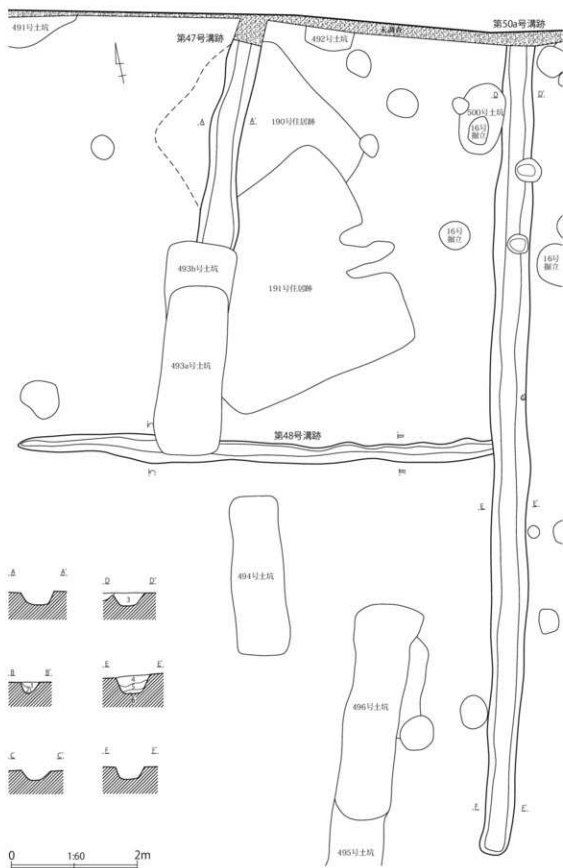
第48号溝跡（第137図）

G地点の調査区西側の東寄りに位置する。重複する第439a土坑に切られている。調査区内では、東西方向に向いて直線的な流路をとっている。溝の西端は削平されて途切れており、東側は南北方向に流路をとる第50a号溝跡と直角に繋がっている。

規模は、溝の上幅が25cm～35cm、下幅が5cm～20cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは18cm程度ある。断面の形態は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面が平坦をなす逆台形である。

遺物は、何も出土しなかった。覆土は、上半が暗褐色土、下半がロームブロックを主体とする黄褐色土である。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係や第50a号溝跡と繋がっていることから、中世後期～近世初頭頃と推測される。



第137图 第47·48·50a号沟迹

第47・48・50a号溝跡土層説明

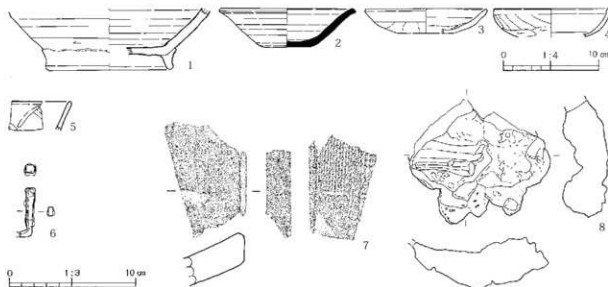
- 第1層：暗褐色土層（径0.5～0.8cmのロームブロック・ローム粒子を少量含む。）
 第2層：黄褐色土層（径0.5～5cmのロームブロックを主体に、暗褐色土を含む。）
 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）
 第4層：暗褐色土層（黒味の強い暗褐色土を主体に、ロームブロック・ローム粒子を含む。）
 第5層：暗褐色土層（径1cmのロームブロック・ローム粒子を少量、径4cmのロームブロックを微量含む。）
 第6層：暗褐色土層（径0.5～5cmのロームブロック・ローム粒子を主体とする。）

第49号溝跡（第142図、図版25）

G地点の調査区東側の西寄りに位置する。重複する第52号溝跡に切られ、第219・220号住居跡と河川跡を切っている。調査区内では、若干北東から南西方向に向いて直線的な流路をとっている。本溝跡の北側延長部分は、北側に近接する久下東遺跡H地点の第102号溝跡の可能性が高い。南側の延長部分については、南側に隣接するE1地点の調査区東側の溝群があるが、時期が異なるものもありその関係は不明である。

規模は、溝の上幅が125cm程度、下幅が25cm～45cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で55cmある。断面の形態は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、中位に平坦な面をもって二段に深くなっている。覆土中には、焼土粒子や炭化粒子を含んでいる。

遺物は、古代の土師器や須恵器の破片とともに、中世の龍泉窯系青磁碗（No 5）、山茶碗窯系片口鉢（No 1）、在地産片口鉢、縄目焼きの平瓦（No 7）の破片などが、覆土中から出土している。その他には、椀形滓を含む鉄滓が覆土中から多く出土している。



第138図 第49号溝跡出土遺物

第68表 第49号溝跡出土遺物観察表

1	山茶碗窯系片口鉢	A. 高台部径(13.5)。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 体部外面回転ナデ後下廻回転ケズリ。内面回転ナデ。底部外面回転系切り。高台部内外面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一灰白色。F. 高台部1/6。G. 還元焼成。内面はよく挫れている。H. 覆土中。
2	須恵器杯	A. 口縁部径(14.4)。器高4.1。底部径(5.8)。B. ロクロ成形。C. 口縁部～体部内外面回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 角閃石。白色粒。E. 外一灰黄色。内一浅黄色。F. 1/3。G. 還元不良。内外面粘土付着。H. 覆土中。
3	杯	A. 口縁部径(12.8)。器高2.6。底部径(5.8)。B. 粘土細積み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。D. 片岩粒。角閃石。白色粒。E. 内外一褐色。F. 口縁～体部1/6。G. 外面に黒炭あり。内外面に黒色付着物あり。H. 覆土中。

4	環	A. 口縁部径(12.1)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ後下平ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、黒色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 口縁~体部1/4。H. 覆土中。
5	磁器壺	B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。D. 黒色粒。E. 内外一オリーブ灰色。F. 口縁部破片。G. 外面に鋸歯弁文。H. 覆土中。
6	鉄釘	A. 長さ(4.0)、幅0.4、厚さ0.7、重さ(5.00g)。B. 鍛造。D. 鉄製。F. 破片。H. 覆土中。
7	平瓦	A. 厚さ2.3。B. 一枚造り。C. 内面糸切後ナデ。凸面曬目叩き。側面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 灰色。F. 破片。G. 還元焼成。H. 中世瓦。H. 覆土中。
8	鉄洋	A. 長さ10.0、幅10.8、厚さ3.4、重さ535.62g。F. 完形。G. 鉄分を含む。椀形洋。H. 覆土中。

第50a号溝跡(第137図、図版25)

G地点の調査区西側の東寄りに位置する。重複する墓壇の第500号土坑に切られ、第16号掘立柱建物跡を切っている。調査区内では、南北方向に向いて直線的な流路をとっている。溝の南端は削平されて途切れているが、その南側にある第50b号溝跡と繋がる同一の溝と考えられる。

規模は、溝の上幅が55cm前後、下幅が30cm程度の均一な幅で、確認面からの深さは20cm～28cmある。断面の形態は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体にしている。

遺物は、古墳時代前期～平安時代の土師器や須恵器の破片及び近世の陶磁器の破片が、覆土中から出土している。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係や出土遺物の様相から、中世後期～近世初頭頃と考えられる。



第139図 第50a号溝跡出土遺物

第69表 第50a号溝跡出土遺物観察表

1	土銅	A. 口縁部径(31.5)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後上位ヨコナデ、内面ヨコナデ。D. 石英、チャート。E. 内外一にぶい黄褐色。G. 外面に煤付着。F. 口縁部破片。H. 覆土中。
2	磁器壺	A. 高台部径4.0。B. ロクロ成形。高台部削り出し。C. 口縁部内外面回転ナデ。D. 黒色粒。E. 内外一浅黄褐色。F. 底部3/4。H. 覆土中。
3	かわらけ	A. 口縁部径11.7、器高3.0、底部径6.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁~体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 雲母、片岩粒、白色粒。E. 内外一褐色。F. 完形。H. 覆土中。
4	須恵器環蓋	A. 口縁部径(12.5)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。天井部外面回転ケズリ。D. 片岩粒、黒色粒。E. 外一灰色、内一灰白色。F. 1/4破片。G. 還元焼成。H. 覆土中。

第50b号溝跡(第140図)

G地点の調査区西側の東寄りに位置する。古墳時代後期の第381号土坑(恋河内2012)と重複し、それを切っている。調査区内では南北方向に向いてほぼ直線的な流路をとっている。溝の北端は削平されて途切れているが、その北側にある第50a号溝跡と繋がる同一の溝と考えられる。

本溝跡の南側延長については、調査区の南側に隣接するD1地点(恋河内2012)やA1地点(恋河内・の野2010)で検出されていないことから、おそらくD1地点の東端で東西方向に流路をとる第22号溝

跡の手前で途切れていたと思われる。

規模は、溝の上幅が35cm～53cm、下幅が20cm～35cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは10cm程度ある。断面の形態は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体としている。

遺物は、古代の土師器の環や甕の小破片が、覆土中から少量出土しただけである。

本溝跡の時期は、北側の第50a号溝跡と同一時期と考えられ、中世後期～近世初頭頃と考えられる。

第50b号溝跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量、径0.5～2cmのロームブロックを微量含む。）

第51号溝跡（第141図、図版25）

G地点の調査区西側の東寄りに位置する。重複する第194号住居跡や第503号土坑を切っている。調査区内では、やや南西から北東方向に向いてほぼ直線的な流路をとっている。本溝跡の北側延長や南側延長は、北側に隣接する久下東遺跡H地点、南側に隣接するD1地点・A1地点では確認されていない。

規模は、溝の上幅が45cm程度、下幅が15cm～25cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは最高で46cmある。断面の形態は、壁が直線的に立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。覆土は、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土を主体としている。

遺物は、古代の土師器や須恵器の破片が、覆土中から少量出土しただけである。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態から、中世後期以降と思われる。

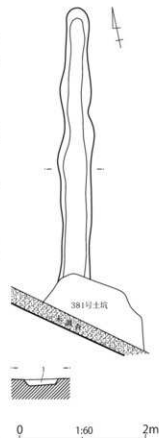
第52号溝跡（第142図）

G地点の調査区東側に位置する。重複する第219・220号住居跡や第49号溝跡を切っている。調査区内では、若干北東から南西方向に向いて直線的な流路をとっている。本溝跡の北側延長部分は、北側に近接する久下東遺跡H地点の第102号溝跡付近になるが明確ではない。南側の延長部分については、南側に隣接するE1地点の調査区東側の溝群があるが、時期が異なる溝もあり、その関係は不明である。

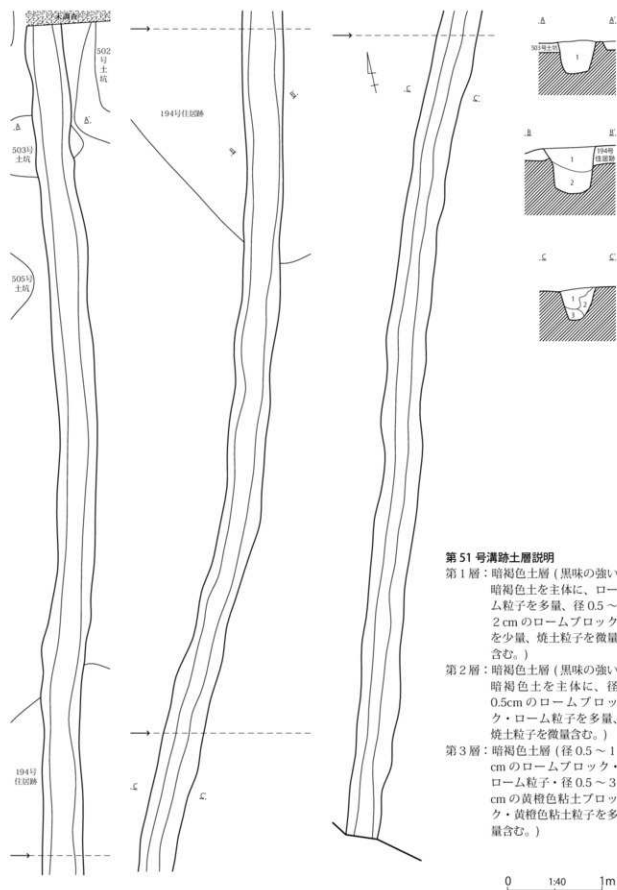
規模は、北側は第49号溝跡と重複しているためよくわからないが、南側では溝の上幅が50cm前後、下幅が20cm～35cmの比較的均一な幅になっている。確認面からの深さは、北側で40cm、南側で20cmある。断面の形態は、壁が直線的に傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。覆土は、ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・白色粒子・小礫等を含む暗褐色土を主体としている。

遺物は、古代の土師器や須恵器の破片が、覆土中から少量出土している。土器以外では、椀型鉄片が1個出土している。

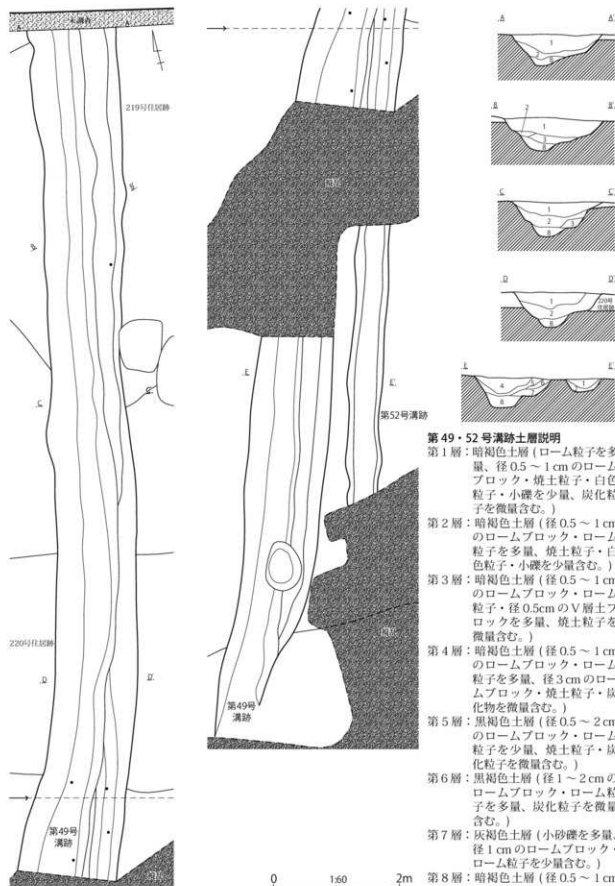
本溝跡の時期は、遺構の重複関係や覆土の状態から、中世後期以降と思われる。



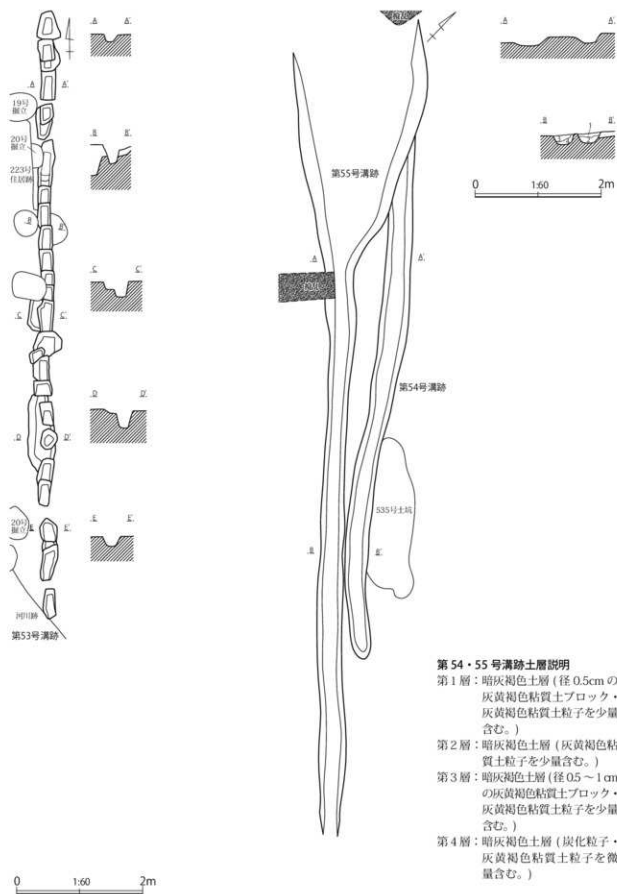
第140図 第50b号溝跡



第141図 第51号溝跡



第142図 第49・52号溝跡



第143図 第53・54・55号溝跡

第53号溝跡（第143図、図版25）

G地点の調査区東側の中央付近に位置する。重複する第19・20号掘立柱建物跡や第223号住居跡を切っている。調査区内では、南北方向に向いて直線的な流路をとっている。本遺構は、長方形の掘り込みが連続したり、複数カ所途切れた形態であることから、溝の掘削途中の段階のものか、あるいは柵列の可能性が高いと考えられる。

規模は、全長9.50mを測り、上幅が20cm程度、下幅が13cm程度の比較的均一な幅で、確認面からの深さは10cm～30cmある。断面の形態は、壁が直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。

遺物は、覆土中から平安時代前期頃の土師器の小破片が5片出土しただけである。

本溝跡の時期は、遺構の重複関係から、中世以降の可能性が高いと思われる。

第54号溝跡（第143図、図版25）

G地点の調査区東側の中央付近に位置する。重複する第55号溝跡に切られ、第535号土坑を切っている。古墳時代の河川跡の北東側斜面にあり、河川跡に沿って北西～南東方向に向いて直線的な流路をとっていることから、河川跡と関係する溝跡と思われる。本溝跡の南東端は、途切れている。

規模は、上幅が45cm前後、下幅が20cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは18cmある。断面の形態は、壁が直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。覆土は、灰黄褐色粘質土を含む暗灰褐色土を主体にしている。

遺物は、覆土中から古代の土師器の破片が少量出土しただけである。

本溝跡の時期は、河川跡との関係から、古墳時代以降の可能性が考えられる。

第55号溝跡（第143図、図版25）

G地点の調査区東側の中央付近に位置する。重複する第54号溝跡を切っている。古墳時代の河川跡の北東側斜面にあり、河川跡に沿って北西～南東方向に向いて直線的な流路をとっていることから、河川跡と関係する溝跡と思われる。本溝跡の北西端と南東端は、いずれも削平されている。

規模は、南東側が上幅40cm前後・下幅20cm前後の均一な幅で、北西側は上幅が最大210cm・下幅174cmで幅が広がっている。確認面からの深さは、最高で15cmある。断面の形態は、壁が直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。覆土は、灰黄褐色粘質土を含む暗灰褐色土を主体にしている。

遺物は、覆土中から古代の土師器や須恵器の破片が少量出土しただけである。

本溝跡の時期は、河川跡との関係から、古墳時代以降の可能性が考えられる。

第56号溝跡（第144図）

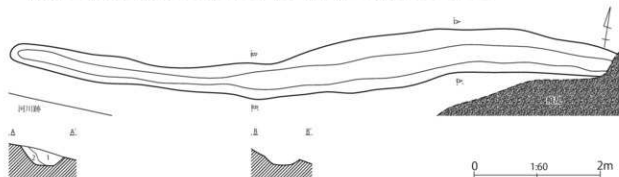
G地点の調査区中央部の南側に位置する。古墳時代の河川跡の北側斜面にあり、河川跡に沿って東西方向にやや蛇行した流路をとっていることから、河川跡と関係する溝跡と思われる。本溝跡の西端は途切れており、東端は後世の掘削によって切られている。

規模は、西側半分が上幅40cm程度・下幅15cm程度の均一な幅で、東側半分は上幅50cm～83cm・下幅

20cm～35cmで幅が広がっている。確認面からの深さは、最高で30cmある。断面の形態は、壁が直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦をなす逆台形である。覆土は、ロームブロックやローム粒子を含む褐色土を主体にしている。

遺物は、覆土中から古代の土師器や須恵器の破片が少量出土しただけである。

本溝跡の時期は、河川跡との関係から、古墳時代以降の可能性が考えられる。



第144図 第56号溝跡

第56号溝跡土層説明

第1層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、径0.5～3cmのロームブロックを多量、焼土粒子を少量含む。）

第2層：褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土の混合土を主体に、ロームブロックを多量含む。）

6. 河川跡

河川跡（第145図、図版26）

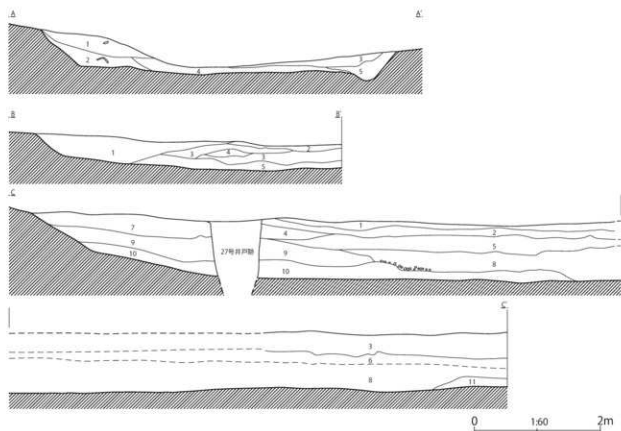
G地点の調査区南側半分に位置する。重複する第225・226号住居跡を切り、第20号掘立柱建物跡と第26～34号井戸跡に切られている。調査区内での流路は、北西から南東方向に向いているが、北西端は大きくヘアピンカーブ状に南側に湾曲して流路を変えており、その延長は南側に隣接するE1地点（恋河内2012）で検出されている。さらにその延長は、E1地点の南側で大きく湾曲して西側のA1地点（恋河内・的野2010）から連続するA2地点（本書第三章）の河川跡に蛇行して繋がるものと思われる（第27図）。南東側の延長については、東側に隣接する第3地点（松本・町田2002）の南側を通り、さらに東側のC4地点（恋河内2018）やB1地点（恋河内・的野2010）の河川跡に繋がり、集落が立地する東西方向に帯状に延びる微高地に沿って東流するものと推測される（第3図）。

規模は、河川跡の上幅が13m～16m、下幅が2.5m～5.3mある。確認面からの深さは1m程度あり、弥生時代の倒木を含む青灰色粘土層を一部掘り込んでいる。壁面は、緩やかに傾斜して立ち上がっているが、北側の微高地側の壁面に対して南側の低地側の壁面の立ち上がりは不鮮明な部分が多い。底面は、広く平坦である。覆土は、上半が灰褐色粘土、下半が黒褐色粘土を主体にしている。時期は、出土遺物の様相から、古墳時代前期と考えられ、中期の間には概ね埋没したものと推測される。

遺物は、土器、土製品、石製品、ガラス製品、木製品などが多く出土している（第147～163図、図版53～70）。これらの遺物は、河川跡北西端の流路が大きく湾曲する部分に集中しており、河川跡の東側ではあまり多くは見られない。本河川跡におけるこのような遺物の出土場所の偏在的傾向は、A地点やC地点でも認められることから、集落における廃棄場所の固定化も推測されるが、流水の停滞箇所との関係も考慮されよう。



第145図 河川跡(1)



第146図 河川跡(2)

河川跡土層説明

<A-A'>

- 第1層：暗褐色砂質土層
- 第2層：暗褐色粘質土層
- 第3層：黒褐色粘質土層
- 第4層：灰褐色粘質土層
- 第5層：砂礫層

<B-B'>

- 第1層：黒褐色粘質土層 (径0.5～2cmのロームブロック・暗褐色粘質土・細砂を含む。)
- 第2層：黒褐色粘質土層 (黒褐色粘質土を主体とする。)
- 第3層：灰色粘質土層 (細砂・鉄分を多量含む。)
- 第4層：灰褐色砂質土層 (鉄分を多量、細砂のブロックを少量含む。)
- 第5層：黒褐色粘質土層 (細砂・炭の互層。)

<C-C'>

- 第1層：灰色粘質土層 (上部は黒味の強い粘質土。粘性に富む。)
- 第2層：黄褐色砂質土層 (細砂を主体に、鉄分を少量含む。)
- 第3層：灰色粘質土層 (鉄分を多量含む。)
- 第4層：黄褐色粘質土層 (細砂・鉄分の混合土。)
- 第5層：灰褐色粘質土層 (鉄分を少量含む。)
- 第6層：灰褐色粘質土層 (細砂・鉄分を少量含む。)
- 第7層：黄白色粘質ローム層 (ロームブロック・ローム粒子の混合土を主体に、灰色粘質土を少量含む。)
- 第8層：黒褐色土層 (砂礫を主体とする。)
- 第9層：黒褐色泥炭層 (粘質土。)
- 第10層：黒褐色泥炭層 (粘質土・細砂を含む。)
- 第11層：黒褐色泥炭層 (細砂を主体とする。)

土器は、縄文時代中期後半から平安時代前期までのものが出土している（第147～159図）。縄文時代の土器は、中期後半の曽利式後半の深鉢の破片（No228）だけである。

弥生時代の土器は、少量ではあるが前期～後期のものが見られる。前期は、当地域の如來堂段階と思われる裏の破片（No229）だけで、A2地点の河川下で検出された弥生時代前期とされる倒木（第VI章第8節参照）との関係が目される。No230は、中期末～後期初頭頃と思われる櫛描文系の壺の破片である。後期は、樽式（No231～241）や吉ヶ谷式（No243～253）及び両者の折衷形（No242）と、東関東系（No212、256～264）が見られるが、これらの中には古墳時代前期に下るものもあると思われる。東関東系の土器は、胎土分析の結果では、以前の分析例（藤根・米田2019）も含めてその多くは本遺跡周辺の胎土材料を用いて製作された可能性が推測されているが、十王台式の可能性もあるNo264については、本遺跡周辺から離れた地域の胎土材料を用いて製作された搬入品の可能性が指摘されている（第VI章第10節参照）。

古墳時代の土器は、前期から後期後葉までのものが見られ、ある程度層位的な出土傾向が認められるようである。主体は前期後半の土器で、中期から後期になるほど量的に少なくなっている。注目される土器としては、畿内布留式の裏の破片（No98）と高坏（No151）がある。布留式の裏は、G地点以外でもC3地点の第103号住居跡・第130号住居跡や第172号土坑及びC4地点の河川跡からも同時期の破片が出土している。胎土分析の結果では、それらの大半は在地の本遺跡周辺で作られた可能性が高いと言われており（藤根・米田2018）、人の移動が推測される貴重な資料である（恋河内2018）。高坏は、在地の一般的な高坏に比べて精選されたきめ細かい胎土で、外面の調整が布留式の小形精製土器群に特徴的な「横方向の細筋沈線状のヘラミガキ」（田中2005）に類似したミガキによるものである。この他では、当地域では出土例が少ない有段口縁鉢（No182～184）が複数見られることや、特異な土器として二連あるいは三連になるとと思われる小形の埴（No214）も注目される。

土製品は、羽口（No271・272）や土錘（No274）の破片が少量出土しているが、これらの帰属する時期は明確ではない。

石製品は、打製石斧（No269）、石製紡錘車（No270）、石製模造品（No273）、管玉（No275・276）などが出土している。石製紡錘車は、形態的特徴から古墳時代中期前半頃のものと考えられ、上面と側面に格子状の線刻が見られる。管玉は、いずれも緑色凝灰岩製で、穿孔は片面穿孔である。

ガラス製品は、形状から管切りによる成形の可能性が推測される水色の小玉（No277）が1点出土しただけである。

木製品は、板状や角状の加工木のほか、器種のわかるものでは横鉾の未成品（No278）、機織具の緯打具（No280）、弓（No282）などが出土している。これらの木製品は、その樹種から「遺跡内及び周辺に生育していた樹木より、用途に応じた木材選択を行っていたと考えられ」「木材加工を遺跡内で行っていた可能性がある」（第VI節第5節）と言われていた。

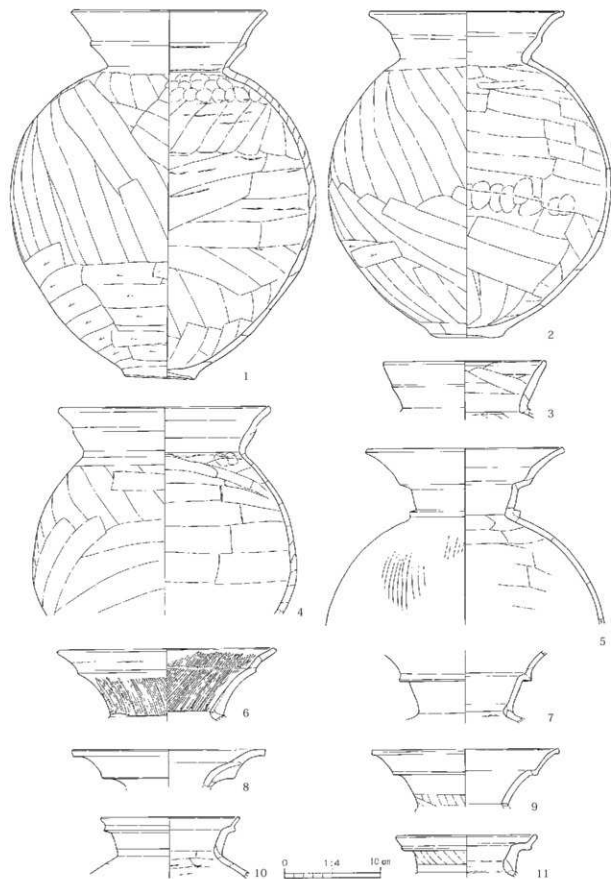
この他に、覆土中からオニグルミ・モモ・エゴノギなどの大形植物遺体も多く出土している（図版69）。この中のオニグルミやモモには、円形の穴が開く動物食痕が見られるものもある。

本河川跡の底面が一部掘り込んでいる青灰色粘土層には、放射性炭素年代測定により歴博の年代観で弥生時代中期～後期に比定される倒木や流木（第VI章第9節）を多く含んでおり、A2地点では弥生時代前期に比定される倒木（第VI章第8節）も埋没している（第6図）。No287の丸太の加工木は、放射

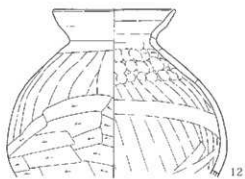
性炭素年代測定により弥生時代後期の年代値が示されている(第VI章第9節)が、河川跡下の青灰色粘土層に埋没していたものが洗い出されたのか、年代測定の暦年較正の年代値の精度的問題を考慮しなければならないのが、今後の検討を要する資料である。

第70表 河川跡出土遺物観察表

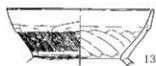
1	二重口鉢	A. 口縁部径 20.9, 器高 38.8, 底部径 7.4, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデの後下半ケズリ, 内面寛ナデ, 底部外面ナデ, D. 石英, 白色粒, E. 内外一淡赤褐色, F. 4/5, G. 胴部内面上部に指頭圧痕を残す, H. 河川西覆土上層。
2	二重口鉢	A. 口縁部径 20.6, 器高 34.4, 底部径 7.8, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデの中部部分的なケズリ, 内面寛ナデ, 底部外面ナデ, D. 片岩粒, 石英, 白色粒, E. 内外一明赤褐色, F. 4/5, G. 胴部外面に黒炭あり, 胴部内面に指頭圧痕を残す, H. 河川西覆土中層。
3	壺	A. 口縁部径 (17.2), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, D. 白色粒, E. 内外一淡褐色, F. 口縁部 1/2, G. 口唇部内外面に黒炭あり, 胴部内面に指頭圧痕を残す, H. 覆土中層。
4	二重口鉢	A. 口縁部径 (22.5), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデ, 内面寛ナデ, D. 角四石, 白色粒, 赤色粒, E. 内外一褐色, F. 上半 1/3, G. 胴部外面に黒炭あり, 胴部内面に指頭圧痕を残す, H. 覆土中。
5	二重口鉢	A. 口縁部径 (21.0), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ミガキ, 内面ナデ, D. 片岩粒, 角四石, 石英, E. 外一明赤褐色, 内一褐色, F. 上半 1/3, H. 覆土下層。
6	二重口鉢	A. 口縁部径 23.3, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデの後ミガキ, D. 角四石, 白色粒, E. 内外一淡黄褐色, F. 口縁部 1/5, G. 口縁部内外面に黒炭あり, H. 覆土中。
7	二重口鉢	B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, D. 石英, チャート, 白色粒, E. 外一淡褐色, 内一黄褐色, F. 頸部 1/5, G. 口縁部外面に黒炭あり, H. 覆土下層。
8	二重口鉢	A. 口縁部径 20.6, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, D. 赤色粒, 白色粒, 石英, E. 外一淡褐色, 内一褐色, F. 口縁部破片, H. 覆土下層。
9	二重口鉢	A. 口縁部径 19.7, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, D. 片岩粒, 石英, チャート, E. 外一淡褐色, 内一淡褐色, F. 口縁部 1/2, H. 覆土中。
10	二重口鉢	A. 口縁部径 14.8, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部内外面ナデ, D. 角四石, 白色粒, 石英, チャート, E. 内外一褐色, F. 口縁部のみ, H. 覆土中。
11	二重口鉢	A. 口縁部径 (15.0), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, D. 片岩粒, 角四石, 白色粒, 石英, チャート, E. 外一褐色, 内一暗灰褐色, F. 口縁部 1/3, H. 覆土中。
12	二重口鉢	A. 口縁部径 13.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部内外面ナデの後下半ケズリ, 内面ナデ, D. 角四石, 白色粒, 石英, E. 内外一褐色, F. 上半 4/5, H. 覆土下層。
13	複合口鉢	A. 口縁部径 15.5, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部外面ヨコナデの後下端ケズリ, 内面ヨコナデ, 頸部外面ハケ, 内面ナデ, D. 白色粒, 石英, チャート, E. 内外一褐色, F. 口縁部のみ, H. 覆土中。
14	複合口鉢	A. 口縁部径 (23.0), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, D. 白色粒, 石英, 角四石, E. 内外一褐色, F. 口縁部破片, H. 覆土中。
15	複合口鉢	A. 口縁部径 (14.9), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデの後ミガキ, 内面寛ナデ, D. 石英, 角四石, 赤色粒, 白色粒, E. 外一褐色, 内一黄褐色, F. 上半 3/4, H. 覆土中。
16	複合口鉢	A. 口縁部径 17.8, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリの後上半ナデ, 内面ナデ, D. 石英, チャート, 角四石, 赤色粒, E. 外一にぶい褐色, 内一黄褐色, F. 上半 1/2, H. 覆土中層下部。
17	複合口鉢	A. 口縁部径 17.9, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデの後ケズリ, 内面ナデ, D. 石英, 白色粒, E. 外一褐色, 内一にぶい褐色, F. 上半 1/2, H. 覆土中。
18	複合口鉢	A. 口縁部径 15.8, 器高 19.5, 底部径 5.7, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 頸部外面ハケ, 内面ナデ, 胴部外面ケズリの後ミガキ, 内面ナデ, 底部外面ケズリ, D. 石英, 白色粒, E. 外一にぶい褐色, 内一にぶい赤褐色, F. ほぼ完形, G. 器表面は荒れている, H. 覆土下層。
19	積み上げ口鉢	A. 口縁部径 (17.4), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 口唇部外面に木口状工具による刺突文を施す, 胴部内外面ナデ, D. チャート, 石英, 赤色粒, E. 外一褐色, 内一にぶい褐色, F. 上半 1/5, H. 覆土中。
20	積み上げ口鉢	A. 口縁部径 (14.8), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ, 頸部内外面ハケ, D. 片岩粒, チャート, 石英, E. 内外一明赤褐色, F. 口縁部 1/4, G. 内外面に黒炭あり, H. 覆土中。
21	積み上げ口鉢	A. 口縁部径 13.9, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ, 胴部外面ハケ, 内面ナデ, D. 雲母, 石英, 白色粒, E. 外一明赤褐色, 内一にぶい赤褐色, F. 上半 4/5, H. 覆土中。
22	複合口鉢	A. 口縁部径 (19.2), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ナデ, D. 角四石, 白色粒, 石英, E. 内外一にぶい褐色, F. 口縁部破片, H. 覆土下層。
23	壺	A. 口縁部径 (12.4), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部外面ヨコナデの後下半ケズリ, 内面ヨコナデ, 胴部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 片岩粒, 角四石, 白色粒, E. 外一赤褐色, 内一にぶい黄褐色, F. 上半 1/3, H. 覆土下層。
24	壺	A. 口縁部径 (14.2), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデ, 内面指ナデ, D. 片岩粒, 石英, 白色粒, E. 外一にぶい黄褐色, 内一黄褐色, F. 上半 1/3, H. 覆土下層。



第 147 図 河川跡出土遺物 (1)



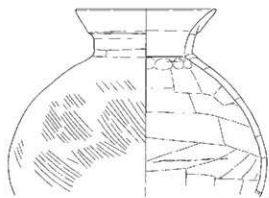
12



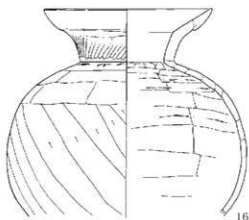
13



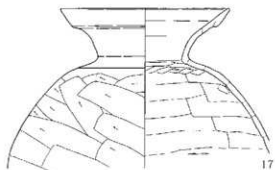
14



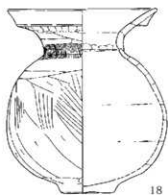
15



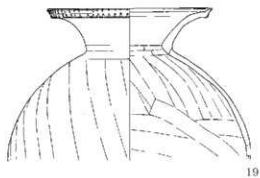
16



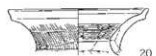
17



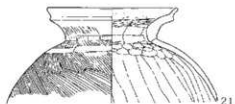
18



19



20



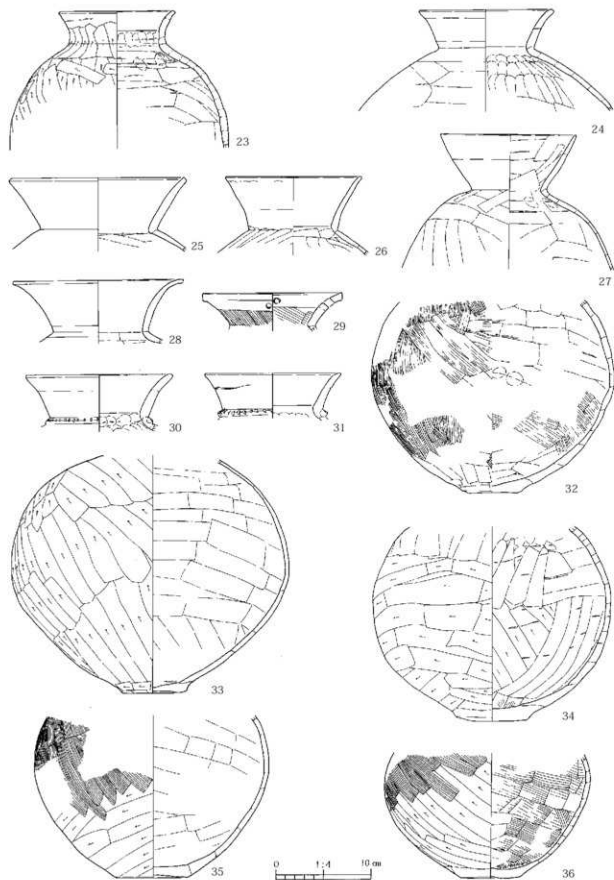
21



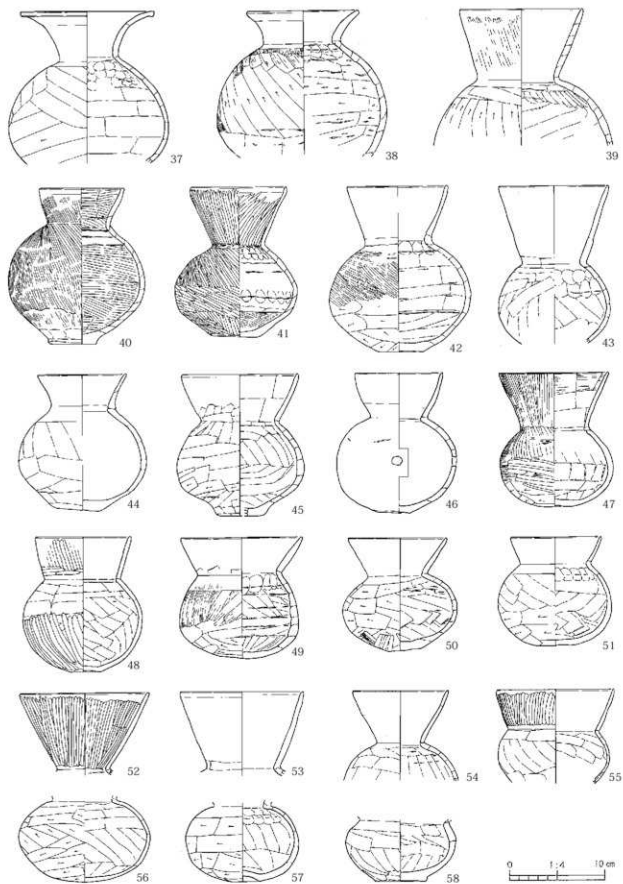
22



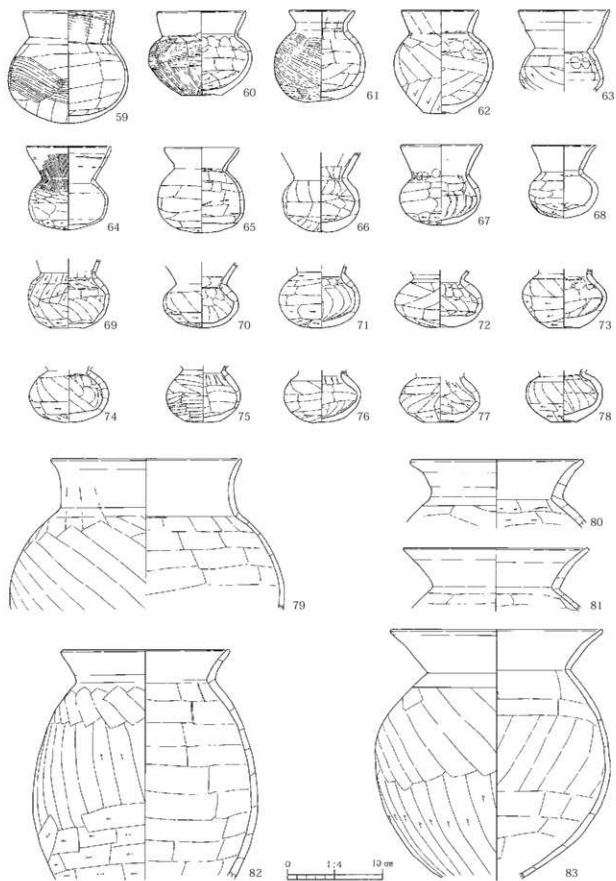
第 148 圖 河川跡出土遺物 (2)



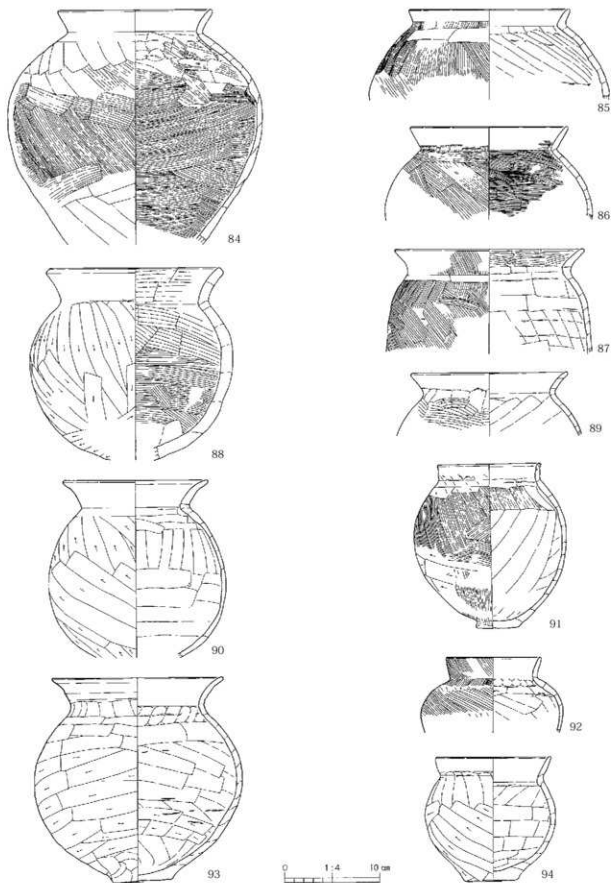
第 149 圖 河川跡出土遺物 (3)



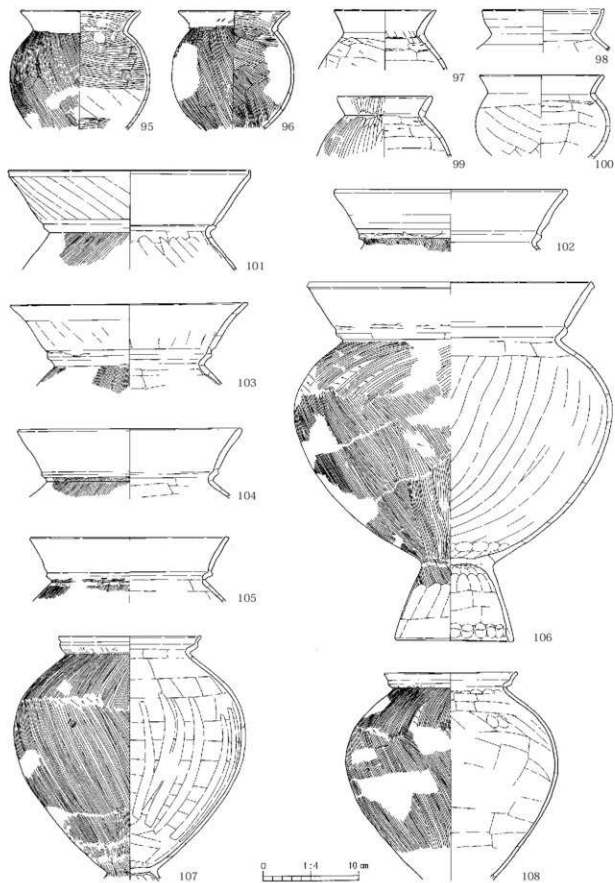
第150圖 河川跡出土遺物(4)



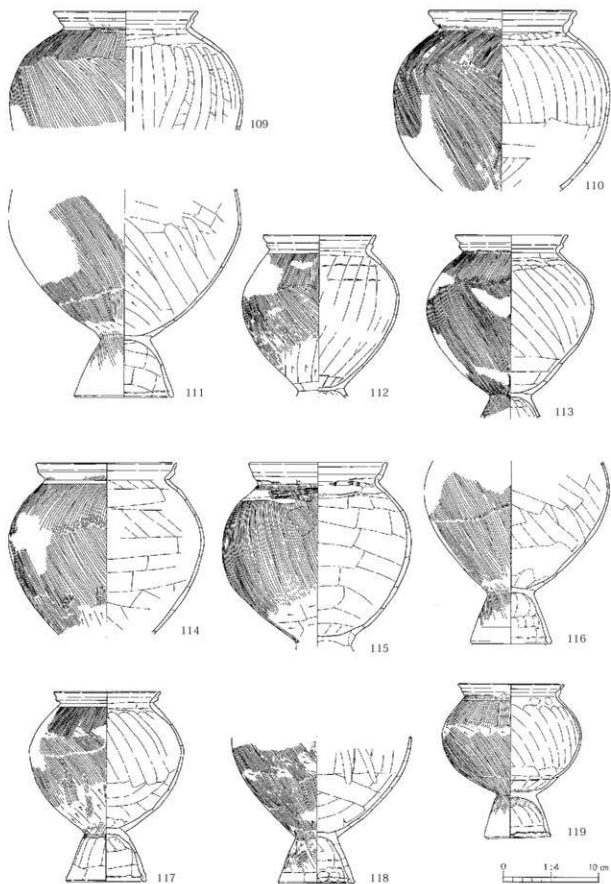
第151圖 河川跡出土遺物(5)



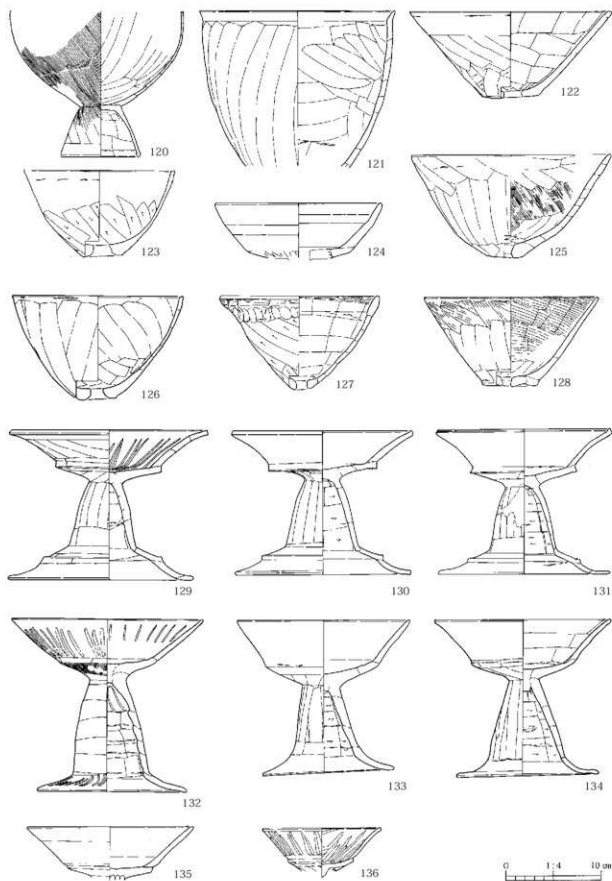
第 152 圖 河川跡出土遺物 (6)



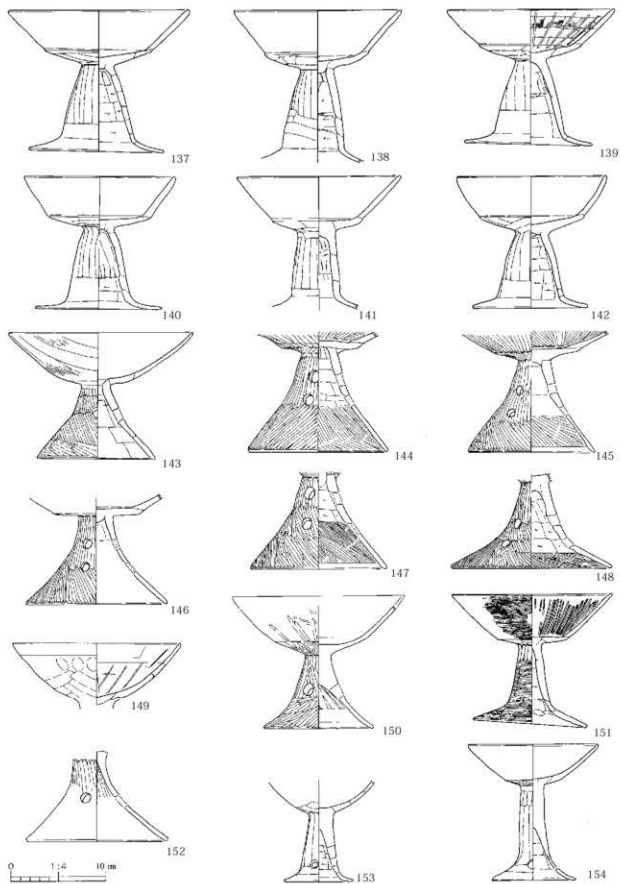
第153圖 河川跡出土遺物(7)



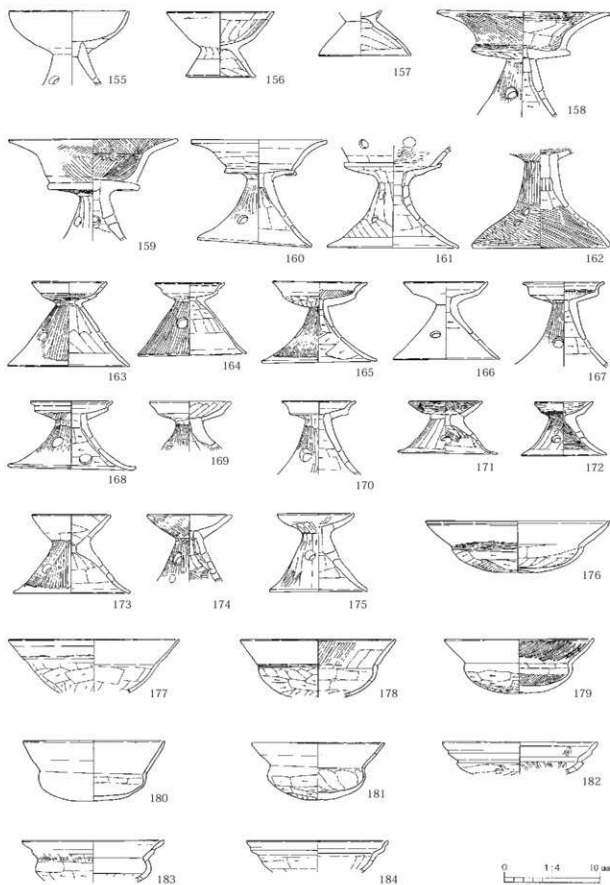
第 154 圖 河川跡出土遺物 (8)



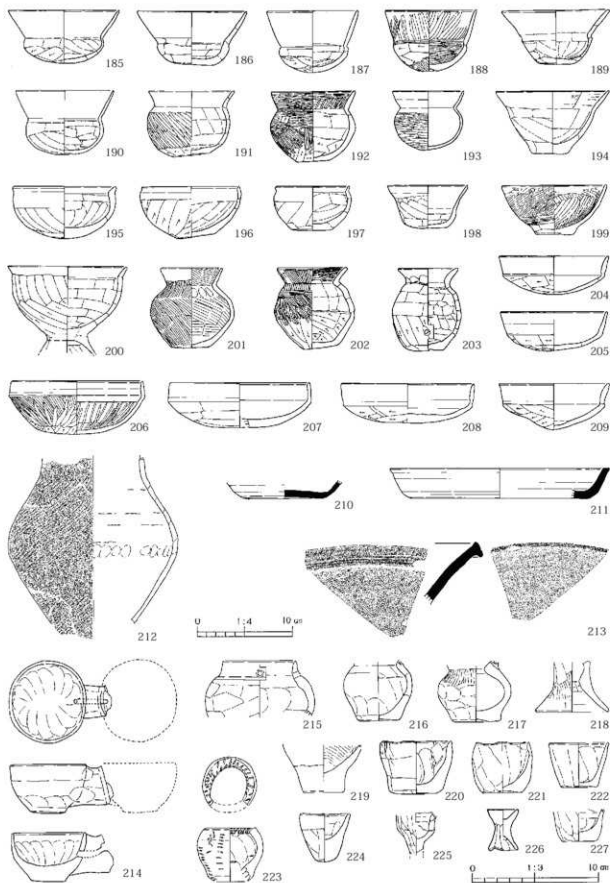
第155圖 河川跡出土遺物(9)



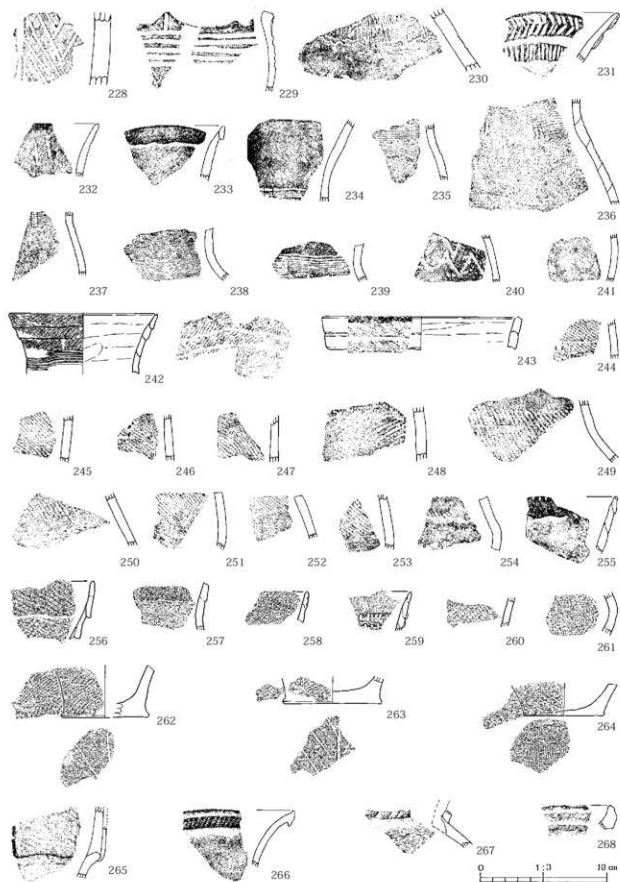
第156图 河川跡出土遺物(10)



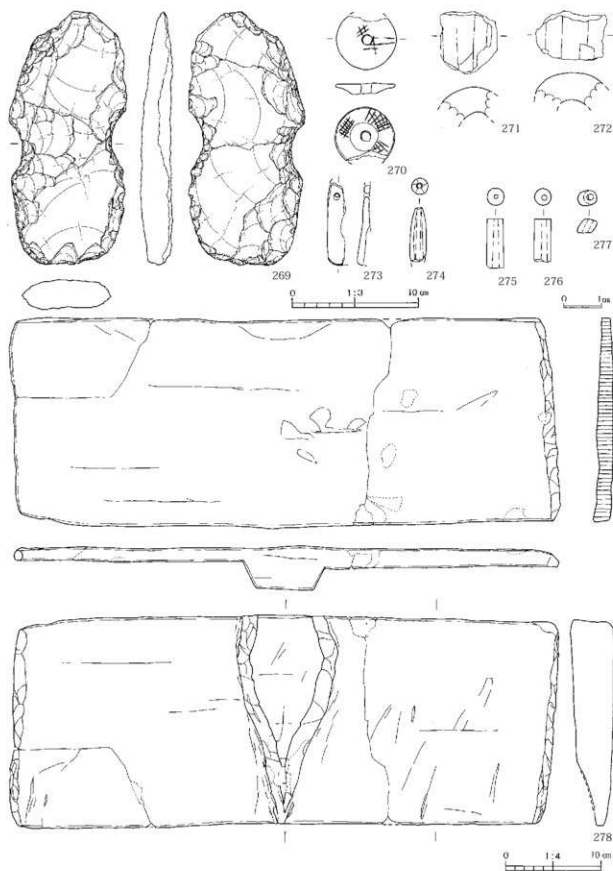
第157图 河川跡出土遺物(11)



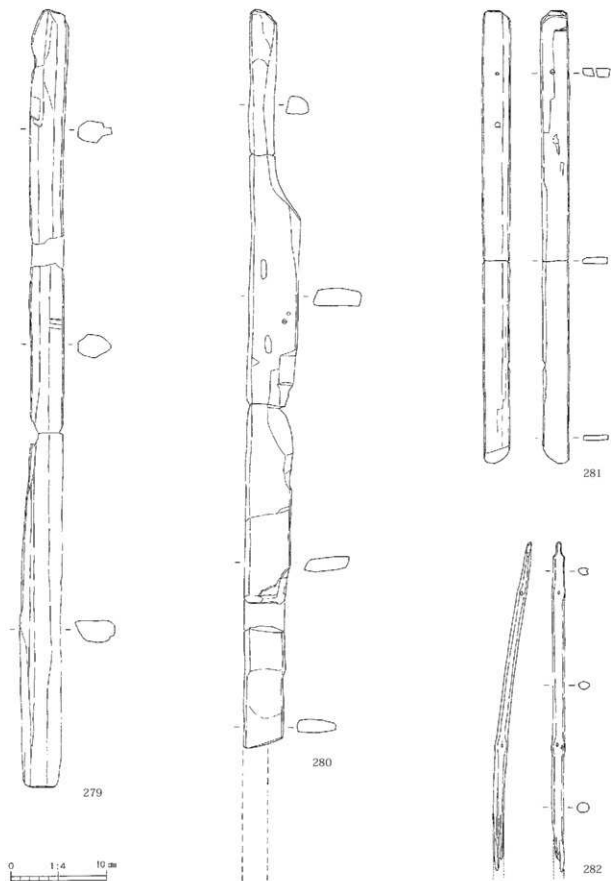
第158圖 河川跡出土遺物(12)



第159图 河川跡出土遺物(13)



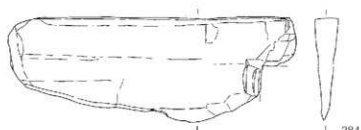
第160圖 河川跡出土遺物(14)



第 161 図 河川跡出土遺物 (15)



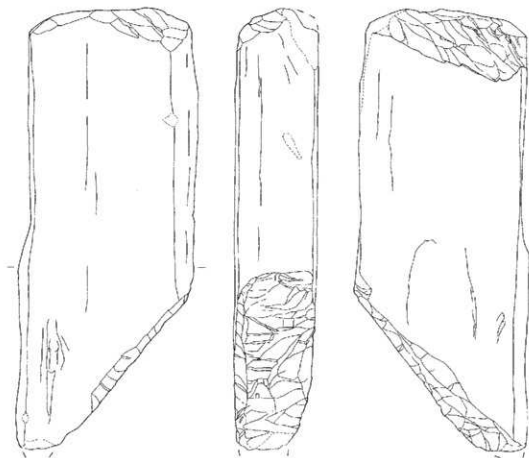
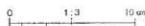
283



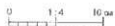
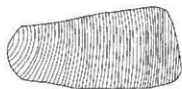
284



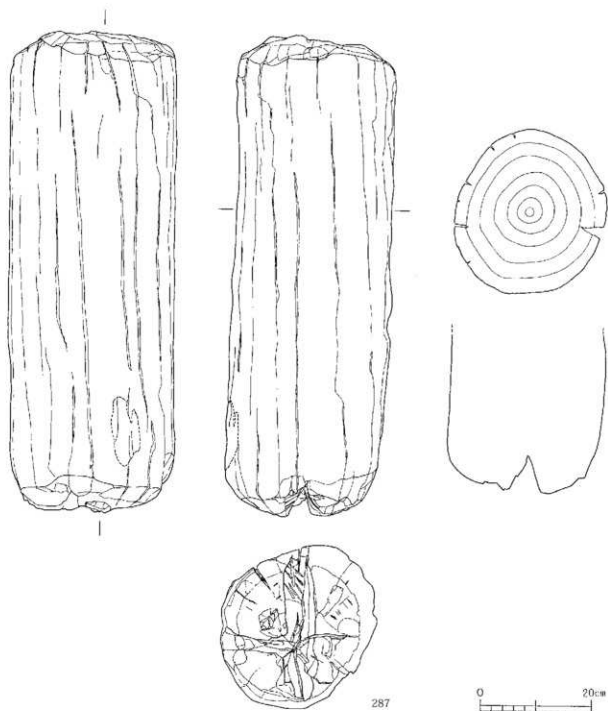
285



286



第 162 図 河川跡出土遺物 (16)



第163図 河川跡出土遺物 (17)

25	壺	A. 口縁部径 18.8. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部内外面ナデ. D. 角閃石、石英、白色粒. E. 内外一橙色. F. 口縁部 3/4. H. 覆土中.
26	大形直口壺	A. 口縁部径 (14.4). B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部内外面ナデ. D. チャート、石英、白色粒. E. 内外一黄橙色. F. 口縁部 1/4. H. 覆土中.
27	大形直口壺	A. 口縁部径 (14.3). B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部内外面ナデ. D. 角閃石、白色粒. E. 外一赤褐色. 内一明赤褐色. F. 上半 2/3. G. 胴部外面に黒炭あり. H. 覆土下層.
28	壺	A. 口縁部径 18.0. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. D. 角閃石、石英、白色粒. E. 内外一明赤褐色. F. 口縁部 3/4. H. 覆土中.

29	歯	A. 口縁部径 (14.8). B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ハケの後上半ヨコナデ. D. 石英、角閃石、白色粒. E. 内外一褐色. F. 口縁部 1/3. G. 口縁部に凹みあり. H. 覆土下層.
30	歯	A. 口縁部径 (15.6). B. 粘土組織み上げ. 頸部凸帯貼り付け. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 頸部凸帯キザミ. D. 石英、角閃石. E. 内外一にぶい褐色. F. 口縁部 1/3. G. 口縁部内面に黒斑あり. H. 覆土下層.
31	歯	A. 口縁部径 (14.2). B. 粘土組織み上げ. 頸部凸帯貼り付け. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 頸部凸帯キザミ. D. 角閃石、白色粒. E. 内外一褐色. F. 口縁部 1/4. H. 覆土中.
32	歯	A. 底部径 5.8. B. 粘土組織み上げ. C. 胴部外面ハケの後下半ナデ、内面ハケの後上半ナデ. 底部外面ケズリ. D. 片岩粒、石英、チャート. E. 外一にぶい褐色. 内一明赤褐色. F. 胴部 2/3. H. 覆土下層.
33	歯	A. 底部径 6.9. B. 粘土組織み上げ. C. 胴部外面ケズリ、内面ナデ. 底部外面ナデ. D. 赤色粒、白色粒、角閃石、石英、チャート. E. 外一明赤褐色. 内一明褐色. F. 胴部 4/5. G. 胴部外面に黒斑あり. H. 覆土中.
34	歯	A. 底部径 7.6. B. 粘土組織み上げ. C. 胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ケズリの後ナデ. 底部外面ケズリ. D. 赤色粒、白色粒、片岩粒、石英. E. 外一褐色. 内一にぶい黄褐色. F. 胴部 1/2. G. 胴部外面に黒斑あり. H. 覆土中.
35	歯	A. 底部径 7.6. B. 粘土組織み上げ. C. 胴部外面ケズリの後上半ハケ、内面ナデ. 底部外面ナデ. D. 黒色粒、白色粒、角閃石. E. 外一にぶい黄褐色. 内一褐色. F. 胴部 1/3. G. 胴部外面に黒斑あり. H. 覆土下層.
36	歯	A. 底部径 6.3. B. 粘土組織み上げ. C. 胴部外面ケズリの後上半ハケ、内面ハケ. 底部外面ケズリ. D. 片岩粒、角閃石、石英、チャート. E. 外一褐色. 内一にぶい褐色. F. 胴部 4/5. H. 覆土中.
37	歯	A. 口縁部径 14.1. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデ. D. 石英、角閃石、白色粒. E. 外一にぶい褐色. 内一にぶい褐色. F. 上半 2/3. H. 覆土中.
38	歯	A. 口縁部径 11.9. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ハケの後ケズリ、内面ケズリの後上半ナデ. D. 片岩粒、石英、角閃石、白色粒. E. 外一にぶい黄褐色. 内一灰褐色. F. 上半 2/3. G. 胴部外面に黒斑あり. H. 覆土下層.
39	中形直口壺	A. 口縁部径 12.5. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部外面ナデの後ミガキ、内面ヨコナデ. 胴部外面ケズリの後上端ナデ、内面ナデ. D. 角閃石、赤色粒、白色粒. E. 内外一明赤褐色. F. 上半 1/2. H. 覆土中.
40	歯	A. 口縁部径 9.0. 器高 16.5. 底部径 5.2. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ハケ. 胴部外面ハケの後下半ナデ、内面ハケの後上端ナデ. 底部外面ナデ. D. 片岩粒、赤色粒、白色粒. E. 内外一淡褐色. F. ほぼ完形. H. 覆土中.
41	中形直口壺	A. 口縁部径 10.2. 器高 15.9. 底部径 5.3. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ナデの後ミガキ. 胴部外面ミガキ、内面ハケの後上半ナデ. 底部外面ナデ. D. 赤色粒、白色粒. E. 内外一淡茶褐色. F. ほぼ完形. G. 底部外面に黒斑あり. H. 覆土中.
42	中形直口壺	A. 口縁部径 10.6. 器高 17.5. 底部径 4.7. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ケズリの後上半ミガキ. 内面笠ナデ. D. 角閃石、石英、片岩粒、白色粒. E. 外一にぶい褐色. 内一褐色. F. 5/6. G. 胴部外面に黒斑あり. H. 覆土下層.
43	中形直口壺	A. 口縁部径 (11.6). B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ナデ. 胴部内外面ナデ. D. 角閃石、石英、白色粒. E. 外一明赤褐色. 内一赤褐色. F. 1/3. G. 胴部外面に黒斑あり. H. 覆土中.
44	中形直口壺	A. 口縁部径 9.4. 器高 14.5. 底部径 4.5. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部内外面ナデ. 底部外面ナデ. D. 白色粒. E. 内外一にぶい褐色. F. ほぼ完形. G. 胴部外面に黒斑あり. H. 覆土中層.
45	中形直口壺	A. 口縁部径 12.4. 器高 15.0. 底部径 5.3. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部外面ナデ、内面笠ナデ. 胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面笠ナデ. D. 角閃石、石英、白色粒. E. 外一明赤褐色. 内一赤褐色. F. 4/5. G. 胴部外面に黒斑あり. H. 覆土中.
46	中形直口壺	A. 口縁部径 9.3. 器高 14.8. 底部径 3.9. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面不明. 内面ナデ. 底部外面ナデ. D. 片岩粒、白色粒. E. 内外一褐色. F. ほぼ完形. G. 器表面は荒れている. H. 覆土中.
47	中形直口壺	A. 口縁部径 11.6. 器高 14.1. 底部径 3.4. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部外面ハケ、内面ハケの後ナデ. 胴部内外面ハケの後ケズリ、内面ナデ. 底部外面ナデ. D. 赤色粒、角閃石、片岩粒. E. 外一にぶい黄褐色. 内一明赤褐色. F. ほぼ完形. H. 覆土中層.
48	中形直口壺	A. 口縁部径 10.1. 器高 14.3. 底部径 3.1. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部外面ナデの後ミガキ. 内面ナデ. 胴部外面ナデの後下半ミガキ. 内面笠ナデ. D. 角閃石、黒色粒、赤色粒. E. 内外一にぶい黄褐色. F. 4/5. H. 覆土中.
49	中形直口壺	A. 口縁部径 12.9. 器高 12.9. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面ハケの後下半ケズリ、内面笠ナデ. D. 角閃石、石英、白色粒. E. 外一にぶい赤褐色. 内一明赤褐色. F. ほぼ完形. G. 胴部外面に黒斑あり. 外面に黒斑あり. H. 覆土上層.
50	中形直口壺	A. 口縁部径 (10.5). 器高 12.0. 底部径 3.5. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ナデ. 胴部外面ケズリの後ミガキ. 内面笠ナデ. 底部外面ケズリ. D. 角閃石、片岩粒、白色粒. E. 外一明黄褐色. 内一黄褐色. F. 4/5. G. 胴部外面に黒斑あり. H. 覆土中.
51	中形直口壺	A. 口縁部径 9.5. 器高 11.5. 底部径 3.6. B. 粘土組織み上げ. C. 口縁部内外面ヨコナデ. 胴部外面上半ナデ下半ケズリ、内面ナデ. 底部外面ケズリ. D. 角閃石、石英、白色粒. E. 内外一褐色. F. ほぼ完形. G. 胴部外面に黒斑あり. H. 覆土中.

52	中形直口壺	A. 口縁径 13.4. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデの後ミガキ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 口縁部 4/5. G. 口縁部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
53	中形直口壺	A. 口縁径 13.1. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ミガキ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一にぶい褐色、内一褐色。F. 口縁部 4/5. H. 覆土下層。
54	中形直口壺	A. 口縁径 10.1. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。胴部内外面ナデ。D. 角閃石、片岩粒、白色粒。E. 内外一褐色。F. 上半 4/5. H. 覆土下層。
55	中形直口壺	A. 口縁径 12.5. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ナデの後ミガキ、内面不明。D. 赤色粒、黒色粒、石英。E. 内外一にぶい褐色。F. 上半 3/4. G. 口縁部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
56	中形直口壺	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 胴部のみ。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
57	中形直口壺	A. 底部径 3.0. B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 外一褐色。内一にぶい赤褐色。F. 胴部のみ。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土上層。
58	中形直口壺	A. 底部径 5.5. B. 粘土組織み上げ。C. 胴部内外面ナデ、底部外面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一赤褐色。F. 胴部のみ。H. 覆土中。
59	中形直口壺	A. 口縁径 9.6. 器高 11.9. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ナデの後中位ハケ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 4/5. G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
60	小形直口壺	A. 口縁径 (9.4). 器高 8.9. 底部径 4.3. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面木口状工具によるナデ、内面ケズリの後上半ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、チャート、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. 3/4. H. 覆土中。
61	小形直口壺	A. 口縁径 (7.0). 器高 9.8. 底部径 3.1. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面木口状工具によるナデ、内面寛ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、石英、赤色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 4/5. G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
62	小形直口壺	A. 口縁径 (8.1). 器高 10.9. 底部径 3.4. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ナデ、内面ヨコナデ。胴部外面上半ナデ下平ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、片岩粒、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土下層。
63	小形直口壺	A. 口縁径 9.3. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半ナデ下平ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 上半 4/5. G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
64	小形直口壺	A. 口縁径 9.0. 器高 8.9. B. 粘土組織み上げ。C. 口唇部内外面ヨコナデ。口縁部外面ハケ、内面ナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 完形。G. 器表面は荒れている。H. 覆土中。
65	小形直口壺	A. 口縁径 7.9. 器高 9.0. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、片岩粒、白色粒。E. 内外一褐色。F. 完形。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
66	小形直口壺	B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面寛ナデ。胴部外面上半ナデ下平ケズリ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 外一明黄褐色、内一明褐色。F. 胴部のみ。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
67	小形直口壺	A. 口縁径 8.6. 器高 8.5. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下平ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 外一褐色、内一にぶい褐色。F. 完形。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
68	小形直口壺	A. 口縁径 (6.8). 器高 7.6. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半ナデ下平ケズリ、内面観察不能。D. 角閃石、片岩粒、白色粒。E. 外一にぶい赤褐色、内一明赤褐色。F. 4/5. H. 覆土下層。
69	小形直口壺	A. 底部径 3.3. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面指ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、石英、雲母。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 胴部のみ。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
70	小形直口壺	B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下平ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒、雲母。E. 内外一明褐色。F. 胴部のみ。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
71	小形直口壺	B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下平ケズリ、内面指ナデ。D. 赤色粒、白色粒、石英。E. 内外一明赤褐色。F. 胴部のみ。H. 覆土中。
72	小形直口壺	A. 底部径 1.9. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 外一明黄褐色、内一にぶい黄褐色。F. 胴部のみ。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
73	小形直口壺	A. 底部径 3.3. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下平ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、チャート。E. 外一赤褐色、内一にぶい赤褐色。F. 胴部のみ。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
74	小形直口壺	A. 底部径 0.9. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下平ケズリ、内面指ナデ。D. 石英、赤褐色、白色粒。E. 外一明赤褐色、内一にぶい褐色。F. 胴部 4/5. G. 胴部外面に粗圧痕あり。H. 覆土中。
75	小形直口壺	A. 底部径 3.7. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下平ミガキ、内面指ナデ。底部外面ケズリ。D. 石英、白色粒。E. 外一明赤褐色、内一にぶい褐色。F. 胴部のみ。H. 覆土中。
76	小形直口壺	A. 底部径 2.1. B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。D. 雲母、赤色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 胴部のみ。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中層。
77	小形直口壺	A. 底部径 3.5. B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ナデの後下平ケズリ、内面指ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 外一にぶい赤褐色、内一暗赤褐色。F. 胴部のみ。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。

78	小形直口歯	A. 底部径 2.5. B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。底部外面ナデ。D. 石英。E. 外一褐色、内一明赤褐色。F. 胴部のみ。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
79	甕	A. 口縁部径 20.2. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 外一にぶい赤褐色、内一にぶい赤褐色。F. 口縁部 2/3. G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
80	甕	A. 口縁部径 18.4. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 口縁部 1/4. G. 口縁部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
81	甕	A. 口縁部径 19.7. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒、チャート。E. 内外一にぶい黄褐色。F. 口縁部 3/4. H. 覆土中。
82	甕	A. 口縁部径 17.9. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上端ナデ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、片岩粒。チャート。E. 外一灰褐色、内一赤褐色。F. 上半 1/2. G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
83	甕	A. 口縁部径 22.5. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒、赤色粒、片岩粒、チャート。E. 外一にぶい黄褐色、内一にぶい褐色。F. 上半 3/4. G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
84	甕	A. 口縁部径 16.7. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後部分にナデ、内面ハケ。D. 角閃石、石英、片岩粒。E. 内外一明赤褐色。F. 上半 1/4. G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
85	甕	A. 口縁部径 (17.0). B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後一部ナデ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、片岩粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 口縁部 1/5. G. 外面に煤付着。H. 覆土下層。
86	甕	A. 口縁部径 (16.7). B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ハケ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 口縁部 1/4. H. 覆土中。
87	甕	A. 口縁部径 (20.0). B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ハケ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D. 白色粒、石英、片岩粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 上半 1/3. G. 外面に煤付着。H. 覆土下層。
88	甕	A. 口縁部径 (18.7). B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ケズリ、内面ハケ。D. 角閃石、白色粒、赤色粒、石英。E. 内外一にぶい褐色。F. 上半 3/4. G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
89	甕	A. 口縁部径 (17.0). B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後一部ナデ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、片岩粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 口縁部 1/5. G. 外面に煤付着。H. 覆土下層。
90	甕	A. 口縁部径 15.3. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一にぶい赤褐色、内一褐色。F. 口縁部 3/4. G. 外面に煤付着。H. 覆土下層。
91	平底甕	A. 口縁部径 10.8. 器高 17.4. 底部径 4.6. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ハケの後下半ケナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一褐色。F. 3/4. G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
92	小形甕	A. 口縁部径 10.0. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒、石英。E. 外一褐色、内一にぶい赤褐色。F. 上半のみ。G. 胴部外面に煤付着。H. 覆土中。
93	平底甕	A. 口縁部径 (18.1). 器高 21.7. 底部径 6.2. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面ナデの後中ケズリ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、白色粒、石英、片岩粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 5/6. G. 胴部外面に煤付着。H. 覆土中。
94	小形平底甕	A. 口縁部径 12.2. 器高 13.2. 底部径 5.6. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、白色粒、石英、チャート。E. 内外一にぶい褐色。F. ほぼ完形。G. 内面に黒斑あり。H. 覆土下層。
95	小形甕	A. 口縁部径 12.7. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。胴部内外面ハケ、内面ナデの後上半ハケ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. 1/3. G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
96	小形甕	A. 口縁部径 (11.8). B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。胴部内外面ハケ。D. 石英、白色粒。E. 外一黒褐色、内一にぶい褐色。F. 1/4. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
97	小形甕	A. 口縁部径 10.8. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、赤色粒。E. 内外一褐色。F. 上半のみ。H. 覆土下層。
98	丸底甕	A. 口縁部径 (13.0). B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡灰褐色、内一淡褐色。F. 口縁部 1/6. G. 布笠式。口縁部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
99	短頸甕	A. 口縁部径 10.1. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデの後ミガキ、内面ヨコナデ、胴部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一淡黄色。F. 上半のみ。H. 覆土中。
100	小形甕	A. 口縁部径 (13.2). B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 1/3. H. 覆土中。
101	山陰系口縁 S 字 甕	A. 口縁部径 25.7. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ナデ、内面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面指ナデ。D. 赤色粒、石英、チャート。E. 内外一灰白色。F. 口縁部 4/5. H. 覆土中。
102	山陰系口縁 S 字 甕	A. 口縁部径 24.8. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D. 片岩粒、石英、白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 口縁部 3/4. H. 覆土下層。
103	山陰系口縁 S 字 甕	A. 口縁部径 (25.2). B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ナデの後内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。D. 赤色粒、角閃石、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. 口縁部 1/3. H. 覆土中。

104	山陰系口縁S字付費	A. 口縁部径 23.7. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面篋ナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. 口縁部の。H. 覆土中。
105	山陰系口縁S字付費	A. 口縁部径 21.1. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面篋ナデ。D. 片岩粒、角閃石、赤色粒、石英、白色粒。E. 内外一にぶい黄褐色。F. 口縁部 4/5. H. 覆土中。
106	山陰系口縁S字付費	A. 口縁部径 30.6. 器高 37.9. 台端部径 12.5. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面指ナデ。上部外面ナデの後上半ハケ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、赤色粒、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 4/5. G. 胴部外面煤付着。台部の内面に砂付着。H. 覆土中。
107	S字状口縁台付費	A. 口縁部径 15.1. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面篋ナデの後指ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一にぶい黄褐色。F. 4/5. G. 胴部外面煤付着。H. 覆土中。
108	S字状口縁台付費	A. 口縁部径 14.1. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ナデ。D. 角閃石、白色粒。E. 外一暗赤褐色、内一黒褐色。F. 4/5. G. 内外面に黒炭あり。H. 覆土中。
109	S字状口縁台付費	A. 口縁部径 15.3. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面篋ナデの後指ナデ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 外一にぶい黄褐色、内一黄褐色。F. 上半 1/2. G. 胴部外面煤付着。内外面に黒炭あり。H. 覆土中。
110	S字状口縁台付費	A. 口縁部径 15.8. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面指ナデの後下半篋ナデ。D. 角閃石、赤色粒、石英、白色粒。E. 内外一浅黄褐色。F. 上半 1/2. G. 胴部外面煤付着。H. 覆土中。
111	S字状口縁台付費	A. 台端部径 10.6. B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリの後ハケ、内面ナデの後下半ケズリ。上部外面ナデの後上半ハケ、内面ナデ。D. 片岩粒、角閃石、石英、白色粒。E. 内外一にぶい黄褐色。F. 下半 1/3. G. 胴部外面煤付着。H. 覆土下層。
112	S字状口縁台付費	A. 口縁部径 11.9. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面篋ナデ。D. 角閃石、石英。E. 外一褐色。F. 4/5. H. 覆土中。
113	S字状口縁台付費	A. 口縁部径 11.9. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面篋ナデ。上部外面ナデの後ハケ、内面指ナデ。D. 角閃石、黒色粒、石英。E. 内外一にぶい褐色。F. 4/5. G. 胴部外面煤付着。底部内外面に砂付着。H. 覆土中。
114	S字状口縁台付費	A. 口縁部径 14.9. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面ナデ。D. チャート、石英、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 上半 1/2. G. 胴部外面煤付着。H. 覆土中。
115	S字状口縁台付費	A. 口縁部径 14.7. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面篋ナデ。D. 片岩粒、角閃石、石英、白色粒。E. 外一褐色、内一にぶい赤褐色。F. 上半 4/5. G. 胴部外面煤付着。H. 覆土下層。
116	S字状口縁台付費	A. 台端部径 8.6. B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ハケ、内面ナデ。上部外面ナデの後上半ハケ、内面ナデ。D. 片岩粒、角閃石、白色粒。E. 外一にぶい明褐色、内一明赤褐色。F. 下半 1/3. G. 胴部外面煤付着。H. 覆土下層。
117	S字状口縁台付費	A. 口縁部径 (11.3). 器高 (20.0). 台端部径 8.5. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面指ナデの後上半指ナデ。上部外面ハケの後下半ナデ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. 上半 1/4. 下半 1/2. G. 底部内外面に砂付着。器形は復元。H. 覆土中。
118	S字状口縁台付費	A. 台端部径 8.2. B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ケズリの後ハケ、内面篋ナデ。上部外面ナデの後上半ハケ、内面指ナデ。D. 片岩粒、石英、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 下半 3/4. G. 胴部外面に黒炭あり。底部内外面に砂付着。H. 覆土下層。
119	S字状口縁台付費	A. 口縁部径 11.2. 器高 16.4. 台端部径 7.0. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ハケ、内面指ナデ。上部外面ナデの後上半ハケ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 完形。G. 口縁部→胴部上半煤付着。底部と台部の内面に砂付着。H. 覆土中。
120	S字状口縁台付費	A. 台端部径 8.5. B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面ハケ、内面篋ナデ。上部外面ナデの後上半ハケ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 外一にぶい褐色、内一灰黄褐色。F. 下半 1/2. G. 胴部外面に黒炭あり。H. 覆土中。
121	大形甌	A. 口縁部径 (20.6). B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D. 片岩粒、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. 上半 1/5. G. 内外面に黒炭あり。H. 覆土中。
122	小形甌	A. 口縁部径 21.3. 器高 9.2. 底部径 6.0. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 片岩粒、角閃石、石英、白色粒。E. 外一黒褐色、内一褐色。F. 完形。G. 内外面に黒炭あり。H. 覆土下層。
123	小形甌	A. 口縁部径 16.0. 器高 9.2. 底部径 4.0. B. 粘土組織み上げ。C. 体部内外面ナデの後下半ケズリ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
124	小形甌?	A. 口縁部径 (17.6). B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 1/3. G. 外面に黒炭あり。H. 覆土中。
125	小形甌	A. 口縁部径 (21.1). 器高 10.8. 底部径 4.1. B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ハケの後ナデ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 内外一褐色。F. 1/5. G. 外面に黒炭あり。H. 覆土中。
126	小形甌	A. 口縁部径 18.0. 器高 11.0. 底部径 3.9. B. 粘土組織み上げ。C. 内外面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 外一褐色、内一にぶい褐色。F. 4/5. G. 内外面に黒炭あり。H. 覆土中。

127	小形 瓶	A. 口縁径 17.0、器高 10.0、底部径 2.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 石英、赤色粒、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 完形。G. 内外面に黒斑あり。口縁部外面下に指頭旺盛を残す。H. 覆土中。
128	小形 瓶	A. 口縁径 18.5、器高 9.4、底部径 6.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ハケの後ナデ、内面ハケ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一あわい褐色、内一褐色。F. 4/5。G. 内面に黒斑あり。H. 覆土中。
129	有段 高 環	A. 口縁部径 21.0、器高 15.8、脚端部径 19.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ナデの後口唇部ヨコナデ、内面ナデの後放射状暗文。脚柱部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. ほぼ完形。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
130	有段 高 環	A. 口縁部径 19.1、器高 15.2、脚端部径 18.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。環部内外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚柱部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 雲母、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. 4/5。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
131	有段 高 環	A. 口縁部径 (18.6)、器高 15.2、脚端部径 18.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。環部内外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚柱部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 雲母、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 3/4。G. 脚端部内外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
132	高 環	A. 口縁部径 20.3、器高 18.2、脚端部径 15.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデの後放射状暗文。環部外面ハケ。脚柱部内外面ナデ。脚端部外面ヨコナデの後放射状暗文。内面ヨコナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
133	高 環	A. 口縁部径 (18.2)、器高 16.4、脚端部径 (13.9)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。環部外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. チャート、石英、白色粒。E. 外一褐色、内一明赤褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
134	高 環	A. 口縁部径 18.6、器高 16.6、脚端部径 (15.1)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。環部外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一にふい褐色。F. 4/5。H. 覆土中。
135	高 環	A. 口縁部径 17.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部-環部内外面ヨコナデ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一暗茶褐色、内一淡茶褐色。F. 環部 2/3。H. 覆土下層。
136	高 環	A. 口縁部径 (12.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデの後ミガキ。環部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 環部 1/2。H. 覆土中。
137	高 環	A. 口縁部径 19.2、器高 15.0、脚端部径 (14.4)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。環部外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 片岩粒、雲母、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. ほぼ完形。G. 脚端部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
138	高 環	A. 口縁部径 17.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。環部外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. 3/4。H. 覆土下層。
139	高 環	A. 口縁部径 17.7、器高 14.4、脚端部径 13.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデの後放射状暗文。環部外面ナデ。脚柱部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. ほぼ完形。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
140	高 環	A. 口縁部径 (16.0)、器高 14.0、脚端部径 (13.4)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。環部外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面較りの後下ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
141	高 環	A. 口縁部径 17.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。環部外面ナデ。脚柱部内外面ヨコナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、雲母、白色粒。E. 外一褐色、内一にふい褐色。F. 3/4。G. 口縁部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
142	高 環	A. 口縁部径 (15.9)、器高 13.9、脚端部径 12.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。環部外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 石英、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 3/4。G. 内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
143	高 環	A. 口縁部径 (19.5)、器高 13.5、脚端部径 12.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ミガキ、内面ナデ。環部外面ナデ。脚柱部外面ミガキ、内面荒ナデ。D. 石英、雲母、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 3/4。G. 脚部穿孔は 4カ所。H. 覆土下層。
144	高 環	A. 脚端部径 14.8。B. 粘土組織み上げ。C. 環部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ハケの後上半ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 脚部のみ。G. 脚部穿孔は縦 2 個 1 組で 3ヶ所。H. 覆土中。
145	高 環	A. 脚端部径 13.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ミガキ。環部外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ハケの後上半ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 環部 3/4。脚部完形。G. 脚部穿孔は縦 2 個 1 組で 3ヶ所。H. 覆土中。
146	高 環	A. 脚端部径 (10.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面観察不能。脚部外面ミガキ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 脚部 1/2。G. 脚部穿孔は縦 2 個 1 組で 3ヶ所。環部外面は荒れている。H. 覆土下層。
147	高 環	A. 脚端部径 9.4。B. 粘土組織み上げ。C. 脚部外面ミガキ、内面ハケの後上半ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一明茶褐色、内一暗茶褐色。F. 脚部のみ。G. 脚部穿孔は縦 2 個 1 組で 3ヶ所。脚端部内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
148	高 環	A. 脚端部径 12.0。B. 粘土組織み上げ。C. 脚部外面ミガキ、内面ハケの後上半ケズリ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一茶褐色、内一暗茶褐色。F. 脚部のみ。G. 脚部穿孔は縦 2 個 1 組で 3ヶ所。H. 覆土中。

149	高 環	A. 口縁部径 (17.8)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。環部外面ナデの後壁ナデ、内面窪ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 環部 1/3。G. 環部内面に黒斑あり。H. 覆土中。
150	高 環	A. 脚端部径 11.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ハケの後ミガキ。内面不明。環部外面ハケの後ミガキ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 環部 1/4。脚部 3/4。G. 脚部穿孔は 3ヶ所。H. 覆土中。
151	高 環	A. 口縁部径 (16.9)。器高 14.1。脚端部径 12.1。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面細いミガキ。環部外面ナデ。脚部外面細いミガキ。内面ケズリ。D. 粟母、白色粒。E. 内外一褐色。F. 4/5。G. 布留式。H. 覆土中。
152	高 環	A. 脚端部径 15.0。B. 粘土組織み上げ。C. 脚部外面ミガキ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 脚部のみ。G. 脚部穿孔は 3ヶ所。H. 覆土中。
153	高 環	A. 脚端部径 7.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。脚柱部外面ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 角閃石、石英、赤色粒。E. 外一褐色、内一にぶい褐色。F. 口唇部欠損。G. 脚部穿孔は 3ヶ所。H. 覆土中。
154	高 環	A. 口縁部径 (13.8)。器高 14.4。脚端部径 8.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデの後ミガキ。環部外面ナデ。脚柱部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 3/4。G. 脚部穿孔は 3ヶ所。H. 覆土下層。
155	高 環	A. 口縁部径 (12.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 内外面とも摩滅のため観察不能。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 上半 1/2。G. 脚部凹孔あり。H. 覆土中。
156	高 環	A. 口縁部径 11.4。器高 7.0。脚端部径 7.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。脚部内外面ナデ。D. 片岩粒、角閃石、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. ほぼ完形。G. 外面に黒斑あり。H. 覆土中。
157	高 環	A. 脚端部径 9.8。B. 粘土組織み上げ。C. 脚部内外面ナデ。D. 片岩粒、角閃石、石英、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 3/4。G. 脚部のみ。H. 覆土中。
158	高 環 状 台	A. 口縁部径 18.3。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ミガキ。環部内外面ミガキ。脚部外面ナデの後ミガキ、内面ケズリ。D. 片岩粒、角閃石、石英、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 上半のみ。G. 口縁部内外面に黒斑あり。脚部穿孔は 3ヶ所。H. 覆土下層。
159	高 環 状 台	A. 口縁部径 17.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ミガキ。環部内外面ミガキ。脚部内外面ナデ。D. 角閃石、白色粒、チャート。E. 内外一褐色。F. 上半のみ。G. 脚部穿孔は 3ヶ所。H. 覆土下層。
160	高 環 状 台	A. 口縁部径 14.4。器高 11.3。脚端部径 12.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。脚部外面ナデの後ミガキ、内面ナデ。D. 片岩粒、角閃石、白色粒、石英。E. 内外一褐色。F. 4/5。G. 内外面に黒斑あり。脚部に凹孔あり。H. 覆土中。
161	高 環 状 台	A. 脚端部径 (14.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ナデ、内面ミガキ。脚部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 片岩粒、角閃石、白色粒。E. 内外一褐色。F. 口縁部欠損。G. 口縁部に凹孔あり。脚部穿孔は縦 2個 1組で 3ヶ所。脚端部内外面に黒斑あり。H. 覆土中。
162	器 台	A. 脚端部径 11.4。B. 粘土組織み上げ。C. 環部内外面ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ケズリの後下平ハ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部欠損。G. 脚部穿孔は縦 2個 1組で 3ヶ所。H. 覆土中。
163	器 台	A. 口縁部径 (8.0)。器高 9.0。脚端部径 (13.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。器受部外面ケズリの後ヨコナデ。脚部外面ミガキ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 外一にぶい褐色、内一褐色。F. 1/4。G. 脚部穿孔は推定 3ヶ所。H. 覆土中。
164	器 台	A. 口縁部径 7.4。器高 7.8。脚端部径 11.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。器受部外面ケズリ。脚部外面ミガキ、内面ナデの後上端ケズリ・下半ヨコナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 器受 1/2 欠損。G. 脚部穿孔は 3ヶ所。H. 覆土中。
165	器 台	A. 口縁部径 10.0。器高 8.8。脚端部径 (12.3)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。器受部外面ケズリ。脚部外面ミガキ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 赤色粒、石英、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 4/5。G. 脚部穿孔は 3ヶ所。H. 覆土中。
166	器 台	A. 口縁部径 8.8。器高 8.2。脚端部径 (11.2)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。器受部外面不明。脚部外面ケズリの後下平ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. 2/3。G. 脚部穿孔は推定 3ヶ所。H. 覆土中。
167	器 台	A. 口縁部径 8.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。器受部外面ケズリの後ナデ。脚部外面ミガキ、内面ケズリ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. 上半 3/4。G. 脚部穿孔は 4ヶ所。H. 覆土中。
168	器 台	A. 口縁部径 8.7。器高 7.3。脚端部径 (13.6)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。脚部外面ケズリの後ミガキ。脚部外面ミガキ、内面ケズリ、脚端部内外面ヨコナデ。D. 角閃石、石英、チャート、白色粒。E. 内外一褐色。F. 2/3。G. 脚部穿孔は千鳥状に 6ヶ所。H. 覆土中。
169	器 台	A. 口縁部径 8.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ナデの後ミガキ。脚部外面ナデの後ミガキ、内面窪ナデ。D. 片岩粒、石英、白色粒。E. 外一にぶい褐色、内一にぶい褐色。F. 上半のみ。G. 脚部穿孔は 3ヶ所。H. 覆土中。
170	器 台	A. 口縁部径 (7.8)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。器受部外面ケズリ。脚部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 2/3。G. 脚部穿孔は 3ヶ所。H. 覆土中。
171	器 台	A. 口縁部径 7.8。器高 5.6。脚端部径 (10.5)。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。脚部外面ナデ、内面ハケ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 粟母、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. ほぼ完形。G. 脚部穿孔は 4ヶ所。H. 覆土下層。
172	器 台	A. 口縁部径 6.3。器高 5.7。脚端部径 9.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ケズリ。脚部内外面ハケ。脚端部内外面ヨコナデ。D. 角閃石、チャート、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. ほぼ完形。G. 脚部穿孔は 3ヶ所。H. 覆土中。

173	器 台	A. 口縁部径 8.4、器高 8.3、脚端部径 12.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ナデ。脚部外面ミガキ、内面ナデ。脚部内外面ヨコナデ。D. 角閃石、石英、チャート。E. 内外一にぶい黄褐色。F. 1/2。G. 脚部穿孔は3ヶ所。H. 覆土中。
174	器 台	A. 口縁部径 9.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデの後ミガキ、内面不明。脚部内外面ナデの後ミガキ、内面ナデの後下半ハケ。D. 雲母、石英、白色粒。E. 内外一褐色。F. 上半のみ。G. 脚部穿孔は縦2個1組で3ヶ所。H. 覆土中。
175	器 台	A. 口縁部径 8.2、器高 8.2、脚端部径 10.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。脚部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. 4/5。G. 脚部穿孔は3ヶ所。脚部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
176	小形 浅鉢	A. 口縁部径 19.4、器高 5.5、底部径 3.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上下端ミガキ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 外一褐色、内一にぶい褐色。F. 1/3。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
177	小形 浅鉢	A. 口縁部径 18.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ケズリ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一暗褐色。F. 1/2。H. 覆土下層。
178	小形 浅鉢	A. 口縁部径 16.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデの後ミガキ、胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 内外一褐色。F. 口縁部 1/3。H. 覆土中。
179	小形 浅鉢	A. 口縁部径 15.8、器高 5.7、底部径 1.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデの後内面ミガキ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデの後下半ミガキ。底部外面ケズリ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 外一明赤褐色、内一褐色。F. 完形。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
180	小形 浅鉢	A. 口縁部径 15.0、器高 6.3。B. 粘土組織み上げ。C. 器面摩擦のため、観察不能。D. 角閃石、白色粒。E. 外一明赤褐色、内一明褐色。F. 4/5。H. 覆土中。
181	小形 浅鉢	A. 口縁部径 14.1、器高 6.1、底部径 2.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一にぶい褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
182	有段口縁鉢	A. 口縁部径 16.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデの後内面ミガキ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデの後ミガキ。D. 角閃石、石英。E. 内外一褐色。F. 口縁 1/4。G. 内面摩擦。H. 覆土中。
183	有段口縁鉢	A. 口縁部径 15.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。D. 角閃石、石英、赤色粒、白色粒。E. 外一褐色、内一にぶい黄褐色。F. 口縁部 1/5。G. 外面赤彩。H. 覆土中。
184	有段口縁鉢	A. 口縁部径 15.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面笠ナデ。D. 雲母。E. 内外一明赤褐色。F. 口縁部 1/4。H. 覆土中。
185	小形 浅鉢	A. 口縁部径 11.8、器高 5.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. ほぼ完形。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
186	小形 浅鉢	A. 口縁部径 11.7、器高 5.7、底部径 4.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 雲母、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. ほぼ完形。G. 口縁部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
187	小形 鉢	A. 口縁部径 9.5。器高 6.5。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。D. 角閃石、赤色粒、白色粒。E. 外一褐色、内一にぶい褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
188	小形 鉢	A. 口縁部径 9.0。器高 6.4、底部径 1.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデの後ミガキ。胴部外面ケズリの後下半ミガキ、内面ナデの後ミガキ。底部外面ケズリ。D. 石英。E. 内外一褐色。F. 2/3。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
189	小形 鉢	A. 口縁部径 11.4、器高 5.7、底部径 3.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、石英、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 4/5。H. 覆土中。
190	小形 鉢	A. 口縁部径 10.4。器高 6.7、底部径 1.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面笠ナデ。底部外面ナデ。D. 角閃石、石英、赤色粒、白色粒。E. 外一明赤褐色、内一にぶい赤褐色。F. 1/2。H. 覆土中。
191	小形 鉢	A. 口縁部径 9.2、器高 7.0、底部径 3.7。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ミガキ、内面笠ナデ。底部外面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. ほぼ完形。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土中。
192	小形 鉢	A. 口縁部径 8.9、器高 7.4、底部径 3.4。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ミガキ。胴部外面ケズリの後ミガキ、内面ケズリの後上半ナデ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、角閃石、白色粒。E. 外一にぶい褐色、内一黒褐色。F. ほぼ完形。G. 胴部外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
193	小形 鉢	A. 口縁部径 7.6、器高 6.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後ミガキ、内面丁寧ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. ほぼ完形。H. 覆土中。
194	小形 鉢	A. 口縁部径 12.0、器高 5.5、底部径 3.8。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面笠ナデ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、角閃石、白色粒。E. 外一褐色、内一にぶい褐色。F. ほぼ完形。G. 胴部内外面に黒斑あり。H. 覆土下層。
195	坏	A. 口縁部径 11.0。器高 5.6。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。D. 石英、白色粒。E. 外一褐色、内一明赤褐色。F. 1/3。H. 覆土中。
196	坏	A. 口縁部径 12.0、器高 5.5、底部径 3.9。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D. 石英、チャート、白色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 1/2。G. 口縁部内面に黒斑あり。H. 覆土中層。
197	坏	A. 口縁部径 7.8。器高 4.7、底部径 4.2。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 石英、白色粒。E. 外一明褐色、内一明赤褐色。F. 1/2。G. 外面に黒斑あり。H. 覆土中。
198	小形 鉢	A. 口縁部径 8.5、器高 4.5、底部径 4.0。B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。D. 片岩粒、角閃石、赤色粒、白色粒。E. 内外一褐色。F. 完形。G. 口縁部内面に黒斑あり。H. 覆土中。
199	坏	A. 口縁部径 11.1、器高 5.3、底部径 3.9。B. 粘土組織み上げ。C. 胴部内外面ナデの後ミガキ。D. 石英、白色粒。E. 内外一にぶい赤褐色。F. ほぼ完形。G. 底部外面に黒斑あり。H. 覆土中。

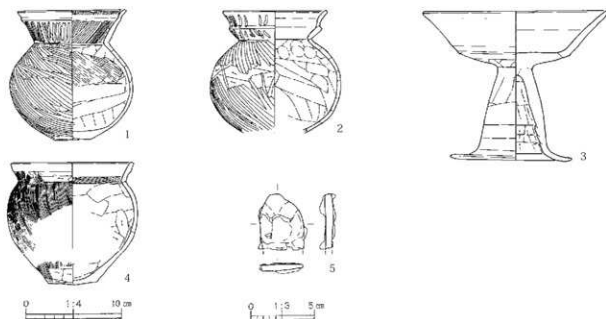
200	小形鉢	A. 口縁径 12.7, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ナデの後下半ケズリ, 内面ナデ, 台部内外面ナデ, D. 石英, 赤色粒, E. 外一灰黄褐色, 内一ぶい褐色, F. 4/5, G. 胴部外面に黒斑あり, H. 覆土中。
201	小形甕	A. 口縁径 66, 器高 8.5, 底部径 3.9, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部外面ヨコナデ, 内面ハケ, 胴部内外面ハケ, 底部外面ナデ, D. 白色粒, E. 外一淡赤褐色, 内一淡黒灰色, F. 完形, H. 覆土中。
202	小形甕	A. 口縁径 7.4, 器高 8.7, 底部径 3.5, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部外面ケズリの後ハケ, 内面ハケの後ミガキ, 胴部外面ハケの後下半ケズリ/中位ミガキ, 内面ケズリの後上半ナデ, 底部外面ナデ, D. 角閃石, 白色粒, E. 外一黒色, 内一黒褐色, F. 完形, G. 外面に黒斑あり, H. 覆土下層。
203	小形甕	A. 口縁径 6.3, 器高 8.7, 底部径 4.2, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ケズリの後上半ナデ, 内面指ナデ, 底部外面ナデ, D. 片岩粒, チャート, 石英, 白色粒, E. 外一灰黄褐色, 内一褐色, F. ほぼ完形, G. 胴部外面に黒斑あり, 胴部下半に焼成前の穿孔あり, H. 覆土下層。
204	横做坏	A. 口縁径 (11.6), 器高 4.0, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面跔ナデ, D. 赤色粒, E. 内外一褐色, F. 1/2, H. 覆土中。
205	横做坏	A. 口縁径 11.4, 器高 4.2, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面跔ナデ, D. 角閃石, 赤色粒, E. 内外一褐色, F. 完形, H. 覆土上層。
206	横做坏	A. 口縁径 14.0, 器高 5.6, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ハケの後薄なミガキ, 内面ナデの後放射状暗文を施す, 底部外面ケズリ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 内外一明茶褐色, F. 完形, H. 覆土中。
207	横做坏	A. 口縁径 (14.8), 器高 4.8, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリの後ナデ, 内面ナデ, D. 石英, 赤色粒, 白色粒, E. 内外一明赤褐色, F. 1/4, H. 覆土中。
208	横做坏	A. 口縁径 14.1, 器高 4.2, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面跔ナデ, D. 角閃石, 石英, 片岩粒, 白色粒, E. 内外一明赤褐色, F. 完形, G. 体部外面に黒斑あり, H. 覆土中。
209	横做坏	A. 口縁径 (11.6), 器高 4.9, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリ, 内面ナデ, D. 黒色粒, 白色粒, E. 内外一褐色, F. 1/3, G. 器形は歪んでいる, H. 覆土中。
210	須恵器坏	A. 底部径 8.5, B. ロク口成形, C. 体部内外面回転ナデ, 底部外面回転糸切り, D. 白色針状物質, E. 内外一黄灰色, F. 底部のみ, G. 還元焼成, H. 覆土上層。
211	須恵器盤	A. 口縁径 (23.2), 器高 3.2, 底部径 (19.1), B. ロク口成形, C. 内外面回転ナデ, D. 片岩粒, 白色粒, E. 外一暗灰色, 内一灰色, F. 破片, G. 還元焼成, H. 覆土中層。
212	甕	A. 残存長 17.7, B. 粘土組織み上げ, C. 頸部外面ナデ(無文), 胴部外面に単節縄文(LR)を多段に横位施文, 内面ナデ, D. 片岩粒, 白色粒, E. 内外一黒褐色, F. 胴部 1/3, G. 胴部外面に煤付着, 胴部内面中に指頭圧痕を残す, 弥生時代後期東関東系, 胎土分析試料(河 53), H. 覆土中。
213	須恵器大甕	B. 粘土組織み上げ後ロク口整形, C. 口縁部外面回転ナデの後帯描波状文, 内面回転ナデ, D. 石英, 白色粒, E. 内外一灰色, F. 口縁部破片, G. 還元焼成, H. 覆土中。
214	二連坏	A. 口縁径 6.0, 器高 4.0, 底部径 2.8, B. 手捏ね, C. 坏部外面ナデ, 内面指ナデ, 底部外面ナデ, D. 片岩粒, 赤色粒, 白色粒, E. 外一明褐色, 内一淡褐色, F. 坏部のみ, G. 連結部に穿孔あり, 3連の可能性もあり, H. 覆土中。
215	小形広口短頸甕	A. 口縁径 (6.0), B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ケズリの後ナデ, 内面ナデ, D. 片岩粒, 赤色粒, 白色粒, E. 外一暗茶褐色, F. 口縁部 1/4, G. 口縁部に穿孔あり, H. 覆土中。
216	小形土器	A. 底部径 3.2, B. 粘土組織み上げ, C. 口縁部内外面ヨコナデ, 胴部外面ナデ, 内面指ナデ, 底部外面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 外一暗褐色, 内一暗褐色, F. 胴部 2/3, H. 覆土下層。
217	小形土器	A. 残存高 4.8, 底部径 4.0, B. 粘土組織み上げ, C. 胴部外面ハケの後下半ナデ, 内面ナデ, 底部外面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 外一淡灰褐色, 内一明灰色, F. 口縁部欠損, H. 覆土中。
218	小形土器	A. 脚端部径 5.8, B. 粘土組織み上げ, C. 脚部外面ハケの後ナデ, 内面ナデ, 脚端部内外面ヨコナデ, D. 白色粒, E. 外一黒褐色, 内一灰褐色, F. 脚部のみ, H. 覆土下層。
219	小形土器	A. 底部径 3.4, B. 粘土組織み上げ, C. 外面ナデ, 内面ハケ, 底部外面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 外一茶褐色, 内一淡茶褐色, F. 胴部 1/2, H. 覆土中。
220	小形土器	A. 口縁径 5.7, 器高 4.2, 底部径 4.3, B. 手捏ね, C. 外面指ナデ, 底部外面ナデ, D. 石英, 赤色粒, 白色粒, E. 外一ぶい褐色, 内一ぶい褐色, F. 完形, H. 覆土中。
221	小形土器	A. 口縁径 (4.2), 器高 4.0, 底部径 3.2, B. 手捏ね, C. 外面ナデ, 内面指ナデ, 底部外面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 内外一茶褐色, F. 1/2, H. 覆土中。
222	小形土器	A. 口縁径 (4.8), 器高 3.5, 底部径 3.0, B. 手捏ね, C. 外面ナデ, 内面指ナデ, 底部外面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 内外一明茶褐色, F. 1/2, H. 覆土中。
223	小形土器	A. 口縁径 4.2, 器高 4.2, 底部径 (3.6), B. 粘土組織み上げ, C. 内外面ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 内外一明茶褐色, F. 1/2, G. 口唇部及び外面に爪形の連続刺突文を施す, H. 覆土中。
224	小形土器	A. 口縁径 4.0, 器高 3.9, 底部径 1.7, B. 手捏ね, C. 外面ナデ, 内面指ナデ, D. 角閃石, 白色粒, E. 内外一ぶい褐色, F. ほぼ完形, H. 覆土中。
225	小形土器	A. 残存高 3.2, 最大幅 3.1, B. 粘土組織み上げ, C. 内外面ナデ, D. 白色粒, E. 内外一暗茶褐色, F. 上下端欠損, H. 覆土中。
226	小形土器	A. 口縁径 (2.5), 器高 3.3, 台端部径 (2.3), B. 手捏ね, C. 内外面指ナデ, D. 角閃石, 白色粒, E. 外一淡黄色, 内一黄灰色, F. 3/4, H. 覆土上層。
227	小形土器	A. 底部径 2.8, B. 手捏ね, C. 体部-底部外面ナデ, 内面指ナデ, D. 赤色粒, 白色粒, E. 内外一淡茶褐色, F. 1/2, H. 覆土中。
228	深鉢	B. 粘土組織み上げ, C. 内外面ナデ, 外面に貫指懸垂状線による縦区画内に貫指による縞杉文を施す, D. 赤色粒, 白色粒, E. 内外一暗茶褐色, F. 胴部破片, G. 縄文時代中期滑石, H. 覆土中。

229	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 内外面ナデ。口唇部に大小の突起をもち、口縁部外面に亀甲による5条の横線文を施す。D. 白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 口縁部破片。G. 弥生時代前期如來堂段路。H. 覆土中。
230	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 内外面ナデ。外面に縦帯の櫛歯条線の後、下端に櫛歯波状文を施す。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一暗褐色、内一暗褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代中期後半？。H. 覆土中。
231	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 内外面ナデ。外面貼り付け隆帯上に寛によるキザミを施す。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 口縁部破片。G. 弥生時代後期樽式。H. 覆土中。
232	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ナデの後8本歯の櫛歯波状文、内面ミガキ。D. 白色粒。E. 外一暗褐色、内一黒褐色。F. 口縁部破片。G. 弥生時代後期樽式。H. 覆土中。
233	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面ナデの後6本歯の櫛歯波状文、内面ミガキ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 口縁部破片。G. 弥生時代後期樽式。H. 覆土中。
234	裏?	B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部内外面ミガキ。頸部外面多進止櫛歯波状文(右回り)。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一茶褐色、内一淡黄褐色。F. 口縁部破片。G. 弥生時代後期樽式。H. 覆土中。
235	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 頸部櫛歯波状文(8本歯右回り)の後上下に櫛歯波状文、内面ミガキ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 頸部破片。G. 弥生時代後期樽式。H. 覆土中。
236	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 外面ナデの後頸部3進止櫛歯波状文(右回り)の後上下に櫛歯波状文、内面ミガキ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 胴部破片。G. 外面煤付着。弥生時代後期樽式。H. 覆土下層。
237	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 外面ナデの後頸部多進止櫛歯波状文(右回り)の後頸部櫛歯波状文、内面ミガキ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一暗褐色、内一淡茶褐色。F. 胴部破片。G. 外面煤付着。弥生時代後期樽式。H. 覆土下層。
238	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 外面ナデの後頸部櫛歯波状文(10本歯右回り)の後上下に櫛歯波状文、内面ミガキ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 頸部破片。G. 弥生時代後期樽式。H. 覆土中。
239	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 外面ナデの後頸部多進止櫛歯波状文(8本歯右回り)の後上下に櫛歯波状文、内面ミガキ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 頸部破片。G. 弥生時代後期樽式。H. 覆土中。
240	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面幅の長い櫛歯波状文の後下半ミガキ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一淡灰色。F. 胴部破片。G. 弥生時代後期樽式。H. 覆土中。
241	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面櫛歯波状文の後下半ミガキ、内面ミガキ。D. 白色粒。E. 外一黒褐色、内一暗茶褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代後期樽式。H. 覆土中。
242	複合口縁直	A. 口縁部径(12.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 内外面ナデ。頸部外面に櫛歯波状文?を施文後、上半に単節縄文(R)を横位多段に施文。D. 片岩粒、白色粒。E. 外一黒褐色、内一黒茶褐色。F. 口縁部1/4。G. 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭。H. 覆土中。
243	裏	A. 口縁部径(16.0)。B. 粘土組織み上げ。C. 口唇部及び口縁部外面単節縄文(R)を横位施文、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 口縁部破片。G. 弥生時代後期吉ヶ谷式。H. 覆土中。
244	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面単節縄文(R)、内面ミガキ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代後期吉ヶ谷式。H. 覆土中。
245	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面単節縄文(R)、内面ミガキ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代後期吉ヶ谷式。H. 覆土中。
246	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面単節縄文(R)、内面ミガキ。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代後期吉ヶ谷式。H. 覆土中。
247	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面単節縄文(R)を横位施文、内面ミガキ。D. 白色粒。E. 外一黒褐色、内一暗褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代後期吉ヶ谷式。H. 覆土中。
248	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面単節縄文(R)と(LR)を交互に羽状に施文、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡茶褐色、内一暗褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代後期。H. 覆土中。
249	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面単節縄文(R)を横位施文後上半ミガキ、内面ミガキ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 胴部破片。G. No250と同一個体。弥生時代後期吉ヶ谷式。H. 覆土中。
250	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面単節縄文(R)を横位施文後下半ミガキ、内面ミガキ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 胴部破片。G. No249と同一個体。施文部外赤彩。弥生時代後期吉ヶ谷式。H. 覆土中。
251	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面単節縄文(R)の後下半ミガキ、内面ミガキ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代後期吉ヶ谷式。H. 覆土中。
252	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面単節縄文(R)の後下半ミガキ、内面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一暗褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代後期南関東系。H. 覆土中。
253	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面単節縄文(R)の後下半ミガキ、内面ミガキ。D. 角閃石、白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代後期吉ヶ谷式。H. 覆土中。
254	裏	B. 粘土組織み上げ。C. 胴部外面単節縄文(R)を多段に横位施文、内面ナデ。D. 白色粒。E. 外一暗茶褐色、内一暗褐色。F. 胴部破片。G. 弥生時代。H. 覆土中。
255	小形鉢	B. 粘土組織み上げ。C. 口唇部キザミ、口縁部内外面ナデ。D. 白色粒。E. 外一黒褐色、内一暗茶褐色。F. 口縁部破片。G. 弥生時代。H. 覆土中。
256	複合口縁直	B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面に単節縄文(R)と(LR)を交互に羽状に施文、内面ミガキ。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一淡褐色、内一淡茶褐色。F. 口縁部破片。G. 外面は被熱により赤化色。弥生時代後期南関東系。胎土分析試料(河54)。H. 覆土中。
257	複合口縁直	B. 粘土組織み上げ。C. 口縁部外面に付加条縄文を横位施文、内面ミガキ。D. 片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 外一黒褐色、内一淡褐色。F. 頸部破片。G. 弥生時代後期南関東系。胎土分析試料(河57)。H. 覆土中。

258	複合口縁壺	B.粘土組織み上げ。C.口唇部と口縁部外面に単節縄文(LR)を横位施文後、口縁部外面に門形刺突文を二列に連続施文、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.口縁部破片。G.弥生時代後期東関東系。胎土分析試料(河58)。H.覆土中。
259	壺	B.粘土組織み上げ。口縁部内外面ナデ。外面貼り付け凸帯上にキザミを連続施文。D.白色粒。E.内外一黒褐色。F.口縁部破片。G.弥生時代後期東関東系?。胎土分析試料(河56)。H.覆土中。
260	甕	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面付加条縄文、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.胴部破片。G.弥生時代後期東関東系。胎土分析試料(河61)。H.覆土中。
261	甕	B.粘土組織み上げ。C.胴部外面単節縄文(LR)、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一暗褐色。F.胴部破片。G.弥生時代後期東関東系?。胎土分析試料(河62)。H.覆土中。
262	甕	A.底部径7.0。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面単節縄文(LR)、内面ナデ。底部外面葉痕を残す。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡褐色、内一淡茶褐色。F.底部1/4。G.弥生時代後期東関東系。胎土分析試料(河58)。H.覆土中。
263	甕	A.底部径8.0。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面単節縄文(LR)、内面ナデ。底部外面葉痕を残す。D.片岩粒、白色粒。E.外一暗褐色、内一暗茶褐色。F.底部1/4。G.弥生時代後期東関東系。胎土分析試料(河59)。H.覆土中。
264	甕	A.底部径6.4。B.粘土組織み上げ。C.胴部外面付加条縄文、内面ナデ。底部外面布目圧痕を残す。D.黒色粒、白色粒。E.内外一暗褐色、内一黒褐色。F.底部1/4。G.外面は二次焼成を受けて荒れている。弥生時代後期東関東系。胎土分析試料(河61)。H.覆土中。
265	複合口縁壺	B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ミガキ。口縁部外面に単節縄文(RL)施文後、棒状浮文を貼り付け。D.赤色粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部破片。G.弥生時代後期南関東系。H.覆土中。
266	複合口縁壺	B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ミガキ。口唇部外面に礫歯状工具による連続刺突文を施す。D.赤色粒、白色粒。E.内外一暗褐色。F.口縁部破片。G.古墳時代前期。H.覆土中。
267	壺	B.粘土組織み上げ。頸部凸帯貼り付け。C.外面ハケ、内面ナデ。凸帯上面に礫歯状工具によるキザミを施す。D.赤色粒、白色粒。E.外一淡茶褐色、内一淡白灰色。F.胴部破片。G.古墳時代前期。H.覆土中。
268	複合口縁壺	B.粘土組織み上げ。C.口縁部内外面ミガキ。口縁部外面に礫歯状工具による連続刺突文を施す。D.片岩粒、白色粒。E.内外一淡褐色。F.口縁部破片。G.古墳時代前期。H.覆土中。
269	打製石斧	A.長さ19.5、最大幅9.3、最大厚2.6。重さ517.46g。C.周縁部を直接打撃による両面加工。D.砂岩。F.完形。G.刃部に摩耗痕あり。H.Ⅲ層。
270	石製紡錘車	A.上面径4.8、下面径2.2、高さ0.8。重さ21.15g。B.粗削りの後ケズリ。C.各面とも研磨。D.滑石。F. A/5。G.上下面に格子目状の線刻あり。H.覆土下層。
271	羽口	B.手捏ね。C.ナデ。D.白色粒。E.外一黄灰色、内一褐色。F.破片。G.外面発砲。H.覆土中。
272	羽口	B.手捏ね。C.ナデ。D.白色粒。E.外一黄灰色、内一褐色。F.破片。G.外面発砲。H.覆土中。
273	石製模造品	A.残存長6.6、残存幅1.5、厚さ0.6、孔径0.6、重さ10.05g。C.全面研磨。D.滑石。F. E/3。H.覆土中。
274	土錘	A.長さ(4.3)、最大幅1.3、孔径0.4、重さ6.9g。B.手捏ね。C.ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.にぶい黄褐色。F. 3/4。H.覆土中。
275	管玉	A.長さ1.3、直径0.45、孔径0.2、重さ0.42g。C.研磨。D.碧玉製。F.完形。G.片面穿孔。H.覆土中。
276	管玉	A.長さ1.15、直径0.45、孔径0.15、重さ0.36g。C.研磨。D.碧玉製。F.ほぼ完形。G.片面穿孔。H.覆土中。
277	ガラス小玉	A.直径0.5、厚さ0.35、孔径0.1、重さ0.09g。B.不明。D.ガラス製。F.完形。H.覆土層。
278	横鎌	A.残存長22.0、幅57.5、厚さ4.6。B.榫目。C.表裏面とも鑿ケズリ。柄挿入孔未貫通。D.アカガシ。F.完形。G.未成品。H.底面付近。木片No27。
279	角材加工木	A.長さ79.5以上、最大幅4.4、最大厚2.5。B.角材。C.表裏面とも多角形状に整形。両端部切断。D.クヌギ。F.ほぼ完形。H.底面付近。木片No53。
280	機織具(緯打具)	A.残存長(77.5)、最大幅5.2、最大厚1.8。B.角材。C.表裏面とも平坦に板状に整形。柄部は四角に整形。D.アカガシ。F. A/5。H.底面付近。木片No37。
281	角材加工木	A.長さ47.5、幅2.9、厚さ1.0。B.角材。C.表裏面とも平坦に整形。両端部とも鑿加工。D.クヌギ。F.ほぼ完形。G.一か所内孔あり。H.底面付近。木片No38。
282	弓	A.残存長34.5、幅1.4、厚さ1.4。B.芯持丸木。C.表面研磨。端部を山形に加工。D.イヌガヤ。F. 1/2。H.底面付近。木片No33
283	角材加工木	A.長さ37.5、最大幅4.8、最大厚1.8。B.角材。C.表裏面とも平坦に整形。両端部切断。D.クヌギ。F.完形。H.底面付近。木片No34。
284	板状加工木	A.残存長30.5、最大幅11.0、最大厚2.5。B.榫目。C.表裏面とも平坦に整形。図右端に四角い穴もしくは切り込みあり。D.カエデ。F.破片。H.底面付近。木片No31。
285	板状加工木	A.長さ14.5、幅5.3、厚さ0.5、重さ12.2g。B.榫目。C.表裏面とも平坦に整形。両端部切断。D.不明。F.完形。H.底面付近。木片No52。
286	木製品原材	A.残存長48.3、幅18.8、厚さ9.0。B.榫目。C.表裏面とも平坦に整形。両端部とも鑿加工。D.コナラ。F.ほぼ完形。H.河川跡下?。木片No29。
287	加工木	A.直径27.0~29.6、長さ87.7。B.芯持丸木。C.両端部を鑿により加工。下端面に十字状の切り込みをもつ。D.コナラ。F.完形。G.弥生時代後期頃。H.河川跡下?。

7. G地点調査区内出土遺物

調査区内出土遺物として掲載した遺物は、主にピットから出土した土器と鉄製品の破片である(第164図)。土器は、古墳時代前期～中期に属するものである。No 1の小形の二重口緑壺は、口縁部上半が短く外反する形骸化した形態のもので、後遺跡C地点の河川跡内土坑覆土上層出土のNo 1の壺(恋河内2005)や、久下前遺跡C3地点第83号住居跡出土のNo 1の壺(恋河内2018)と同じ系譜の二重口緑壺の亜種と推測されるもので、時期は前期後葉～末頃と考えられる。No 2の小形の二重口緑壺は、口縁部が短い中期的な形態で、胴部外面の調整にケズリの後ミガキを施していることからすると、中期でも前半頃と考えられる。No 3の高坏は、いわゆる和泉型高坏で、外面調整にミガキが見られないが未だ大形であることから、中期前半頃と考えられる。No 4の小形平底甕は、口縁部と胴部の差があまりないやや古い形態の特徴が見られるが、底部外面がケズリで、胴部外面の調整がケズリの後にハケを施しているをことから、前期でも後半頃と考えられる。No 5の板状の鉄製品の破片については、その製品の形状や時期は不明である。



第164図 G地点調査区内出土遺物

第71表 G地点調査区内出土遺物観察表

1	二重口緑壺	A. 口縁部径 11.4、器高 13.7、底部径 3.8、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデの後ミガキ、胴部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデの後上位ハケ、D. 角閃石、石英、白色粒、E. 内外一にふい赤褐色、F. 4/5、H. P209
2	二重口緑壺	A. 口縁部径 11.0、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部外面ヨコナデの後ミガキ、内面ヨコナデ、胴部外面ケズリ後ミガキ、内面ナデの後上位指押さえ、D. 角閃石、石英、白色粒、E. 内外一にふい赤褐色、F. 口縁～胴部下位 4/5、H. P189
3	高 坏	A. 口縁部径 19.5、器高 15.8、脚端部径 12.8、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部内外面ヨコナデ、坏部外面ナデ、脚柱部外面タテナデ後下半ヨコナデ、内面絞り痕後ヨコナデ、脚端部内外面ヨコナデ、D. 角閃石、白色粒、E. 外一にふい褐色、内一暗褐色、F. 完形、H. P126
4	小 形 甕	A. 口縁部径 (13.0)、器高 (13.0)、底部径 5.2、B. 粘土組織み上げ、C. 口縁部外面ヨコナデの後ハケ、内面ハケの後ヨコナデ、胴部外面ケズリの後ハケ、内面ナデの後中位ケズリ、底部外面ケズリ、D. 角閃石、白色粒、チャート、E. 外一黒褐色、内一灰褐色、F. 口縁部～胴部中位破片、底部 1/2、G. 器形は図上復元、胴部外面覆付着、H. P26
5	板状鉄製品	A. 残存長 4.0、幅 3.9、厚さ 0.6、重さ 22.48g、B. 鍛造、D. 鉄製、F. 破片、H. P102。

第VI章 自然科学的分析

第1節 久下前遺跡A2・C4地点の花粉分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

埼玉県本庄市北堀に位置する久下前遺跡において発掘調査が行われ、古墳時代前期(4世紀代)の土器などが出土する河川跡が検出されている。この遺跡周辺の古植生を検討する目的で、遺跡内の2地点から花粉分析用の試料を計17点採集した。以下では、試料について行った花粉分析結果を示し、遺跡周辺の古植生とその変遷について推定した。

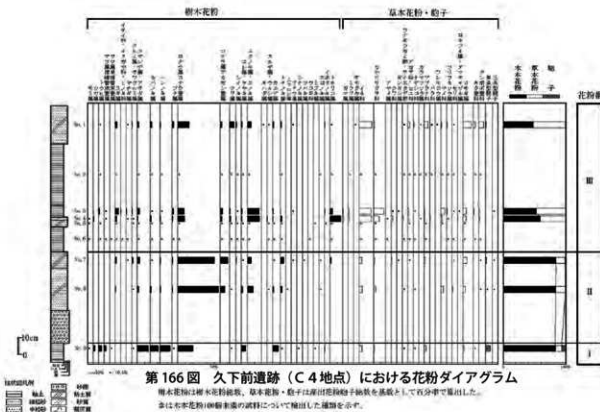
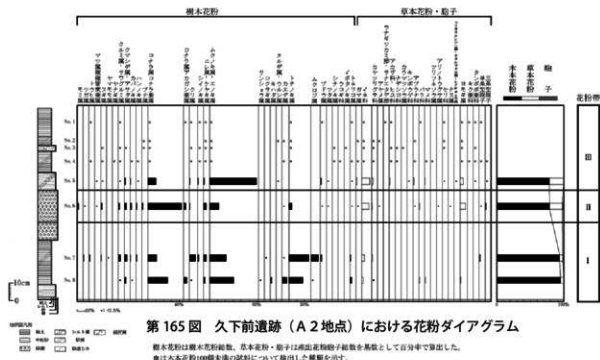
2. 試料と分析方法

分析試料は、久下前遺跡のA2地点とC4地点の河川跡およびその下の位置から採取した計17試料である。A2地点では、東側セクションの土層断面から8試料採取し、C4地点では、東側調査区東壁セクションの土層断面から9試料採取した。A2地点とC4地点の試料採取場所は東西方向におよそ170m離れており、A2地点が上流になる。A2地点東側セクションの土層断面は、上位から黒色粘土(No 1)、やや砂混じりの黒色粘土(No 2)、黒褐色凝灰質砂(No 3)、やや砂質な黒色粘土(No 4)、炭化材や植物片を含むやや泥質なオリブ黒色中粒砂(No 5)、土器片や炭化材を含む砂礫(No 6)、礫、やや砂質なオリブ黒色粘土(No 7)、黒色粘土(No 8)、および最下部の中粒砂からなる(第165図)。このセクションでは、No 1～No 6の層が河川跡内堆積物で、それ以下が河川跡底面を含む下位層であると思われる。C4地点の東側調査区東壁セクションの土層断面は、上位から黒褐色粘土質砂(No 1)、やや土壌化した黒色粘土(No 2)、土器片を含む黒色粘土(No 3)、黒色凝灰質砂(No 4)、やや砂質な黒色粘土(No 5)、やや砂質な黒褐色粘土(No 6)、炭化材を含むやや粘土質なオリブ黒色中粒砂(No 7)、炭化材や植物片を含むやや粘土質な黒色中粒砂(No 8)、礫、および最下部の青灰色粘土(No 9)からなる(第166図)。このセクションではNo 1～No 8の層が河川跡内堆積物で、それ以下が河川跡底面を含む下位層であると思われる。出土遺物や木材の放射性炭素年代測定により、A2地点とC4地点ともに河川跡内堆積物が古墳時代前期、これより下位層が弥生時代前期と考えられている。これらの試料から次の手順で花粉化石を抽出した。

試料(湿重量約2～3g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え10分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行った。各プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。なお、写真1に示した分類群ごとの単体標本(PLC.256～261)はパレオ・ラボに保管されている。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉35、草本花粉26、形態分類のシダ植物胞子2の総計63である。花粉・胞子の一覧を第72表に示し、分布図を第165図と第166図に示した。分布図において樹木花粉の産出率は樹木花粉を基数とし、草本花粉、胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百



分率で示してある。また、図表においてハイフン(—)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科、マメ科、バラ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。なお、作製したプレパラート全面を鏡顕しても樹木花粉総数が100個に満たない試料については、産出した種類を*で表示するにとどめた。

Ⅲ帯：河川跡の堆積物であるA2地点のNo1～5とC4地点のNo1～6が該当する。なお、C4地点におけるNo5とNo6は、十分な量の花粉化石が得られていないため、花粉ダイアグラムには*でしか表示していない。しかし、2試料から産出した花粉化石群集はNo4以上のⅢ帯とほぼ同様の花粉組成を示しており、ここではⅢ帯とした。この帯ではコナラ属コナラ亜属の産出率が減少し、ムクノキ属-エノキ属が増加する。また、C4地点ではスギ属やトネリコ属のわずかな増加がみられる。この帯においてもコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属などの照葉樹の産出がみられる。C4地点の草本花粉では、イネ科やカヤリグサ科、ヨモギ属の増加がみられる。この帯でも抽水植物であるガマ属やミクリ属、オモダカ属や、湿地を好む種が多く含まれるアヤメ属やツリフネソウ属などが産出した。

4. 考察

各帯の堆積年代は、出土遺物や木材の放射性炭素年代測定から、I帯が弥生時代前期、Ⅲ帯が古墳時代前期であると考えられるが、Ⅱ帯についてはA2地点とC4地点において年代が異なる。すなわち、C4地点のⅡ帯の河川跡底面下から産出する木材は、放射性炭素年代測定によって弥生時代前期の年代値が得られた。一方で、A2地点のⅡ帯からは古墳時代前期の土器片が出土している。よって、Ⅱ帯は弥生時代前期と古墳時代前期の堆積物が混ざっている可能性があり、Ⅱ帯の堆積年代を限定することは困難である。以上の時代観と花粉化石帯を基に、以下では遺跡周辺の古植生とその変遷について検討した。

弥生時代前期のI帯には草本花粉の産出が非常に少なく、コナラ属コナラ亜属をはじめ、クマシデ属-アサダ属、カバノキ属、ニレ属-ケヤキ属、カエデ属などが多く産出しているため、遺跡周辺の丘陵部から低地にかけて落葉広葉樹林が広がっていたと思われる。また、A2地点においてはムクノキ属-エノキ属、トチノキ属が多く産出しており、丘陵地の沢や河川の周辺に分布を広げていたと思われる。こうした落葉広葉樹林のなかにコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属などの照葉樹がわずかに生育していたものと思われる。なお、遺跡内から弥生時代前期の遺物は出土していない。

Ⅱ帯では、コナラ属コナラ亜属が増加しているため、遺跡周辺に広がっていた落葉広葉樹の中では、コナラ属コナラ亜属が広範囲に分布を広げていたと思われる。このようなコナラ属コナラ亜属主体の落葉広葉樹林の中にも依然としてコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属などの照葉樹がわずかに生育していたと思われる。また、草本花粉では抽水植物であるガマ属や湿地を好む種が多いアヤメ属などの産出が見られることから、遺跡周辺に湿地的環境が存在したか、河川内で滞水していた時期や場所があったと考えられ、その周りにはイネ科やヨモギ属、カヤツリグサ科などの雑草が生育していたと思われる。ただし、上記したように弥生時代前期と古墳時代前期の堆積物が混ざっている可能性があるため、花粉組成の解釈には注意が必要である。

古墳時代前期のⅢ帯ではコナラ属コナラ亜属がやや減少し、ムクノキ属-エノキ属の増加が認められるため、コナラ属コナラ亜属がやや分布を狭め、丘陵地の沢や河川周辺を中心としてムクノキ属-エノキ属が分布を広げていたと思われる。また、スギ属のわずかな増加や、コナラ属アカガシ亜属やシイノキ属などの照葉樹がわずかに産出することから、コナラ属コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林に温帯性針葉樹のスギ林や照葉樹が混じる森林が形成されていたと思われる。さらに、C4地点では湿地林を形成するトネリコ属が増加し、両地点の草本花粉では、ガマ属やミクリ属、オモダカ属などの抽水植物や、湿地的環境を好む種が多く含まれるアヤメ属やツリフネソウ属などの好湿性の分類

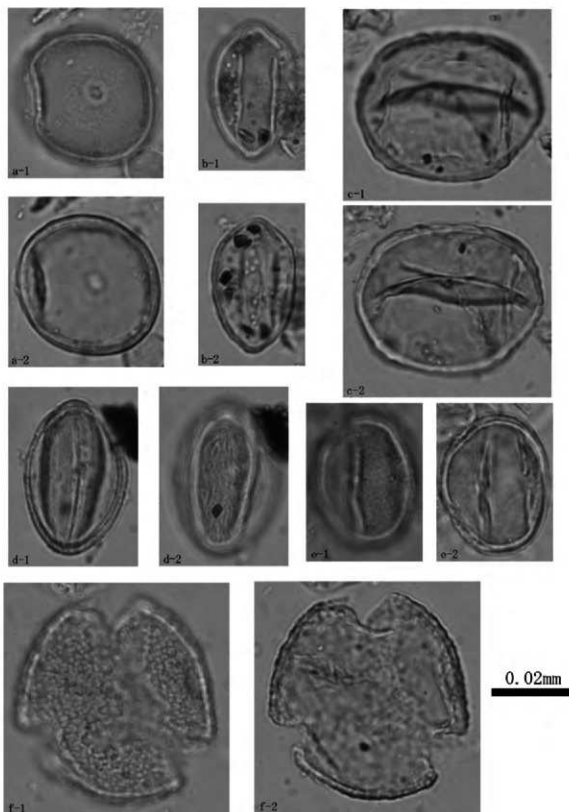


写真1 久下前遺跡(A2地点 No 7)から産出した花粉化石

- a. ムクノキ属-エノキ属 (PLC.256) b. トチノキ属 (PCL.257) c. ニレ属-ケヤキ属 (PLC.258) d. カエデ属 (PLC.259)
 e. コナラ属アカガシ亜属 (PLC.260) f. コナラ属コナラ亜属 (PLC.261)

群が産出する。このことから、この時期には河川の影響が弱まり、滞水していた場所が増え、遺跡周辺には湿地的環境が広がってきたことが推測される。一方で、プラント・オパール分析と種実同定ではⅢ帯相当層においてイネの産出が見られるため、こうした湿地的環境の一部では水田稲作が行われていた可能性が考えられる。イネを花粉形態で区別するのは難しいが、Ⅲ帯においてわずかにイネ科花粉が増加しており、C4地点のⅢ帯では水田雑草を含む分類群であるオモダカ属を伴う。よって、花粉分析の結果も古墳時代前期に水田稲作を行っていた可能性を示唆していると言える。

(2011年3月)

第2節 久下前遺跡A2地点のプラント・オパール

米田恭子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

久下前遺跡は埼玉県本庄市北堀に所在する。A2地点で行われた発掘調査において、古墳時代前期（4世紀：五領式期）の土器などが出土する河川跡が検出された。ここではA2地点東壁セクションより採取された土壌試料について、イネ科植生を検討する目的でプラント・オパール分析を行った。以下に、分析の結果及び考察を記す。なお、同試料については花粉分析を行っており（第1節参照）、同試料に相当する層より採取された土壌試料について種実同定も行っている（第4節参照）。

2. 試料と方法

試料は、A2地点東壁セクションより採取された試料No4とNo5の計2試料である。各試料の土質は、試料No4がやや砂質の黒色粘土、試料No5がオリーブ黒色のやや泥質な中粒砂で、植物遺体を含む。時期については、両試料ともに古墳時代前期である。

プラント・オパール分析は、上記した2試料について、下記に示した手順にしたがって行った。秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについてガラスビーズが300個に達するまで行った。

3. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1gあたりの各プラント・オパールを求め（第73表）、それらの分布を第167図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1gあたりの検出個数である。

検鏡の結果、試料No4からイネのプラント・オパールが4,000個体検出された。最も多く観察されたネザサ節型は、試料No4で205,700個体が得られており、試料No5では53,500個体が観察された。ウシクサ族は試料No4で約25,000個体、試料No5では約16,000個体が観察された。キビ族は試料No4で23,700個体、試料No5では14,600個体が得られた。他のタケ亜科（ネザサ節型とササ属型とは異なるタイプのタケ亜科）は試料No4で18,500個体検出された。その他に、ササ属型とヨシ属、不明の植

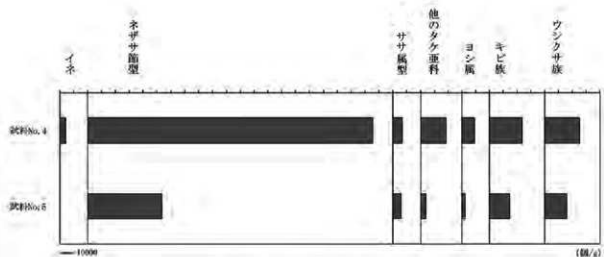
第73表 試料1gあたりのプラント・オパール個数

試料No.	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ風型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
4	4,000	205,700	6,600	18,500	9,200	23,700	25,100	55,400
5	0	53,500	6,100	3,700	2,400	14,600	15,800	23,100

物珪酸体が観察された。

4. 稲作について

プラント・オパール分析の結果、古墳時代前期の堆積物である試料No 4からイネのプラント・オパールが検出された。イネについては、プラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上検出された地点から推測された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査成果とがよく対応する結果が得られている(藤原1984)。稲作の検証に関しては、この5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断がなされている。試料No 4では1gあたり4,000個と検証の目安とされる5,000個体に近い数値を示しており、試料No 4堆積期の河川周辺において稲作が行われていた可能性がある。しかし、花粉分析や大型植物遺体の結果を見ると、試料No 4および相当する層ではオモダカ属などの水田雑草となる植物の花粉や種実は検出されていない(第1節、第4節参照)。よって、プラント・オパール分析のみから水田稲作が行われていたかどうかは断定できない。ここで、A 2地点からおよそ170m下流にあたるC 4地点の東側調査区東壁セクションの上層断面から採取された試料について花粉分析を行った結果を見てみると、A 2地点の試料No 4、5と同時期の古墳時代前期に相当するC 4地点の試料No 1~6ではイネ科花粉が多産しており、オモダカ属などの水田雑草となる植物も検出されている(第1節参照)。よってC 4地点周辺ではプラント・オパール分析がされていないため不明であるが、水田稲作が行われていた可能性が推察される。また一方で、C 4地点周辺で水田稲作が行われていなかったと仮定すると、A 2地点で検出されたイネのプラント・オパールは稲藁が河川に持ち込まれ廃棄された、または河川周辺で使用されたものが流れ込んだものに起因する可能性、あるいはA 2地点周辺では陸稲栽培が行われていた可能性なども考えられる。また、種実同定の結果



第167図 久下前遺跡A 2地点のプラント・オパール分布図

からは、試料 No 5 相当層より採取された試料 S-2 からイネの炭化糊殻片が検出されている (第 4 節参照)。A 2 地点は河川跡という堆積物の混ざりやすい環境であることから、イネの炭化糊殻片が上層 (試料 No 4 相当層) よりもたらされた可能性もあると推察される。

5. A 2 地点周辺のイネ科植物

試料 No 5 堆積期について花粉分析の結果を見ると、A 2 地点周辺にはムクノキ属-エノキ属を主体とした落葉広葉樹林が広がっていたと推察されており (第 1 節参照)、こうした森林の林縁部などのられる。また、ススキやチガヤなどのウシクサ族もネザサ節型と同様の場所に生育していたと推測さ

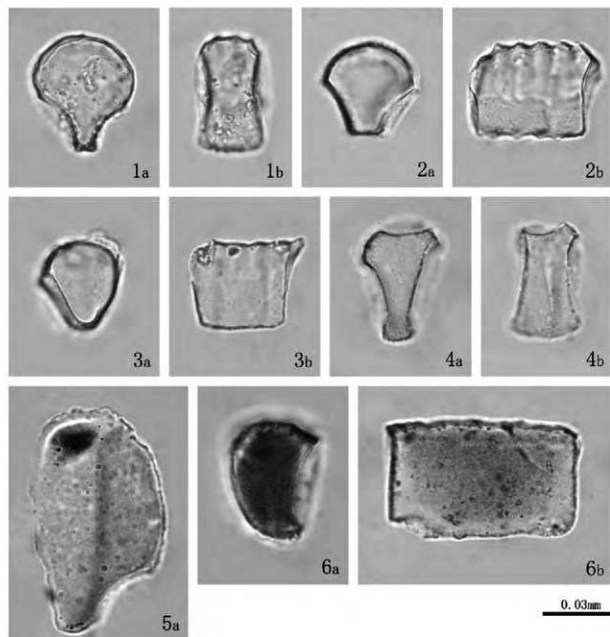


写真 2 久下前遺跡 A 2 地点のプラント・オパール

1. イネ (試料 No 4)、2. ネザサ節型 (試料 No 4)、3. 他のタケ亜科 (試料 No 4)、4. ウシクサ族 (試料 No 5)、5. ヨシ属 (試料 No 4)、6. キビ族 (試料 No 5) a: 断面、b: 側面

日あたりの開けたところに、アズマネザサと考えられるネザサ節型のササ類が分布を広げていたとみられる。スズタケやミヤコザサなどのササ属型のササ類については、森林の下の草の存在で生育していたとみられる。他のタケ亜科については、メダケ属と似たプラント・オパール形態を有していると思われるが同定には至っておらず、ここでは他のタケ亜科として示した。ヨシ属については、河川周辺の湿地的環境の場所に生育していたものと思われる。キビ族については、プラント・オパール形態から栽培植物(アワやヒエ、キビなど)か雑草類(イヌビエやエノコログサなど)かを区別するのは難しく、観察されたキビ族を分類するのは現時点においては困難である。

試料 No 4 堆積期のプラント・オパールの検出状況を見てみると、試料 No 5 に比べて多くの分類群で検出個数が増加している。その一因として、試料 No 5 の試料は中粒砂を主体としていたため、プラント・オパールが流されて元々含まれていなかった結果、試料 No 4 に比べて検出個数が少なかった可能性もある。一方で、花粉分析の結果からは、試料 No 5 で多く得られたムクノキ属-エノキ属などの樹木花粉が試料 No 4 では大幅に減少しており(第 1 節参照)、河川周辺での環境的な変化とも捉えられる。すなわち試料 No 4 堆積期を含む古墳時代前期のある時期に、A 2 地点周辺では稲作が行われるようになり、人々の活発な活動によって遺跡周辺では空き地が広がり、この空き地にネザサ節型のササ類やウシクサ族が分布を広げていた可能性も考えられる。その場合、ヨシ属は稲作が行われていた場所周辺の水路などに生育していたとみられる。また、試料 No 4 堆積期のキビ族については稲作に伴うタイヌビエなどの雑草類として、この時期に増加したことが考えられる。

引用文献

- 藤原宏志(1984)「プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—」『考古学ジャーナル』227、2-7
(2011年3月)

第3節 久下前遺跡G地点堆積物中の珪藻化石群集

藤根 久(パレオ・ラボ)

1. はじめに

珪藻は、10～500 μm ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻類が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている(小杉 1988、安藤 1990)。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種(陸生珪藻)が知られている。こうした珪藻群集の特徴を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析を行うことで過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

第 74 表 分析試料と堆積物の特徴

試料 No	位置	遺構	No	堆積物の特徴	その他
1	北端壁	溝	13	黒褐色(10YR3/2) 炭・礫混じり粘土～シルト質砂	礫最大 6 mm
2			14	にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘土～シルト質砂礫	礫最大 7 mm
3			15	黒色(2.5Y2/1) 植物遺体・砂礫混じりシルト質粘土	礫最大 4 mm

ここでは、久下前遺跡G地点の堆積環境を検討するために珪藻化石群集を調べた。

2. 試料と方法

試料は、久下前遺跡G地点において採取された堆積物3試料である(第74表)。

各試料については、以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

- (1) 湿潤重量約1g程度を取り出し、秤量した後ピーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。
- (2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を7回ほど繰り返した。
- (3) 残渣を遠心管に回収し、マイクロベットの適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下600~1000倍で観察し、同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形(半分以上残っている殻)に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。また、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1g当たりの殻数を計算した。

3. 珪藻化石の環境指標種群

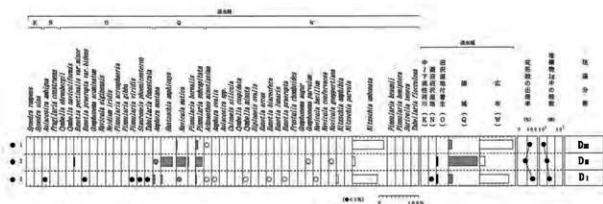
珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤が設定した環境指標種群に基づいた(安藤1990)。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。以下に、安藤が設定した淡水域における環境指標種群の概要を環境指標種群示す。

[上流性河川指標種群(J)]: 上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にびったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中~下流性河川指標種群(K)]: 中~下流部、すな

第75表 堆積物中の珪藻化石産出表(種群は小杉(1988)および安藤(1990)による)

分類群	種群	I	II	III
<i>Actinocyclus</i> spp.	A	-	-	-
<i>Thalassiosira altriculoides</i>	A	-	-	-
<i>Achnanthes lanceolata</i>	E	1	-	-
<i>A. minutissima</i>	N	2	-	1
<i>Actinella brasiliensis</i>	O	-	-	-
<i>Aphora monima</i>	Q	1	3	5
<i>A. ovalis</i>	V	-	-	1
<i>Achnanthes ambigua</i>	N	-	-	-
<i>A. spp.</i>	N	1	-	-
<i>Caloneis alliculus</i>	N	-	-	-
<i>Caloneis disculium</i>	N	-	1	-
<i>Cymbella cuspidata</i>	V	-	-	-
<i>C. sphaerocycli</i>	O	-	-	-
<i>C. nitida</i>	N	-	1	1
<i>C. naviculiformis</i>	O	-	-	-
<i>C. spp.</i>	?	1	-	-
<i>Diploneis ovalis</i>	N	-	-	-
<i>Emotia arcus</i>	N	-	2	-
<i>E. alveolata</i>	N	-	-	1
<i>E. lunaria</i>	N	-	-	-
<i>E. pectinialis</i> var. minor	O	-	5	-
<i>E. pectinialis</i> var. undulata	O	-	-	-
<i>E. praerupta</i>	O	-	-	1
<i>E. praerupta</i> var. hians	O	-	-	1
<i>E. spp.</i>	?	1	3	2
<i>Fragilaria constricta</i>	N	-	-	-
<i>Frustulia rhomboidea</i>	N	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i>	O	-	1	-
<i>G. ausp.</i>	N	-	-	-
<i>G. parvulum</i>	N	-	-	-
<i>G. sphaerophorum</i>	N	-	-	-
<i>G. spp.</i>	?	1	1	-
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	1	61	7
<i>Meridion circulare</i> var. euvirtuta	V	1	-	1
<i>Nitzschia bacillum</i>	V	-	1	-
<i>N. confervacea</i>	N	-	1	-
<i>N. cryptocephala</i>	N	-	1	-
<i>N. oligonialis</i>	O	-	-	-
<i>N. goeppertiana</i>	N	-	2	-
<i>N. nitida</i>	Q	4	49	1
<i>N. populi</i>	N	-	-	-
<i>N. spp.</i>	?	6	5	12
<i>Neidium biseriatum</i>	Q	-	1	-
<i>N. izidis</i>	O	-	-	-
<i>N. spp.</i>	?	-	-	-
<i>Nitzschia aquilina</i>	V	-	1	9
<i>N. parvula</i>	N	-	-	-
<i>N. umbonata</i>	N	171	15	130
<i>N. spp.</i>	?	1	2	1
<i>Pinnularia acrocephala</i>	O	-	-	-
<i>P. borealis</i>	Q	1	5	-
<i>P. brevis</i>	N	-	2	5
<i>P. divergens</i>	N	-	-	-
<i>P. gibba</i>	O	-	-	-
<i>P. hemiptera</i>	N	-	-	-
<i>P. microstaurum</i>	N	-	-	-
<i>P. subopacata</i>	Q	10	31	7
<i>P. viridis</i>	O	-	1	-
<i>P. spp.</i>	?	2	2	7
<i>Stauroneis phoenicenterum</i>	O	-	-	1
<i>Sarirella tenera</i>	N	-	-	-
<i>S. spp.</i>	?	1	-	-
<i>Synedra rufipes</i>	N	-	1	-
<i>S. ulza</i>	N	-	1	-
<i>S. spp.</i>	?	1	-	1
<i>Tubelliera fenestrata</i>	O	-	1	1
<i>T. flocculosa</i>	N	-	1	-
Unknown	?	7	9	6
外洋 (A)	-	-	-	-
海水不定・不明種(?)	-	-	-	-
中~下流性河川 (K)	-	1	2	-
瀬沼沼沢地 (N)	-	-	-	1
沼沢地付着生 (O)	-	-	-	5
塩 域 (Q)	-	17	150	10
広 布 (W)	-	175	27	145
淡水不定・不明種(?)	-	19	10	20
珪藻 殻 数	-	212	204	200



第 168 図 堆積物中の珪藻化石分布図 (1%以上の分類群を表示)

わち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に附着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。[最下流性河川指標種群 (L)]: 最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊性の種でも生育できるようになる。

[湖沼浮遊性指標種群 (M)]: 水深が 1.5 m 以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群 (N)]: 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における附着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい。

[沼沢湿地附着生指標種群 (O)]: 水深 1 m 内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地で、附着の状態が優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群 (P)]: 尾瀬ヶ原湿地や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群 (Q)]: 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である (陸生珪藻と呼ばれている)。

4. 珪藻化石の特徴と堆積環境およびその変遷

全試料から検出された珪藻化石は、海水種が 2 分類群 2 属 1 種、淡水種が 65 分類群 22 属 51 種 4 変種であった。これらの珪藻化石は、海水域において 1 環境指標種群、淡水域において 4 環境指標種群に分類された (第 75 表)。これら環境指標種群の特徴から、一連の堆積物は大きく 4 珪藻帯に分類された (第 168 図)。以下に、各珪藻帯について、珪藻化石群集の特徴と堆積環境について述べる。

[I 帯 (試料 No 1)]

この試料中の珪藻化石は、沼沢湿地指標種群の *Stauroneis phoenicenteron* などが特徴的に出現し、中～下流性河川指標種群や湖沼沼沢湿地指標種群あるいは陸域指標種群などが出現した。

以上のことから、主に沼沢湿地環境と推定される。

[II 帯 (試料 No 2)]

これら試料中の珪藻化石は、指標種群ではないが有機汚濁に関し、強い汚濁域 (DAIpo10 以下; 渡辺 2005) から DAIpo80 前後の貧腐水性水域まで広く分布する *Nitzschia umbonata* が特徴的に出現した。

以上のことから、主に人間活動により有機汚濁が進んだ水域環境であった可能性がある。

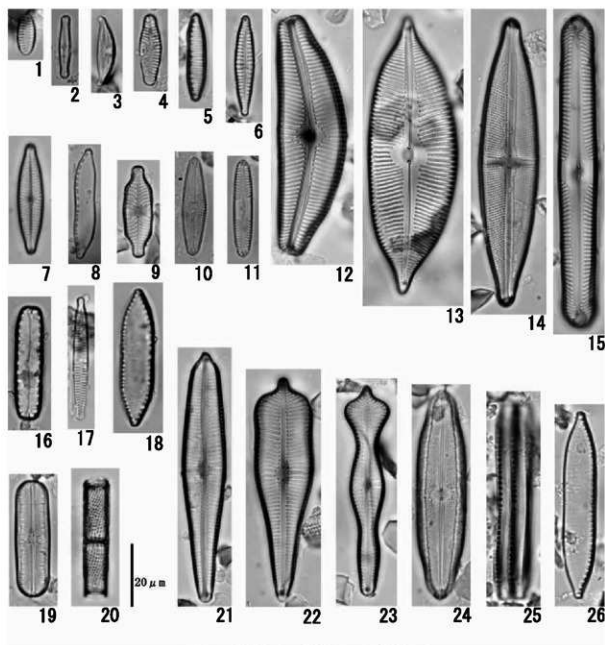


写真3 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

1. *Fragilaria construens* (No. 5) 2. *Achnanthes minutissima* (No. 1) 3. *Amphora montana* (No. 2)
 4. *Achnanthes lanceolata* (No. 1) 5. *Nitzschia amphibia* (No. 3) 6. *Gomphonema parvium* (No. 5)
 7. *Navicula cryptocephala* (No. 5) 8. *Nitzschia parvula* (No.) 9. *Navicula elginensis* (No. 5)
 10. *Navucyla bacillum* (No. 2) 11. *Pinnularia subcapitata* (No. 2) 12. *Cymbella tumida* (No. 5)
 13. *Cymbella cuspidate* (No. 5) 14. *Stauroneis phoenicenteron* (No. 5) 15. *Pinnularia gibba* (No. 5)
 16. *Pinnularia borealis* (No. 2) 17. *Synodra rumpens* (No. 5) 18. *Nitzschia umbonate* (No. 1)
 19. *Navucyla bacillum* (No. 5) 20. *Aulacosira ambigua* (No. 55) 21. *Gomphonema augur* (No. 5)
 22. *Gomphonema augur* (No. 5) 23. *Gomphonema acuminatum* (No.) 24. *Noëditum iridis* (No. 5)
 25. *Nitzschia umbonata* (No. 1) 26. *Nitzschia umbonate* (No. 1)

[Ⅲ帯 (試料 No 3)]

この試料中には、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* や *Navicula mutica* などが特徴的に出現した。その他では、沼沢湿地付着生指標種群や先の *Nitzschia umbonata* も出現した。

以上のことから、埋積が進み、ジメジメとした陸域が推定される。

5. おわりに

久下前遺跡 G 地点において採取された堆積物について堆積環境を検討するために、珪藻化石を調べた。その結果、堆積当初は主に沼沢湿地環境であった。

引用文献

- 安藤一男 (1990) 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42、73-88
 小杉正人 (1988) 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27、1-20
 渡辺仁治 (2005) 『淡水珪藻生態図鑑』内田老鶴園、666p

(2012年3月)

第4節 久下前遺跡 A 2 地点出土の大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スタルジャン (パレオ・ラボ)

1. はじめに

久下前遺跡は本庄市北堀に位置し、男堀川と女堀川に挟まれた微高地に所在する、縄文時代～江戸時代の複合遺跡である。古墳時代前期の河川跡では、木材や種実が出土した。ここでは古墳時代前期の河川跡より出土した大型植物遺体の同定を行い、周辺の植生や利用植物について検討した。

2. 試料と方法

試料は、出土遺物から古墳時代前期 (4世紀; 五領式期) と考えられる A 2 地点河川跡の調査区東壁のセクション堆積物中より採取した 2 試料である。上層を S-1、下層を S-2 として約 20cm × 約 10cm の範囲を厚さ約 5cm の大きさのブロックで採取し、大型植物遺体検出用の試料とした。S-1 は粘質シルト層で、S-2 は砂層～砂礫層 (堆積物の違いでさらに上層と中層、下層に区別) である。また花粉分析とプラント・オパール用の試料も付近から採取され、S-1 が No 4、S-2 が No 5 に対応する。

堆積物の水洗量は S-1 がから 1000cc、S-2 の上層から 300cc、中層から 400cc、下層から 300cc (計 1000cc) を 0.5mm 目の篩で水洗選別した。大型植物遺体の抽出・同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は完形または一部が破損しても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。同定された試料および残渣は、本庄市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物のコウゾ属核とクワ属核・炭化核、マタタビ属種子、キイチゴ属核、ブドウ属種子、タラノキ核、エゴノキ核、エゴノキ属核、ニワトコ核の 9 分類群、草本植物のカラムシ属果実とアカザ属炭化種子、スミレ属種子、イネ炭化粉粒、アワ炭化種子 (穎果)、スゲ属 A 果実、スゲ属 B 果実の 7 分類群、計 16 分類群が得られた。このほかに状態が悪いために科以下の詳細な同定がで

きなかった同定不能種実、炭化種実と、種実以外に虫食い、炭化した子囊菌、昆虫が得られた(第76表)。特に多く産出した分類群はなく、ニワトコとカラムシ属、スゲ属Aが少量産出した他はわずかな産出量であった。

以下に同定した大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) コウゾ属 *Broussonetia* sp. 核 クワ科

赤茶色で、上面観は厚みのある扁平、側面観は不整楕円形。全体的にイボ状の突起があり、着点突出する。長さ2.4mm、幅2.0mm。

(2) クワ属 *Morus* spp. 核・炭化核 クワ科

赤茶褐色で、側面観はいびつな広倒卵形または三角状倒卵形、断面形は卵形または三角形。背面は稜をなす。表面にはゆるやかな凹凸があり、厚くやや硬い。基部に嘴状の突起を持つ。長さ1.7mm、幅1.3mm。

(3) マタタビ属 *Actinidia* spp. 種子 マタタビ科

赤褐色で、完形ならば上面観は長楕円形、側面観は倒卵形または楕円形。表面には五角形や六角形、円形、楕円形などの窪みが連なる規則的な網目模様がある。壁は薄く堅い。サルナシやマタタビなど、種までの同定には至らなかった。微細な破片のため、写真撮影および計測は行っていない。

(4) キイチゴ属 *Rubus* spp. 核 バラ科

淡黄褐色で、上面観は幅広の両凸レンズ形、側面観は先端が湾曲した腎形。表面には不定形な多角形状の稜による網目模様がある。長さ1.4mm、幅0.9mm程度。

(5) ブドウ属 *Vitis* spp. 種子 ブドウ科

茶褐色で、上面観は楕円形、側面観は先端が尖る卵形。背面の中央もしくは基部寄りに匙状の着点があり、腹面には縦方向に2本の深い溝がある。種皮は薄く硬い。長さ4.5mm、幅3.6mm、厚さ2.0mm。

(6) タラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seem 核 ウコギ科

明黄褐色で、上面観は扁平、側面観は半月形。稜に沿って網目状の構造がある。長さ2.2mm、幅1.2mm程度。

(7) エゴノキ *Styrax japonica* Siebold et Zucc. 核 エゴノキ科

茶褐色で、上面観は円形、側面観は倒卵形になる。下端に大きな着点がある。頂部から3本の浅い溝が走る。表面には細かい網目模様があり、厚く硬い。長さ13.0mm、幅7.0mm。破片でハクウンボクとの区別がつかなかった一群をエゴノキ属とした。

(8) ニワトコ *Sambucus racemose* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) H.Hara 核 レンブクソウ科

黄褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形で基部が尖る。基部に小さな着点があり、縦方向にやや反る。波状の凹凸が横方向に走る。長さ2.6mm、幅1.8mm程度。

(9) カラムシ属 *Boehmeria* spp. 果実 イラクサ科

透明感のある黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は上部が尖ったゆがんだ円形。表面はざらつく。長さ1.3mm、幅1.0mm程度。

(10) アカザ属 *Chenopodium* spp. 炭化種子 アカザ科

上面観はやや扁平、側面観は円形。種皮は強い光沢があり、硬い。着点の一端がやや突起し、中心部方向にむかって浅い溝がある。長さ 0.8mm、幅 0.8mm 程度。

- (11) スミレ属 *Viola* sp. 種子 スミレ科
淡黄色で、卵形、表面は平滑で強い光沢がある。長さ 1.3mm、幅 0.3mm。
- (12) イネ *Oryza sativa* L. 炭化粉殻 イネ科
完形ならば側面観は長楕円形 2 条の稜があり、断面形は扁平。表面には単独で規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。基部である小穂軸を中心として残存していた。残存長 1.1mm、残存幅 0.7mm。
- (13) アワ *Setaria italica* P.Beauv. 炭化種子 (穎果) イネ科
上面観は楕円形、側面観は円形に近く、先端がやや突出することがある。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚があり、長さは全長の 2/3 程度。種子の大きさは、長さ 1.2mm、幅 1.0mm 程度。
- (14) スゲ属 A *Carex* sp. A 果実 カヤツリグサ科
赤褐色で、上面観は扁平、側面観は下端が窄まる円形。先端は突出する。表面は微細な網目がある。長さ 2.2mm、幅 1.5mm。
- (15) スゲ属 B *Carex* sp. B 果実 カヤツリグサ科
上面観は三稜形、側面観は下端が窄まる紡錘形。先端はやや突出する。側面は稜をもつ。長さ 1.2mm、幅 0.7mm。

第 76 表 A 2 地点河川跡から出土した大型植物遺体 (括弧内は破片数)

分類群	試料 No.	S-1		S-2	
		粘質シルト層	上層 (砂層)	中層 (砂-砂礫層)	下層 (砂礫層)
	部位 / 水洗量	1000cc	300cc	400cc	300cc
コウゾ属	核			1	1
クワ属	核			(1)	
	炭化核				2
マタタビ属	種子		(2)		
キイチゴ属	核			1	
ブドウ属	種子			1	(3)
タラノキ	核	2(1)	2(1)	4	
エゴノキ	核				1(4)
エゴノキ属	核			(1)	
ニワトコ	核	13(14)	1		1
カラムシ属	果実	2	4	10	7(2)
アカザ属	炭化種子				1
スミレ属	種子			(1)	1(1)
イネ	炭化粉殻		(1)	(8)	(2)
アワ	炭化種子			2	
スゲ属 A	果実	2	8	24(3)	11(1)
スゲ属 B	果実				1
同定不能	種実		(1)	(4)	(4)
	炭化種実			(8)	
虫えい				(3)	1
子囊菌	炭化子囊	+		+	++
昆虫				++	++

+ : 1-9 点、++ : 10 点-20 点



スケール 1-5,7-16: 1mm, 6: 5mm

写真4 本州市久下前遺跡A2地点から出土した大型植物遺体

1. コウゾ属核 (S-2, 下層), 2. クワ属炭化核 (S-2, 下層), 3. キイチゴ属核 (S-2, 中層), 4. ブドウ属種子 (S-2, 中層), 5. タラノキ核 (S-2, 上層), 6. エゴノキ核 (S-2, 下層), 7. ニワトコ核 (S-1), 8. カラムシ属果実 (S-2, 下層), 9. アカザ属炭化種子 (S-2, 下層), 10. スミレ属種子 (S-2, 下層), 11. イネ炭化籽殻 (S-2, 中層), 12. アワ属炭化種子 (S-2, 中層), 13. スゲ属A果実 (S-2, 下層), 14. スゲ属B果実 (S-2, 下層), 15. 虫えい (S-2, 下層), 16. 子囊菌炭化子嚢 (S-2, 中層)

4. 考察

4世紀代の河川跡の堆積物から産出した大型植物遺体を同定した結果、上層の試料S-1には少量産出したニワトコを除いて種実がほとんど含まれていなかったが、下層の試料S-2からは複数の分類群が得られた。得られた分類群から当時の植生を推定すると、河川周辺には落葉広葉樹で高木のクワ属や小高木のエゴノキ、低木のコウゾ属やキイチゴ属、タラノキ、ニワトコなどに混じってつる性植物のマタタビ属やブドウ属が絡んで生育していたと推定される。森林要素が多く、タラノキなどの陽樹が多いので、河川跡の周囲は比較的开けた明るい場所であったと推定される。花粉分析では同一層からアカガシ亜属などの照葉樹も検出されている(第1節参照)。大型植物遺体では照葉樹は見いだされていないため、河川跡の近くには落葉樹を主体とした森林が広がっていたと考えられる。エゴノキ以外は食用などに利用可能な樹木であるため、有用樹が選択され生育していた可能性もある。またこれらの樹木の間にはカラムシ属やアカザ属、スミレ属など乾いた場所に生育する草本植物が生育していたであろう。さらに、S-2ではイネ炭化粉殻とアワ炭化種子が少量産出していることから、付近に水田や畑があった可能性があるが、水田雑草は産出していない。イネ炭化粉殻については籾摺り後の残渣、アワ炭化種子については調理・加工の際の残渣などが、河川内に流れ込んだ可能性もある。付近からは水田や畑は検出されておらず、栽培植物の生育や利用空間についても検討が必要であろう。

(2011年3月)

第5節 久下前遺跡 A1・A2・C4地点出土木材の樹種同定

小林克也・佐々木由香(パレオ・ラボ)

1. はじめに

久下前遺跡は本市北堀に位置し、男堀川と女堀川に挟まれた微高地に所在する、縄文時代～江戸時代の複合遺跡である。本遺跡では古墳時代前期の河川跡が検出され、木製品や加工木、自然木などの木材が出土した。ここではA2地点とC4地点の河川跡から出土した木材の樹種同定を行った。また、これらと比較するため、過去に報告されたA1地点と試掘トレンチから出土した木製品や加工木の樹種についても検討した。なお、試料の一部についてはウィグルマッチング法による放射性炭素年代測定も行われている(第8節参照)。また同定に際し、森林総合研究所の能城修一氏のご教示を得た。

2. 試料と方法

試料はA1地点の河川跡で出土した古墳時代前期の木製品と加工木が6点、A2地点の河川跡の底面の下から出土した弥生時代前期の倒木を含む自然木が2点、倒木とほぼ同一層から出土した弥生時代前期の自然木が2点、河川跡で出土した古墳時代前期の木製品と加工木が20点、出土層がはっきりしないため弥生時代前期または古墳時代前期と推測される自然木が8点、C4地点の河川跡の底面から出土し、A2地点の倒木と同層準のため弥生時代前期と考えられる自然木が8点、試掘トレンチで出土した古墳時代前期の木製品が1点の、計47点である。また、河川跡が形成される以前に堆積した自然木(倒木)についてウィグルマッチング法による放射性炭素年代測定を行った結果、20層年代範囲において702-691cal BC(8.1%)と537-487cal BC(87.3%)となり、確率の高い方の年代範囲は弥

生時代前期に相当する年代を示した(第8節参照)。各試料について、任意に試料番号を付し、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定は、器種と木取りを観察した後、試料の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリで薄い切片を切り出してガムクロラールで封入し、永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて鏡検および写真撮影を行った。なお、作製したプレパラートは(株)パレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

同定の結果、針葉樹ではイヌガヤとモミ属、ヒノキの3分類群と、広葉樹ではクマシデ属イヌシデ節(以下イヌシデ節と呼ぶ)とコナラ属アカガシ亜属(以下アカガシ亜属と呼ぶ)、コナラ属クヌギ節(以下クヌギ節と呼ぶ)、コナラ属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)、ムクノキ、ケヤキ、フジ属、カエデ属、ウコギ属の9分類群の、計12分類群が産出した。その他に科以下の同定ができなかった樹皮が産出した。

弥生時代前期の木材ではケヤキが最も多く5点で、コナラ節が4点、イヌシデ節とカエデ節が各1点産出し、弥生時代前期または古墳時代前期の木材では、ケヤキが5点とコナラ節が2点、フジ属が1点産出した。古墳時代前期の木材ではアカガシ亜属が最も多く8点で、クヌギ節が各5点、ケヤキが4点、イヌガヤと樹皮が各2点、モミ属とヒノキ、ムクノキ、ウコギ属が各1点産出した。

古墳時代前期の木製品を器種別にみると、木製品では、機織具の棒材でヒノキが1点みられ、農工具の櫛状木製品と柄でアカガシ亜属が各1点であった。不明木製品では板状具でアカガシ亜属が1点、棒状具でケヤキが1点、板材でアカガシ亜属が2点、クヌギ節が1点、不明でモミ属が1点であった。木取りでは、機織具の棒材は割材、農工具の櫛状木製品は柾目、柄は芯無削出であった。また不明木製品では板状具はいずれも板目、棒状具は芯無削出、板材はいずれも柾目、不明はいずれも板目であった。

加工木や残材などでは、杭状でイヌガヤが1点、加工木でクヌギ節が1点、残材でアカガシ亜属が

第77表 久下前遺跡出土木材の樹種同定結果

樹種	器種	時代		古墳時代前期											合計		
		弥生時代前期	弥生時代前期または古墳時代前期	織具			農工具			不明木製品							
		自然木	自然木	棒材	櫛状木製品	柄	板状具	棒状具	板材	不明	杭状	加工木	残材	残材か加工木	加工木か自然木	倒木	樹皮
イヌガヤ											1			1			2
モミ属									1								1
ヒノキ				1													1
クマシデ属イヌシデ節		1															1
コナラ属アカガシ亜属					1	1	1		2				3				8
コナラ属クヌギ節									1			1	2	1			5
コナラ属コナラ節		4	2									1	2		1		10
ムクノキ														1			1
ケヤキ		5	5				1						1	1			13
フジ属			1														1
カエデ属		1															1
ウコギ属														1			1
樹皮																	2
合計		11	8	1	1	1	1	1	3	1	1	1	7	4	3	1	2

3点とクヌギ節が2点、コナラ節とケヤキが各1点であった。残材か加工木ではコナラ節が2点、クヌギ節とケヤキが各1点みられ、加工木か自然木ではイヌガヤとムクノキ、ウコギ属が各1点であった。木取りでは、杭状は芯持丸木、加工木は柾目、残材は柾目材のクヌギ節が柾目のほかはすべて割材、残材か加工木はいずれも割材、加工木か自然木は芯持丸木であった。また、樹皮が2点みられた。同定結果を第77表に、一覧を第78表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、各樹種の光学顕微鏡写真を示す。

- (1) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forber) K. Koch イヌガヤ科 写真5 1a-1c (No23)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。樹脂細胞は年輪内に均一に散在する。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1~6列となる。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1分野に2~4個みられる。仮道管の内壁には、1対のらせん肥厚がみられる。

イヌガヤは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する常緑小高木の針葉樹である。樹木自体が小さいため、現在では顕著な木材利用は行われていない。

- (2) モミ属 *Abies* マツ科 写真5 2a-2c (No 6)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2~12列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2~4個みられる。放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミ、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

- (3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc) Endl. ヒノキ科 写真5 3a-3c (No27)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。樹脂細胞は早材の終わりから晩材にかけて散在する。放射組織は単列で、高さ1~6列となる。分野壁孔は中型のトウヒ~ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

- (4) クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 写真5 4a-4c (No29)

小型の道管が単独ないし2~7個放射方向に複合して、やや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1列が直立する異性で、幅1~4列のものと集合放射組織がみられる。

クマシデ属イヌシデ節は温帯から暖帯の山林などに分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬く、割裂しにくい。切削加工は中庸である。

- (5) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 写真5 5a-5c (No18) 写真5・6 6a-6c (No21)

壁の厚い大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみら

れる。

コナラ属アカガシ亜属は材組織では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定が出来ない。そのため本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属と考えられる。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬、強靱で耐水性があり、切削加工は困難である。

(6) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 写真6 7a-7c(No5)

年輪の始めに大型の道管が1～2列並び、晩材部では径を急に減じた壁が厚くて丸い道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で切削などの加工はやや困難である。

(7) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 写真6 8a-8c(No28)、9a-9c(No37)

年輪の始めに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた、薄壁で角張った道管が火炎上に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なコナラはやや重くて強靱で、切削加工はやや難しい。

(8) ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 写真6 10a-10c(No25)

中型の道管がほぼ単独でやや疎に散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状、翼状、4列以上の帯状となる。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、幅1～4列となる。

ムクノキは温帯の日当たりのよい適潤地を好み、海に近い所に比較的多い落葉高木の広葉樹である。材の強さは中庸であるが、靱性があり割裂しにくい。

(9) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 写真6・7 11a-11c(No30)、写真7 12a-12c(No31)

年輪の始めに大型の道管が1列並び、晩材部では急に径を減じた道管が、多数複合して接線～斜線方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が方形となる異性で、幅1～7列となる。放射組織の上下端には大型の結晶がみられる。

ケヤキは温帯から暖帯にかけての肥沃な谷間などに好んで生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難ではない。

(10) フジ属 *Wisteria* マメ科 写真7 13a-13c(No35)

年輪の始めに大型の道管が疎らに1列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が単独ないし2～3個複合して疎らに散在する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状、翼状、成長輪界状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞が混在する異性で、1～6列となる。接線断面において軸方向柔組織と放射組織が層界構造をなす。

フジ属にはフジとヤマフジがみられ、代表的なフジは本州、九州、四国の低山地や平地の林縁や崖、林中などに普通に見られるつる性の広葉樹である。材からは纖維をとり、籠や椅子

第78表 久下前遺跡出土木材の樹種同定結果一覧

試料No.	地点	出土遺構	層位	遺物No.	大分類	小分類	樹種	木取り	備考	時代	年代 測定番号
1	A2	河川跡	第8群 No.1	①	残材	板目材	コナラ属 クスギ節	板目		古墳時代前期	-
2	A2	河川跡	第8群 No.1	②	加工木	板目材	コナラ属 クスギ節	板目		古墳時代前期	-
3	A2	河川跡	一括	③	不明 木製品	板材	コナラ属 アカガシ垂属	板目	農工具か	古墳時代前期	-
4	A2	河川跡	一括	④	不明 木製品	板材	コナラ属 アカガシ垂属	板目	側面に エタリあり	古墳時代前期	-
5	A2	河川跡	一括	⑤	不明 木製品	板材	コナラ属 クスギ節	板目	淵か灘の歯	古墳時代前期	-
6	A2	河川跡	一括	⑥	不明 木製品	不明	モミ属	板目		古墳時代前期	-
7	A2	河川跡	一括	⑦	樹皮	樹皮	樹皮	板目		古墳時代前期	-
8	A2	河川跡	一括	⑧	不明 木製品	棒状具	ケヤキ	芯無削出	側面面取り	古墳時代前期	-
9	A2	河川跡	一括	⑨	残材か 加工木	割材	コナラ属 クスギ節	割材		古墳時代前期	-
10	A2	河川跡	一括	⑩	残材か 加工木	割材	コナラ属 コナラ節	割材		古墳時代前期	-
11	A2	河川跡	一括	⑪	残材か 加工木	割材	コナラ属 コナラ節	割材		古墳時代前期	-
12	A2	河川跡	一括	⑫	残材か 加工木	割材	ケヤキ	割材	木っ端	古墳時代前期	-
13	A2	河川跡	一括	⑬	加工木か 自然木	丸木材	イヌガヤ	芯持丸木	樹皮付き 部分的に炭化	古墳時代前期	-
14	A2	河川跡	第1群 No.5	⑭	樹皮	樹皮	樹皮	板目	穿孔あり	古墳時代前期	-
15	A2	河川跡	第1群 No.1	⑮	残材	割材	ケヤキ	割材		古墳時代前期	-
16	A2	河川跡	第7群 No.1	⑯	残材	割材	コナラ属 アカガシ垂属	割材		古墳時代前期	-
17	A2	河川跡	第7群 No.1	⑰	残材	割材	コナラ属 アカガシ垂属	割材		古墳時代前期	-
18	A2	河川跡	第7群 No.1	⑱	残材	割材	コナラ属 アカガシ垂属	割材		古墳時代前期	-
19	A2	河川跡	第1群 No.8	⑲	残材	割材	コナラ属 クスギ節	割材		古墳時代前期	-
20	A2	河川跡	第1群 No.1	⑳	残材	割材	コナラ属 コナラ節	割材		古墳時代前期	-
21	A1	河川跡		No.127	農工具	棒状 木製品	コナラ属 アカガシ垂属	板目		古墳時代前期	-
22	A1	河川跡		No.128	不明 木製品	板状具	コナラ属 アカガシ垂属	板目		古墳時代前期	-
23	A1	河川跡		No.130	棒状	棒状	イヌガヤ	芯持丸木		古墳時代前期	-
24	A1	河川跡		①	加工木か 自然木	丸木材	ウコギ属	芯持丸木	太い	古墳時代前期	-
25	A1	河川跡		②	加工木か 自然木	丸木材	ムクノキ	芯持丸木	細い	古墳時代前期	-
26	A1	河川跡		③	農工具	柄	コナラ属 アカガシ垂属	芯無削出		古墳時代前期	-
27	試掘 トレンチ			①	機械具	棒材	ヒノキ	割材	片断のみ 突起状の古	古墳時代前期	-
28	A2	河川跡下	砂礫層		側木	自然木	コナラ属 コナラ節	芯持丸木	Y字状に分枝	弥生時代前期	PLD-16391
29	A2	河川跡下	砂礫層		自然木	自然木	クマシデ属 イヌシデ節	芯持丸木	コナラ節材 側木下出土	弥生時代前期	-
30	A2	河川跡下または 河川跡	一括		自然木	自然木	ケヤキ	芯持丸木		弥生時代前期または 古墳時代前期	-
31	A2	河川跡下または 河川跡	一括		自然木	自然木	ケヤキ	芯持丸木		弥生時代前期または 古墳時代前期	-
32	A2	河川跡下または 河川跡	一括		自然木	自然木	コナラ属 コナラ節	芯持丸木		弥生時代前期または 古墳時代前期	-
33	A2	河川跡下または 河川跡	一括		自然木	自然木	ケヤキ	芯持丸木		弥生時代前期または 古墳時代前期	-
34	A2	河川跡下または 河川跡	一括		自然木	自然木	ケヤキ	芯持丸木		弥生時代前期または 古墳時代前期	-
35	A2	河川跡下または 河川跡	一括		自然木	自然木	フジ属	芯持丸木		弥生時代前期または 古墳時代前期	-
36	A2	河川跡下または 河川跡	一括		自然木	自然木	ケヤキ	芯持丸木		弥生時代前期または 古墳時代前期	-
37	A2	河川跡下または 河川跡	一括		自然木	自然木	コナラ属 コナラ節	芯持丸木		弥生時代前期または 古墳時代前期	-
38	A2	河川跡底面	6層	①	自然木	自然木	ケヤキ	芯持丸木		弥生時代前期	-
39	A2	河川跡底面	6層	②	自然木	自然木	コナラ属 コナラ節	芯持丸木		弥生時代前期	-
40	C4	河川跡下	8層	①	自然木	自然木	コナラ属 コナラ節	芯持丸木		弥生時代前期	-

試料 No.	地点	出土遺構	層位	遺物No.	大分類	小分類	樹種	木取り	備考	時代	年代 測定番号
41	C4	河川跡下	8層	㉔	自然木	自然木	コナラ属 コナラ節	芯持丸木		弥生時代前期	-
42	C4	河川跡下	8層	㉕	自然木	自然木	ケヤキ	芯持丸木		弥生時代前期	-
43	C4	河川跡下	8層	㉖	自然木	自然木	ケヤキ	芯持丸木		弥生時代前期	-
44	C4	河川跡下	8層	㉗	自然木	自然木	カエデ属	芯持丸木		弥生時代前期	-
45	C4	河川跡下	8層	㉘	自然木	自然木	ケヤキ	芯持丸木		弥生時代前期	-
46	C4	河川跡下	8層	㉙	自然木	自然木	ケヤキ	芯持丸木		弥生時代前期	-
47	C4	河川跡下	8層	㉚	自然木	自然木	コナラ属 コナラ節	芯持丸木		弥生時代前期	-

などに用いる。

(11) カエデ属 *Acer* カエデ科 写真7 14a-14c(No44)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで雲紋状の文様が木口面にみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～2列のものと4列以上のものに二分化する。

カエデ属は、10列以上の放射組織を持つチドリノキ以外は種までの同定ができない。そのため本試料はチドリノキ以外のカエデ属と考えられる。カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

(12) ウコギ属 *Eleutherococcus* ウコギ科 写真7 15a-15c(No24)

小型の道管が多数複合し、接線～斜線状に配列する散孔材である。晩材部では道管の径は減じる傾向がみられる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1～2列が方形となる異性で、4～7列となる。放射組織には不完全な鞘細胞がみられる。

ウコギ属は、半環孔性となるコシアブラ以外は種までの同定が出来ない。そのため本試料はコシアブラ以外のウコギ属と考えられる。ウコギ属にはヤマウコギやヒメウコギなどがあり、代表的なヤマウコギは北海道西南部、本州、西国の温帯から暖帯の山野に普通に見られる落葉低木の広葉樹である。材は細く、現在では用材としての利用はほとんどない。

(13) 樹皮 Bark 写真7 16a-16c(No 7)

篩部細胞が放射組織に並ぶ樹皮である。樹皮は対象標本が少なく、同定には至っていない。

4. 考察

弥生時代前期の倒木を含めた自然木では、ケヤキとコナラ節が比較的多くみられた。ケヤキは谷間などの肥沃な場所に生育しやすい樹種であり、本遺跡では倒木が出土しているため、遺跡内に生育していたと考えられる。また弥生時代前期または古墳時代前期の自然木にはケヤキが多くみられ、その他にはコナラ節とフジ属が産出した。

古墳時代前期の木製品で比較的多く産出したアカガシ亜属は、とても重硬で強靱な樹種である。またケヤキは、重硬な樹種に含まれるが加工性が良く、モミ属とヒノキはやや軽軟で加工性の良い樹種である。農具など耐朽性が必要な木製品には重硬なアカガシ亜属を、耐朽性をそれほど必要としない木製品では加工性の良いモミ属やヒノキ、ケヤキなどを用材選択していた可能性が考えられる。アカガシ亜属で不明木製品とした柁目の板材は残存状態が悪く器種の判断に至らなかったが、薄板状の

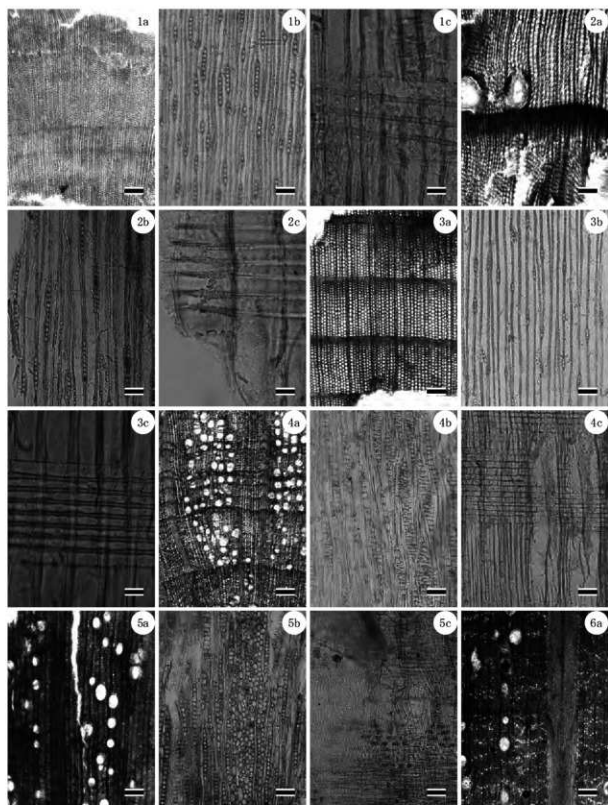


写真5 久下前遺跡出土木材の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c. イヌガヤ(No. 23) 2a-2c. モミ属(No. 6) 3a-3c. ヒノキ(No. 27) 4a-4c. クマシデ属イヌシデ節(No. 29)
5a-5c. コナラ属アカガシ亜属(No. 18) 6a. コナラ属アカガシ亜属(No. 21)

a: 横断面(スケール=250 μm) b: 接線断面(スケール=100 μm) c: 放射断面(スケール=1-3:25 μm ・4-5:100 μm)

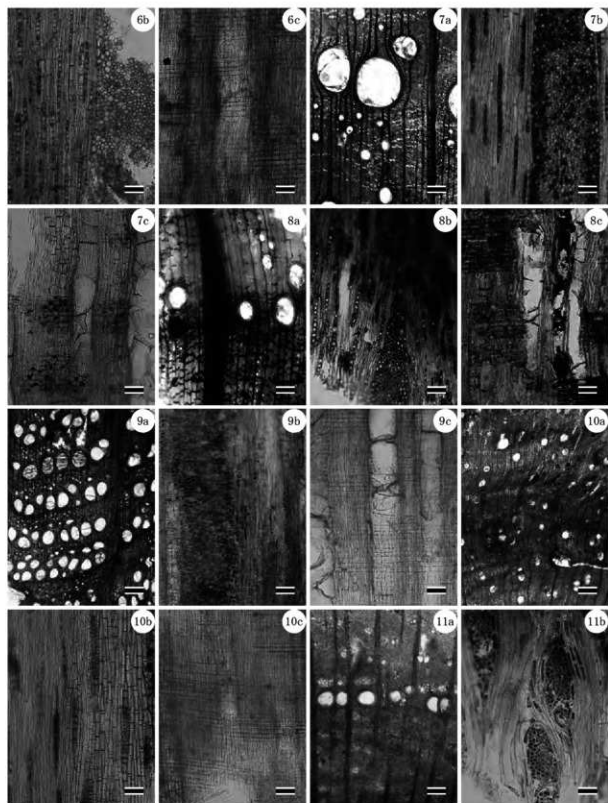


写真6 久下前遺跡出土木材の光学顕微鏡写真(2)

6b-6c, コナラ属アカガシ亜属(No. 21) 7a-7c, コナラ属クヌギ節(No. 5) 8a-8c, コナラ属コナラ節(No. 28)

9a-9c, コナラ属コナラ節(No. 37) 10a-10c, ムクノキ(No. 25) 11a-11b, ケヤキ(No. 30)

a: 横断面(スケール=250 μm) b: 接線断面(スケール=100 μm) c: 放射断面(スケール=100 μm)

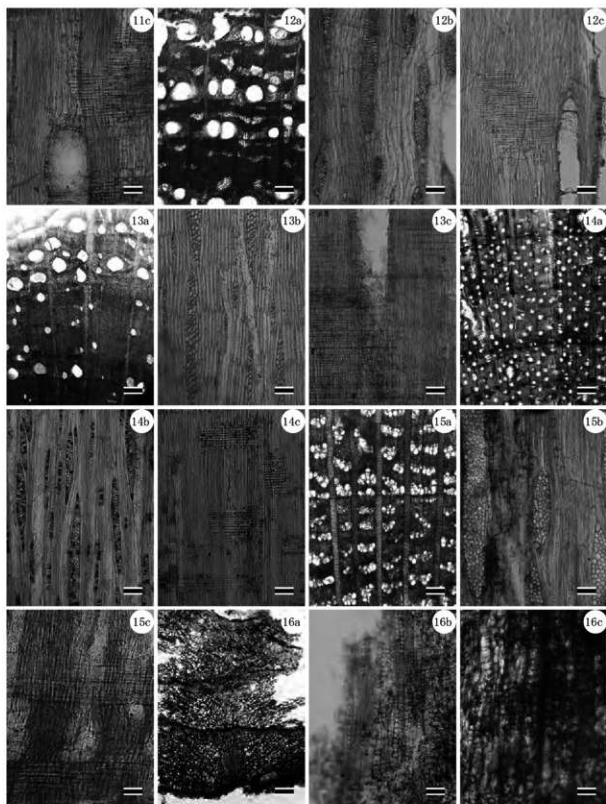


写真7 久下遺跡出土木材の光学顕微鏡写真(3)

11c. ケヤキ(No. 30) 12a-12c. ケヤキ(No. 31) 13a-13c. フジ属(No. 35) 14a-14c. カエデ属(No. 44) 15a-15c. ウコギ属(No. 24) 16a-16c. 樹皮(No. 7)

a: 横断面(スケール=250 μm) b: 接線断面(スケール=100 μm) c: 放射断面(スケール=100 μm)

ため、農工具であった可能性がある。またクヌギ節で不明木製品とした柾目の板材も同様に器種の判断に至らなかったが、鎌か鋤の歯であった可能性がある。

古墳時代前期の加工木や残材では、木製品の中では確認できなかったクヌギ節とコナラ節が産出した。残材は木製品や加工木を加工した際に出た残り、久下前遺跡ではクヌギ節とコナラ節も木製品や加工木に利用されていた可能性がある。これらクヌギ節とコナラ節は重硬で強靱な樹種であり、アカガシ亜属などと同じく耐朽性が必要なものに利用されていた可能性がある。また加工木が自然木でも、イヌガヤとムクノキ、ウコギ属など木製品でみられなかった樹種がみられた。

花粉分析の結果では、弥生時代前期にはクヌギ節とコナラ節を含めたコナラ属コナラ亜属（以下コナラ亜属と呼ぶ）をはじめ、クマシデ属—アサダ属、カバノキ属、ニレ属—ケヤキ属、カエデ属などが多く産出し、遺跡周辺の丘陵部から低地にかけて落葉広葉樹林が広がり、落葉広葉樹林のなかにアカガシ亜属やシイノキ属などの照葉樹がわずかに生育していたと推測されている。また古墳時代前期には、コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林に温帯性針葉樹のスギ林や照葉樹が混じる森林が形成されていたと推測されている（第1節参照）。

東松山市の反町遺跡では、古墳時代の木製品類 285 点と自然木 79 点の樹種同定が行われており、遺跡周辺に人為的な二次林が形成され、現在の植生では確認できない照葉樹林の主要な構成樹種が自然木で確認されている。また木製品類でみられたモミ属やスギ、ヒノキといった針葉樹やイチイガシやトチノキといった広葉樹が、遠方で製材されて反町遺跡にもたらされたか、製品として他地域から搬入されたと想定されている（能城他 2009）。

久下前遺跡の自然木では、弥生時代前期から古墳時代前期を通して照葉樹のアカガシ亜属や落葉樹のクヌギ節は産出さず、古墳時代前期の人の手の加わった木材では、これらの樹種が比較的多く使われていた。しかし花粉分析の結果では、弥生時代前期と古墳時代前期共に、アカガシ亜属とクヌギ節を含めたコナラ亜属の花粉が確認されており、量は少ないがアカガシ亜属とクヌギ節も周辺に生育していた可能性が高い。したがって反町遺跡とは異なり、久下前遺跡では遺跡内及び周辺に生育していた樹木より、用途に応じた木材選択を行っていたと考えられる。古墳時代前期ではアカガシ亜属やクヌギ節、コナラ属などの残材が認められたことから、これらの樹種を持ち込み、木材加工を遺跡内で行っていた可能性がある。

引用文献

能城修一・佐々木由香・村上由美子（2009）「反町遺跡出土木材の樹種」「反町遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書（2011年3月）

第6節 久下前遺跡G地点と久下東遺跡B1地点出土木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

本庄市北郷に所在する久下前遺跡G地点と久下東遺跡B1地点から出土した木製品の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

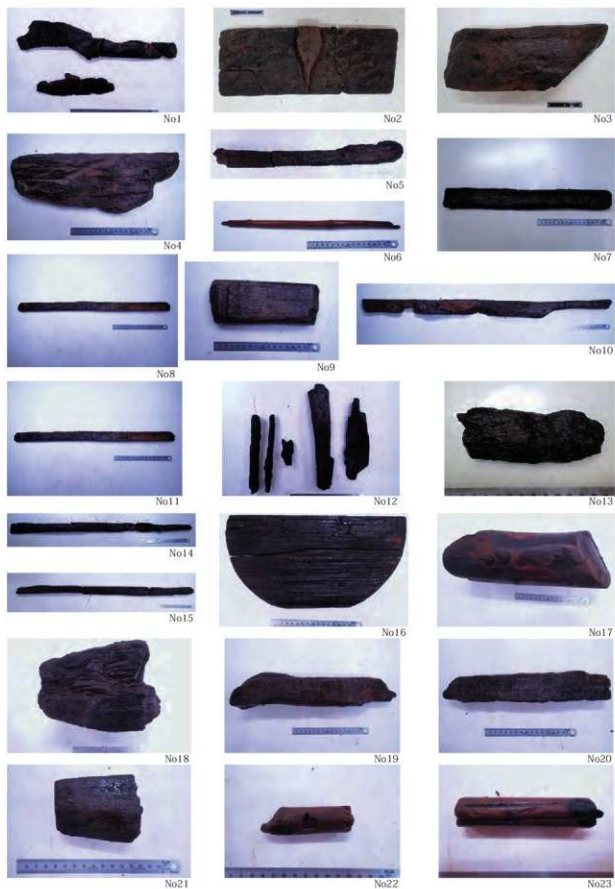


写真8 樹種同定試料 (縮尺不同)

試料は、久下前遺跡G地点の河道と第26号井戸跡、久下東遺跡B1地点の第4号井戸跡から出土した木製品と加工木、計23点である(写真8)。遺構の時期は、河道は古墳時代前期、井戸は近世の江戸時代である。

これらの試料から、剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクロールで封入してプレバートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定、写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹はヒノキとイヌガヤの2分類群、広葉樹はコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)とコナラ属クヌギ節(以下、クヌギ節)、コナラ属コナラ節(以下、コナラ節)、コナラ属樹皮、クワ属、カエデ属、ニワトコ属の7分類群、計9分類群が確認された。

器種別の樹種同定結果を第79表、結果の一覧を第80表に示す。試料全体では、クヌギ節が11点、コナラ節が4点、アカガシ亜属3点、ヒノキとイヌガヤ、コナラ属樹皮、クワ属、カエデ属、ニワトコ属は各1点確認されている。

以下に、同定根拠となった木材組成の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 写真9 1a-1c(No16)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型〜ヒノキ型で、1分野に2個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性及び体湿性は著しく高く、狂いが少ない。

(2) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K. Koch イヌガヤ科 写真9 2a-2c(No 6)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。仮道管は薄壁で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は早材と晩材を通じて均等に分布する。放射組織は単列で、2〜5細胞高、分野壁孔はトウヒ型で1分野に1〜2個存在する。仮道管にらせん肥厚がある。

イヌガヤは岩手県以南の暖帯から温帯に生育する常緑の低木または小高木である。材は堅硬および緻密である。

(3) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen.Cyclobalanopsis* ブナ科 写真9 3a-3c(No10)

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。イチイガシとシリブカガシマテバシイ以外は木材組織からは識別困難なため、イチイガシとシリブカガシマテバシイを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強韌で、水湿に強い。

(4) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 写真9 4a-4c(No14)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

第79表 器種別の樹種同定結果

樹種/器種	鋸	横鋸未成品	底板	弓	原材	不明	加工木				計
							板状	角材	丸木	樹皮	
ヒノキ			1								1
イヌガヤ				1							1
コナラ属アカガシ亜属	1	1				1					3
コナラ属クヌギ節						1	9		1		11
コナラ属コナラ節					1	1		2			4
コナラ属										1	1
クワ属								1			1
カエデ属						1					1
ニワトコ属								1			1
計	1	1	1	1	1	1	3	9	4	1	24

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強靱で、加工困難である。

(5) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 写真9 5a-5c(No18)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部及び暖帯に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

(6) コナラ属樹皮 *Quercus bark* 写真9・10 6a-6c(No13)

二次師部と周皮で構成される樹皮である。樹皮に厚みがあり、内樹皮に近い部位では単列の放射組織と広放射組織がみられるため、コナラ属とした。

(7) クワ属 *Morus* クワ科 写真10 7a-7c(No17)

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は3~5列幅で、上下端の1~2細胞が直立もしくはは方形細胞である異性である。

クワ属は温帯から暖帯、亜熱帯に分布する落葉高木で、ケグワとマグワ、ヤマグワなどがある。材は堅硬で、韌性に富む。

(8) カエデ属 *Acer* カエデ科 写真10 8a-8c(No 4)

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において木部繊維の壁厚の違いによる雲紋状の模様が見られる。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚が見られる。放射組織はほぼ同性で、1~5列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジやハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種がある。材は全体的に緻密で韌性がある。

(9) ニワトコ属 *Sambucus* スイカズラ科 写真10 9a-9c(No22)

小形の道管が複合して接線~斜線状に配列する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は3~5列幅の異性で、不完全な鞘細胞が見られる。

ニワトコ属は温帯から暖帯に分布する落葉小高木または低木で、ニワトコとエゾニワトコがある。材はやや柔らかい部類に属す。

4. 考察

農耕土木具の鎌と横鎌未成品はアカガシ亜属であった。また、不明木製品もアカガシ亜属であり、木製品の原材はコナラ節であった。アカガシ亜属の材は重硬で靱性もあるため、農耕具など強度を要する器種に適している。埼玉県でも古墳時代の農耕具にはアカガシ亜属の使用が多く確認されている(伊藤・山田編 2013)。

弓はイヌガヤであった。イヌガヤは低木もしくは小高木であり、丸木のまま弓に使用できる。本試料も丸木の先端に加工が施してあった。全国的にも弓にはイヌガヤを多用する傾向があり、関東地方でもイヌガヤの使用が多い(伊藤・山田編 2013)。

底板はヒノキであった。ヒノキは軽軟で割裂性が大きいため製材しやすい。また、耐水性もあるので水場での使用に適している。

その他の加工木は、角材はすべてクヌギ節であり、板状はクヌギ節とコナラ節、カエデ属、丸木はコナラ節とクワ属、ニワトコ属であった。なお、ニワトコ属の材は中心の髄が抜けて中空になっていた。加工痕のない丸木はクヌギ節であった。いずれも器種や用途は不明である。クヌギ節とコナラ節、カエデ属、クワ属は重硬な材である。

樹種同定の結果、今回の木製品は古墳時代前期における周辺地域の用材傾向に即していた。原材や

第80表 樹種同定結果一覧

No.	遺構	層位	試料No.	器種	樹種	木取り	備考
1	河道西平	-	木片 No.16	鎌	コナラ属アカガシ亜属	板目	
2	河道西平	Ⅲ層下部	木片 No.27	横鎌未成品	コナラ属アカガシ亜属	板目	
3	河道西平	-	木片 No.29	木製品原材	コナラ属コナラ節	板目	
4	河道西平	Ⅲ'層	木片 No.31	加工木(板状)	カエデ属	板目	
5	河道西平	Ⅲ'層	木片 No.32	加工木(角材)	コナラ属クヌギ節	角材	片端炭化
6	河道西平	Ⅲ'層	木片 No.33	弓	イヌガヤ	芯持丸木	
7	河道西平	Ⅲ'層	木片 No.34	加工木(角材)	コナラ属クヌギ節	角材	
8	河道西平	Ⅲ'層	木片 No.35	加工木(角材)	コナラ属クヌギ節	割材	
9	河道西平	Ⅲ'層	木片 No.36	加工木(板状)	コナラ属クヌギ節	板目	
10	河道西平	Ⅲ層下部	木片 No.37	不明木製品	コナラ属アカガシ亜属	角材	
11	河道西平	Ⅲ層下部	木片 No.38	加工木(角材)	コナラ属クヌギ節	角材	
12-1	河道西平	Ⅲ層下部	木片 No.39	加工木(板状)	コナラ属コナラ節	板目	
丸木				コナラ属クヌギ節	芯持丸木(樹皮付)		
13	河道西平	Ⅲ層下部	木片 No.40	樹皮	コナラ属	板目状	
14	河道西平	-	木片 No.51	加工木(角材)	コナラ属クヌギ節	角材	
15	河道西平	Ⅳ層	木片 No.53	加工木(角材)	コナラ属クヌギ節	角材	
16	SE-04	-	木片 No.27	底板	ヒノキ	板目	
17	SE-26	-	木片	加工木(丸木)	クワ属	芯持丸木	片側切断痕
18	SE-26	-	木片	加工木(丸木)	コナラ属コナラ節	芯持丸木	
19	SE-26	-	木片	加工木(角材)	コナラ属クヌギ節	角材	
20	SE-26	-	木片	加工木(角材)	コナラ属クヌギ節	角材	
21	SE-26	-	木片	加工木(角材)	コナラ属クヌギ節	角材	
22	SE-26	-	木片	加工木(丸木)	ニワトコ属	芯持丸木	片端切断痕
23	SE-26	-	木片	加工木(丸木)	コナラ属コナラ節	芯持丸木	片端炭化

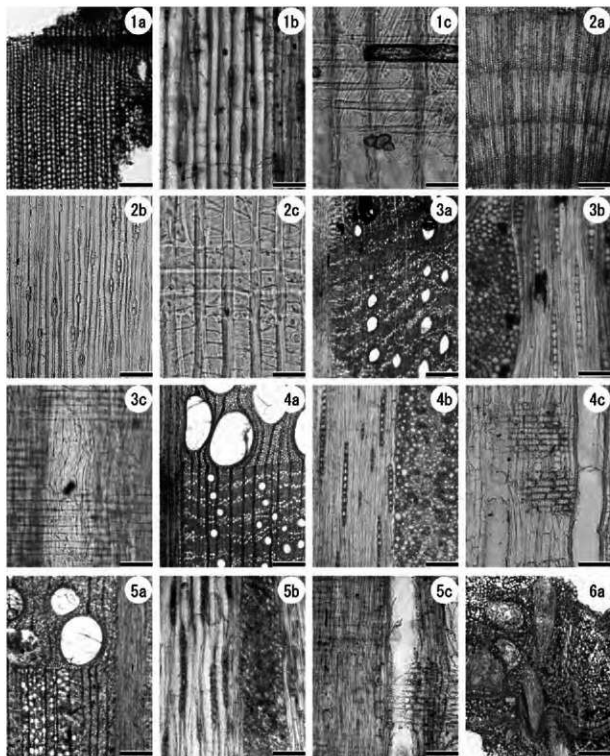


写真9 久下前遺跡出土材の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c. ヒノキ (No. 16)、2a-2c. イヌガヤ (No. 6)、3a-3c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 10)、4a-4c. コナラ属クスギ属 (No. 14)、5a-5c. コナラ属コナラ節 (No. 18)、6a. コナラ属樹皮 (No. 13)
 a: 横断面 (スケール=250 μ m)、b: 接線断面 (スケール=100 μ m)、c: 放射断面 (スケール=1-2: 25 μ m、3-5: 100 μ m)

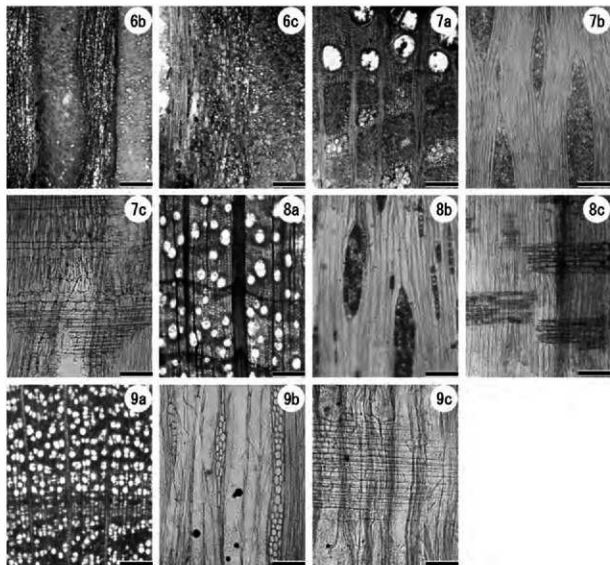


写真 10 久下前遺跡出土材の光学顕微鏡写真（2）

6b-6c. コナラ属樹皮 (No. 13)、7a-7c. クワ属 (No. 17)、8a-8c. カエデ属 (No. 4)、9a-9c. ニワトコ属 (No. 22)

a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=6 : 250 μm 、7-9 : 100 μm)、c: 放射断面 (スケール=6 : 250 μm 、7-9 : 100 μm)

加工木、丸木、樹皮については用途不明であるが、いずれも遺跡周辺に生育していた樹種であったと考えられる。

(2015年3月)

参考・引用文献

平井信二 (1996) 『木の大自然』朝倉書店 394p

伊藤隆夫・山田昌久編 (2012) 『木の考古学—出土木製品用材データベース—』海青社 449p

第7節 久下前遺跡G地点と久下東遺跡B2地点出土木製品の樹種同定

黒沼保子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

本庄市に所在する久下前遺跡G地点の河川跡下から出土した加工木と、久下東遺跡B2地点の江戸時代の井戸から出土した木製品について、樹種同定を行った。なお、加工木は同一資料で放射性炭素年代測定も行われており、弥生時代後期の暦年代範囲を示した(第9節参照)。

2. 試料と方法

試料は、久下前遺跡G地点の河川跡下の暗灰緑色土から出土した加工木が1点(No 1)と、久下東遺跡B2地点第8号井戸跡(恋河内・的野 2014)から出土した木製品4点の、計5点である(第169図)。時期については、第8号井戸跡は江戸時代と考えられ、河川跡下から出土した加工木は放射性炭素年代測定により弥生時代後期であった。

目視で木取りを確認した後、試料から剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、針葉樹はモミ属とマツ属複雑管束亜属の2分類群、広葉樹はコナラ属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)とトチノキの2分類群、計4分類群が確認された。結果を第81表に示す。

加工木はコナラ節で、木取りは芯持丸木であった。漆器碗はトチノキで、木取りは横木取りであった。曲物は側板も底板もモミ属で、木取りはともに柾目であった。板材はマツ属複雑管束亜属で、木取りは追柾目であった。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 写真 11 1a-1c(No 3-1)、2a-2c(No 3-2)

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織でじゅず状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1~4個存在する。

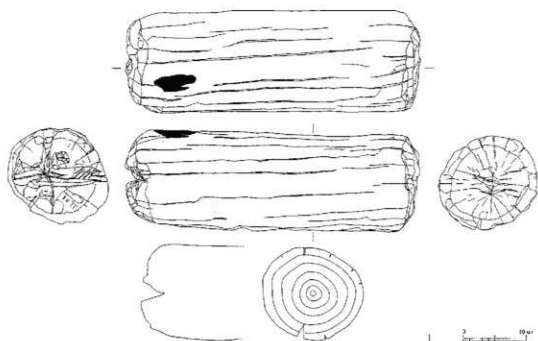
モミ属は暖帯から温帯の山地に生育するむ常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約5種ある。材は軽軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性は低い。

(2) マツ属複雑管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ化 写真 11 3a-3c(No 4)

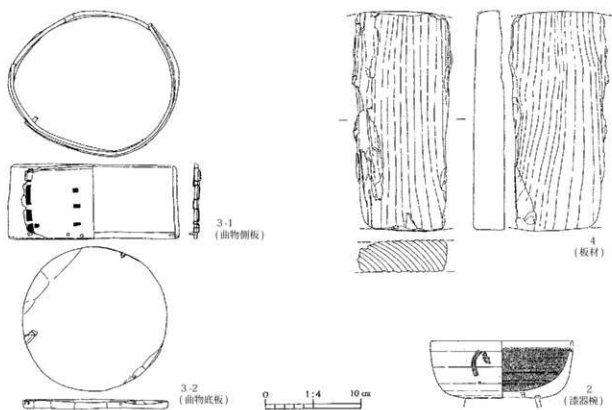
仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への

第81表 樹種同定結果

遺構	No.	器種	樹種	木取り	年代測定番号
河川跡	1	加工木	コナラ属コナラ節	芯持丸木	PLD-23082 ~ 23084
SE08	2	漆器碗	トチノキ	横木取り	-
SE08	3-1	曲物側板	モミ属	柾目	-
SE08	3-2	曲物底板	モミ属	柾目	-
SE08	4	板材	マツ属複雑管束亜属	追柾目	-



久下前遺跡G地点河川跡出土加工木



久下東遺跡B2地点第8号井戸跡出土木製品

第169圖 分析試料

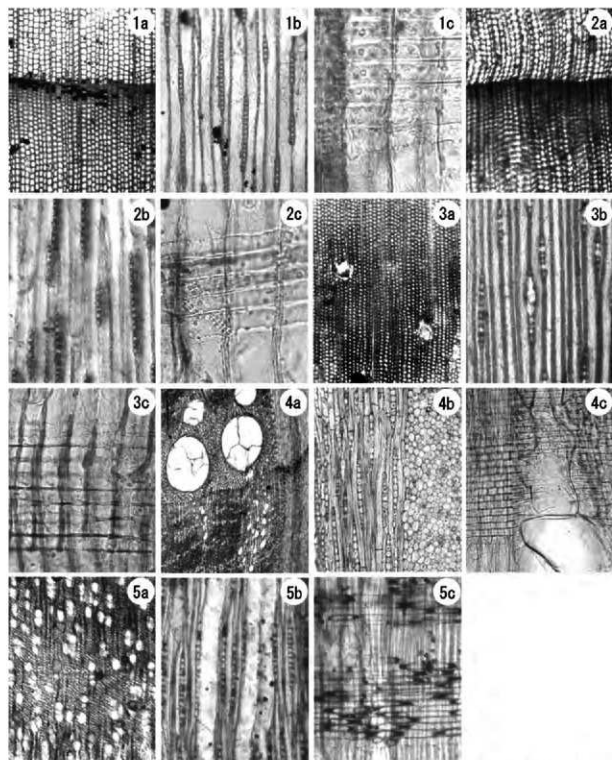



写真 11 久下前遺跡G地点出土木製品の光学顕微鏡写真

スケール: 

1a-1c. モミ属 (No. 3-1)、2a-2c. モミ属 (No. 3-2)、3a-3c. マツ属複雑管束亜属 (No. 4)、4a-4c. コナラ属コナラ節 (No. 1)、5a-5c. トチノキ (No. 2)

a: 横断面 (スケール=250 μ m)、b: 接線断面 (スケール=100 μ m)、c: 放射断面 (スケール=1c-3c: 25 μ m、4c-5c: 100 μ m)

移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複雑管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性は大である。

(3) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 写真11 4a-4c(No 1)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と広放射組織の2種類がある。

(4) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 写真11 5a-5c(No 2)

やや小型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。接線断面において放射組織は層界状に配列する。

トチノキは温帯から暖帯に分布する落葉高木で、やや湿り気のある肥沃な土地の深い谷間や中腹の緩傾斜地によく生育する。材は柔らかく緻密であるが、保存性は低い。

4. 考察

弥生時代後期の加工木は芯持丸木で伐採痕があり、樹種はコナラ節であった。コナラ節は日当りの良い山野に生育する落葉広葉樹である。したがって、川岸ではなくやや離れた所に生育していたと思われる。利用するために伐採後に移動されたと推測される。

また、江戸時代の井戸 SE08 から出土した木製品では、漆器はトチノキで、木取りは横木取りであった。近世の漆器にはケヤキやトチノキ、ブナが多用される傾向があり(北野 2005)、漆器の一般的な用材傾向と一致する。

曲物はモミ属であった。曲物にはスギやヒノキなど軽軟で加工容易な針葉樹が良く利用される(伊藤ほか 2011)。モミ属の材も軽軟で加工しやすく、また虫や鼠に強いとされており、民俗例としては食品の保管容器や米櫃など特定の用途に利用される傾向がある(伊藤ほか 2011)。また板材のマツ属複雑管束亜属は、針葉樹の中では重硬な部類に属する。

中世以降、江戸周辺ではスギやマツなどの植林が本格化し、スギ・ヒノキ・マツ属を中心とした針葉樹が大量消費される傾向が明らかにされている(鈴木・三浦 2012)。今回は分析点数が少ないため、木材利用の傾向については言及できないが、周辺の用材傾向と矛盾しない結果であった。

引用文献

- 伊藤隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)『日本有用樹木誌』海青社 238p
 北野信彦(2005)『近世出土漆器の研究』吉川弘文館 394p
 鈴木・三浦(2012)『南関東(2)―神奈川県・千葉県・東京都・埼玉県(中世以降)―』『木の考古学出土木製品用材データベース』海青社 185-192

(2014年3月)

第8節 久下前遺跡 A 2 地点出土木材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

1. はじめに

久下前遺跡は、埼玉県本庄市北堀地内に所在する段丘上の遺跡である。調査では、古墳時代前期の河川跡が検出され、遺物の他、倒木とみられる大型の丸木材が出土した。ここでは、この倒木について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

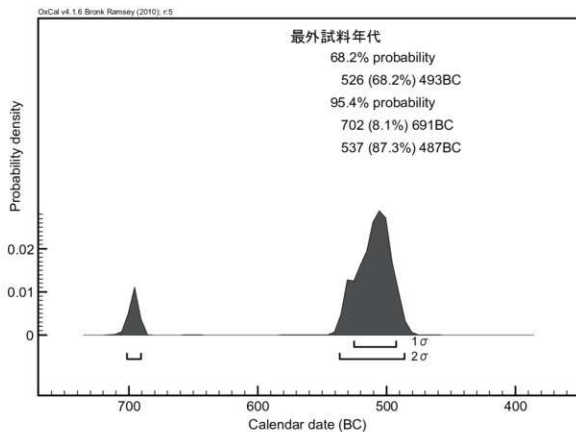
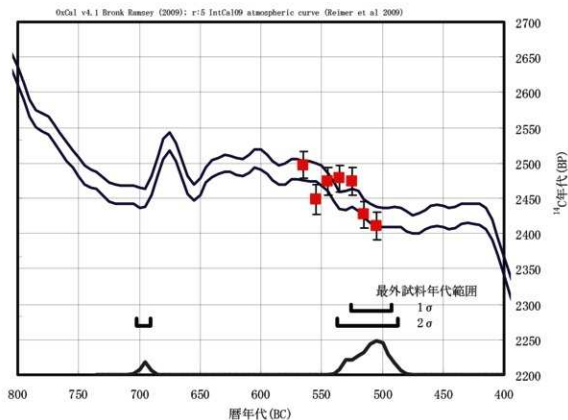
測定した対象試料は、A 2 地点の古墳時代前期の河川跡底部から出土した大径の倒木である。測定試料は、倒木をチェーンソーで輪切りで切断した後、年輪計測を行い、5 年輪単位で 7 試料を採取した (第 82 表、写真 12)。これらの年輪試料は、調整した後、加速器質量分析計 (コンパクト AMS: NEC 製 1.5

第 82 表 久下前遺跡 A 2 地点倒木のウィグルマッチング試料及び処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理データ
PLD-16725	調査区: 久下前遺跡 A2 地点 層位: 古墳前期河川跡より下位層 種類: 木材 (コナラ属コナラ節) 形状: 最大直径 38cm, 芯持丸木 方法: ウィグルマッチング法	採取位置: 最外・5 年輪	超音波洗浄 酸・アルカリ・機洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-16726		採取位置: 11-15 年輪	
PLD-16727		採取位置: 21-25 年輪	
PLD-16728		採取位置: 31-35 年輪	
PLD-16729		採取位置: 41-45 年輪	
PLD-16730		採取位置: 51-55 年輪	
PLD-16731		採取位置: 61-65 年輪	

第 83 表 放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-16725	-26.03 \pm 0.18	2411 \pm 19	2410 \pm 20	510BC (56.7%) 436BC	716BC (3.8%) 694BC
				425BC (11.5%) 409BC	540BC (91.6%) 403BC
PLD-16726	-26.18 \pm 0.18	2427 \pm 19	2425 \pm 20	521BC (68.2%) 412BC	732BC (12.6%) 691BC
					661BC (2.0%) 651BC
PLD-16727	-26.20 \pm 0.19	2474 \pm 19	2475 \pm 20	751BC (21.8%) 704BC	763BC (32.5%) 681BC
				695BC (3.8%) 687BC	673BC (62.0%) 510BC
PLD-16728	-25.24 \pm 0.18	2478 \pm 19	2480 \pm 20	621BC (2.7%) 614BC	436BC (0.9%) 425BC
				594BC (25.6%) 539BC	
PLD-16729	-25.65 \pm 0.18	2474 \pm 19	2475 \pm 20	753BC (14.4%) 724BC	764BC (31.4%) 679BC
				694BC (3.6%) 686BC	674BC (64.0%) 514BC
PLD-16730	-30.02 \pm 0.17	2449 \pm 21	2450 \pm 20	668BC (16.9%) 632BC	751BC (27.7%) 687BC
				625BC (5.8%) 612BC	667BC (8.9%) 640BC
PLD-16731	-26.78 \pm 0.17	2497 \pm 19	2495 \pm 20	596BC (27.6%) 541BC	594BC (58.9%) 411BC
				751BC (21.8%) 704BC	770BC (20.0%) 706BC
				526BC (68.2%) 493BC	695BC (75.4%) 539BC
最外年輪の年代範囲				526BC (68.2%) 493BC	702BC (8.1%) 691BC
					537BC (87.3%) 487BC



第 170 図 久下前遺跡 A 2 地点倒木のウィグルマッチング結果

SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表 83 に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲、ウィグルマッチング結果を、図 170 にウィグルマッチング結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は、AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代は誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定統計誤差、標準偏差値等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。なお、暦年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

[暦年較正]

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C 半減期 5730 \pm 40年) を較正して、より実際に年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal14.1(較正曲線データ IntCal10)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

[ウィグルマッチング法]

試料の年代を得る上での問題は ^{14}C 年代値から暦年較正を行う際に較正曲線に凹凸があるため単一の測定値から高精度の年代を決定するのが難しいという点である。ウィグルマッチング法では複数の資料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと、較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって高精度で信頼性のある年代値を求めることができる。

測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の ^{14}C 年代値から暦年較正を行い、得られた確率分布を年輪幅だけずらしてすべてを足し合わせるにより最外年輪の確率分布を算出する。この確率分布より年代範囲を求める。

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行い、PLD-16725 ~ 16731を用いてウィグルマッチング法により最外年輪の暦年代を求めた。

A 2地点の古墳時代前期の河川跡底部から出土した倒木のウィグルマッチングを行った結果、 1σ 暦年代範囲において、526-493calBC(68.2%)、 2σ 暦年代範囲において、709-691calBC(8.1%)および537-487cal BC(87.3%)であった。この年代範囲のうち、 2σ 暦年代範囲の確率の高い方の年代範囲は弥生時代前期の年代範囲を示す。

対象とした倒木は、古墳時代前期の河川跡底部に横断して横たわっていた木材であるが、調査では河

川跡の底面付近の両側壁に潜り込んだ状態で出土した。このことは、この倒木が古墳時代前期より前にすでに存在したことを示し、年代測定結果の年代範囲が妥当であることを裏付けている。

なお、この河川跡の下流部の調査（C 4 地点）においても同様の大径木（すべてコナラ属コナラ節）が数多く検出されており、やはり今回の資料と同様に木材の一部が古墳時代前期の河川跡の底面付近の両側壁に潜り込んだ状態で出土していることから、これらの木材も同時期の木材である可能性が高い。

参考文献

Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 43(2A), 381-389

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」:3-20, 日本第四紀学会

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, J., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111-1150.

(2011年3月)



写真 12 A 2 地点河川跡底部から出土した大型木材（コナラ属コナラ節）とウィグルマッチング試料
（虫ピンは 5 年輪間隔）

第9節 久下前遺跡G地点出土木材および種子の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭玄・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani

1. はじめに

久下前遺跡G地点の流路跡から検出された木材および種子試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは第84・85表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS-NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第84表 ウィグルマッピング測定試料及び処理

測定番号	遺跡・試料データ	採取データ	前処理データ
PLD-20394	層位: 砂・泥炭互層上部 試料: 生材 種類: コナラ属コナラ節 状態: wet	採取位置: 1-5y(最外以外部位不明)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-20395		採取位置: 11-15y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-20396		採取位置: 21-25y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-20397		採取位置: 31-35y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-20398		採取位置: 41-45y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-23082		種類: 生加工木	採取位置: 1-5y(BARK側)
PLD-23083	試料: 生材 種類: コナラ属コナラ節	採取位置: 41-45y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-23084	状態: wet	採取位置: 76-80y	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)

第85表 単体測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-20399	遺物 No. 砂・泥炭互層泥炭層内	試料の種類: 生種実(ナラガシワ殿斗) 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

3. 結果

第86・87表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、ウィグルマッピング結果を、第88表に単体試料の暦年較正結果を、第171図にウィグルマッピング結果を、第173図に単体試料の暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代は、AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代は誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。なお、暦年較正、ウィグルマッピング法の詳細は以下のとおりである。

第 86 表 放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-20394	-27.8 \pm 0.11	2198 \pm 23	2200 \pm 25	356BC(47.1%)286BC 234BC(21.1%)203BC	365BC(95.4%)197BC
PLD-20395	-29.34 \pm 0.10	2192 \pm 22	2190 \pm 20	354BC(48.2%)291BC 231BC(20.0%)202BC	362BC(95.4%)192BC
PLD-20396	-27.97 \pm 0.11	2171 \pm 21	2170 \pm 20	350BC(45.7%)304BC 209BC(22.5%)183BC	358BC(55.1%)281BC 258BC(1.9%)244BC 235BC(38.4%)167BC
PLD-20397	-26.66 \pm 0.20	2182 \pm 21	2180 \pm 20	352BC(52.4%)296BC 228BC(5.3%)221BC 211BC(10.5%)199BC	359BC(59.1%)277BC 260BC(36.3%)175BC
PLD-20398	-26.56 \pm 0.13	2198 \pm 22	2200 \pm 20	356BC(46.9%)287BC 234BC(21.3%)203BC	363BC(95.4%)198BC
最外試料年代				318BC(68.2%)296BC	326BC(95.0%)272BC 203BC(0.4%)201BC

第 87 表 放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-23082	-29.56 \pm 0.12	1830 \pm 19	1830 \pm 20	137AD(68.2%)217AD	131AD(95.4%)236AD
PLD-23083	-27.79 \pm 0.17	1836 \pm 19	1835 \pm 20	135AD(41.9%)177AD 186AD(26.3%)213AD	128AD(95.4%)235AD
PLD-23084	-27.13 \pm 0.16	1932 \pm 19	1930 \pm 20	30AD(6.8%)37AD 52AD(56.5%)85AD 110AD(4.9%)115AD	24AD(95.4%)126AD
最外試料年代				176AD(68.2%)198AD	131AD(10.0%)151AD 167AD(85.4%)204AD
最終形成年輪年代				178AD(68.2%)200AD	133AD(10.0%)153AD 169AD(85.4%)206AD

第 88 表 単体試料の放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-20399 砂・泥炭互層泥炭層内	-28.97 \pm 0.11	2034 \pm 22	2035 \pm 20	84BC(2.8%)80BC 54BC(65.4%)3AD	110BC(95.0%)26AD 44AD(0.4%)47AD

[暦年較正]

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C 半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal14.1(較正曲線データ: IntCal109) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

[ウィグルマッチング法]

ウィグルマッチング法とは、複数の資料を測定し、それぞれの資料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと校正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年校正を行い、得られた確率分

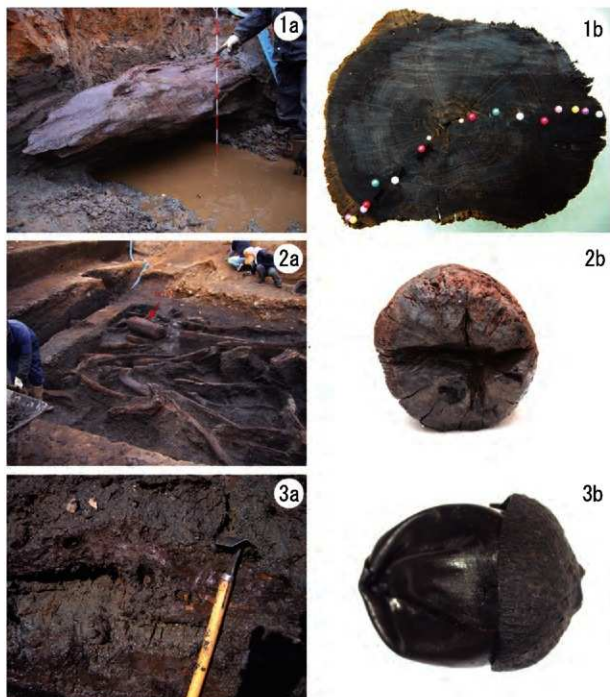
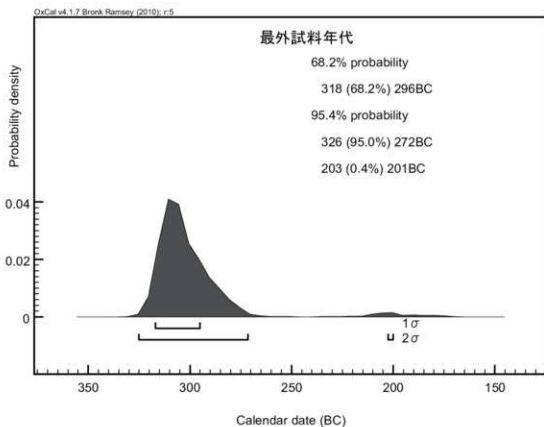
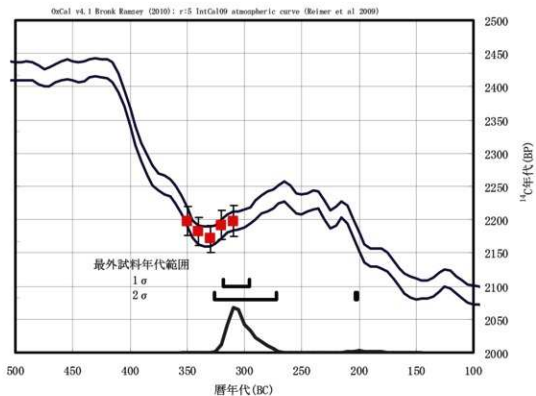


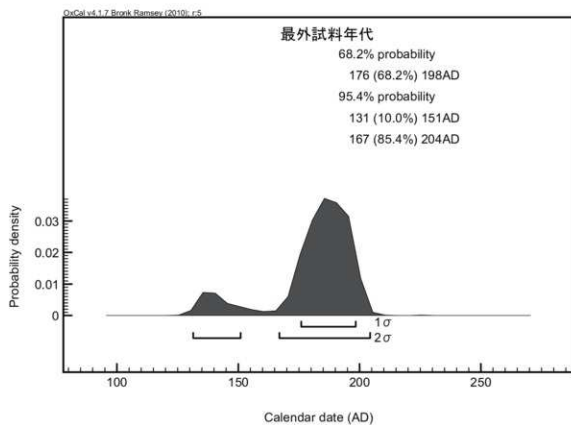
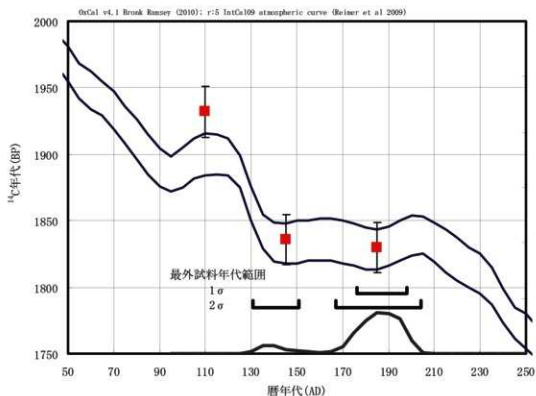
写真 13 ウィグルマッチング法による年代測定等を行った試料

1a・1b. ウィグルマッチング木材 (PLD-20394 ~ PLD-20398)

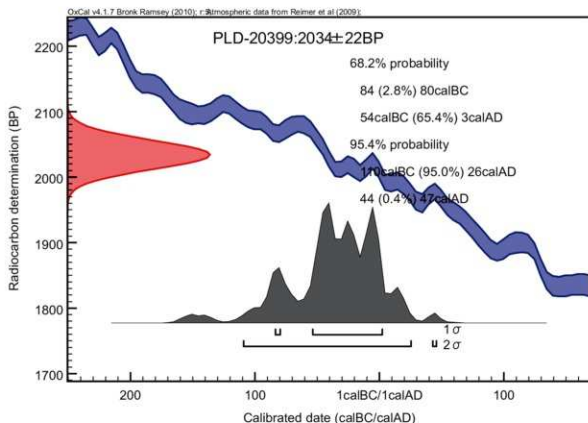
2a・2b. ウィグルマッチング木材 (PLD-23082 ~ PLD-23084)



第 171 図 ウィグルマッチング結果 (1)



第172図 ウィグルマッチング結果 (2)



第 173 図 単体試料の暦年較正結果

布を最外試料と当該資料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせることで最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、まとめた試料の中心の年代を表している。そのため試料となった木材の最外年輪年代を得るためには、最外試料としてまとめた年輪数と、さらにその外側にある年輪数を考慮する必要がある。

4. 考察

各試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正またはウィグルマッチング法により最外試料の暦年代を求めた。

調査区から出土した最も大径木の木材 (PLD-20394 ~ PLD-20398) は、 1σ 暦年代範囲において 318-296cal BC (68.2%) であった。この流木の年代は、流路の形成期が少なくともこの年代まで遡る可能性を示している。

なお、加工途中の木材 (PLD-23082 ~ PLD-23084) は、 1σ 暦年代範囲において 176-198cal AD (68.2%) 最終形成年輪の年代値は 2 年を加算して 178-200cal AD (68.2%) であった。

砂・泥炭互層泥炭層内から検出されたナラガシワ殻斗は、 1σ 暦年代範囲において 84-80cal BC (2.8%)、54cal BC-3cal AD (65.4%) であった。

参考文献

Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 43(2A), 381-389

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」:3-20, 日本第四紀学会

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111-1150.

(2014年3月)

第10節 久下前遺跡G地点出土土器の胎土分析

矢作健二 (バリノ・サーヴェイ株式会社)

はじめに

本庄市に所在する久下前遺跡は、本庄台地北東縁に形成された低位段丘上に位置する。これまでの発掘調査により、弥生時代後期から古墳時代前期とされる遺構や遺物が確認されている。

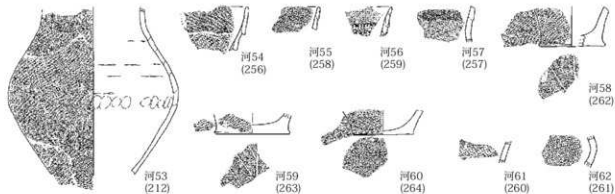
本分析調査では、同時期とされる土器について、その材質(胎土)の特徴を明らかにすることにより、土器の製作と使用に係る資料を作成する。特に今回の試料では、弥生時代後期の東関東系とされる土器について、土器の在地性と搬入品の可能性について検討を行う。

1. 試料

試料は、久下前遺跡G地点の河川跡から出土した弥生時代後期から古墳時代前期とされる土器片10点である(第174図、写真14・15)。各試料の試料名や出土地点などは一覧にして第89表に示す。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は薄片作製観察が主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。弥生土器や土師器のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼



第174図 胎土分析試料 (※カッコ内の数字は第V章第2節6河川跡出土遺物の番号)

成と考えられる土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか(1999)の

方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレバート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

結果を第90・91表、第175～177図に示す。以下に、鉱物・岩石組成、粒径組成、砕屑物・基質・孔隙の割合の順に述べる。

1) 鉱物・岩石組成

試料によって異なる組成が認められるのは、特に岩石片の種類である。10点の試料のうち、河56(No259)と河60(No264)を除く8点の試料には雲母片岩や石英片岩などの結晶片岩類の岩石が含まれている。これらのうち、結晶片岩類の岩石片を比較的多く含む組成をここではA類とする。A類に分類される試料は、河53(No212)、河55(No258)、河57(No257)、河58(No262)、河59(No263)、河62(No261)の6点である。さらにその中で、河58(No262)には他の試料には少量しか含まれない斜長石の鉱物片が多く含まれるためにA2類とし、他の5点をA1類とする。結晶片岩類を微量しか含まず、他にチャートや凝灰岩、流紋岩・デイサイトなどの堆積岩類や火砕岩類も少量～微量含む胎土は、B類とする。これに分類される試料は、河54(No256)と河61(No260)の2点である。

結晶片岩類を含まない胎土については、チャートを比較的多く含む河60(No264)をC類とし、花崗

第89表 試料一覧

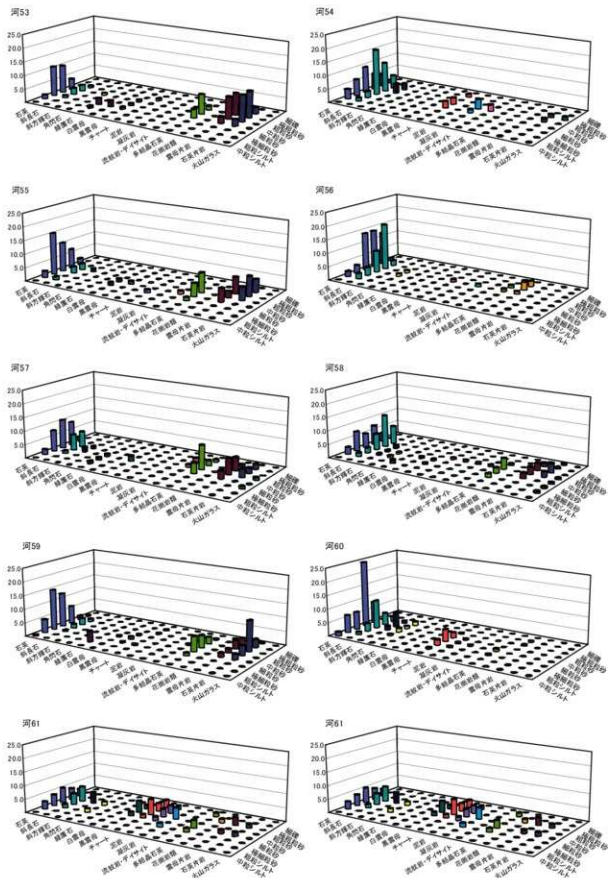
試料名	地点名	層位名
河53	河川跡西半	No.3873 Ⅲ層下部 + 河川跡西B Ⅲ層
河54	河川跡西B	Ⅲ層
河55	河川跡西A	Ⅲ層
河56	河川跡西6.7区	
河57	河川跡西C	Ⅲ層下
河58	河川跡西B	Ⅲ層
河59	河川跡6区	2層下層
河60	河川跡西B	Ⅲ層
河61	河川跡6区	5層
河62	河川跡西B	Ⅲ層

第90表 薄片観察結果(1)

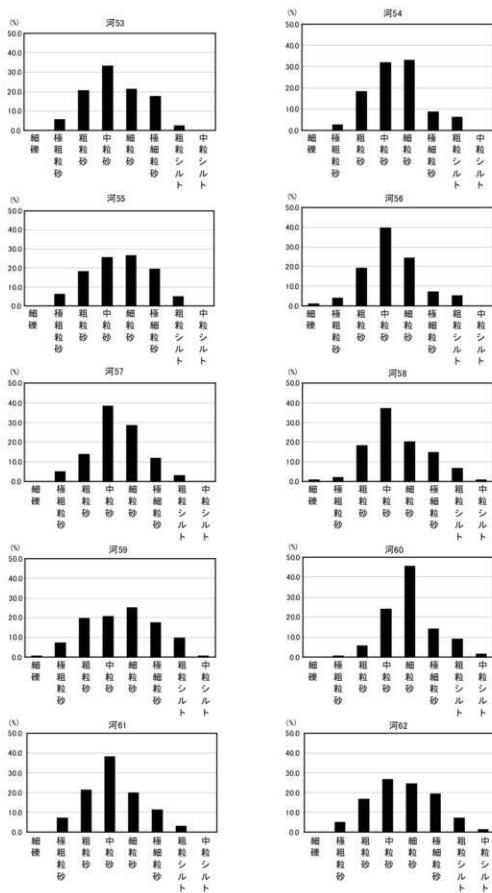
試料	砂粒区分	砂粒の種類構成															その他	合計														
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑輝石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	泥岩	砂岩	凝灰岩			流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	緑色片岩	雲母片岩	岩片岩	粘板岩	黒石英	雲母岩	火山ガラス	植物性有機体	酸化鉄塊	
P53	細礫																													0		
	粗粒砂												1										3	3						7		
	中粒砂	5	3			1				1				1				2				10	12							26		
	細粒砂	13	3							1								9				10	12							42		
	極細粒砂	14	1									3	3	1				4				3	3							27		
	粗粒シルト	2									1																			22		
	中粒シルト																													3		
	基質																														0	
	孔隙																														437	
	備考	基質は、褐色粘土、雲母鉱物、炭質物などで埋められ、暗褐色を示す。片岩類の片状組織は弱い。																														
P54	細礫																													0		
	粗粒砂	1										1																			2	
	中粒砂	4	4	2													2						1			1	1				15	
	細粒砂	5	9	3								2					3	2					1								26	
	極細粒砂	8	14	1		1						2		1																	27	
	粗粒シルト	5	2																												7	
	中粒シルト	3	1																												1	
	基質																														5	
	孔隙																															0
	備考	基質は雲母粘土鉱物、酸化鉄などで埋められ、褐色を示す。																														
P55	細礫																														0	
	粗粒砂	2														1							1	4							5	
	中粒砂	6	2	1														6					5	6			1				15	
	細粒砂	9	2															1	4				2	4							21	
	極細粒砂	13																	4				4								22	
	粗粒シルト	2	1														1														4	
	中粒シルト																														0	
	基質																															410
	孔隙																															4
	備考	基質は淡褐色粘土鉱物などで埋められる。片岩類の片状組織は弱い。バブルウォール型火山ガラスあり。																														
P56	細礫	1																													1	
	粗粒砂	1	1																				2								4	
	中粒砂	12	1	2																			1	3							19	
	細粒砂	14	2	17		1	1											1	1												39	
	極細粒砂	14	1	8			1																								24	
	粗粒シルト	3	3									1																			7	
	中粒シルト	2	2																												1	
	基質																															0
	孔隙																															326
	備考	基質は、褐色粘土、雲母鉱物、炭質物などで埋められ、暗褐色を示す。片岩類の片状組織は弱い。																														
P57	細礫																														0	
	粗粒砂																						1	1	2						5	
	中粒砂	2																2	2				5	2					1		14	
	細粒砂	9	6	1														1	9				6	3			3	1			39	
	極細粒砂	11	6	2																											29	
	粗粒シルト	8	1									1	2									4	3								12	
	中粒シルト	2																													3	
	基質																															0
	孔隙																															459
	備考	基質は雲母粘土鉱物、酸化鉄などで埋められる。酸化角閃石あり。火山ガラスはバブルウォール型。片岩類の片状組織は弱い。																														

第91表 薄片観察結果(2)

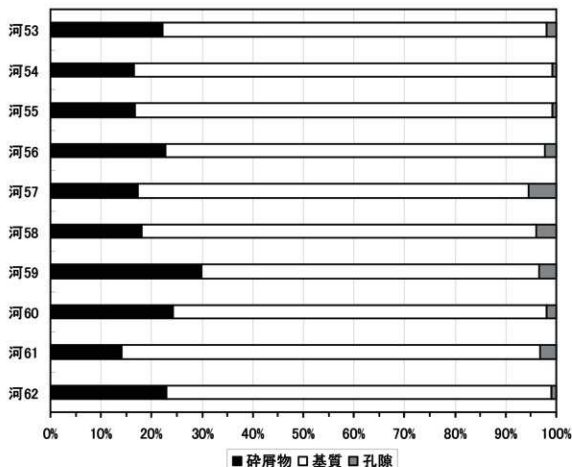
試料	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計												
		石英	カリ長石	斜方輝石	角閃石	角閃石	酸化角閃石	緑輝石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	泥岩	砂岩	凝灰岩	凝灰岩・デイサイト	安山岩		多結晶石英	花崗岩類	緑色片岩	雲母片岩	泥母片岩	粘板岩	石灰岩	黒石英	変質岩	火山ガラス	酸化鉄塊	植物残骸
P58	細礫																													1
	極粗粒砂																													2
	粗粒砂	5	10		1												1												4	
	中粒砂	11	2	18	2	2						1	1		1	1	1	6				4	3		1		1		55	
	細粒砂	8		9	1	2	1				1	1						3				3							30	
	極細粒砂	11		3	1		1					1	1					2										1	22	
	粗粒シルト	4		2																								1	10	
	中粒シルト																												1	1
	基質																													642
	孔隙																													32
備考	基質は淡褐色粘土、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型。片岩類の片状組織は強い。																													
P59	細礫																													1
	極粗粒砂	1										1					1					5	6							14
	粗粒砂	3	2									1					5					6	22							39
	中粒砂	13	5	1										1		9						3	7		1				41	
	細粒砂	25	3	1							1	2						11				3	4						50	
	極細粒砂	30	1									1	1																35	
	粗粒シルト	10																										1	19	
	中粒シルト	1																												1
	基質																													446
	孔隙																													23
備考	基質は淡褐色粘土、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。片岩類の片状組織は強い。																													
P60	細礫																													0
	極粗粒砂																													1
	粗粒砂			4	2	3						1																		11
	中粒砂	16	5	9	11	2						4	1																	48
	細粒砂	49	2	21	3	3						9	1					2												91
	極細粒砂	13	1	6			1					4	1					1											1	28
	粗粒シルト	13	1	2								1																	1	18
	中粒シルト	3																												3
	基質																													610
	孔隙																													16
備考	基質は、褐色粘土、雲母鉱物、炭質物などで埋められ、暗褐色を示す。花崗岩類には、花崗岩が含まれる。一部の角閃石は、弱酸化している。																													
P61	細礫																													0
	極粗粒砂											2	1					1						1						5
	粗粒砂	2									1	2	2	3							1	2	1				1			15
	中粒砂	3	4	3	2	1						3	4	2		3												2		27
	細粒砂	4	3									1	1	1							2		1	1						14
	極細粒砂	3	1	1			1														1									8
	粗粒シルト	2																												2
	中粒シルト																													0
	基質																													419
	孔隙																													
備考	基質は、褐色粘土、炭質物、セリサイトなどによって埋められる。角閃石は弱酸化している。片岩類の片状組織は強い。																													
P62	細礫																													0
	極粗粒砂	2																												9
	粗粒砂	4																				2	1	1	6	15		1		30
	中粒砂	14	1		1								1									18		9	4					48
	細粒砂	24	5		1	1	1	1													8	1	2	1						44
	極細粒砂	20	6																											35
	粗粒シルト	12										1																		13
	中粒シルト	2																												2
	基質																													603
	孔隙																													
備考	基質は、雲母鉱物、石英、斜長石、酸化鉄などで埋められる。片岩類の片状組織は強い。																													



第 175 図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度



第 176 図 胎土中の碎屑物の粒径組成



第177図 碎屑物・基質・孔隙の割合

岩類を比較的多く含む河56(No259)をD類とする。

2) 粒径組成

最も割合の高い粒径と2番目に高い割合の粒径に着目すると1類から4類までの分類が可能である。中粒砂をモード径とする1類は、河53(No212)、河56(No259)、河57(No257)、河58(No262)、河61(No260)、河62(No261)という6点の試料が分類される。次いで細粒砂をモード径とする試料のうち、中粒砂の割合も細粒砂と同程度に高い河54(No256)と河55(No258)を2類とし、粗粒砂や中粒砂および極細粒砂も細粒砂の割合に近いという組成の河59(No263)を3類とする。そして細粒砂の割合が突出して高い河60(No260)を4類とする。

3) 碎屑物・基質・孔隙の割合

碎屑物の割合に注目すると、ほとんどの試料は15～25%の範囲内にあるが、河59(No263)は30%を示し、河61(No260)は15%未満である。ここではこれら2点以外の8点の試料を1類とし、河59(No263)はⅡ類、河61(No260)はⅢ類とする。

以上に述べた薄片観察による胎土の分類結果を一覧にして第92表に示す。

4. 考察

胎土中に含まれる鉱物や岩石の種類構成は、土器の材料となった粘土や砂の採取地の地質学的背

景を反映している。久下前遺跡の地質学的背景については、須藤氏（須藤 1991）などにより概観することができるが、本分析調査における胎土の鉱物・岩石組成分類のA類の特徴とした結晶片岩類は、久下前遺跡の立地する本庄台地周辺に土砂を供給した神流川水系の河川上流域の関東山地に広く分布する三波川帯と呼ばれる変成岩帯に由来すると考えられる。今回の試料の中でA類に分類された試料が最も多かったことも考慮すれば、A類の胎土を有する土器は、在地性の高い土器であると考えることができる。A1類とA2類の違いについては、材料採取地の局所的あるいは層位的な違いによると考えられる。

B類の胎土については、結晶片岩類が含まれることから、神流川水系の河川堆積物の及ぶ範囲であるとは考えられるが、その量比が低いこと、結晶片岩類以外の岩石の種類が多いことなどから、本庄台地周辺からはやや距離を置いた利根川の沖積低地に由来する碎屑物が使用されている可能性があると考えられる。また、B類に分類された2点の試料において、胎土中の碎屑物の粒径組成とその割合が、A類の多くの試料が分類された1類かつ1類ではないことも、B類の異地性を示唆していると考えられる。

C類については、結晶片岩類が含まれないことから、本庄台地周辺の堆積物は使用されていないと考えられる。すなわち、本庄台地周辺域外からの搬入品である可能性が高いと考えられる。これらのうち、C類の特徴であるチャートは、神流川水系上流域の関東山地にも分布するが、結晶片岩類の混入しないような地域の関東山地に由来すると考えられる。主要な河川の水系で考えるならば、多摩川水系の堆積物がC類の由来となる可能性がある。また、C類に分類された河60(No264)の碎屑物の粒径組成が、A類の多くの試料が分類された1類とは明瞭に異なる4類であることからC類の異地性が示唆される。

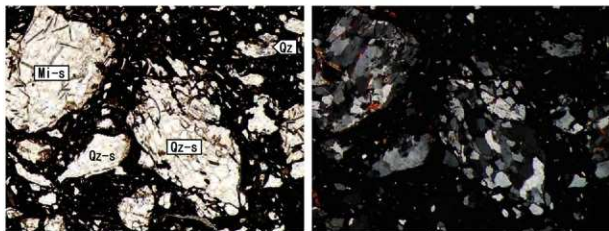
D類については結晶片岩類が含まれずに花崗岩類が比較的多いことを特徴としたが、岩石片全体が極めて微量なために、その地質学的背景を推定することは難しい。また、D類の河56(No259)における碎屑物の粒径組成や割合は、A類の多くの試料と同様の1類と1類に分類されることから、現時点では在地の可能性も否定できない。今後、岩片の計数の多い試料において同様の組成が見出された事例を得ることがあれば、その地域性を検討することが望まれる。

引用文献

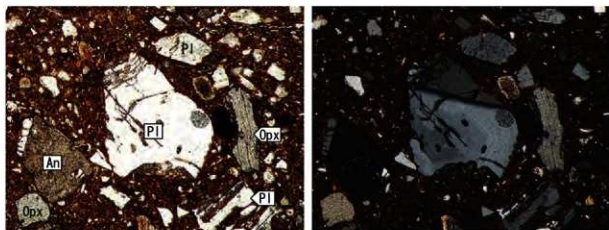
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高（1999）「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—」日本文化財科学会第16回大会発表要旨集、120-121。
 須藤定久・牧本 博・秦 光男・宇野沢 昭・滝沢文教・坂本 亨（1991）20万分の1地質図幅「宇都宮」地質調査所。（2019年3月）

第92表 胎土分類結果

試料名	地点名	胎土分類		
		鉱物・岩石	粒径組成	碎屑物
河53	河川跡西半	A1	1	I
河54	河川跡西B	B	2	I
河55	河川跡西A	A1	2	I
河56	河川跡西6.7区	D	1	I
河57	河川跡西C	A1	1	I
河58	河川跡西B	A2	1	I
河59	河川跡6区	A1	3	II
河60	河川跡西B	C	4	I
河61	河川跡6区	B	1	III
河62	河川跡西B	A1	1	I



1.河53 久下前G 河川跡西半 No.387Ⅲ層下部+河川跡西BⅢ層



2.河54 久下前G 河川跡西B Ⅲ層

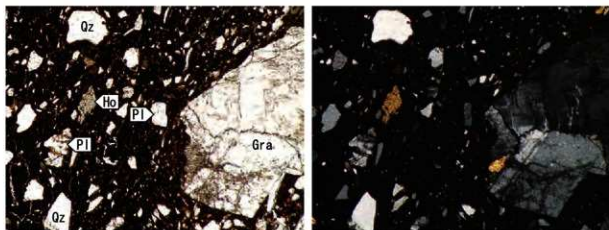


写真 14 胎土薄片 (1)

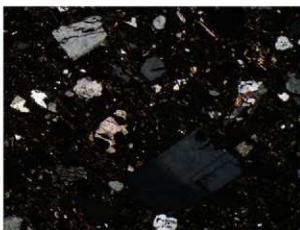
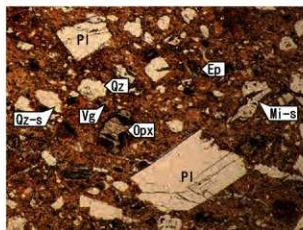
3.河56 久下前G 河川跡西6.7区

Qz:石英, Pl:斜長石, Opx:斜方輝石, Ho:角閃石, An:安山岩, Gra:花崗岩,

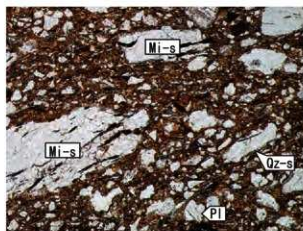
Qz-s:石英片岩, Mi-s:雲母片岩,

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



4.河58 久下前G 河川跡西B Ⅲ層



5.河59 久下前G 河川跡6区 2層下層

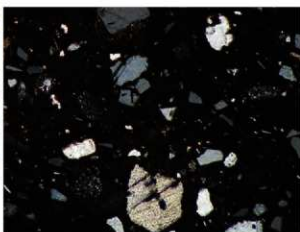
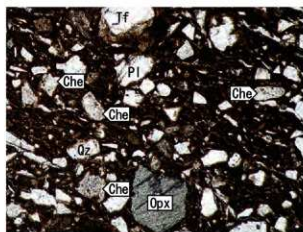


写真 15 胎土薄片 (2)

6.河60 久下前G 河川跡西B Ⅲ層

Qz:石英, Pl:斜長石, Opx:斜方輝石, Ep:緑レン石, Che:チャート, Tf:凝灰岩,

Qz-s:石英片岩, Mi-s:雲母片岩, Vg:火山ガラス,

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



第 178 図 周辺の既発掘調査遺跡

第七章 考察

第1節 久下前・久下東遺跡の中世土坑墓と歴史的背景

平成18年度から平成24年度にかけて実施した本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う久下東遺跡と久下前遺跡の発掘調査では、数は少ないながらも複数の地点で中世の土坑墓や土坑墓群が検出されている。これらの中世土坑墓の時期は、久下前遺跡のB1地点で鎌倉時代前半頃のものが1基(第15号土坑)見られるが、その他は戦国時代前期(15世紀後半)から中期(16世紀前半)頃の比較的短い期間と思われるものであり、同一墓地の範囲内で中世前期から後期とか中世後期から近世のような、長期にわたって継続的に営まれた墓地は見られない。

以下、久下前遺跡と久下東遺跡の各地点から検出された中世土坑墓(群)と、本遺跡周辺の遺跡で調査された類似した中世土坑墓(群)についてその様相を述べ、当地方の歴史的な背景との関係を検討したい。

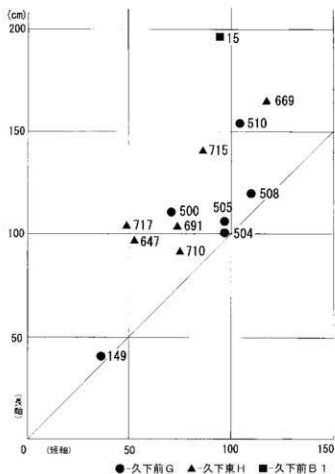
1. 久下前遺跡と久下東遺跡の中世土坑墓(群)の様相

久下前遺跡B1地点(第180図)

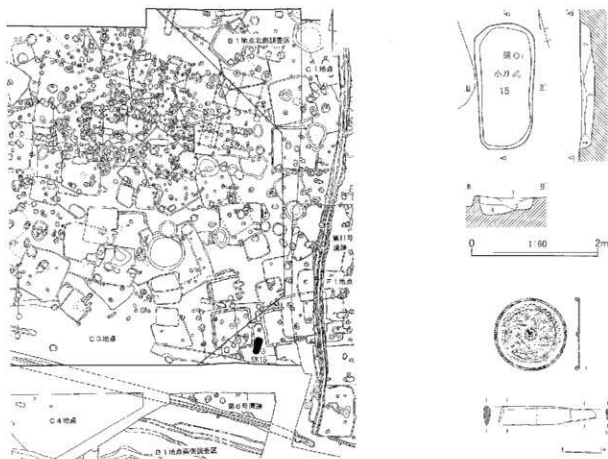
久下前遺跡B1地点北側調査区(恋河内・的野2010)の南端から、中世の土坑墓(第15号土坑)が1基検出されている。この久下前遺跡B1地点の第15号土坑は、198cm×95cmのやや大形の隅丸長方形を呈し、土坑の長軸をほぼ南北方向に向けている。埋葬姿勢は、人骨が残っていないため明確ではないが、土坑の向きや副葬品の和鏡の出土位置から、北頭位であったと思われる。土坑の規模からすると、姿勢は伸展葬の可能性が高い。

副葬品は、土坑北側から和鏡と中央付近から小刀の破片が出土している。時期は、和鏡と小刀の典型的な副葬品の組合せから、鎌倉時代前半頃と思われる。

本土坑墓の墓域構成は、西側に隣接するC3地点(恋河内2018)の調査区西側で、本土坑墓から約45m離れて中世の火葬墓とされる土坑が2基(第239・240号土坑)見られるが、本土坑墓の近くには他に中世の土坑墓が所在しないことから、1基単独的な様相を想定してよいであろう。本土坑墓の北側約20mに中世後期頃には廃絶されたと推測される屋敷跡が所在し、東側のC1地点(松本・的野2010)やF1地点(松本2013)の第11号溝跡と、南側のB1地点南側調査区の第6号溝跡やC3地点の第14・15号溝跡の小規模な溝によってやや



第179図 久下前・久下東遺跡中世土坑墓規模比較図



第180図 久下前遺跡B1地点中世土坑墓及び出土遺物

不整の四角形に区画された屋敷地内の南東隅に位置することから、当地に基盤を築いた先祖の墓として屋敷地内の傍らに葬られ、その後子孫たちによって一族の「土地継承を象徴する祖霊として祀られた」(桃崎 2003) 墓であったかもしれない。

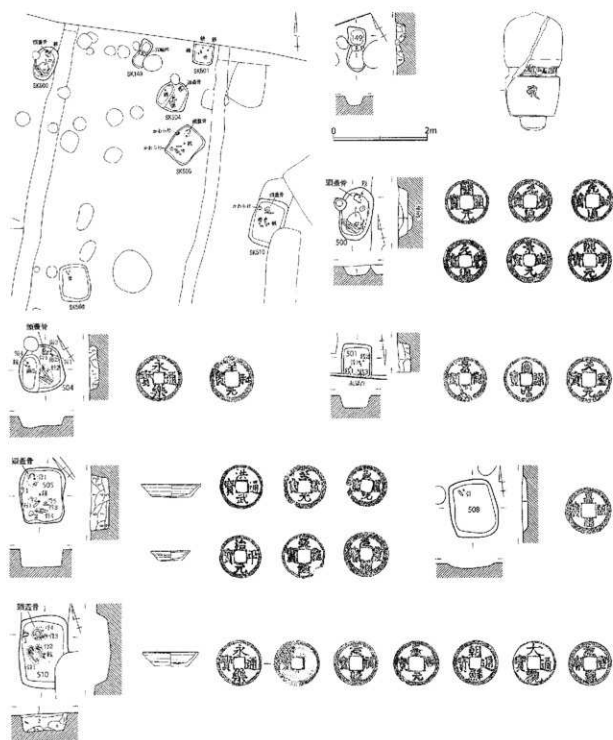
久下前遺跡G地点(第181図)

久下前遺跡G地点(本報告)の調査区北西端に位置し、狭い範囲に密集して6基の中世土坑墓が検出されている。土坑墓群は、北側の調査区外にさらに広がる可能性があるが、北側未調査区の道路北側に位置する久下東遺跡H地点(恋河内2019)の調査区内から検出された散在的に分布する中世土坑墓群(第182図)とは様相が異なることから、別の土坑墓群としてよいであろう。

これらの土坑墓は、いずれも長軸がやや短めで底面が平坦な隅丸長方形を呈しており、土坑の長軸を北に向けるものとやや北東に向けるものがある。多くの土坑から人骨が出土している。埋葬姿勢は、北頭位の横臥屈葬で、脚部の骨の屈折具合からすると、多くは西方を向いていたようである。

副葬品は、かわらけと銭貨を主体にしている。銭貨はいずれも渡来銭であるが、第500・505・510号土坑の3基からは「六枚1組の完全セット」(鈴木1999)と思われる六道銭が見られ注目されよう。

本土坑墓群の時期は、第505号土坑から出土した副葬品のかわらけの形態が、西側に所在する南北方向が約56m、東西方向が約37mの土地を、久下東遺跡B1地点の第1号溝跡と第2号溝跡(松本・大熊2009)や、B2地点の第9号溝跡(恋河内・的野2014)とともに不整形に圍繞する断面V字形の葉



第181図 久下前遺跡G地点中世土坑墓及び出土遺物

研堀を呈する久下前遺跡D地点の第27号溝跡(恋河内2012)から出土したかわらけ(第21図)に類似しているが、出土した銭貨の中に永楽通宝や洪武通宝が少量ながら含まれていることから、永楽通宝の流通が一般化する16世紀以前の15世紀末から16世紀初頭頃と推測される。

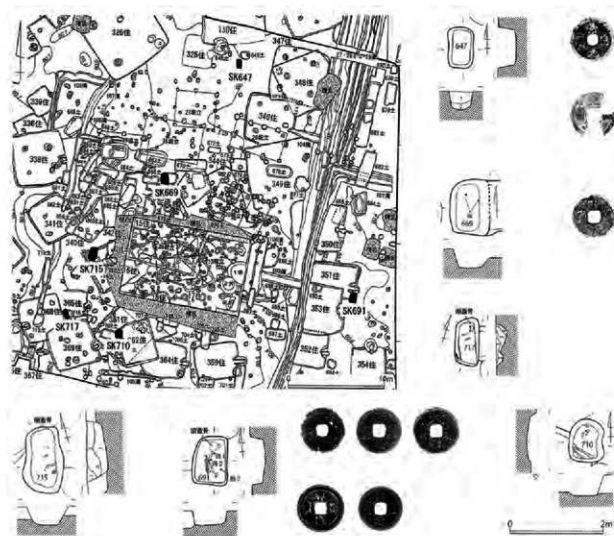
本土坑墓群は、G地点と道路を挟んで北側に近接する久下東遺跡H地点(恋河内2019)の屋敷地の南西隅に位置する可能性もある。土坑墓群の第149号土坑の上面から五輪塔の空風輪が出土していることから、一部に石塔を造立した墓を伴う集団墓と考えられよう。

久下東遺跡H地点(第182図)

久下東遺跡のH地点から、6基の中世土坑墓が密集せずに相互に距離を置いて調査区内の広い範囲から散在して検出されている(恋河内2019)。

土坑墓の形態は、いずれも隅丸長方形を基調としており、土坑の長軸がやや長いものと短めのものの二者がある。土坑の長軸方向は、概ね南北方向を向いている。6基中5基から人骨や歯が出土している。埋葬姿勢は、北頭位の横臥屈葬が主体で、第691・710・717号土坑は脚部の骨の屈折具合からすると、西方を向いていたようである。

副葬品は、銭貨を伴うものが3基、何も出土しなかったものが3基である。銭貨は、いずれも渡来銭であるが、枚数は第669号土坑が1枚(開元通宝)、第647号土坑が2枚(景德元宝、天聖元宝)、第691号土坑が5枚(太平通宝、祥符通宝、熙寧元宝、紹聖元宝、大觀通宝)で、全体的に少数である。この中の第691号土坑の5枚は、土坑中央部から3ヶ所に分かれて出土しているが、枚数的には六道銭の一部であった可能性もあろう。この副葬品の貧弱性からみて、これらのH地点の土坑墓は庶民階層でも下層民の墓と考えられる。



第182図 久下東遺跡H地点中世土坑墓及び出土遺物

久下東遺跡H地点の中世土坑墓は、同じ場所にある中世後期を主体とする屋敷跡に関係する建物跡や屋敷地を区画する溝跡などの遺構との重複関係は顕著ではないが、その配置には一定のまとまりがなくかなり散在的である。屋敷内の居住者や生活者を屋敷内の不特定な場所に埋葬する場合もあるようであるが、おそらく屋敷がその後も継続して営まれていないことを考慮すると、屋敷内で個別に埋葬されたというよりも、屋敷の廃絶によって所有者が不明確な荒地となり、屋敷あるいは屋敷地と直接関係しない周辺の特定の墓地を持たない下層民がこのような「野辺」を埋葬地として利用したのではないと思われる。時期は、土坑墓の形態や埋葬姿勢から、おそらく15世紀末～16世紀初頭頃と思われる。

2. 周辺遺跡の中世土坑墓(群)の類例

城内遺跡B・C地点(第183図)

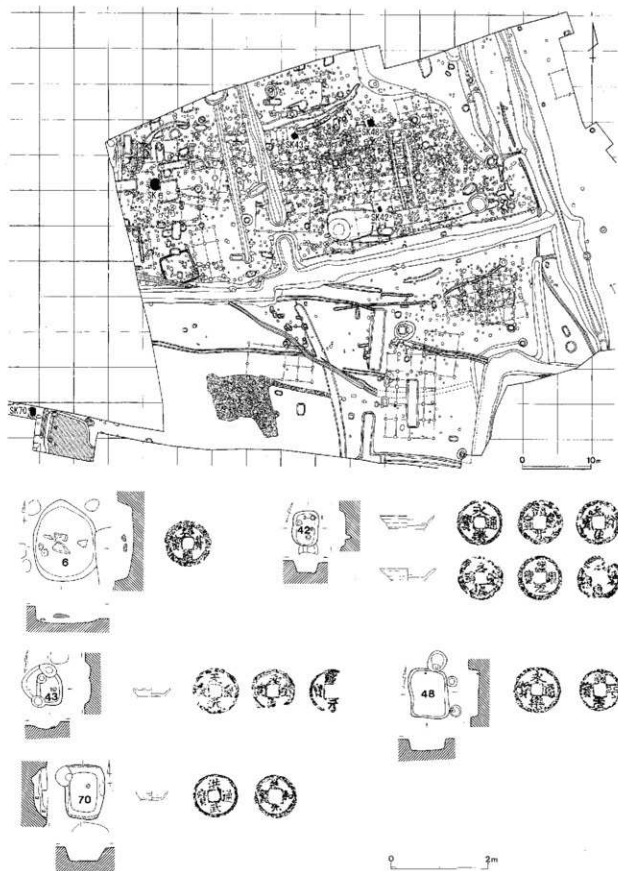
本庄市児玉町入浅見字城内に所在する。生野山残丘の北側支丘斜而下の狭い低台地上に立地している。かつては、その小字名の「城内」の地名から、武蔵七党の児玉党阿佐美氏の館が所在した場所と推測されていた(埼玉県教育委員会1968・1988)。その後、鉄塔建設やほ場整備事業に伴って発掘調査が実施された結果、石川安司氏の「北武蔵1期」(石川2019)に属する凸面縄目吹き瓦(12世紀末～13世紀前半頃)や、山崎信二氏の「中世Ⅳ期」(山崎2000)や石川氏の「北武蔵2期」とされる凸面に複線大形格子目文様の吹きを施す連珠文軒平瓦(14世紀前半頃)を伴う寺院が造営され、その後15世紀に造成されてやや規模の大きな箱状の堀によって区画された複数の四角い区画地をもつ領主クラスの館が築造されたことが明らかになっている(鈴木・西口1981、恋河内1997)。

中世土坑墓と推測されるものは、調査区内から5基検出されているが、楕円形を呈する第6号土坑については明確ではない。これらは、調査区内では密集した墓域を形成せずに、相互に距離を置いて散在した配置をとっており、先の久下東遺跡H地点の土坑墓群の様相と類似している。この他にも土坑内に石敷や石囲いを伴うもの、多くの礎が見られるものなど、土坑墓の可能性のあるものもあるが、埋葬と関係する遺物が出土していないため確定できない。5基の土坑墓のうちC地点の第70号土坑は、土坑の壁面が被熱により赤色化しており、いわゆる土坑内で遺体を焼いてそのまま埋めた火葬直葬墓と考えられるものである。

形態は、楕円形が1基(第6号土坑)と隅丸長方形が4基(第42・43・48・70号土坑)あり、隅丸長方形を呈するものは、土坑の長軸がやや短いものが主体である。いずれも長軸方向を南北方向に向けている。埋葬姿勢は、人骨が残っていないため不明である。

副葬品は、かわらけと銭貨が見られる。かわらけは、1～2個体副葬されている。銭貨は、すべて渡来銭で、枚数は1枚、2枚、3枚、6枚である。この中の第42号土坑は、出土状態は不明ながら、銭貨が6枚出土しており、いわゆる六道銭であった可能性が高いと思われる。

本土坑墓群の時期は、出土したかわらけや銭貨の様相から、15世紀末～16世紀前半頃と推測される。多くの中世後期の館に関係すると思われる掘立柱建物跡などの遺構と重複していることから、館が15世紀後半に廃絶され、その後館の土地が荒地となった「野辺」に形成された、館とは直接関連性のない一般庶民階層の墓域の可能性が高いと思われる。



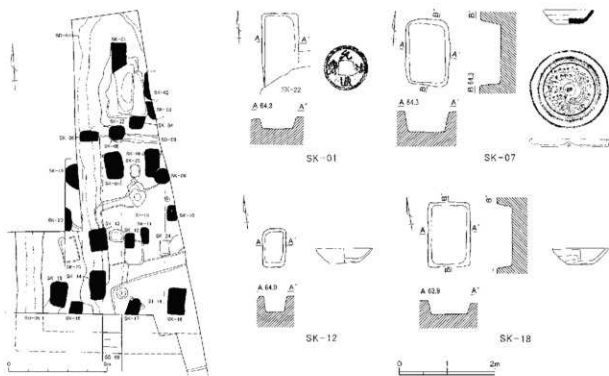
第183図 城内遺跡B・C地点中世土坑墓及び出土遺物

社具路遺跡第4地点(第184図)

本庄市大字西富田字金鑽に所在し、平坦な本庄台地の南側縁辺部付近に立地している。墓域の全容は不明であるが、調査区の北端で25基の土坑が検出されており、そのうちの20基(第184図黒塗りの土坑)が土壙(墓穴)と推測されている(知久・有山2004)。また、第4地点の北側に隣接する第13地点の調査区南西端でも、隅丸長方形や隅丸方形を呈すると思われる土坑がかたまって3基検出されており、その中の1基から銭貨(治平元宝)が1枚出土していることから、本地点と同一の墓域を構成する土坑墓と推測される(知久・有山2004)。

第4地点の土坑墓群は、調査区内から隅丸長方形17基、隅丸方形1基、円形2基が検出されている。土坑墓群の主体をなす隅丸長方形の土坑墓は、規模に大小の二形態が見られ、おそらく成人と子供のように被葬者の年齢差によるものと考えられる。この隅丸長方形の土坑墓は、隅丸方形の土坑墓とともに、ほとんどがその向きを南北方向に向けている。これらの土坑墓は、西側の第6号溝跡と南側の第9号溝跡によって四角に区画された墓域内に形成されているようで、東西・南北方向に並ぶような配置の様相が窺える。第5・11・13号土坑から人骨片が出土しているが、出土状態の記録がないため、埋葬姿勢はよくわからない。覆土上層に多量の礫を伴う土坑墓が多く見られることから、土坑墓の上面には礫が敷かれ、棺の腐食によって土坑内に落ち込んだことが窺える。

副葬品の詳細は、報告書には明記されていないが、報告書に図示された4基の副葬品と写真を参考にすると、第7号土坑から和鏡1枚とかわらけ1個体、第12・18号土坑からかわらけ1個体と銭貨、第1・9・11・13・16号土坑から銭貨(第1号土坑以外は銭種や枚数は不明)が出土しているようである。これらの副葬品の様相から、本土坑墓群は16世紀頃(戦国時代中期以降)に形成されたと考えられ、



第184図 社具路遺跡第4地点中世土坑墓及び出土遺物

和鏡を副葬した第7号土坑を中核として、他の土坑墓は銭貨とかかわらけを主体とする副葬品の構成から、一般庶民階層の集団墓地と考えられる。

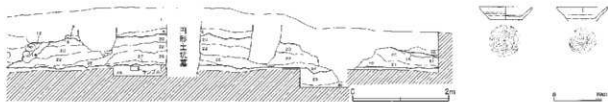
社具路遺跡第4地点の土坑墓群は、土坑の長軸がやや長めの長方形土坑墓が主体であるが、その他に第9号土坑や第19号土坑などの円形土坑墓の存在が目される。報告書では、その形態から「中世でも新しい時期、もしくは近世において多くの類例が認められるもの」としているが、その後墓地が継続して近世墓地として発展した様相が見られないことから、他の長方形土坑墓と近い時期としてよいのではないと思われる。この時期における円形土坑墓の出現は、埋葬施設としての桶棺(早桶)の普及を推測させるものであり、17世紀以降の長方形土坑墓と円形土坑墓の混在から円形土坑墓が主体となる当地域の近世墓(恋河内2016)に繋がる資料として重要と思われる。

元富東古墳B地点(第185図)

本庄市東富田に位置する。元富東古墳は、模様積み胴張横穴式石室を伴う7世紀前半の円墳と推測される古墳で、久下前遺跡と久下東遺跡の西側約400mにあり、両遺跡と同じ女堀川と男堀川の間を東西方向に帯状に広がる微高地上に立地している。古墳が所在する場所は、現在旧中山道沿いの本庄宿にある安養院の故地と推測されている場所(増田2014)で、A地点の調査では中世前期の「北武蔵1期」(石川2019)に属する凸面縄目甲きの平瓦(12世紀末～13世紀前半頃)の破片が出土した、底面が広く平坦な箱葉研状の堀跡(第1号溝跡)が検出されている(松本2016)。現在、古墳の南側には富田寺の墓地が隣接しているが、以前は墓地の範囲は現在よりも広がったようで、古墳の墳丘上にも戦国時代～江戸時代の土坑墓がいくつか作られている。

土坑墓は、古墳の墳丘にかかるB地点の調査区北側壁面に半分かかって、円形土坑墓が1基検出されている。形態は、直径65cm～75cmの円柱状を呈し、深さは古墳の墳丘上から115cm以上ある。人骨については不明であるが、埋葬施設は土坑の形態から桶棺(早桶)と考えられる。

副葬品は、土坑の底面付近から完形のかわらけが2個体重なって出土している。銭貨等の他の副葬品については不明である。本土坑墓は、出土したかわらけの形態から16世紀頃と推測され、副葬品や土坑墓の形態から一般庶民階層の墓と考えられる。



第185図 元富東古墳B地点円形土坑墓及び出土遺物

3. 中世後期の土坑墓群の類型と歴史的背景

以上のように、久下前遺跡と久下東遺跡の調査で検出された戦国時代前期(15世紀後半)から中期(16世紀前半)頃の一般庶民階層の墓地と考えられる土坑墓群には、久下前遺跡G地点のような狭い

範囲に土坑墓が分布する「密集型」と、久下東遺跡H地点のような広い範囲に土坑墓が離れて分布する「散在型」が見られる。この2つのタイプは、前述した当地域の周辺遺跡における中世後期の近時した時期の土坑墓群においても類例が見られる。

「密集型」は、比較的狭い範囲に分布することから、小規模な調査でも検出されれば容易に判断しやすい。久下前遺跡G地点のように溝による墓地の区画を持たないものと、社具路遺跡第4地点のような溝による区画を伴うものがあるが、前者においても遺構としてその痕跡が残らないような簡単な柵や生垣などによる区画が存在した可能性もあろう。この「密集型」は、土坑墓が東西・南北方向に列状に並ぶような配列性が窺えるもの(社具路遺跡第4地点)や、墓地内にさらに土坑墓の分布の粗密によるグループ性が窺えるもの(久下前遺跡G地点)があり、墓地内における土坑墓相互の関係性の強さを窺うことができる。一般的には、屋敷に付随する屋敷墓や家族墓、寺に付随する寺墓など、地縁的、血縁的な特定の集団との関係が深い集団墓と考えられている。

「散在型」は、比較的広い範囲に土坑墓が散散的に分布している場合が多いことから、単独的で小規模な調査ではその様相を把握することが難しい。当地域の比較的広い範囲が発掘調査された遺跡では、15世紀末～16世紀初頭頃と推測される例が多く、久下東遺跡H地点や城の内遺跡のように、15世紀後半の有力者層の屋敷や領主クラスと思われる館の廃絶後、荒地地となったその敷地(野辺)に下層民の土坑墓群が形成される例が見られ注目される。この「散在型」は、副葬品の貧弱性から被葬者の身分階層的な共通性が窺えるが、個々の土坑墓の配置が散散であることから、土坑墓相互の関係性はかなり希薄と思われる。

当地域の女堀川中・下流域の平野部に立地する中世の館跡や屋敷跡は、15世紀後半に廃絶される遺跡が比較的多く見られる。これらは、久下東遺跡H地点や城の内遺跡のような有力者の屋敷や館のほか、南街遺跡(恋河内1996)や浅見境北遺跡(恋河内1997)のような一般農民層の屋敷と考えられる遺跡でも、15世紀後半のうちに廃絶されるものも見られる。この当地域に多く見られる15世紀後半の館跡や屋敷跡を主とする遺跡の不連続性は、当然のことながら当地域で起こった歴史的事象と深く関係するものと考えられる。

15世紀後半の関東地方といえは、1454年(享徳3年)の鎌倉公方足利成氏による関東管領上杉憲忠の謀殺に始まる享徳の乱により、鎌倉公方(後の古河公方)と幕府・関東管領の両陣営による関東を東西に二分した内乱状態が続いた時期である。足利成氏は、1455年(康正元年)に北関東方面に敗走する関東管領側の上杉勢を追撃中、幕府の命を受けた駿河国守護今川範忠に鎌倉を占領されて帰還が不可能となったことから、本拠地を北関東の古河に移した(古河公方)。幕府・関東管領側は、それに対抗して利根川右岸の当地域の東五十子・西五十子を中心とした地に、本陣として五十子陣を構築した。そして、この五十子陣の構築を実質的に執り行ったのは、関東管領山内上杉家宰の白井長尾景仲と景信の親子と思われる。

五十子陣は、1456年(康正2年)(森田2014)、あるいは1456年(康正2年)～1458年(長祿2年)の間(本庄市1986、則竹2013)に構築されたと考えられており、1477年(文明9年)の長尾景春の乱によって廃絶するまでの約20年間にわたり、「東国における政治的・文化的な中心地の一つとして、五十子陣は機能していた」と言われている(森田2006b)。この五十子陣には、関東管領で上野国・武藏国・伊豆国守護の山内上杉氏、越後国守護の越後上杉氏、相模国守護の扇谷上杉氏、堀越公方の援軍の犬懸上杉氏などの上杉氏一門、家宰の白井長尾氏や惣社長尾氏などの長尾氏一門、及び太田氏、幕府派遣

軍の諸將などが各軍勢を引き連れて、「天子之御旗」を掲げて常駐した。そのため、地方から多くの人々が集まり、大量の物資の往来が活発になって、宿や市などの設営による町の形成、大軍の移動や物資を輸送する道路の整備、兵站や馬場などの関連施設の造営なども行われたものと思われる。五十子陣は、関係すると思われる遺跡がいくつか調査されているもの(太田 2005)、未だその具体的な様相は不明であるが、堀や土塁によって囲まれた軍事的な施設とともに、陣の内外に政治的・経済的な都市的機能も合わせもった常設的な一大陣地であったと考えられる。そして、敵である古河公方側と利根川を挟んで対面し、陣の大手(正面)側にあたる北側の妻沼低地から東側の女堀川・身馴川(現小山川)・志戸川の小河川が合流する深谷断層崖が途切れる付近の低地の「榛沢・小波瀬・阿波瀬・牧西・掘田・瀧瀬・手斗河原」などの場所に、各軍勢が陣取ったことが『松陰私語』に記載されている。陣の掘め手側(裏側)と思われる南西側後背部には、女堀川や志戸川の中・下流域に基盤を持つ小領主層(小国人・土豪層)と思われる館や屋敷が複数見られる。それらの小領主層は、おそらく従来からの武蔵国守護山内上杉氏や家宰白井長尾氏及び武蔵国守護代惣社長尾氏との関係から、五十子陣の後備えや兵站の中継・管理などの新たな役割による館の拡張や整備あるいは造営を余儀なくされ、五十子陣への出仕、関係する諸施設や街道の警備、要人の警護などの任にも充てられたのではないかと思われる。

五十子陣の崩壊は、関東管領山内上杉家宰の白井長尾景信の死(1473年)によって、景仲・景信と二代にわたって白井長尾氏が継承してきた家宰職が、関東管領山内上杉顕定とその側近によって、長尾氏一門の長老格であった叔父の惣社長尾忠景に決定された(1474年)ことに不満をもつ景信の嫡子景春が反乱を起こしたことによる(1477年)。

長尾景春は、すぐに反乱を起こしたわけではなく、家宰職の決定に反抗の意志を示してから3年後に武力蜂起している。景春は、最初五十子陣の近くに布陣し、傍輩や被官達が五十子陣に通じる道を塞いで人々の往来や糧道を絶ち、それを阻止しようとする上杉勢と周辺の路地や村里で小競り合いを行い抵抗していた。また、親戚関係にあった扇谷上杉家宰の太田道灌(道灌の妻は景仲の娘、景信の姉妹で、景春の叔母にあたる)を味方に引き入れることも考えていたようである。これに対して、関東管領の山内上杉顕定や家宰の惣社長尾忠景がほとんど何も効果的な対策を講じることなく景春を放置し、景春の反乱の計画を知った道灌の進言も無視せざるおえなかったのは、景春の五十子陣周辺の勢力との関係の強さや、景春に同道する2000人～3000人と言われる上野・武蔵・相模の傍輩や被官中の軍勢の存在を考慮せざるおえなかったためと、敵対する古河公方側に関東管領側の内部分裂の状況を知られたくなかったためと思われる。その後1476年(文明8年)、道灌が堀越公方の要請で守護今川氏の家督争いでもめる駿河に出兵した間に、景春は五十子陣から退去して新たに構築した鉢形城にこもり、道灌が駿河から江戸城に帰還後、顕定や忠景の態度に臍を曲げて五十子陣に参陣しないのを見計らって、翌1477年(文明9年)正月十八日に五十子陣を急襲して、全上杉軍(山内・扇谷・越後)を上野に撤退させ、五十子陣を崩壊させている。

この長尾景春の乱は、その後太田道灌の活躍によって地域的な個々の反乱は鎮圧され、拠点とした鉢形城も攻め落とされて景春は秩父に敗走した。そして、道灌の進言により五十子陣に代わって鉢形城が関東管領山内上杉氏の本拠となる。ちなみに景春(出家後は伊玄)は、武蔵から没落した後、紆余曲折した波乱の人生を歩み、最後は盟友の伊勢宗瑞(北条早雲)のはからいによって今川氏の駿河に赴き、同地において64歳前後で没したと言われている(黒田 2020)。

このように、15世紀後半の当地域は、五十子陣やその周辺を中心として、古河公方や長尾景春との

度重なる大規模な攻防戦の主戦場となり、結果的には地域的な荒廃をもたらしたと推測される。特に長尾景春の乱による五十子陣の崩壊では、当地域に館を構える小領主層は、多くの館や屋敷が15世紀後半に廃絶された後も再建された形跡が見られないことから、五十子陣構築前後の守護職・家宰職・守護代職などに関係する上部権力との個別な繋がりから、上杉勢の五十子陣退去や景春の敗退に伴ってそれぞれの主家に付き従って、当地域を離れて行ったのではないかと思われる。また、当地域の農民層においても、戦乱を避けて安全な地域に避難したり、屋敷や耕作地を放棄して他の領主などの所領に逃げ込んだ者も多くいたのではないかと思われる。

鈴木徳雄氏は、城館の土地について「地域社会の互酬的関係の外部に位置しているところから、城主が変化することによってその機能もまた推移し、機能を停止した瞬間から荒廃の一途を辿り、他の用益地へと急速に変化して行く」と言われている(鈴木2005)。おそらく、15世紀後半に廃絶された久下東遺跡H地点の屋敷跡や城の内遺跡の館跡の荒地地に作られた「散在型」とした一般庶民階層の土坑墓群も、このような地域的事情により、用益地に変化したことによって形成されたものと思われる。

当地域における五十子陣の構築は、急激な地域社会の変革と発展をもたらし、その廃絶は急速な地域的衰退と混乱を引き起こしたものと推測される。しかしながら、五十子陣の存在は、短い期間であったがその後の本庄の町形成の基礎となった可能性も考慮され、当地域の現在に至る過程の歴史的事象の中でも、特筆される一大画期として注視すべき事象の一つであろう。

<参考文献>

- 石川 安司(2019)『北武蔵』『中世史の考古学』 中世史研究会 高志書院
- 太田 博之(2002)『東五十子・川原町』 東五十子遺跡調査会
(2005)『五十子陣』研究ノート『群馬考古学手帳』15 群馬土器観会
(2007)『西五十子古墳群』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 柿沼 幹夫(1978)『東谷・前山2号墳・古川端』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集
- 柿沼 幹夫・小久保 徹(1979)『下田・諏訪』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集
- 栗岡眞理子(2003)『北関東の中世墓と埋葬』『中世東国の世界Ⅰ 北関東』 高志書院
- 黒田 基樹(2020)『中世武士遺書43 太田道灌と長尾景春 一暗殺・叛逆の戦国史一』 戎光祥出版
- 恋河内昭彦(1993)『川越田遺跡Ⅱ(B・C地点の調査)』 児玉町遺跡調査会報告書第5集
(1996)『辻堂遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書第19集
(1996)『辻堂Ⅱ・南街道・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第20集
(1997)『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』 児玉町文化財調査報告書第23集
(2012)『久下前遺跡Ⅳ(D1・E1地点)・久下東遺跡Ⅴ(F1地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第28集
(2016)『久下東遺跡Ⅹ(C2・D2・D3・E2・E3・E4地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第49集
(2018)『久下前遺跡Ⅵ(C2・C3・C4・F2・F3地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第53集
(2019)『久下東遺跡Ⅹ(G2・H地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第57集
- 恋河内昭彦・野 善行(2010)『北郷久下塚北遺跡Ⅱ(B地点)・久下東遺跡Ⅳ(C1・D1・E1地点)・久下前遺跡Ⅱ(A1・B1地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第19集
(2014)『七色塚遺跡Ⅲ(B2地点)・北郷久下塚北遺跡Ⅲ(C・D地点)・久下東遺跡Ⅶ(A2・B2・B3・F2地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第37集
- 埼玉県教育委員会(1968)『225城の内』埼玉の館城跡 国書刊行会
(1988)『埼玉の中世城館跡』
- 鈴木 公雄(1999)『出土錢貨の研究』 東京大学出版会
- 鈴木 徳雄(2005)『児玉丘陵における地域社会の形成』『高柳原遺跡—B・C地点の調査—』 児玉町文化財調査報告書第39集
- 鈴木徳雄・西口正純(1981)『深町・城の内』 深町遺跡調査会
- 知久裕昭・有山経世(2004)『社具路遺跡—第4地点—』 本庄市遺跡調査会報告書第7集
(2004)『社具路遺跡—第13地点—』 本庄市遺跡調査会報告書第10集

- 則竹 雄一 (2013) 『動乱の東国史6 古河公方と伊勢宗瑞』 吉川弘文館
- 本 庄 市 (1986) 『本庄市史』 通史編 I
- 本庄市教育委員会 (2016) 『本庄市の遺跡と出土文化財』 本庄市郷土叢書第 5 集
- 山崎 信二 (2000) 『中世瓦の研究』 雄山閣出版
- 松本 完 (2013) 『久下前遺跡V (F 1 地点)・久下東遺跡M (G 1 地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第 32 集
(2015) 『北堀新田前遺跡Ⅱ (A 2・A 3 地点)・北堀新田遺跡Ⅳ (A 2・B 地点)・久下東遺跡Ⅶ (G 3 地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第 44 集
(2016) 『元富東古墳 — A・B 地点の調査—』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第 48 集
- 松本 完・大熊 季広 (2009) 『浅見山 I 遺跡 (Ⅲ次)・久下東遺跡 (Ⅲ次) A 1・B 1 地点・北堀久下塚北遺跡』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第 13 集
- 松本 完・町田奈緒子 (2002) 『久下前遺跡 (第 3 地点) 発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第 25 集
(2002) 『大久保山遺跡浅見山 I 地区 (第 2 次)・北堀前山古墳群 (第 2・3 次) 発掘調査報告書』 本庄市遺跡調査会報告第 6 集
- 松本 完・的野 善行 (2010) 『久下前遺跡Ⅲ (C 1 地点)・北堀新田遺跡 (A 1 地点)・有勝寺北裏遺跡Ⅲ (A 1・B 1 地点)』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第 23 集
- 的野 善行 (2015) 「五十子陣の構造と範囲について」『埼玉考古』第 50 号 埼玉考古学会
- 増田 一裕 (1985) 『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 一久下東遺跡・遺構編一』 本庄市埋蔵文化財調査報告書第 7 集
- 増田未来望 (2014) 「安養院の創立地安入院は何処か」本庄地元学だより 25号 のち「本庄地元学だより」(2017)本庄まち N E T に所収
- 峰岸 純夫 (2005) 「享徳の乱における城郭と陣所」『城郭と中世の東国』千葉城郭研究会 高志書院
(2009) 『中世の合戦と城郭』 高志書院
(2017) 『享徳の乱 — 中世東国の三十年戦争—』 講談社
- 峰岸 純夫・川崎 千鶴 (2011) 『史料篇集 松陰私語』 八木書店
- 梶崎 祐輔 (2003) 『筑波山周辺の世界』『中世東国の世界 I 北関東』 高志書院
- 森田 真一 (2006a) 「文書・記録からみた五十子 (いかつこ) 陣」『中世考古学文献研究会会報』第 6 号 中世考古学文献研究会
(2006b) 「文書・記録からみた五十子陣 (2)」『中世考古学文献研究会会報』第 7 号 中世考古学文献研究会
(2014) 『中世武士選書 24 上杉顕定 — 古河公方との対立と関東の大乱—』 戎光祥出版
- 山田 邦明 (2015) 『敗者の日本史 8 享徳の乱と太田道灌』 吉川弘文館

写真図版



本庄市マスコット

はにぼん



A 2 地点調査区遠景（北より）



A 2 地点調査区全景



河川跡全景（北より）



河川跡全景（南より）



河川跡北側土層断面



河川跡遺物出土状態 (1)



河川跡遺物出土状態 (2)



河川跡遺物出土状態 (3)



河川跡木片出土状態 (1)



河川跡木片出土状態 (2)



河川跡木片出土状態 (3)



河川跡底面倒木 (コナラ)



D地点調査区遠景（北より）



D地点調査区全景



D 2 地点全景 (南より)



第388号土坑



第389号土坑



第389号土坑土層断面



第24・25号溝跡



D3地点全景（東より）



第29・30号溝跡



第30号溝跡土層断面



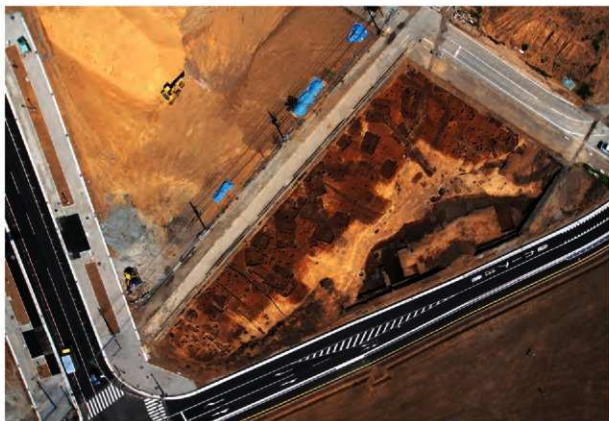
第31号溝跡



第31号溝跡土層断面



G地点調査区遠景（北より）



G地点調査区全景



第1号住居跡



第2b号住居跡



第5号住居跡



第6号住居跡



第7号住居跡



第189号住居跡



第189号住居跡カマド



第190号住居跡



第191号住居跡



第191号住居跡カマド



第192号住居跡



第192号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



第193号住居跡



第193号住居跡カマド



第194号住居跡



第194号住居跡カマド



第194号住居跡貯蔵穴



第195号住居跡



第196号住居跡



第196号住居跡カマド



第197号住居跡



第197号住居跡カマド



第197号住居跡貯蔵穴



第197号住居跡遺物出土状態



第198号住居跡



第198号住居跡遺物出土状態



第199号住居跡



第200号住居跡



第200号住居跡遺物出土状態



第201号住居跡



第202号住居跡



第202号住居跡カマド



第203号住居跡



第203号住居跡カマ下



第204号住居跡



第205号住居跡



第205号住居跡貯蔵穴



第205号住居跡遺物出土状態



第206号住居跡



第206号住居跡カマ下



第206号住居跡遺物出土状態(1)



第206号住居跡遺物出土状態(2)



第205~208号住居跡



第208号住居跡



第209号住居跡



第209号住居跡炉



第210号住居跡



第211号住居跡



第212号住居跡



第213号住居跡



第213号住居跡カマド



第213号住居跡遺物出土状態



第214号住居跡



第214号住居跡カマド



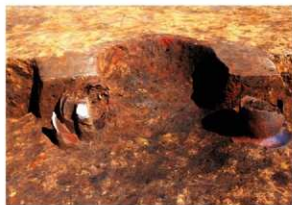
第214号住居跡遺物出土状態(1)



第214号住居跡遺物出土状態(2)



第215号住居跡



第215号住居跡カマド



第215号住居跡遺物出土状態(1)



第215号住居跡遺物出土状態(2)



第216号住居跡



第216号住居跡カマド



第217号住居跡遺物出土状態(1)



第217号住居跡カマド



第218号住居跡



第219号住居跡



第220号住居跡



第220号住居跡カマド



第220号住居跡遺物出土状態



第221号住居跡



第221号住居跡竈



第221号住居跡遺物出土状態



第222号住居跡



第223号住居跡



第224号住居跡



第224号住居跡カマド



第225号住居跡



第226号住居跡



第226号住居跡kama



第226号住居跡遺物出土状態



第227号住居跡



第227号住居跡カマ下



第16号掘立柱建物跡



第17号掘立柱建物跡(1)



第17号掘立柱建物跡(2)



第18号掘立柱建物跡



第19・20号掘立柱建物跡



第21号掘立柱建物跡



第26号井戸跡



第27号井戸跡



第28号井戸跡



第29号井戸跡



第30号井戸跡



第31号井戸跡



第32号井戸跡



第33号井戸跡



第34号井戸跡



第149号土坑



第460~490号土坑



第468~477号土坑



第468・469号土坑



第470号土坑



第477~482号土坑



第485~490号土坑



第493a·493b号土坑



第500号土坑



第501号土坑



第504号土坑



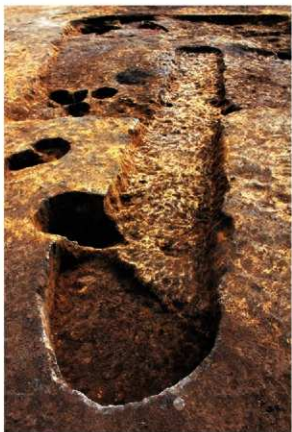
第505号土坑



第510号土坑



第511·512号土坑



第513号土坑



第515号土坑



第516号土坑



第517号土坑



第518号土坑



第519号土坑



第522号土坑



第523号土坑



第526号土坑



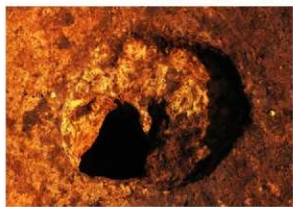
第527号土坑



第528·529号土坑



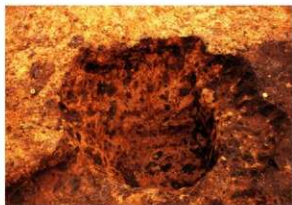
第530号土坑



第531号土坑



第532号土坑



第533号土坑



第534号土坑



第535号土坑



第536号土坑



第537号土坑



第538号土坑



第539号土坑



第540号土坑



第46号沟迹



第47号沟迹



第49·52号沟迹



第50a号沟迹



第51号沟迹



第53号沟迹



第54·55号沟迹



河川跡全景（東より）



河川跡全景（西より）



河川跡遺物出土状態(1)



河川跡遺物出土状態(2)



河川跡遺物出土状態(3)



河川跡遺物出土状態(4)



河川跡遺物出土状態(5)



河川跡下暗灰綠色土内木材出土状態(1)



河川跡下暗灰綠色土内木材出土状態(2)



河川跡下木材出土状態(3)



河川跡下木材出土状態(4)



河川跡下加工木出土状態



河川跡木製品出土状態(1)



河川跡木製品出土状態(2)



河川跡木製品出土状態(3)



河川跡木製品出土状態(4)



河川跡木製品出土状態(5)



河川-1a



河川-1b



河川-2



河川-3



河川-4



河川-5



河川-6



河川-7



河川-8



河川-9



河川-10



河川-11



河川-12



河川-13



河川-14



河川-15



河川-16



河川-17



河川-18



河川-19



河川-20



河川-24



河川-21



河川-23a



河川-22



河川-23b



調査区内-1



SK388-1



SK389-1



SK388-2



26溝-1



26溝-2



26溝-3



26溝-4



26 溝-5



30 溝-1



6 住-1



6 住-2



6 住-4



6 住-3



6 住-5



7 住-1



7 住-2



7 住-3



7 住-4



7 住-5



189 住-1



191 住-1



191 住-2



191 住-3



191 住-6



191 住-7



191 住-4



191 住-5



191 住-8



192 住-1



192 住-2



192 住-4



192 住-3



192 住-5



193 住-1



193 住-2



193 住-3



193 住-4



193 住-5



193 住-6



193 住-7



193 住-8



193住-9



193住-11



193住-12



193住-10



193住-13



193住-14



193住-15



193住-16



194住-1



194住-2



194住-3



194住-4



194住-5



194住-6



194住-7



194住-8



194住-9



194住-10



194住-11



194住-12



194住-13



194住-14



194住-15



194住-16



194住-20



194住-17



194住-18



194住-19



194住-21



194住-22



194住-23



196住-1



196住-2



196住-3



196住-4



196住-5



196住-6



196住-7



196 住-8



196 住-9



196 住-11



196 住-10



197 住-1



197 住-2



197 住-3



197 住-4



197 住-5



197 住-7



197 住-8



197 住-6



197 住-9



197 住-17



197 住-10



197 住-11



197 住-12



197 住-13



197 住-14



197 住-15



197 住-16



198 住-1



198 住-2



198 住-3



198 住-4



198 住-5



198 住-6



198 住-7



198 住-8



199 住-1



199 住-2



199 住-3



200 住-1



200 住-4



200 住-6



200 住-2



200 住-3



200 住-7



200 住-5



200 住-8



200 住-9



201 住-1



201 住-2



202 住-1



202 住-2



202 住-3



202 住-4



202 住-5



203 住-1



203 住-2



203 住-3



203 住-4



203 住-5



203 住-6



203 住-7



203 住-8



203 住-9



203 住-11



203 住-12



203住-10



203住-13



203住-14



203住-15



203住-16



203住-17



203住-18



203住-19



203住-21



203住-22



203住-20



204住-1



204住-2



204住-3



204住-6



204住-4



204住-5



204住-7



204住-8



204住-9



205 住-1



205 住-2



205 住-3



205 住-4



205 住-5



205 住-6



205 住-7



205 住-8



205 住-11



205 住-9



205 住-10



205 住-12



205 住-13



205 住-14



205 住-15



206·207 住-1



206·207 住-2



206·207 住-3



206·207 住-4



206·207 住-5



206·207 住-6



206·207 住-7



206·207 住-8



206·207 住-9



206·207 住-10



206·207 住-11



206·207 住-14



206·207 住-12



206·207 住-13



206·207 住-23



206·207 住-15



206·207 住-16



206·207 住-17



206·207 住-18



206·207 住-19



206·207 住-20



206·207 住-21



206·207 住-22



206·207 住-24



208 住-1



208 住-2



208 住-3



209 住-1



209 住-2



209 住-3



209 住-4



210 住-1



210 住-2



210 住-3





214 住-4



214 住-5



214 住-6



214 住-7



214 住-9



214 住-8



214 住-10



214 住-11



215 住-1



215 住-4



215 住-3



215 住-2



215 住-5



215 住-6



215 住-8



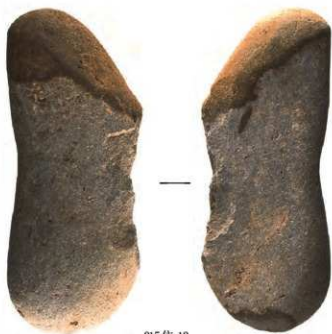
215 住-9



215 住-7



215 住-10



215住-12



215住-11



215住-13



217住-1



218住-1



218住-2



218住-3



218住-4



218住-5



218住-7



218住-8



218住-9



218住-10



218住-6



219住-1



219住-2



219住-3



220住-1



220住-2



220住-3



220 住-4



220 住-5



220 住-7



220 住-8



220 住-6



221 住-1



221 住-2



221 住-3



221 住-4



221 住-5



221 住-6



221 住-7



221 住-8



221 住-10



221 住-9



221 住-11



221 住-12



221 住-13



221 住-14



221 住-15



222 住-1



222 住-2



222 住-3



222 住-4



223 住-1



224 住-1



226 住-1



226 住-2



226 住-3



226 住-4



226 住-5



226 住-8



226 住-7



226 住-6



226 住-9



226 住-10



226 住-11



227 住-1



227 住-2



227 住-3



227 住-4



227 住-5



227 住-6



227 住-7



227 住-8



227 住-9



227 住-10



227 住-11



227 住-12



227 住-14



227 住-15



227 住-13





30井戸-1



30井戸-2



30井戸-3



30井戸-4



30井戸-5



30井戸-6



30井戸-7



30井戸-8



31井戸-1



32井戸-1



32井戸-2



32井戸-3



32井戸-4



33井戸-1



33井戸-2



33井戸-4



33井戸-3



33井戸-5



33井戸-6



33井戸-7





504 土坑-1



504 土坑-2



508 土坑-1



527 土坑-1



505 土坑-1



505 土坑-3



505 土坑-4



505 土坑-5



505 土坑-2



505 土坑-6



505 土坑-7



505 土坑-8



510 土坑-1



510 土坑-2



510 土坑-3



510 土坑-4



510 土坑-5



510 土坑-6



510 土坑-7



46 溝-1



46 溝-2



46 溝-3



49 溝-1



49 溝-2



49 溝-3



49 溝-4



49 溝-5



49 溝-6



49溝-7



49溝-8



50a溝-1



50a溝-2



50a溝-3



50a溝-4



河川-1



河川-2



河川-3



河川-4



河川-5



河川-6



河川-7



河川-8



河川-9



河川-10



河川-11



河川-13



河川-12



河川-18



河川-21



河川-24



河川-26



河川-29



河川-14



河川-15



河川-19



河川-22



河川-25



河川-27



河川-30



河川-16



河川-17



河川-20



河川-23



河川-28



河川-31



河川-32



河川-33



河川-34



河川-35



河川-36



河川-37



河川-38



河川-39



河川-40



河川-41



河川-42



河川-43



河川-44



河川-45



河川-46



河川-47



河川-48



河川-49



河川-50



河川-51



河川-54



河川-52



河川-53



河川-55



河川56



河川57



河川58



河川59



河川60



河川61



河川62



河川63



河川64



河川65



河川66



河川67



河川68



河川69



河川70



河川71



河川72



河川73



河川74



河川75



河川76



河川77



河川78



河川-79



河川-80



河川-81



河川-82



河川-83



河川-84



河川-85



河川-86



河川-87



河川-88



河川-89



河川-90



河川-91



河川-92



河川-94



河川-93



河川-95



河川-96



河川-97



河川-98



河川-99



河川-101



河川-102



河川-100



河川-104



河川-105



河川-103



河川-106



河川-107



河川-108



河川-109



河川-110



河川-111



河川-112



河川-113



河川-114



河川-115



河川-116



河川-117



河川-118



河川-119



河川-120



河川-121



河川-122



河川-123



河川-124



河川-125



河川-126



河川-127



河川-128



河川-129



河川-130



河川-131



河川-132



河川-133



河川-134



河川-135



河川-136



河川-137



河川-138



河川-139



河川-140



河川-141



河川-142



河川-143



河川-144



河川-145



河川-146



河川-147



河川-148



河川-149



河川-150



河川-151



河川-152



河川-153



河川-154



河川-155



河川-156



河川-158



河川-159



河川-160



河川-161



河川-162



河川-163



河川-164



河川-165



河川-166



河川-167



河川-168



河川-169



河川-170



河川-173



河川-172



河川-171



河川-174



河川-175



河川-176



河川-177



河川-178



河川-179



河川-180



河川-181



河川-182



河川-184



河川-183



河川-185



河川-186



河川-187



河川-188



河川-189



河川-190



河川-191



河川-192



河川-193



河川-194



河川-195



河川-196



河川-197



河川-198



河川-199



河川-200



河川-201



河川-202



河川-203



河川-204



河川-205



河川-206



河川-207



河川-208



河川-209



河川-212



河川-210



河川-211



河川-213



河川-215



河川-216



河川-217



河川-218



河川-214



河川-219



河川-220



河川-221



河川-222



河川-224



河川-225



河川-223



河川-226



河川-227



河川-228



河川-229



河川-230



河川-231



河川-232



河川-233



河川-234



河川-235



河川-236



河川-237



河川-238



河川-239



河川-240



河川-241



河川-242



河川-243



河川-244



河川-245



河川-246



河川-247



河川-248



河川-249



河川-250



河川-251



河川-252



河川-253



河川-254



河川-255



河川-256



河川-257



河川-258



河川-259



河川-260



河川-262



河川-263



河川-264



河川-261



河川-266



河川-267



河川-265



河川-268



河川-269



河川-270



河川-271



河川-272



河川-273



河川-274



河川-275



河川-276



河川-277



河川-278



河川-280



河川-281



河川-282



河川-283



河川-284



河川-285



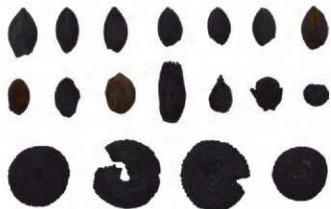
河川-286



河川出土大型植物遺体(オニグルミ)



河川出土大型植物遺体(モモ)



河川出土大型植物遺体(エゴノキ、ミズナラ-ナラガシワほか)



報告書抄録

フリガナ	クゲマエイセキⅧ(A2・D2・D3・Gチテン)								
書名	久下前遺跡Ⅷ(A2・D2・D3・G地点)								
副書名	本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 12								
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書						巻次	第61集	
編著者	恋河内昭彦ほか								
編集機関	本庄市教育委員会								
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号						TEL	0495-25-1185	
発行日	西暦2020年(令和2年)3月31日								
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 (°'〃)	東経 (°'〃)	調査 期間	調査 面積	調査 原因	
		市町村	遺跡						
クゲマエ チテン 久下前A2地点	本庄市早稲田の杜2 チヨウタ 丁目2	112119	53-065	36° 13' 17"	139° 10' 55"	20100720 ～ 20100806	240 m ²	造成	
クゲマエ チテン 久下前D2地点	本庄市早稲田の杜2 チヨウタ 丁目2	112119	53-065	36° 13' 20"	139° 10' 53"	20100914 ～ 20101130	100 m ²	造成	
クゲマエ チテン 久下前D3地点	本庄市早稲田の杜2 チヨウタ 丁目2	112119	53-065	36° 13' 18"	139° 10' 54"	20101111 ～ 20101126	156 m ²	造成	
クゲマエ チテン 久下前G地点	本庄市早稲田の杜2 チヨウタ 丁目2	112119	53-065	36° 13' 18"	139° 10' 57"	20111019 ～ 20120207	3571 m ²	造成	
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
久下前A2地点	河道	古墳前期	河川跡			土器、漆			
		中世				銭貨(水廻通宝)			
久下前D2地点		中世	土坑1、溝1			在地産土器(内耳鍋、片口鉢)			
		近世	土坑1、溝3			陶磁器(肥前系)、銭貨(寛永通宝)、砥石、硯			
久下前D3地点		白鳳～奈良	溝1						
		中世	溝2						
		近世	溝1						
久下前G地点	縄文					土器片(加曾利EⅢ式、曾利式、堀之内式)、石器(打製石斧、巖き石、石織未成品)			
		弥生				土器片(前期如来堂段階、後期樽式、吉ヶ谷式、東関東系)、土製品(紡錘車)			
	集落	古墳前期	住居跡6、河川跡			土器、木製品(横織未成品、機織具、弓)、加工木			
		古墳中期	住居跡1			土師器、石製品(管玉、紡錘車)			
	#	古墳後期	住居跡12、井戸1				土師器、須恵器、円筒埴輪、土製品(土鐘)、石製品(勾玉、紡錘車、砥石)		
			#	白鳳	住居跡8、井戸跡1			土師器、須恵器、土製品(羽口)、鉄製品(刀子、鉄鏝)	
	#	奈良	住居跡7			土師器、須恵器、転用硯			
	#	平安	住居跡6、掘立建物4、井戸3			土師器、須恵器、土製品(転用紡錘車、土鐘、羽口)、鉄製品(刀子、釘、鉄鏝)、砥石			
	屋敷 墓地	中世	掘立建物1、井戸3、土坑9、溝2				龍泉窯系青磁碗、常滑窯系甕、山茶碗窯系片口鉢、在地産土器(かわらけ、内耳鍋、片口鉢)、銭貨(六道銭)、鉄鏝、五輪塔(空風輪)、平瓦、人骨		
			近世以降	井戸1、土坑1、溝3			陶磁器、鉄製品、木製品(櫛)		
不明			住居跡4、土坑55						

本庄市埋蔵文化財調査報告書第61集

久 下 前 遺 跡 VII
(A2・D2・D3・G地点)

—本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12—

令和2年 3月 23日 印刷

令和2年 3月 31日 発行

発行／本庄市教育委員会

埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

発行／株式会社文林堂印刷所

埼玉県本庄市寿3丁目1番1号